
英雄の息子とサイヤの英雄

足洗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の息子とサイヤの英雄

【Nコード】

N6020K

【作者名】

足洗

【あらすじ】

悟飯とセルとの闘いを見届けた孫悟空は修行のため界王とともに天国へ行こうとしていた。しかし突如現れた魔法陣によって異世界へ飛ばされてしまう。そして飛ばされた先はなんとネギまの世界だった。

ドラゴンボールと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。苦手な方はお気をつけください。

プロローグ（前書き）

どうもこんにちは。足洗と申します。

小説初投稿です。ではどうぞ！

プロローグ

「よくやったな、悟飯！」

長く続いた戦いはようやく終わりを告げた。

圧倒的な威力で放たれたセルのかめはめ波を、息子である悟飯は更なる威力で撃ち返し、倒しきったのだ。

「それにしても、悟飯のやつものすげえ強さになっちまったな……
・・オラも負けてらんねえ！」

超サイヤ人を超えた超サイヤ人をなにがなんでもモノにしなれば。
そしてさらにその上さえも。

「なあ界王様、天国にはどんな強え奴がいんだ？」

今すぐにでも修行を始めたい悟空は、前を飛ぶ界王に問うた。

「慌てんでもお前を超える強い奴だってちゃんとおるわ。それにセルの脅威はもう無いんじゃないからこれから時間はたっぷりある。存分に修行できるぞい」

少々の呆れと悟空のその予想通りな物言いに界王は笑った。今や闘

うべき強敵は居なくなつたというのに、悟空の純粹な力への探究心は衰えることを知らないのだ。

これから思いを馳せ、悟空は胸躍らせる。自分の知らない事も自分より強い存在も世界にはまだ五万とあるのだと、悟空は知つた。それは新たな好奇心の目覚めであり、悟空の喜びでもある。

「へへッ！楽しみだなあ、オラわくわくすつぞ！」

過去何度と無く感じてきた高揚感。蛇の背中を眼下に、体を叩く風が強まる。天国へ向けて悟空は速度を上げる。

強さを渴望し

尽きること無い冒険心を抱いて

幾度と無く世界を救つてきた優しい英雄はこの時『願つた』

それは形さえも曖昧な、それでいてどんなものよりも強い願望

「ん？」

「ん？なんだ、どうした？」

速度を上げた悟空は、直後急停止して蛇の道に降り立った。界王は怪訝そうに悟空を見る。

「いや、よくわかんねえんだけど……変な力みてえのを感じるんだ……」

「力？そんなもん特には……って悟空！！お前そりゃナンだ？！」

「え？うわっ!?!」

突如悟空の足元を中心に、幾何学的紋様を成す円形の光が広がっていった。徐々に円は広がり続け、円内の模様達も時が経つにつれその内容をより難解で複雑なモノへ変化させている。

「と、とりあえず悟空、そいつから離れる！」

「あ、ああ……」

悟空はその場から離れるためそっと身じろぎして、光から足を上げた。

その瞬間、光は悟空足に追いついて絡み付いてきたのだ。

「なっ!?!」

驚愕に声を上げる悟空に追い討ちをかけるかのように光は足を這い上がると胴を包み込み肩へ腕へ、とうとう悟空の全身を包み込んでしまった。

「悟空!!」

界王の必死の音が響く。呼応するかのように光は眩い輝きを放った。

「つぬう!?!」

強烈な光によって辺り一面が輝きの白に染まった。思わず界王は腕で顔を覆う。

程なくして、光は呆気ないほどあっさりと止んだ。

「……………つ!悟空!何処行きおつた?!悟空!!」

そして、悟空の姿は最早そこになかった。

プロローグ（後書き）

まだネギまに一切触れてませんね……。展開遅くてすみません。
。至らない点が多々あるかも知れませんが暇つぶし程度にでも読んで
いただければこれ以上の喜びはございません。

第1話 異世界からのお父さん

少年は震えていた。

麻帆良学園の最端に位置する学園と街とをつなぐ橋の上で少年、ネギ・スプリングフィールドは、眼前の少女をその目に満々と涙を湛えて見つめていた。

長い金の髪を夜風になびかせ、夜闇より尚黒いローブを纏った少女、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはさも愉快と言いたげに微笑んでいる。

明らかに格上の存在であるエヴァンジェリンに対して、ネギは正攻法をとらずに捕縛結界による拘束を選んだ。趣味で集めたアンティークを駆使し、対敵の猛攻から辛くも逃げ惑いながら、なんとかこの橋の上まで彼女を誘い込むことには成功した（畏と承知でついて来られたわけだが……）。

確かに、捕縛結界は完全に極まっていた。無数の光の縄がエヴァンジェリンのその少女らしい小さな体躯を縛り、動きを封じた瞬間をネギは見届けたのだ。

魔法の成功を見たネギは勝利を確信していた。つい先刻までは。

勝利の喜びはエヴァンジェリンの傍らに佇むもう一人の少女、エヴァンジェリンの従者・絡繰茶々丸によって再び絶望に塗り変わった。目配せを超越すエヴァに頷き返し、茶々丸は自身の側頭部それぞれ位置する『カチューシャ』を展開し小さく呟いた。

「結界解除プログラム起動・・・・・・・・」

その途端、エヴァ、茶々丸両名を拘束する光の縄達は軋みを上げてひび割れ、硝子が割れるが如く呆気ない音と共に脆くも崩れ去った。両手を広げて、エヴァは実にシニカルな笑みをネギに送る。

「科学の力だそうだ。便利なものだろう?」

「そ、そんな!?!」

驚愕するネギを他所に、音も無くエヴァはネギの眼前に悠々と歩み寄っていた。エヴァはそのまま祿に反応できないでいるネギから、その身長には不釣り合いなほど長大な杖をひょいと取り上げた。

「ああ!」

「ふんっ・・・・・・・・奴の杖か・・・・・・・・」

寂しげな呟きはほんの一瞬、エヴァは躊躇う事無くネギの杖を湖に投げ捨てた。

「ああ!父さんの杖が!!!ひどいじゃないですかエヴァンジェリンさん!!!」

状況も外聞も体裁も忘れてネギはエヴァへ食って掛かった。ネギにとつて掛け替えの無い、今自分に残された唯一の標しほく。唯一つだけ託された絆。それを投げ捨てられた。まるでゴミでも放るように。

やおら発露した怒りもネギは結局持て余し、それが泣き言に近くなつた辺りでエヴァは切れた。

「甘つたれるのも大概にしる……!!」

「ぐつ!?!……あつく……!」

ネギの細首は、少女の白磁のようなしなやかに伸びる片手によって絞め上げられた。少女の幼い外見からは想像し難い程の力が籠められた指がネギの首へ容赦なく食い込んでいく。ひゅう、と息が漏れた。

「これは勝負だ。男ならそれ相応の覚悟でかかって来い!」

ネギの情けない様に、エヴァは怒りを露にした。しかし刹那の逡巡の後、エヴァは無表情を顔に貼り付ける。凍てつく視線をネギに突き刺し、間髪入れずネギを片手で放り投げた。たまらずネギは落下。その場に尻餅を付くと、喉をおさえて激しく咳き込み立つ事さえまならなかった。

「さて、約束だったなネギ先生。遠慮なく血を吸わせて貰うぞ・・・」

比喩無しに、氷結した冷たい声音でそう言い放つと、エヴァは殊更ゆっくりとネギに近づいていく。

ネギはまた泣いていた。

しかし、今この時ネギの頭を占めているのは恐怖ではない。自身の弱さがただただ悔しくて、そして涙を流すまま何も出来ない自分がただただ情けなかったからだ。

(エヴァンジェリンさんが怒るのも当然だ・・・こんなことじゃ、父さんを探し出すなんて夢のまた夢じゃないか・・・!!)

目の前には自身を見下ろすエヴァの姿がある。たったそれだけで体は震え、奮い立たせた心は容易く折れた。脳裏を過ぎるのはあの雪の日。強かった父親のこと。

(お父さん・・・!)

ピュンッ

風を切る音を聞いた。

騒騒と揺れる木々。吹き抜ける風が頬を撫ぜる。
ピクリと瞼が震え、悟空は程なく目を覚ました。

「……何ごとだ？」

仄暗く、見上げた枝葉の隙間から僅かに月光が覗いているだけの此処は、文字通り木の中だった。

「でっけえ〜！これ木か？はあ〜、オラこんなでけえ木始めて見たぞ」

巨大。その一言に尽きるのだ。

悟空が足場としている幅数メートルの地面は、実の所枝の一本だった。悟空が背を預けていたのが木の本体であり、そこから放射状に伸びた木の先端は鬱蒼と茂る大量の枝葉によって目視することすら出来ない。

よっこらせ、一声上げて悟空はその場で立ち上がった。

「……あの世じゃねえよなあ。じゃ下界に来ちまったのか？」

確かめる意もこめて、悟空は周囲の広範囲に感覚を這わせた。

「……悟飯の気を感じねえ……ピッコロもベジータも……知らねえ気ばっかだ。どうなってんだ？」

これから自分はどうしようか。腕を組み合わせると悟空は首を捻った。
見知らぬ土地、知り合いも居ない、帰ることが出来るか保障さえない。

悟空は考えた。考えて、考えて……

「ま、いつか！」

考えるのをやめた。

仮にここが自分の知らない惑星であったとしても自分のすることは変わらない。修業して強くなる。帰り方はこれから探せばいい。

「うしっ！そんじゃまずは……人を探すとすつか」

そう気合を入れると同時に自身の額に人差し指と中指を当て、近場の気を探った。

何をするにしてもここが何処なのかを知っておきたい。その為にはまず人を探さなければ。

「ん？こいつは……」

探ったと同時に悟空は高速で動く気を二つ感じ取った。自身のいる

場所からもそう遠くはない。

違和感

「こいつは……あん時感じた力だ！……ん？でもちよつと違う？」

即、違和感は確信に変わった。つい先程悟空を飲み込んだ光の力。感覚だけを頼りとする悟空にはその力の微かな差までは見分けが付かない。しかし、これは違う。それだけはなぜかはつきりと悟空は確信していた。

二つの力は現在激しく上下しながら移動を続けていた。

「……………闘ってんのか？」

見知らぬ土地、知り合いも居ない、帰ることができるか保障さえない、そんな場所で今まさに未知の存在が戦闘が繰り広げている。こんな状況で悟空は

「……………すげえ！オラこんな力が世の中にあるなんて初めて知ってたぞ！」

わくわくしないはずもなかった。

（お！止まったみてえだな。勝負がついちまったか？まいいや、行けばわかる！）

そして思い立ったが吉日と言わんばかりに、早速自身の得意技を使おうと悟空は身構えた。

しかし、ふと背後へと振り返る悟空。そこには誰も居ない。ただ静かに、悠然と、雄々しい巨木が自身を見下ろしているだけ。

何か考えがあったのではない。意味があるとも思っていないかつたろう。

それでも、悟空は一つ笑顔を浮かべて右手の指は額に当てたまま、もう片方の掌を上げた。

「またな！」

ピシユンッ

答える者など居やしない。それでも悟空は、その一言を残したかったのだ。

騒騒と揺れる木々。
蟠桃は騒騒笑う。

目の前には長身の男が居た。

上下オレンジ色の胴着に紺色のアンダーシャツ。そしてアンダーシャツと同色の帯とリストバンドをしている。黒い髪が四方八方に伸びているが、だらしないという感じではなく不思議と髪型として成り立っていた。

唐突に現れたその男に驚き、しばらくネギは呆然とした。見れば、エヴァと茶々丸もまた、あまりに予想外な男の登場に固まってしまっている。

その男は蹲るネギを視界に収めると、掌を上げて

「オッス！」

挨拶してきた。

第1話 異世界からのお父さん（後書き）

展開遅えええ！

すみませんすみません、次こそ戦闘に突入させます。

第2話 吸血鬼VSサイヤ人

再度、ネギは呆けてしまった。

そんな中いつの間にかその男はネギの傍にまで近づいてきていた。

「オラ、孫悟空だ。よろしくな！」

言いつつこちらに手を差し出してくる。

平時なら怪しむなり怖がるなりするはずなのだが、不思議と警戒心はチラとも沸かず、自然とその手を取っていた。

悟空はそのまま手を取ってネギを引き起こした。

「よし！なあ、おめえはなんて名前なんだ？」

「え・・・あ、はい！僕、麻帆良学園女子中等部3 - A担任のネギ・スプリングフィールドともうしまふ！！」

ペコリとお辞儀をしながら、いきなりの自己紹介に慌てたためか微妙に囁んだ。

悟空は特に気にすることもなく。

「うーんと・・・ネギだな！うん、旨そうでいい名前だな！」

「えっ、そうですか？ありがとうございます……？」

よく分からないほめ方をされても、とりあえず律儀に礼だけは言うておくネギである。

ああそうだ、と言いつつ悟空改めてネギに向き直った。

「それでよネギ、オラおめえに聞きて「おい……！」ん？」

振り返るとそこには、エヴァンジェリンが腕を組み、額に青筋を浮かべ、悟空を睨みつけ、仁王立ちしていた。因みに傍らには茶々丸も待機している。

ついでにネギは、悟空の後ろで小動物のごとく震えている。

「いきなり現れたかと思えばこの吸血鬼の真祖エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルをして散々無視しておつてからに……貴様等そんなに死にたいのか……!？」

「マスターは放つとかれたのが寂しくて拗ねてるだけでは？」

ドスの聞いた声でエヴァンジェリンは凄むが、すかさず茶々丸がツッコミを入れる。

「……だからお前は何でいっつもいっつも……!？」

顔を真っ赤にしてエヴァンジェリンは茶々丸の胸倉をつかみ激しく揺する。

「あ、そうか寂しかったんか……。わりい無視しちゃって……」

「ええい！！お前もそんな同情の目で見るな！！！！というかそんなこと今はどうでもいいわ！！！！」

せつかくの迫力も今のやりとりで霧散し、なんとなく気まずい雰囲気の中エヴァンジェリンは改めて悟空を見据えた。

「貴様、一体何者だ。今の転移はお前の魔法か？何の目的でここにいる？《茶々丸、魔力の動きはあったか？》」

言いつつエヴァンジェリンは自身の従者である茶々丸に念話を送った。

《いえ、魔力反応は検知できませんでした。というより彼からは一切の魔力を確認できません。》

《なに？ならば西の者か？いや西の呪術にあのような転移は不可能だ……。気の発動は？》

《今の所ありません。しかし常に一定量を体中に満たしているよう

です。》

《・・・なるほど、気を操る術には長けているようだな。》

気とは万物に流れる力の流れ。気のコントロールを極限まで磨き上げれば空を飛ぶことも、離れた場所へ一瞬で移動することも可能だ。(ごく一部の者に限られるが)

今悟空は気を極限まで押さえこんでいるため、気の感知が出来る者の目にも悟空は一般人としか映らないだろう。

(それ相応の実力者ということか・・・)

エヴァンジェリンは内心でそう結論付けた。

「答える！」

「いや、だからオラ孫悟空だ」

「それはさつき聞いた・・・私が聞きたいのは貴様の目的だ！」

「そんなこと言われてもなあ。気が付いたら、でけえ木の中にいたんだ。」

「ふんっ、そんな話を信用すると思うのか？まあいい、貴様の目的は後できっちり吐いてもらおう・・・それにちょうどいい、ぼーやだけじゃ物足りないと思っただころだ。」

「え！？そんなエヴァンジェリンさん！！！」

ネギの狼狽を無視して、言い終えたと同時にエヴァンジェリンは構えた。

「茶々丸構えろ。」

「よろしいのですか？」

「ああ、ぼーやにもはや戦意はあるまい。それよりも侵入者を排除する方が先だ。ああそれと茶々丸。」

「はい？」

「絶対に油断するな……。あの男只者ではない……。」

「……了解。」

悟空はエヴァンジェリンの戦意を気取り、構えてはおらずともすでに戦闘態勢に入っていた。間合いを測り、相手の気を量り、全身に気を充実させていく。

そんな悟空を見てネギは一層激しく動揺を見せた。

「悟空さん！駄目です！危険です！これは僕とエヴァンジェリンさんとの戦いなんです！悟空さんを巻き込むなんて

」

ぽんっ

唐突に頭の上に暖かいものが乗せられた。

それは手だった。

何度も怪我をしたり、皮がめくれてしまったのがごっごっとした無骨な手だった。

でも心にはこれ以上ないくらいの安堵と、暖かさが満ちるのが分かる。

「え？」

「大丈夫だ。オラは負けねえ。それにおめえ、負けたのが泣くほど悔しかったんだろ？もつと強くなりてえって思ったんだろ？」

コクリ、とネギは頷いた。

悔しかったとしても。弱い自分が嫌で嫌で仕方なかった。

でもこれは自分が、先生である自分がやらなくちゃいけないことだ
・・・

「なら、今は休め。そこでこん次はもつと修行してリベンジすんだ

「！」

「でも僕……弱虫で……一人じゃっ……何もできなくて……
ひっ……」

ああ、また泣いてしまう。

嗚咽を漏らし何とか涙を堪えようとするが、あとからあとから涙はこぼれた。

「大丈夫！おめえは強え。オラおめえが一人でここまで頑張ったの知ってっぞ！おめえはまだまだ強くなれる！本当だ！！」

にしし、歯を見せて笑う悟空はなんだか太陽みたいで、見ているとつられてネギも笑ってしまった。

この会って数分と経たない人物に、何故自分はいここまで安心してしまっのか、今分かった気がする。

「（お父さんみたいなんだ、悟空さんは）……僕……僕、
頑張ります」

まっすぐに悟空の目を見据え、たくさんの意味をその一言に込めて

「ああ！んじゃ、ちよっくら行ってくる！ネギはちよっと離れて
てくれ。」

その背中を見送った。

距離は10m程、すでに戦闘態勢を整えたエヴァンジェリン達は悟空を待っていた。

「よお、待たせちまったな。」

言いながら悟空は構えた。

「かまわん。あの年のガキにはまだまだ親が必要と言うことだろう・・・」

微かにエヴァンジェリンの表情が陰る。

思い出すのは今は亡きネギの父親・・・だがそれも一瞬、顔を上げたエヴァンジェリンの表情はすでに好戦的な笑みが浮かんでいた。

この時点ですでにエヴァンジェリンにとっては、悟空が侵入者かどうかはあまり興味のない些事ではなかった。眼前の男の力が見て

みたいという、ただの暇つぶし、遊びでしかない。

(藪をつついて出てきたのは、蛇か羽虫か、それとも……)

こんな感覚いつ以来か。

こいつ相手なら全力でやりあえる！

「さあ、始めようか！」

死合開始だ。

第2話 吸血鬼VSサイヤ人(後書き)

私は前回戦闘シーンがどうのとのたまっておりましたね・・・。

申し訳ございません!!

第3話 続・吸血鬼VSサイヤ人

「行け！茶々丸！」

エヴァンジェリンの命令とともに茶々丸が悟空との間合いを一瞬で詰めた。

その間エヴァンジェリンは呪文の詠唱に入る。

ブースターで加速をつけた右の拳を悟空の顔面へ見舞う。

スカッ

悟空はそれを首を反らすだけでかわした。

しかしそれだけでは終わらない。

茶々丸はさらに左の拳を放ち、引くと同時に膝蹴りを放ち、先ほど引いた右腕から強烈な肘打ちを入れようとする。

シュツシュツシュツシュツ！.....

茶々丸は自身の、ガイノイドとしての特性をフルに活かしている。

スタミナという概念がない茶々丸の連撃は止まることはない。エネルギーさえ供給されれば、この連撃は永遠に続くだろう。

しかし聞こえるのは鋭い風切音のみ。

悟空は茶々丸から放たれる鋭い連撃を防ぐのでも、捌くのでもなく、完璧に避けきっていた。

体を反らし、足を曲げ、跳躍し、また首を反らす。

常に動き続けているにも関わらず、その息が、動きが乱れることは

なかった。

(…………あの動体視力とスタミナはすでに人間のものではないぞ…………)

呪文を完成させつつ、驚嘆と呆れの混じった声で内心エヴァンジェリンはつぶやいた。

《茶々丸、距離をとれ!》

《了解》

「魔法の射手 連弾・氷の17矢!」

茶々丸が離脱したと同時に魔法の射手を放つ。

エヴァンジェリンから放たれた氷の弾丸は狙い変わらず悟空に迫る。

それを見た悟空は腕を頭を覆うように交差させ構えた。

(! 防いだところで、中れば氷付けだぞ!)

もはや魔法の射手が悟空に直撃すると思われた時

「だぁあ！！！」

悟空は腕を開くと同時に気を一気に放出した。

それは強烈な衝撃を周りにばら撒く。

悟空の気の直撃を受け、氷の17矢は一矢残らず消し飛んだ。

「！？つく！」

「マスター！！」

「エヴァンジェリンさん！！」

気の余波を受け、エヴァンジェリンと茶々丸はたまらず吹き飛ばされた。

ネギは橋の欄干にしがみついて吹き飛ばされないよう耐える。

茶々丸は宙返りの要領で態勢を立て直し、なんとか着地に成功した。

エヴァンジェリンはとっさに飛ぶことが出来ず、顔面からアスファルトへの着地に成功した。

「のぺろぽおおおお！！！！」

形容し難い奇声を発しながらアスファルトを転がっていくエヴァンジェリン。

ようやく止まったとき、すでに傍らには茶々丸が駆けつけていた。

「マスター大丈夫ですか?!」

「ま、まあなんとかな・・・しかし単純な気の放出でこれでは・・・凝縮した奴の気による『技』を想像するとゾツとせんな・・・」

軽く20mは吹き飛ばされ、悟空からはだいぶ距離があった。

「お〜い!大丈夫か〜!」

手でメガホンを作り、大声で敵の安否を気遣う様な悟空のその行為。普段なら舐められている、と激怒するのだが悟空のその様はどこか滑稽で、それでいて本人はいたって真面目なだから文句も言えない。

エヴァンジェリンは自然と微笑んでいた。

「茶々丸。」

「? はい、なんででしょうかマスター?」

「ここからは私一人でやる。お前は下がれ」

「!?!? しかし・・・」

エヴァンジェリンからの思いがけない命令に、さすがに茶々丸は言いよんだ。

「なあに、奴がこちらに対して害意がないのは分かってるんだ。最悪でも死ぬことはないよ。」

「しかし、だからと言ってマスター一人だけを戦わせる訳には……」

そう言っつて、茶々丸は自身のマスターの顔を見た。

茶々丸は何も言えなくなった。

「それじゃ、行ってくるよ。」

「……はい、お気をつけて。」

あんなに楽しそうなマスターは初めて見るから。

エヴァンジェリンは前に出ると大声で悟空に言った。

「おい！孫悟空とか言ったな！」

「うん？」

たった一人で前に出たエヴァンジェリンを怪訝そうに悟空は見た。
エヴァンジェリンはさらに続けた。

「これから貴様に私の全力の一撃をぶつけてやる！だから貴様もその全力の一端を見せてみる！！」

エヴァンジェリンはそう言い放つと獯猛に悟空へ笑いかけて見せた。
肝の小さいものなら泡を吹いて気を失うほどの覇気を込めて。

悟空は一瞬呆けた、がすぐに笑い返して見せる。

思い出すのは、自分にサイヤ人としての誇りを教えてくれた永遠の好敵手。

悟空は今、最高に楽しかった。

「姉さん！橋が見えてきたぜ！もうすぐだ！」

「うっさい！！耳元で叫ばないでよ！！」

今まさに橋へ猛スピードで近づく少女とその肩に乗る動物がいた。
少女の名は、神楽坂明日菜。

ネギの担当する2-Aの生徒である。

ある出来事がきっかけでネギが魔法使いであることを知った。
そしてその肩に乗っているのはネギの弟分を自称するオコジヨ妖精、
アルベール・カモミール（通称カモ）である。

「たく、なんであいつはガキのクセに！なんでもかんでも自分一人で背負い込もうとすんのよ！！ガキのクセに！！」

「いやそりゃ姉さん、微妙な男心ってやつさ！自分の力で未来を切り開く！憧れるねえ！！」

「はあ？！なにそれアホくさ！」

「ガーン！そりゃねえぜ姉さん！」

「うっさい！！アタシはね、そう言うまどろっこしいのが大嫌いな

のよー!!」

橋までの距離も残り1000mを切ったその時

「!?!?きゃあああああ?!!!!」

「うおおおおお!!?!?!?なんだあ!?!?」

橋の上空で極光と爆音が響き渡った。

第3話 続・吸血鬼VSサイヤ人（後書き）

戦闘シーンどうでしょうか？

初めて書いたのですが、読み返すたびに誤字を発見するため読むのが怖くなってきました・・・；

エヴァンジェリンのキャラおかしいだろう！とか

悟空強くしすぎじゃね？とか

ご意見ご感想などありましたら遠慮なく言ってやってください。

第4話 終・吸血鬼VSサイヤ人

夜風が美しい金の髪を優しく梳いている。

空気は澄み、街の光がここからでも見て取れる。

空には雲ひとつない。

満月でないのがなんとも惜しい。

橋から上空30mほどの所で、エヴァンジェリンはふとそんなことを思った。

今から自身の全力を眼下にいる男に見舞ってやる、と高らかに宣言して見せたのだが闘争の空気はそこになかった。代わりにあるのは、今までにないほどの好奇心。

「単純な力での勝負など、私らしくもないな……ふふふ。」

そう言って自嘲気味に笑う。

(だが、存外こういうのも悪くない)

あの男……孫悟空には勝てない、というのはもう分かっていた。力の差をここまで感じたのは過去百年でもたったの一度。

こちらの攻撃をのりくらりとかわし、腹立たしいほど飄々として

いて、それでいて自分の知るどんな奴よりも強い力を持っていた。あいつ』。

（・・・ああ、そうか）

そこでふと思い至った。

何故自分はこんなに嬉しいのか。

容姿はまるで違っし、性格だって全然違っ、拳句魔法さえ使わない、にもかかわらず

（『あいつ』に似てるんだ・・・）

そんな望郷にも似た感覚を感じながら、眼下の男を見据えた。

「うっしー！いつちよっかー！」

と一声気合をいれ、両の手のひらを開き、両の手首をあわせ腰溜めに構える。

その瞬間、押さえていた気を一気に開放する。

「!?・・・これが悟空さんの・・・」

気をよく理解していない今のネギにも分かる。

これはとてつもない力だ。

さらに、対するエヴァンジェリンから発せられる魔力も尋常ではない。

これらが今からぶつかり合うのだろうか。

「エヴァンジェリンさん・・・悟空さん・・・」

「ネギ先生、もう少しさがっててください」

「！茶々丸さん・・・」

「マスター達は恐らく放出系の技をぶつけ合うつもりです。ここには危険です」

無感情に見えて内心茶々丸は焦っていた。

孫悟空から発せられている気はすでに、茶々丸のセンサーでは計測できない値まで達しており、今なお上がり続けている。

こんな物をぶつけられれば、不死の魔法使いといえどただではすまない。

それでも

「…………マスター…………。」

『信じて待とう』そんなまったく非合理的な答えが出てしまったから。

「かあ…………。」

体中を満たしていた気が悟空の両の手のひらに集まり、青い光があたりを照らす。

「…………行くぞ！リク・ラク ラ・ラック ライラック！！」

「めえ…………。」

対するエヴァンジェリンも呪文を紡ぐ。
目の前の男を屠るに相応しい呪文を。

「来たれ、氷精、闇の精！！」

「はぁ………」

凝縮されていく魔力と気が大気を揺らし、湖は波立つ。

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪！！」

「めえ………」

魔力と気は極限まで高められ

「『闇の吹雪』！！！！」

「波あああああ！！！！」

今、放たれた。

「ぐっ！……ぐっのおおおお！……！」

迫り来る青色の極光。

ぶつかり合った瞬間に感じた尋常ならざる力。

（これがこの男の力か！！ふざけているなまったく！！）

力が拮抗したのはほんの一瞬。

自身の『闇の吹雪』はゆっくりと押し返されている。

手加減なし、リミッターなしで放った魔法をいとも容易く上回って
みせるこの力。
でも

「っ！……まだまだあああああ！……！」

腕に力を込める。

まだ出せるはずだ、全力のその向こう、この男に私の力を届かせる
ために。

ゆっくりと前進していたかめはめ波は、唐突にその進行を止めた。
悟空は驚いていた。
全力と思われていたエヴァンジェリンのあの力がこの局面で増大したのだ。

「……すげえ……」

悟空は思わずつぶやいていた。
力の大きさがではない。
確かに限界を迎えているはずなのに、エヴァンジェリンはさらにその上の力を自身から引き出してみせたのだ。

「……悪かったな……」

悟空は小さく謝罪した。
エヴァンジェリンは極限の闘いをしようとしている。
だのに自分はこの期に及んで手加減しているのだ。
自嘲気味に笑い、キツと表情を引き締め、大声で言った。

「悪かった!!」

「？」

突然の謝罪を受けて、エヴァンジェリンは疑問符を浮かべた。

それでも悟空は続ける。

「おめえはすげえよ！！ものすげえ強え！！だからオラも見せてやる！！これが」

瞬間、金色の閃光が橋を包んだ。

「オラの本気だ！！！」

逆立った金色の髪、碧に光る鋭い目、迸る金色の焰。

超サイヤ人、孫悟空。

「なに！？！！！」

「波あああああ！！！」

圧倒的力の前に『闇の吹雪』は掻き消えてゆく。
もはや避けることも叶わない程に迫ってきた青い極光の向こう。
金色に輝いている戦士の姿は、雄雄しく、力強く、同時に

「……綺麗」

他人事のようにエヴァンジェリンはつぶやいていた。

「マスター！！！！」

「エヴァンジェリンさん！！！！」

全てを焼き消す巨大な青い焔は今まさにエヴァンジェリンを飲み込もうとする。

そう思われたとき

「「「な！？」「」」

巨大な焔がエヴァンジェリンの眼前で『直角に』曲つたのだ。

方向を変えたかめはめ波は、遠く夜空の向こうへ消えていった。

「ふいっ………危ねえ危ねえ。おっ！怪我ねえか！？」

突然の出来事でエヴァンジェリン、茶々丸、ネギは、安心やら驚き

やら様々な感情が渦巻き呆然としていた。
そんな空気を特に気にすることもなく悟空は言っ。

「オラの勝ちだな!!」

へへへ、と子供のように笑う悟空。

その一言に、いち早く正気を取り戻していたエヴァンジェリンは悟空につられてこれまた笑った。

「ああ……私の負けだ……」

そう言ってまた笑い合った。

ピピッ

唐突に響く電子音。

その発生源は茶々丸だった。

「!?!? いけない!!」

「え!?!?」

茶々丸が叫ぶと同時に、橋の主塔のライトや街灯が一斉に点灯し始めた。

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！マスター、戻ってくだ
さいー！」

「っええい！いい加減な仕事をしおってー！」

エヴァンジェリンはそう毒づき、急いで橋の上へ飛ぼうとする。

チリッ

「きゃんっ！ー！！」

しかし次の瞬間、感電したかのようにその体を紫電が走った。
電撃が止むと、エヴァンジェリンはぐったりとして湖へ落ちてゆく。

「！？どうしたんだ！？」

「マスターは結界の影響で魔力が使えず今は10歳のただの子供で
す！あとマスターは泳げません！！」

「いい！？」

そう言っている間にもエヴァンジェリンはどんどん落下していく。

湖に落下している最中、エヴァンジェリンの頭の中では走馬灯が駆け巡っていた。

今はもういない自身を下した男、サウザントマスター。

奴との旅は600年の歳月を生きてきたエヴァンジェリンにとって、最も色濃いものだったと言える。

この土地に縛り付けたその張本人は、3年したら自分をこの呪いから解放してくれると言った。

それを信じて15年間待ち続たにも関わらず、帰ってきたのは死亡報告だけだった。

(・・・嘘つき！)

心の中で憤りと悲しみとがゴチャゴチャになっていく。
目に涙を溜め、エヴァンジェリンは目を閉じた。

「杖よ！」

そんな時自分の近くで声がした。
突然腕を取られ引っ張りあげられる。

「っぐ！」

無理矢理に引き上げたせいで肩を痛めたのか苦悶の声が聞こえる。
しかし、そんなことはどうでもいいと言わんばかりにそれは慌てて
声をあげた。

「大丈夫ですか?! エヴァンジェリンさん!」

そこにはネギ・スプリングフィールドが心配そうに自分を見ている
姿があった。

「……貴様、何故助けた?」

「?なんでって……エヴァンジェリンさんは僕の生徒じゃないで
すか!」

何を言ってるんだ、と疑問符を浮かべつつネギはまっすぐに答えた。

「……ふんっバカが……」

顔を背けてエヴァンジェリンはつぶやいた。

「良かった……マスター」

「ははは！自分で橋、飛び降りちまうなんてネギの奴度胸あんなあ
ゝ。あいつも無事みてえだ」

茶々丸と悟空は並んで、そんな二人を眺めていた。

第4話 終・吸血鬼VSサイヤ人（後書き）

ようやくエヴァンジェリン戦終了です・・・。

展開遅くてホントにすみません；

頑張りますのでよろしければこれからも読んでやってください。

第5話 名前を呼んで？

「で？」

「ん？」

エヴァンジェリンが湖へ落下するのをネギがなんとか阻止し、橋の上へと戻るとエヴァンジェリンは開口一番悟空に問うた。

「お前は一体何者だ？何の目的でここにいる？！というかお前ほどの力を持ったものがどうやってこの学園に忍び込んだ？！！というか最後のあの姿はナンだ？！！力が数十倍に上がるとかどんな反則技だ？！！！じじいか？！じじいの回し者なのか？！！」

「お？お？お？」

エヴァンジェリンは悟空に掴み掛からんばかりに一気にまくし立てた。
勢いの激しさにたまらず悟空はたじろぐ。

「あははは……。。。」

「ああマスター、そんなに楽しそうになさって……。」

エヴァのそんな様にネギは苦笑い、茶々丸は微笑ましげに呟いた。

「だあかあらあー！茶々丸お前は！
あいいい……。とりあえず孫悟空、お前には聞かなきゃならんこと
が山ほどある。これから行く場所についてきて貰う……。」

「おお、分かったぞ！」

間髪入れずに悟空は了解した。あまりの無警戒な態度に、逆にエヴァは肩透かしを喰らう。

「……。いいのか？もしかしたら厄介そうなお前を始末するため
に、私は嘘を言って罫に嵌めようとしているかもしれないのだぞ？」

ニヤリ、と人の悪い笑みを浮かべてエヴァは悟空の目を、身長差の
関係もあつてか、睨み上げた。

「え？そうなんか？！」

しかし、そんな冗談が悟空に通ずるはずもなく、悟空は完璧に真に
受けた。さも予想外である、と言わんばかりに驚いた様子で悟空は
エヴァを見る。

「!? いやだからこれは例え話だ！私はお前にはそんなことしない！！」

「ん？じゃあいいじゃねえか。それによ、おめえがいい奴だったのはさっきで分かったかな！」

「な！？」

からかってやるつもりが思わぬ返答を受け、エヴァは顔を真っ赤に染めた。

「お前までそつち方面のツッコミを！？」「ネギイイイ！！」「あ？」

「お？」

「あ、アスナさん！」

見るとそこには、こちらに全力疾走してくる明日菜とカモの姿があった。どうやら、決闘の真っ最中とされていたエヴァとネギが一緒にいることに驚いているようである。

アスファルトを削るが如き勢いのままネギの直前で急ブレーキ踏んだ明日菜は、ネギに掴みかからんばかりに飛びついて肩を揺すった。

「ネギ！無事！？え？つていうか決闘は？！」

「そつだぞ兄貴！！なんでエヴァンジェリンなんかと一緒にいるん

だよ?!」

「い、いやだからその実は……。」

矢継ぎ早にぶつけられる質問に、ネギは混乱しながら今までの出来事を説明し始めた。

自分は勝負に負けてしまった事、悟空が助けてくれた事、そして悟空が勝った事、授業に出てもらうという約束と自分がエヴァにかけるられた呪いを解くという約束をした事。

説明が進む度、大いに驚愕し、声を上げて、芸人もかくやなりアクションを明日菜とカモは見せた。

そして、思う存分驚き終えると明日菜はポケツと突っ立っている件の男、悟空に向き直る。多少の極まりの悪さからしばし明日菜は逡巡した。

「あのアタシ、神楽坂明日菜って言います!今日はネギを助けてくれてありがとうございました!こいつガキのクセになんでもかんでも自分一人で背負い込むもんだから……このバカっ!」

「あう……。」

「オレっちはオコジョ妖精のアルベール・カモミールっす!オレっちからも礼を言わせてもらうぜ!それにしても悟空の旦那はすげえや!魔力解放状態のエヴァンジェリンに勝っちゃうなんてよ!」

軽く一発、明日菜に叩かれたネギは見るからに小さくなっていく。

悟空は豪快に笑った。

「ははは！気にすんな。それにネギだって、ちゃあんと自分の力量が分かってたからここまで来たんだかな。あんまり怒っちゃ可哀想だぞ？」

「う……ま、今回は悟空さんに免じて勘弁してやるけど、今度はただじゃ置かないから」

「あう！？」

涙目であたふたと焦るネギ。明日菜と悟空はこれまた一頻り笑い合った。

「……そろそろいいか？」

腕を組み事の成り行きを見ていたエヴァは、話の区切りを見て一歩前へ。悟空を正面に据えた。

「孫悟空、これからお前にはこの学園の管理者に会ってもらおう。事情説明や今後のお前の身柄についてはそこで決定が下るだろう」

「そっか、分かった。おめえらについて行きゃいいんだな？」

「ああ、ではそろそろ行くぞ……茶々丸」

「はい」

エヴァの目配せを受けて茶々丸はそのままエヴァの小さな体躯を抱え上げる。身体の各所に内蔵されたブースターが顔を出し、激しい熱風を地面に叩き付けて中空へと舞い上がった。悟空もまたそれに続くため地を蹴ろうとする。

「あのつ悟空さん!」

「ん?なんだ?」

首を傾げる悟空に対し、しばらくの間何かを思索するようにネギは押し黙っていた。しかし、意を決した様子で顔を上げると、まっすぐに悟空を見つめ、深々と頭を下げた。

「本当に、本当にありがとうございました!僕……僕、頑張ります!頑張りますから!」

悟空もまたネギをまっすぐに見つめ返す。そして、その瞳の中にある力強い決意の意志を悟空は確かに感じ取った。

会って間もないこの少年に悟空は幻視する。恐怖を跳ね除けて、闘うと言ってくれた息子の姿。

一つ頷いてサムズアップ。

悟空はそのまま何も言わず、エヴァ達の後を追って飛び立った。

「ふおおおお。とりあえず一件落着かの。」

「ええ。……しかし、またもう一つ案件が増えましたね。」

麻帆良学園女子中東部学園長室にて

口髭を生やし、頭の異様に長い老人、近衛近右衛門と眼鏡を掛け、無精髭を生やし、スーツ姿で佇む壮年の男、高畑・T・タカミチ等はそう小さく呟いた。

「うむ。エヴァにも困ったもんじゃったが、さてはてこれは……」

「とてつもない力ですよ。まだまだ底が見えませんでしたし……それに最後に感じたあれは一体……」

「……なんにせよ、会ってみれば分かることじゃて。それへの高畑くん、ワシは不思議とあの気の持ち主を悪い人間とは思えんのじゃよ。」

ふおふおふお、その特徴的な笑いを漏らして、近右衛門は清々しいほど澄み渡る星空を見上げた。

不可解な物言いに高畑は疑問符を浮かべて近右衛門を見る。

「ワシも長いこと生きておるがの、あれ程純粋な『力』は初めてじゃ……一体どんな人物なんじゃろうなあ。ふおふおふお！」

明らかに不謹慎だろう近右衛門の様子に高畑の顔には空かさず苦笑いが浮かぶ。

しかし、ふと気付いてみれば何のことは無い。高畑が今正に抱いている闘争心こそ不謹慎なのだろう。高畑の苦笑いますます深まるの

だった。

麻帆良学園上空

「おい！孫悟空！」

「うん？なんだ？」

茶々丸の腕から顔だけ覗かせて、エヴァは後方の悟空を見やる。不意の大声にキョトンとして悟空もまたエヴァを見返した。不何故かもしもじ逡巡し続けるエヴァ。

「……その……お前は私に名乗ったが、私はお前に対してまだ名乗っていなかったからな……そ、それでは礼を欠くというものだ！」

「あ、そう言やそうか」

悟空は合点がいったとばかりに手を打った。

風に靡く髪を押さえて、エヴァはもう片方の手で悟空を指差して高らかに言い放った。

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルだ！お前のことだ、どうせ覚えられんだろうから……その……私のことはエヴァと呼べ！……と、特別だからな！！」

「おう！分かったぞ！」

顔を真っ赤にして言うエヴァに悟空は笑顔で頷いた。
そして、そんな主の様子を見て、人によっては判別できない程小さく、茶々丸は微笑んでいた。

「……従者の絡繰茶々丸と申します。茶々丸とお呼びください。」

「うっし、エヴァにチャチャマルだな！オラ孫悟空だ、よろしくな！」

こうして、今日何度目かになる挨拶を済ませた一行は一路、学園長室へ向かうのだった。

第5話 名前を呼んで？（後書き）

次でやっつと学園側と接触です・・・。

出したいキャラとかいっぱいいて迷いますが、とりあえず頑張ります！

それから感想を書いてくださった方々ありがとうございます！励みになってます！

では今回も読んでいただきありがとうございます！

第6話 現状把握

『一部』を除くほとんどの生徒が下校し、教師もそのほとんどが勤務を終え帰宅した暗い校舎で、一室だけ電灯が点っている部屋があった。

「はじめましてじゃの。ワシはこの学園の学園長を務めさせてもらつとる、近衛近右衛門という。そしてこちらは、学園広域指導員の高畑くんじゃ。」

「高畑・T・タカミチです。タカミチでいいよ。よろしく。」

高畑はそう言つて微笑むと手を出して悟空に握手を求めた。

「孫悟空だ。よろしくな。」

悟空もまた握手を返す。

「ふむふむ。さあ、悟空くん立ち話もなんじゃ。適当に掛けてくれ・・・と言つてもエヴァはもう座つとるがの・・・。」

見るとエヴァンジェリンはすでに備え付けのソファ―にふんぞり返っていた。茶々丸はその傍らに静かに佇んでいる。

「さて、挨拶が済んだところで早速本題じゃ。……悟空くん、君は一体何者なんじゃ？」

部屋にいる全員の視線が悟空に向けられた。

エヴァンジェリンなど見つめるを通り越して睨みつけるように悟空を見つめる。

それも当然であろう。

自身をいとも容易く下してみせたこの男、先ほどは戦いやらなんやらで有耶無耶のままになってしまっていたが、この男の力は言ってしまうえば異常だ。

彼女は伊達に最強の魔法使いを名乗っている訳ではない。

悟空から発せられる力、動き、そのどれもが長きに渡り研鑽されてきた『技』だ。さらに対人戦闘に対して一切の迷いが無いことから間違いなくいくつもの死線を潜ってきている。

だが、そんな実力者であるはずの孫悟空の名をエヴァンジェリンは今日この日までついぞ聞いたことがなかった。

それは有り得ない事である。

第一線から退いているとは言え、彼女の裏の繋がりは決して浅くはない。

さらに言えばこの場にいる高畑もまた裏に精通しており、近衛近右

衛門に至って言えば彼の裏の情報網は他の比ではない。

しかしそんな彼らを以てしても孫悟空とは全くの未知の存在だった。警戒するなど言う方が無理な話である。

「このような質問をして不躰だとは重々承知してある……。しかしワシはこの学園の長として君の事を、君の今後を見定めねばならん。……。話してくれんかの？」

学園長の言葉を聞くと悟空は考え込んだ。

悟空のその様子を深刻に受け取ったのか、学園長はさらに続ける。

「……すまないとは思っとる。君にも事情が「いや、そうじゃなくてよ」「ふお？」

悟空を気遣った学園長の言葉を悟空が遮った。

「実はよ、オラにもよくわかんねんだ！」

「」「は？」「」

頭を掻き、あつけらかなとして悟空は言った。

思わずその場にいた全員（茶々丸を除く）が素っ頓狂な声をあげる。

そんな皆の様子を気にも留めず悟空は続けた。

「ここに来る前、変な絵みてえな光に飲み込まれてよ。気が付いたらでっけえ木の中だったんだ。いやゝあれはおでれえたぞ。」

一同は悟空の話を理解出来ずいまだ混乱している。
しかしそこで高畑はハツとして自身の記憶を思い返した。

「学園長、そういえば停電の直後に極々微弱ですが世界樹の発光があったと報告が……」

「おお！そうじゃったそうじゃった。……決闘騒ぎですっかり忘れとったわい……」

「……」

学園長が横目でエヴァンジェリンに視線を送る。

エヴァンジェリンが若干の反応を示すも、すぐに何事もなかったかのように表情を戻した。

「うむ、悟空くんが転移してしまったのには世界樹が関係している可能性があるようじゃな……これはまたおつて調べるとしよう。して悟空くんは何処から来たんじゃない？訳の分からん内にいきなり知らん場所に来て混乱しとるじゃる。言ってくれればすぐにも元いた所へ送り届けるぞい」

「うっくん、でもオラあの世から来たかなあ。戻るにやっばオラ、もう一辺死ななきゃなんねえのか？」

「「「はい？」」」

本日二度目の間抜けな声を全員（茶々丸を除く）が上げ、高畑と学園長はいよいよもって混乱し始めた。

エヴァンジェリンはなにやら拳を握ってピクピクと震えている。

学園長は混乱を呈してさらに悟空からの説明を求め

「悟空くん、それは一体どういう「ふざけるな！！あの世だど！？じゃなにか？お前は死人だとも言うのか？ふざけるのも大概にしる！！会った瞬間からお前はまったく！！あれか、私に自分のこと知られるのそんな嫌か！！？私のなにが気に

「

「どつどつどつ、マスター落ち着いてください」

我慢の限界を迎えたエヴァンジェリンが暴走するのを茶々丸が宥め賺す。

そんな様子に苦笑いしつつも、今度は高畑が口を開いた。

「悟空さん、出来れば一から順を追って説明してもらえるかい？どつにも事情が複雑なようだ」

「わりいわりい。うん、そうだな〜……………なにから話したらいいかな?……………」

悟空はそんな風に言うと、遠い思い出を見るかのように目を細め話を

「もついい」

「ん?」

出来なかった。

悟空の鼻を挫いたのは、先ほどから茶々丸によって黙らされていたはずのエヴァンジェリンであった。

エヴァンジェリンは幽鬼のように立ち上がると座っている悟空の正面に回る。

「ははははそうだ、始めからこうしていればよかったのだ……………
……………」

「な、なあエヴァどうしたんだ?オラなんかまずいこと言っちゃまったか?」

「! まさか、悟空さんの記憶を見る気か?……………」

「エヴァ、いくらなんでもそれは良くないよ……………悟空さんにも事情が「あ、なんだそんなことか」「え?」

高畑が気を遣いエヴァンジェリンを静止しようとする。
しかし悟空は言う、そんなことかと。

「オラが説明するよか余つ程いいや。エヴァ、オラの記憶を見てくれ。」

少々面食らったエヴァンジェリン。しかし今度は真剣な表情で悟空を見据えた。

「……いいのか？確かに見る記憶を選ぶことは出来るが、それも絶対ではない。お前にとって不都合な記憶まで見てしまうかもしれない。それにな、記憶を読むということは、心を晒すということなのだぞ？感情も、思いもだ」

「……そうかもな。でもよ、それでおめえ達は安心出来るんだろ？」

悟空の言葉に学園長と高畑ギクリとして悟空を見た。警戒を解いていないことを見透かされたのだ。そしてまた同時に申し訳ないとも。につ、と今日何度目かの悟空の笑顔をエヴァンジェリンは真正面から見た。
そして自然とほころぶ自身の顔。

「……ふん。では見せてもらおう。お前は何者なのかを……」

「ああ」

エヴァンジェリンはそのまま自身の額を悟空の額に合わせて、目を閉じ集中する。

そしてエヴァンジェリンは見た。

荒唐無稽、波乱万丈、奇々怪々な一人の男の物語を。

圧倒的な強さで立ちふさがった数々の敵、闘うことで解かり合えた仲間達。

そして

『最後に見せてくれよ、オラたち二人で作った力を！』

『はい!!』

自分の死を誰よりも悲しみ悔やみ、最後まで諦めず闘い抜いてくれた息子の姿。

『爆発させる!!力を!!』

『ううわあああああああああ!!……!!……!!』

強烈な蒼い光を最後に、そこで全てが暗転した。

「……………はあ……………」

そっと息を吐いて、エヴァンジェリンはゆっくりと目をあけた。
長い映画を見たような軽い疲労感が彼女を包む。

「どっじゃ、エヴァの目から見て悟空くんはどう映る？」

学園長は問う。

そして静かにエヴァンジェリンは口を開いた。

「……………まず一つ、大きな勘違いを正しておく。こいつはこの
世界の人間ではない」

「!?!?・・・そうか、では魔法世界の「違う」「ふお?」

学園長の発言をエヴァンジェリンはすぐに否定した。
さらにエヴァンジェリンは続ける。

「平行世界・・・否、地球という星を舞台にすれど、こいつがいたのは全くの所謂『異世界』だ。」

「な、なんと・・・」

「・・・そんな事が有り得るのかい?」

エヴァンジェリンの言葉に、学園長と高畑は驚愕した。
因みに悟空はキョトンとした。

「まあまず間違いないだろう。洗脳や記憶障害の痕跡は見られなかったし、こいつの強さがなによりの証拠だ。ああそれと、こいつにこの学園をどうこうしようなんて意思はないから安心していいぞ。・・・それにしても、お前の世界には化物しかおらんのか!」

「ひでえな。いい奴だっっていたろ?」

相も変わらず悟空は暢気に言う。

学園長はそんな悟空の様子にとつとつ吹きだした。

「ふおふおふお！あい分かった！悟空くん、麻帆良学園学園長として君を歓迎しよう！」

学園長はそう言って、また笑った。
隣では高畑も微笑んでいる。

「元の世界へ帰るための方法はワシの伝手を当たってみよう。悟空くんの今後の生活についてもこちらで手配させよう」

「ほんとか！？ありがとうな、じっちゃん！」

「なに、かまわんよ！さしあたって生活の場所なんじゃがな。実は今度女子寮の管理「ちよつと待て！」「ふお？」

二度あることは三度ある。

学園長の言葉は三度エヴァンジェリンによって遮られた。

「いつの身柄は私が預かる。」

「ふお！？しかしのエヴァ……」

「なんだ？なにか文句があるのか、じい？」

ドスの利いた低い声で言うエヴァンジェリンには言い知れぬ迫力があつた。

睨まれた学園長はそれだけで閉口する。

「そういう訳だ。では茶々丸、悟空行くぞ！」

「あ、ああ分かった……。」

無言で付いていく茶々丸と多少混乱しながら従う悟空。

「ああ悟空くん！明日の朝もう一度ここに来てくれんか？折り入って頼みたい仕事があるんじゃない！エヴァもそれくらいいいじゃろ！」

「……ふん、勝手にしろ」

「ああ、いいぞ！明日の朝だな。じつちゃんもタカミチも今日はありがとな！」

そしてエヴァ、茶々丸、悟空の三人は学園長室を後にした。

おまけ

「さて、今夜はもう寝るとしてお前の寢床をどうするかだが・・・わ、私の部屋で・・・い・・・一緒に寝てやらんこともな「うん、オラ居候だかな、その長椅子で十分だぞ」・・・」

「・・・分かりました。毛布をお持ちします」

「サンキュー、茶々丸。ん？エヴァ、なんか言ったか？」

「・・・もういい！寝る！」

「??あ、ああ？」

「ふん！・・・ぐすん・・・」

「なあ茶々丸、オラなんかエヴァを怒らすよつなこと言ったか？」

「さあ、どつでしようか。」

「??.?.?」

第6話 現状把握（後書き）

長いし、展開遅いしって……。

修学旅行はいつ始められるか、疑問です……。

本当すみません！

第7話 サイヤの副担任

朝の登校ラッシュも収まり、皆ホームルームに勤しんでいる頃、孫悟空は一人学園長室の扉の前にいた。

昨夜の別れ際に学園長と交わした約束を果たすためである。

しかしここまでの道程は決して楽なものではなかった。

麻帆良学園の朝はまさに戦場と言っても差し支えない。

迫り来る人の波、塞がれる道、身動きできぬほどの圧迫感、交わされる拳と拳。

そして踊るように闘う、髪をシニヨンで纏めた小柄で褐色の肌をした少女（この時点で悟空の頭の中には瞬間移動すると言う思考はなかった）。

一人の少女がいかにも格闘家然としたたくさんの男達に囲まれ闘いを挑まれている。

一人ずつ仕掛けていたのが二人ずつになり、それが増えて四人ずつになり、また増えて八人ずつになった。

そんな勝負とも言えぬ状況であってもその少女はひるむことも、まして負けることもなかった。

拳をかわし、蹴りをいなし、組み付こうと近寄ってきた柔道家に掌底をかます。

背後のボクサーを振り向きざまに蹴り飛ばし、その回転力を活かす

た裏拳で巨漢の力士の顎を打つ。

振り下ろされる木刀を体を反らすだけでかわし、体重を乗せた右肘をその剣道家の防具の上から見舞う。

すかさず接近してきた空手家のハイキックを腰を落としてかわし、がら空きになつた背中に正拳突きを入れる。

これらの動作が完了するまでに三秒掛からなかった。

少女の周りには一気に戦闘不能者が五人出来上がる。

休みなく向かってきていた格闘家の波がそこでまた止む。

同時にギャラリーの歓声、挑戦者達は一様に冷や汗を流してその少女を見つめている。

すでにこの数倍の数があちらこちらに転がっていた。

圧倒的な強さを見せ付けたその少女、古菲は物憂げに溜息を漏らした。

「……つまらないアルな。もっと強い奴はいないアルか？」

そう言つて辺りを見渡す。

つまらない、そうつまらないのだ。

古菲は知らずまた溜息を吐いた。

こんな風に毎朝挑戦者が来るようになったのはいつ頃からだったろうか。

格闘技大会で優勝して以降このような路上での挑戦はさらにあつたし、自分もまたそれを嬉しく思つていたはずだった。

しかしこれは、自分が本当に望んでいるものではない。

自分が本当に望んでいることは唯一つ、強者との死力を尽くした闘いだ。

何度自分に倒されても何度でもまた自分に挑戦しようという彼らの姿勢はとても好ましいが、しかし如何せん自分を満足させてくれる実力を持ったものはいなかった。

）（・・・ふう。今日もワタシと”闘える”奴はいないアルな・・・

内心落胆してつぶやく。

彼女のクラスメイトである長瀬楓や龍宮真名などの実力を彼らに期待するだけ酷な話なのだが、彼女の落胆は大きい。

そしてそんな思いを尻目に挑戦者は続々と古菲に殺到してくる。

古菲は心中で、楓に決闘を申し込もうかなどと思考しながらも、挑戦者達の攻撃をまた捌き始めた。

瞬間、視線を感じた。

驚いて周りを見回す。

ギャラリーの数は今日も結構なもので、挑戦者達の数を入れれば軽く百人はいる。

そんな中で視線を感じないはずなどないのだが。

問題なのは、その視線が、挑戦者達がどれだけ頑張っても見切れなかった自分の動きに、見失うことなくびったりと”付いて来ている”ことだ。

自分の動きに付いて来られる人間など自分が知る中ではクラスの一部の者くらいだ。

ではこの視線は一体誰だ。

正面の相手を蹴り飛ばし、囲まれた状態から脱し、再度視線の出所を探す。

そして見つけた。

そいつはオレンジ色の変わった胴着を着ている男だった。

しかし、今の自分には詮無いこと。

視界に収めた瞬間に解った。

この男は間違いなく強い！

さっきまでの憂いが嘘のように一瞬で古菲の表情が満面の笑顔に変わる。

そして指を差して叫ぶ。

「そのオレンジ色の胴着の人！ワタシと勝負するアル！！」

「え？オラか？」

いきなり指名されたことに孫悟空は驚き、自分を指差してそう宣言した少女を改めて見た。

ギャラリーはどよめいた。

あの古菲が名指しで相手に勝負を申し込んだのだ。そしてそのまま視線は古菲の指の先、悟空に向けられる。

「なあ、あんな奴この学校にいたか？俺初めて見るぜ？」

「フェイ部長が直接指名するなんて……あいつそれだけ強いっ

てことか？」

「なんか、ぼおつとして強そうに見えねえな……俺でも勝てそうだぜ。」

「ふざけんな！俺がフェイ部長に勝つためにどれだけ修行したと思っただけだ！俺が先に闘うんだよ！」

「いやでも面白いじゃん。見たことない新参者がフェイ部長とどれだけ闘えんのか。」

「なんでもいいからやっちまえよ兄ちゃん！」

「フェイ部長直々の指名なんてそうねえぞ！頑張んな！」

ギャラリーからはまた歓声が上がリ挑戦者達からは一部不満の声上がるが、古菲はそれを気にすることなく続ける。

「さあ！尋常に勝負するアルよ！！」

構えながら言い放つ古菲。

少々の戸惑いの後、悟空はやっぱり笑った。

先ほどからこの少女の動きを見ていたから解る、この少女は強い。まだこの地に来てまともな戦闘をしたのはエヴァンジェリンと茶々丸だけである。

そしてこの少女の動きは茶々丸とはまた違う。

自身と同じ、武道を心得た人間の動きだ。

悟空もまた構えながら言う。

「オラ孫悟空だ。いつでも来い！」

「古菲アル！行くアルよ！！」

歓声と共に、喜びと期待を胸に、古菲は地を蹴った。

「じっちゃん！来たぞ！」

声を掛けると同時にそのまま扉を開けた。

窓からの光が室内を明るく照らしている。

その中に大小の人影が二つ。

一つはもちろん学園長のもの。そしてもう一つの小さな影は入る前から気で分かつていた。

「よお！元気そうだな、ネギ！」

「じ、悟空さん！？」

驚愕に声をあげるネギ。

しかし心底驚いた顔はすぐに笑顔に変わった。

ネギは学園長に向き直り言った。

「じゃあ学園長、僕の補佐の先生って！」

「うむ、悟空くんじゃよ。」

「？どついつことだ？」

状況が解らず困惑する悟空。

そんな悟空に嬉々としてネギは説明し始めた。

ネギのクラスは今度の修学旅行で京都へ行くことになった。しかし京都には関西呪術協会と呼ばれる組織が有り、昔からこちら側、関東魔法協会とは折り合いが悪かった。今回ネギは先方との仲を改善するための特使として親書を渡す役目を受けた。その際、ネギのサ

ポートとして一人修学旅行に付いて行かせると学園長は言ったのだ。そして

「それが悟空さんだったんですよ！」

ネギは悟空の手を取ってピョンピョン跳ねている。

学園長もまた笑みを濃くしていたが一つ咳払いしてさらに話を続けた。

「さて、それでは悟空くん。君にはこれからネギ先生のクラスで一度副担任として挨拶してきてもらいたいんじゃないが。改めて、修学旅行でネギ君を頼めるかの？」

「ああ、もちろんいいぞ。その手紙を向こうの長つちゆう人にネギと届けりゃいいんだな。ネギ！これからよろしくな！」

「はい！」

喜びに満ちたネギの笑顔。

悟空の顔もほころんでいるようだった。

「むふふふふ」

「くーちゃんどうしたの？やけにご機嫌じゃん」

3・Aの教室にて、席に座って上機嫌に笑う古菲を見て明石裕奈は興味を示した。

「むふふ、分かるアルか？」

「うん、もうこれでもかっつてくらい分かり易いよ……。今朝なにか良いことでもあったの？」

若干呆れつつ裕奈はさらに問うた。
それに古菲は笑顔のまま答えた。

「むふふふ　ワタシは今日運命の出会いをしたヨ」

「違うアルヨ!!!・・・今日の朝ワタシいつもみたいに勝負してたヨ」

「ああ、あのいつもくーふえに挑戦しに来る人たちね」

「それでいつもみたいに皆ノしたアル。そしたらその人がいたヨ！」

拳を握って力説する古菲の目はいつも以上に輝いていた。

「ワタシの攻撃ほとんどその人に通用しなかつたアル」

「ええ!?くーふえの攻撃が効かないってどんな化物よ・・・」

ピク、自前の糸目を開き反応を見せる生徒が一人。
長瀬楓は古菲に問いかける。

「クー、その御仁はどのような人相をしているのでござるか?」

「うーんと、背が高くて、オレンジ色した変わった胴着着てたヨ。
あと髪は黒くてツンツンしてたアル」

ピク、斜め後ろに座り頼杖をついてつまらなそうにしていた少女、
エヴァが反応した。

前に座る茶々丸も無言で視線を向ける。

「ふむ……古菲の攻撃を捌き切るとは只者ではござらんなあその御仁は」

「そうアル！その人ほとんど攻撃してこなたアルが、あのまま続けてもワタシ絶対勝てなかつたアルヨ！」

勝てなかつた、そう言っているにも関わらず古菲は相変わらず笑顔のままだった。

そんな古菲の様子に楓もまた笑顔で返す。

「うむ、拙者も是非、一手仕合てもらいたいでござるな」

「むむむカエデ、ワタシがリベンジするのが先アルヨ！」

「まあまあ、堅いことは言いつこなしてござるよ」

「む〜！」

まだ古菲は唸っていたが、その時教室のドアが開かれネギが入ってきたことで話は中断された。

立ち歩いていた生徒も自分の席へと戻っていく。

ネギは教壇に立つと口を開いた。

「皆さん！唐突ですが今日は新しい先生を紹介することになりました！」

「……………ええ〜!?」「……………」

またしても教室がどよめく。

そして質問の嵐がまた始まった。

「新しい先生って男の人ですか？女の人ですか？」

「なんの教科なのかな？」

「新任教師なんて情報初耳だよ!?私の情報網に掛からないなんて……………」

「優しい人ならいいですねえ」

「……………頼むからまともなのであってくれ……………」

皆思い思いに質問するため收拾がつかなくなりつつある。

そこでネギが手を叩いて声をあげた。

「皆さん！静かにしてください！今その先生を呼びますから質問はそれからしましょう！」

「……………は〜い!!」「……………」

素直に返事を返す生徒達。

そんな様子にネギは満足し、一部の生徒は呆れて溜息を漏らした。

「じゃあ悟空さん、入ってください！」

ガタツ！

その時、古菲は思わず立ち上がった。

その拍子に椅子は音を立てて倒れ、驚いたクラスメイト達が皆古菲を見つめる。

その間にもガラガラとドアを開けて件の人物は教室に入ってきていた。

生徒達は、今度は前方に意識を向ける。

「オッス、オラ孫悟空だ！今日から副担任っちゅうのになったんで、これからよろしくな！」

悟空は元気よく挨拶した。

しかし教室は相変わらず静寂のままである。

悟空は何の反応もしない生徒達を怪訝に思いネギを見た。ネギもまた不思議そうに首をかしげている。

生徒達は皆悟空を見ていた。

背が高く、オレンジ色の変った胴着を着て、ツンツンした黒髪の男を。

静寂は唐突に終わりを告げた。

「「「「「運命だ〜〜〜!!!!!!」」」」」

「「わあ!?!」」

いきなり大声で叫ばれたことで悟空とネギは同時に声をあげた。

3・Aはそれからしばらく、チャイムが鳴るまで賑やかだったそう
だ。

第7話 サイヤの副担任（後書き）

古菲と出会わせてみました。悟空と古菲の性格は比較的似通ってますよね。

さてはて、なかなか話が前進しません……。

出会いとか小話を書くのって楽しくてつい……すみません！

これからも頑張って更新していきますので、楽しんでいただければ幸いです！

それでは！

第8話 悟空悩みを聞く

「ふいふ、それにしてもおめえら元気あんな。オラおでれえたぞ」

「まあ、あのクラスの特徴というか悪癖というか……」

「あははは！そうですね。でも皆さんいつも明るくて賑やかで、とっても楽しい人たちだったでしょう？」

「そうやね。でもびっくりや、アスナとネギ君が悟空さんと知り合いやったなんてな」

授業が終わった放課後、ネギと明日菜と友人の近衛木乃香と悟空は日の傾きかけた道を並んで歩いてた。

3 - A生徒達の迫力に少々圧倒された悟空に、ネギは楽しげな笑顔で3 - A生徒達にまつわるエピソードを語った。

大小四つの影がすっかりと長く伸びて、四人を赤く照らしている夕日は半分ほど隠れてしまっている。

悟空の自己紹介が終わった後、混沌が3 - A教室を支配していた。

いまにも飛び掛らんとする古菲、そしてそれを取り押さえる長瀬楓。マシンガンのように質問を飛ばすパラッチこと朝倉和美。

ジャングルジムの如く悟空登りを始めた双子の鳴滝姉妹。

悟空をじ~~~~~と睨み見つめるエヴァンジェリン。

困っているネギを見て恍惚とした表情を見せる雪広あやか。

悟空の大声が麻帆良学園に響き渡ったのだった。

声が止み静まり返った教室で、最初に口を開いたのは悟空だった。

「おめえら、静かにしねえと駄目だぞ。ネギの話、ちゃんときか
ねえとだかな！」

「「「「「「「「は、はい……」「」「」「」「」

その日3 - Aは静かだった。

「お、あれがネギたちの家か？でけえな〜！」

「いや、んなわけないでしょ！あれ全部が女子寮なの！」

「あははは、悟空さんおもしろいなあ！修学旅行が楽しみや。なあネ
ギ君？」

「はい！ああ楽しみだなあ、早く来週にならないかなあ！」

修学旅行が楽しみで仕方ないのか、ピョンピョン跳ねるネギ。

木乃香は柔らかな笑顔でそんなネギを見つめ、明日菜もまた呆れつつその口元は笑みを浮かべていた。

「うっし、オラもそろそろ帰るぞ。ネギもアスナもコノカもまた明日な！」

「あ、はい！また明日です悟空さん！」

ぶんぶんと手を振ってネギ達は女子寮へと帰って行った。
ネギ達が見えなくなった後、悟空もまた歩き出す。

そのままエヴァンジェリン宅へ、は行かず公園へ。

公園の半ば程まで来た悟空は周囲に人がいないのを確認してから背後に声をかけた。

「ここなら大丈夫だ……。オラになんか用か？」

すると物陰から小柄な影がスツと姿を見せる。

自分の身長程の長大な竹刀袋を担ぎ、その黒い髪をサイドテールにした少女、桜咲刹那はじつと悟空を見据え、やがて口を開いた。

「……………驚きました。気づいてらしたんですね」

「おお、おめえは他の奴よりも気が強えからな。気配だけ消してもそれじゃばれちまうぞ」

わずかに目を見開く刹那だったが、すぐに表情を元に戻すと警戒した様子で身構えた。

孫悟空と名乗ったこの男を桜咲刹那は教室で一目見た瞬間から警戒していた。

明らかに常人とは違う足運びと拳動、なにより微かだが感じるこの力は気の類だろうか？本当に極々微弱にしか感じられないため確認できなかったが……。

授業が終わり、皆それぞれ帰宅していく中、その男は子供先生と一緒に帰宅して行くつもりのようなだった。しかしそこへ神楽坂明日菜さんと、あるうことかこのかお嬢様まで加わり帰宅することに。学園に勤めているとはいえ得体の知らない男には違いない。

お嬢様にもしものことがあつたら……！！

夕風を強く握り締め、刹那はそのまま悟空達を尾行し始めたのだ。た。

「……やはり『こちら側』の人間か！なにが目的だ？貴様お嬢様に手を出してみる、ただではおかんぞ！」

「お嬢様？おめえ何言つて……」

「とばけるな！」

言うが早いか、瞬時に悟空の懐に入った刹那は夕風を横に薙ぐ。峰打ちであつても、気で強化した夕風の一撃は常人なら防ぎようのない破壊力を秘めている。まともに当たればひとたまりもないだろう。

そう”常人”なら。

ガキッ！

鋭い音と共に、夕凧は止まった。

「な！？！？」

刹那はあまりの光景に驚愕した。

これ以上ないほどのタイミングと威力で放った一撃は、悟空の『指一本』に止められたのだ。

悟空は人差し指に気を集中させることで、夕凧の硬度を上回って見せたのである。

「くそっ！！まだまだあああ！！」

刹那はさらに夕凧を振るう。

（一度止められたからなんだ？！それならば、当たるまで何度でも打ち込んでやる！！）

上下左右正面、あらゆる角度から神速の斬撃が悟空を襲う。

秒間数十合というおびただしいまでの剣閃。
その全てが、もはや必殺である。
だが

ガガガガガッガガガガッガガガガッ！！！！

その全てを、悟空は自身の人差し指一本で捌き切ったのだ。

刹那は息を切らし、夕凧を強く握り締め過ぎて血の滲む自身の手を愕然と見た。

「はあ！、はあはあっはあ・・・つく！・・・いづ！・・・っは・・・
そん、な・・・」

なにも最大の奥義を見舞ったわけでもなければ容易く打ち負かされたわけでもない。止められたただけだ。全力の自身の剣戟を。しかしだからこそ悟る。

悟空の力を見誤っていたこと、自身がまだまだ未熟であったこと、これでは到底お嬢様を守ることなどできないこと・・・。

「・・・それじゃ駄目だ。おめえの一撃はこんなもんじゃねえはずだぞ」

「え？・・・」

しかし悟空が投げかけてきた言葉は自身の未熟を罵るものではなかった。

「焦ってんのか？おめえ」

「!?!」

何気なく発せられた悟空の言葉は刹那の心情を的確に言い当てていた。

こんな弱い自分ではお嬢様を守ることなどできやしない。

自身の未熟がお嬢様を危険に晒してしまふのだ。

想像しただけで、それは恐ろしいことだった。

あの川辺でお嬢様に、自身の心に誓ったのに。

あの頃から必死に修行して、力を得たと思っていたのに。

なんたる驕りたかぶりか。

「ひっく、……くっ……うう……」

「お、おいっおめえ泣いてんのか？」

目が熱い、視界がぼやける。
刹那は静かに肩を震わせた。

(情けない……こんなの……)

顔を俯かせ、嗚咽を漏らす刹那。

悟空はどうすればよいか分からず、あたふたと焦る。

しかし、ふと悟空は泣いている刹那を見て軽い既視感を覚えた。

目の前で泣きじゃくる刹那に重なるのは、大声で泣く自身の息子の姿。

サイヤ人達が地球に来る前、一人歩きがやっと出来るようになった悟飯は外では泣くことが多かった。

転んでは泣き、獣を見れば泣き、一人になれば泣きで、それはよく泣く子供だった。

そんな時、自分は一体どうやって悟飯を泣き止ませていただろうか？

(うっくん……あ、そうだ！)

ピカリ、頭に電球を閃かせゆっくりと悟空は刹那に近づいていった。

刹那は相変わらず涙を流し、頭の中では負の感情が螺旋を描いている。

(私は……私は……私は……)

刹那はいよいよ声を上げて泣き出してしまいそうになった。
しかしその時

ギユッ

刹那は悟空に抱き締められた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

悟空の胸に顔をうずめたまま何が起こったのか理解できず、刹那は
思わず顔を上げようとした。すると

グシグシグシグシグシグシ

「あうあうあう!?!?!?!?!」

今度は抱き寄せられたまま、少し乱暴に頭を撫でられた。
整えられていた髪はすっかり乱れて、呆然として悟空を見上げる刹
那。そこには刹那をまっすぐに見つめる悟空の顔。
ようやく脳が現状を受け入れると刹那の顔は赤一色になった。頭か
らはもうもつと湯気が立ち上る。

「あのあのあののののっつっつ!!!????」

焦って言葉が出てこない。

頭の中は今までの人生で一番混沌としている。

なんで自分は今抱き締められているのだろうか、頭を撫でられるなんて久しぶりだとか、見た目よりも厚い胸板だなとか、男の人の匂いはこんななんだとか、それこそ思考は妙な方向に向かっていた。

思考の海で溺れる刹那をよそに悟空は静かに口を開いた。

「泣き止んだか？」

「え!?!?.....あ、はい」

「そっか！悟飯もよ、こうすつとすぐ泣き止むんだ」

「は、はあ.....」

悟飯を知らない刹那はとりあえず疑問符を浮かべながら返事をする。
悟空はかまわず続けた。

「おめえ、自分以外の誰かの為に闘ってたんだな」

「.....」

「それで自分の力じゃそいつのこと守ってやれねえって思ったんだ」

る？」

「っ！……」

びくりと肩を震わせる刹那。

まるで自分の心の中を見透かされているようで驚いている。

「なんでおめえがそんな風に思っただのかはオラには分からねえ。

けど、一人で抱えなきゃなんねえことなのかそれ？」

「それは……」

刹那は言いよんだ。

そう思っただけ生きてきたのだ。今まで。昔のようにお嬢様とはいてはならない。影からお嬢様の幸せを見守ると。弱い自分にお嬢様と一緒にいる資格なんてない。そしてなにより自分の正体は……。

「私にはお嬢様と一緒にいる資格なんて……」

「ん……それはよ資格とかそういうことじゃねえんじゃねえか？……」

「え？」

悟空は眉間にしわを寄せ、必死に頭をひねる。
そして言った。

「そうだ！おめえがそいつといたって思ってたやそれで十分なんじゃねえか！」

答えが出たことに満足してか、悟空は笑顔で言った。

歯を見せてニツと笑う悟空。

刹那はポカンと呆気にとられていた。

「力は修行して強くなりやいい！オラがおめえくらいの頃はまだまだで弱っちかったかな。おめえならなれるさ、絶対だ！」

いつの間にか悟空は刹那から身を離し、頭に手を乗せまたグシグシと撫でている。

頭から感じる力強い手は、乱暴で無骨で暖かく懐かしい感触だった。

「・・・・・・・・悟空・・・・・・・・さん」

「ん？なんだ？」

顔を上げた刹那にはまだ迷いがあった。しかし憂いの色はもつそこにはなかった。

意を決して刹那は口を開いく。

「私はまだ、答えは出せそうにありません・・・お嬢様と一緒に
いていいのか迷っている自分がある・・・でも、だからこそ私は
修行します！自分の心が納得するだけの強さを手に入れて見せます
！」

「おお！そんな時は、もっとちゃんとした試合をしような！」

「はい！」

日はすっかり沈み、星が見え始めた夜空は、今日も澄んでいた。

おまけ

「・・・一戦申し込もうかと後をつけてきたでござるがこれは？」

「うむ、刹那も案外可愛いところがあるもんだね」

「いやいや、悟空殿も結構大胆でござるな。公園の真ん中であのような」

「いいじゃないか、刹那にはアレくらいでちょうどいいさ。少々お堅いところがあるから実は少し心配していたんだ」

「ははは、真名もなかなかどうして友達思いでござるな。さて、ではそろそろお暇するでござるよ」

「そうだね、時間も時間だし帰るとしよう」

「お、じゃあな！おめえらも気をつけて帰れよ！」

「！？」

第8話 悟空悩みを聞く(後書き)

次回こそ修学旅行へ！

すみませんすみません、テンポ良く話が書けなくて……。

とにかく読んでくださりありがとうございました！

第9話 そつだ、京都行こうぜ！

「じゃあ、お先に行つてきまーす!!」

「はいはい……がんばってね、先生（小学生の遠足か……）

」

「いつてらっしゃ〜い！ほなアスナ、うちらも準備しよか」

早朝五時半を回ったころ、元気良く小走りに先を急ぐ少年が一人。ネギ・スプリングフィールドは集合場所である大宮駅へ向かっていた。

「でも本当に楽しみだなあ！日本の古都、京都・奈良に五日間も行けるなんて！」

「でもよ兄貴、関西呪術協会や親書のこともあるし油断すんなよ！」

リュックサックから顔を覗かせるオコジヨ、アルベール・カモミールがそんなネギに釘を刺す。

「うん、父さんの住んでた家つてのも探したいしね。でも今回は悟空さんも一緒だよ！色んな所を一緒に回れるんだよ！一緒にご飯食べたり！一緒に温泉入ったり！」

「……兄貴、それだと親と旅行する子供みてえだぜ……まあ悟空の旦那がいりゃ、どんなのが来ても負けやしねえからな！心強いことに変わりはねえや」

「うん！こりゃ就任以来最高に忙しくなるぞー！」

「おーーーー」

そう言って、ネギ達は踊るように電車に乗り込んでいった。

これまた早朝のエヴァンジェリン宅の玄関先にて
大きなポストンバックを担いだ悟空は、後ろの二人に声をかけた。

「わりいな見送りさせちまって。エヴァは朝弱えのによく起きられ
たな〜」

「ふ、っふん！べ別にお前のためなんかじゃないぞ！た、たまには
早く起きてみるのもいいかもしれないと思ったただけだ。日本の諺で
早起きはなんとやらと言っただろう！」

顔を赤らめそつぽを向くエヴァ。そんな様子を見て、悟空は笑いな
がらエヴァの頭に手をのせて言った。

「ははは、大丈夫だ！ちゃんと土産買って帰るからよ」

「な！？別に私は土産の催促のために起きたんじゃない！！」

「お？違うのか？じゃあ……」

「マスターはしばらくの間悟空さんに会えないのが寂しいだけです
よ」

「っ！？」

頬に差していた赤色は顔全体に広がり、エヴァは口をパクパクさせ
て茶々丸を睨んだ。

「こんのポケロボは！！いったい何処でそんな知識を付けてくるのだ！？」

「主にインターネットを使用しています。マスターのような性格を一部の人間はツンデレと、ああいけませんマスターそんなに巻いては」

「うるさい！記憶が無くなるまで巻き続けてくれる！！」

茶々丸の頭のゼンマイをきりきり巻き続けるエヴァ。

悟空はそんな二人を見て声を出して笑った。

「はははは！大丈夫だエヴァ、いつかその呪いっちゅうのが解けたら皆で一緒に行こうぜ。向こうは飯がすげえ美味いらしいぞ！」

「ふん！いつになるか分かったものではない！……だがまあ、その……や、約束だからな！」

「ああ！約束だ！茶々丸もな！」

「はい、約束です」

悟空は二人の頭をグリグリと撫でた後、人差し指と中指を額に当てた。

「そんじゃ今度こそ、行つてくつぞ」

「瞬間移動……だったか？反則気味の能力だな……。くれぐれも一般人にはばれるなよ」

「分かつてるって！……お、こりゃセツナか？周りに誰もいねえな、よし」

ピシュンッ

軽い風切音と共に悟空はその場から消え去った。

悟空がいなくなった玄関先でエヴァは何故か腕組みし、一人考え込むように頭を捻らせている。

「？どうかしましたかマスター」

「うん？いや、私はホテル業界と言うものをよくは知らんからな。少し考えていた」

「どういう意味でしょうか？」

「……旅館の食材のストックとは、何人分を想定しているのだ？……」

「旅館の規模や宿泊する客層によって異なりますが……悟空さんなら半日掛からないと思われます」

「……………そうか」

暖かな朝日が差し込み、小鳥がさえさえるコテージでエヴァンジェリンはふと、サービス業が如何に大変かしみじみ思ったそうだ。

大宮駅新幹線乗り場前ではすでに多くの生徒達が集合していた。

これから先組まれている予定を確認する者、ガヤガヤとお喋りに興じる者、肉まんを売る者そして食う者、そんな賑やかな集団から少し離れた場所に位置する柱の影に一人で佇む者。

桜咲刹那はクラスメイト達を眺めながらも周りに視線を配る。

関西呪術協会の妨害があると思われるのはあくまで京都に入ってからだが、警戒に越したことは無い。

敵が狙うのはまず間違はなく木乃香お嬢様だ。

木乃香お嬢様が持っているその莫大な力を敵は関東魔法協会に対する戦力として利用しようとするだろう。

(そんな事、絶対にさせない……!)

その為にも自分は強くならなければ。

そして鍛えるのは身体だけでは駄目だ。何より自分が鍛えなければならぬのはこの弱い心。

教えられたのだ。約束したのだ。強くなる為に“修行”するのだと。強くて、優しく、暖かい、ちよつと変わった先生。

あの時の事を思い出して、刹那は頬を赤らめながら微笑んだ。

「……………私、頑張ります……………悟空さん……………」

「呼んだか!」

「みゃあ!!!????」

完全な不意打ちで声をかけられ、刹那は30cm程飛び上がった。

そして振り返った先にあつたのは、さつきから何度も思い浮かべていた顔。

悟空は刹那のそんな様子を気にすることもなく笑顔で言う。

「よつ、セツナ!こんなところでおめえ何してんだ?皆のとこに行かぬえのか?」

「い、いえ私は周囲の警戒です!いつ何時西の者が仕掛けてくるか

分かりませんし！集団から距離を置けば、その分周りを見渡せますから！」

自身の弦きを聞かれたのではと、内心焦りまくりでまくし立てるように言う刹那。

「ん、今んとこそんな妙な気は感じねえから大丈夫だ！ほら、行くぜ！」

言うが早いか悟空は刹那の手を取って3・Aの集合場所へどんどん引っ張っていく。

「ちょちよつと！？悟空さん！？」

「お。おい！ネギー！」

「あ、悟空さん！・・・とあなたは15番、桜咲さん！一緒に来たんですか？」

普段見られない組み合わせに戸惑いながらも、ネギは嬉しそうに手を振った。

しかしそれは桜咲刹那という人間を知っている者からしても同じことで、明石裕奈や朝倉和美などは目ざとく反応を示した。

「お〜！同伴出勤なんて刹那さん意外と大胆」

「ええ！？いえ、別にそういうわけでは！！」

「何！？また私の知らないところでクラスのデータに変化が！？」

賑やかさに拍車が掛かりつつある3-A。
そこに、しずな先生が声をかけた。

「はいはい！お話はそれくらいにして3A、3D、3H、3J、3Sの皆さん。点呼をとってからホームへ向かいましょう！」

「……………はーい！……………」

生徒達は素直に従い、続々とホームへ向かって行く。

「それじゃ悟空さん、僕らも行きましょう！」

「おお、行くか！」

生徒達の後を追って、悟空とネギは駆けていった。

続々新幹線に乗り込む。A生徒達をネギと悟空は出迎える。

1班の場合

「ネギ君！昨日は楽しかったね！」

「はい、桜子さん！またカラオケ連れてってくださいね！」

「悟空先生！肩車、肩車して！」

「悟空先生登りです〜！」

「おおいぞ、でもまた後でだ！」

「賑やかなのは双子だけじゃないわね……」

「いいじゃん、楽しそうだし！」

2班の場合

「ネギ坊主も悟空さんもコレ食うヨロシ！力出るヨ！」

「ははは……僕はオニギリいただいたので」

「くれんのか？サンキュー！あぐ……うめえ……！やっぱサツキの肉まんはうめえや……！」

ふふっ、ありがとっございます

「悟空さん、四葉さんとお知り合いだったんですか？」

「悟空先生は超包子の常連アルヨ！」

「っっていうか何処でも売ってるよね……」

「あいあい」

「春日さんもおーつかがですか？」

3班の場合

パシヤッ

「で！？悟空さんって結局刹那さんとなんかあるの！？」

「ん？なんかってなんだ？」

「そうだね。ああいつ刹那さん見るの初めてだったし」

「さあ、ネギ先生はどうぞこちらへ！グリーン車を借り切っており

ますので!」

「あらあら、あやかったら」

「いいんちゃん!? 僕まだ仕事が!」悟空さくん!」

4班の場合

「うう・・・肉まん食べ過ぎてもった・・・」

「あら・・・水買っところか?」

「ん? どうひふあ?」

「うぷ!? 悟空先生、今肉まん見せんといて・・・!」

「・・・一体何個目なんだい? それ」

「リスみたい・・・」

「ネギ君! 自由行動日一緒に行かない?」

「いえ、あのっ・・・」

5班の場合

「あ、悟空さん。おはよう！」

「よお、アスナ！それにコノカも！」

「悟空さんおはようさんやな〜」

「あ、このかささん オニギリありがとうございます〜！」

「そんなん気にせんでええよ〜」

「ほら、チャンスだよ！自由行動日と一緒にってどうですかっ！」

「で、でも〜・・・」

「ネギ先生は頼み込めばイヤとは言わないのでは？なんなら悟空先生に言っつて仲立ちを頼みましょうか？」

「そんなこんなで、あらかたの生徒達が乗り終えたのを確認したネギは、ふと首をかしげた。

「あれれ？今ので5班だから・・・1班足りないぞ？」

「ん？ネギ、セツナ達だ」

「あ！そうだ、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんはお休みだった」

見るとそこには刹那とザジ・レイニーデイの二人が手持ち無沙汰にこちらへ近づいてきていた。

「あの、ネギ先生、悟空さん、私たちは……」

「はい、そうでした。それじゃ桜咲さんはアスナさんたちの班へ。ザジさんはいいinchよさんたちの班に入れてあげてください」

「はいはい」

「分かりましたわ、ネギ先生」

「え……」

そんなやり取りに、木乃香は内心ドキリとした。そして少々の淡い期待も。

「あの……一緒に班やな、せつちゃん」

もしかしたら、また昔のように一緒に

「あ……」

木乃香を見て、刹那は内心動揺した。

しかし軽く会釈すると、木乃香に背を向ける。

そのまま刹那は自分の席に行ってしまった。

「あ、せつ……」

木乃香は再度呼び止めようとする。

しかし、出そうとした声は驚くほど弱々しく、それでいて不安で一杯だった。

伸ばした手は手持ち無沙汰に空中を彷徨い、最後は自分の胸元に抱いた。

そんな様子にネギは不思議そうに疑問符を浮かべ、悟空は静かに二人を見ていた。

第9話 そうだ、京都市こうぜ！（後書き）

修学旅行に入りました！やっと！

いろいろ小話など織り交ぜていくつもりでいますので修学旅行編が
ちよつと長くなるかもしれません……。

ご容赦いただければ幸いです。

それでは、読んでくださりありがとうございました！

第10話 一緒にいたくて(前書き)

なんやかんやでもう10話です。

ここまで読んでいただきありがとうございます！

これからもよろしければお付き合いください。

ではじつぞー！

第10話 一緒にいたくて

カポーン

よく晴れた夜空の下、石造りの露天風呂に浸かる大小の影が二つ。

「ふい〜、しっかし今日は大変だったな〜」

「はい〜、皆さん酔いつぶれて寝ちゃいましたからね〜。悟空さんのおかげでバスへ運び込むときは助かりました！」

悟空とネギは湯船に並んで浸かりながらそんなことをぼやいた。頭にタオルを載せ、縁に寄りかかりながら二人は気持ちよさそうに目を細める。

「それにしてもオラこんなでけえ風呂入るの初めてだ。気持ちが良いもんだな」

「僕もです。風が気持ちいい」

「いつもはオラ土管風呂だからな〜、ネギは入ったことあっか？」

「はい、ありますよ！あれは長瀬さんと山で……」

そうしてネギは自分の事を嬉々として話し始めた。

新幹線に乗ってから清水寺に行きこの旅館に着くまで、それはそれは様々なことが3・A一行に降りかかった。

あふれ出るカエルの群れ、親書を奪おうと飛んでくるツバメ、仕掛けられた落とし穴、さらにあふれ出るカエルの群れ、飛び降りる長瀬楓、酔いつぶれる生徒達。

新田先生他、引率の教員達に気づかれなかったのは奇跡といえた。そんなイベントを乗り越えたネギたちは今、絶賛露天風呂堪能中なのである。

温泉を思う存分堪能しているそんな二人にカモは焦って声を上げる。

「ネギの兄貴も悟空の旦那もちょっと腑抜けすぎだぜ！あの刹那ってヤツが怪しいのは分かってんだ！ここは二人でサクッと倒しちまうときだぜ！」

修学旅行当初からネギとカモは桜咲刹那と言う人物を疑っていた。京都の出身であることやクラスの輪を離れ、こちらを窺うような拳動が怪しいのだとカモは言う。

しかしそんなカモに悟空は首をかしげながら言った。

「いや、セツナはそんな悪いやつじゃねえぞ。むしろイイやつだ」

「……どういことかい、悟空の旦那？」

「そうだ！悟空さんって刹那さんとお知り合いみたいでしたけど、
いったいどうして」

悟空の言葉でネギは今朝から疑問に思っていたことを口にしようとする。

しかしその時、ガラリと脱衣所の扉を開ける音が響いた。

「ん？」

「あ、男の先生方かな？」

ネギと悟空はそのまま扉の方へ視線を向けた。

そこには湯船から桶でかけ湯をする人物、桜咲刹那の姿があった。

一糸纏わぬ刹那の肢体はその肌の白さと寂光のライトとが相まって
うっすらと光ってさえ見えた。

一瞬見とれていたネギと興奮した様子の力モは、はっとした。

（ええ！？ここって男湯じゃ！？）

（混合ってんだ！それより二人とも隠れるぞ！）

（お？あ、ああ）

ネギと悟空は力モに言われるまま岩陰に身を潜めた。

岩陰で様子を窺いながら杖を取り出したネギ。
悟空は状況を掴めず疑問符を浮かべる。

(なあ、なんでオラたち隠れてんだ?)

(そりゃあもしかしたら向こうから仕掛けてくるかも知れねえだろ
！悟空の旦那がいるとはいえ、こんな所で戦闘は避けてえ!)

(いやだからよ、セツナはそんな悪いやつじゃ・・・)

(と、ともかく今はばれないようにお風呂から出ましょう!)

悟空とカモのやりとりをよそにネギはそつと動き出す。
その時

「…………困ったな、魔法使いのネギ先生ならなんとかしてくれる
と思っただけど…………悟空さんにも協力を…………いや、で
も…………」

(!?)

ネギは驚愕した。

自分が魔法使いであることを刹那は知っていたのだ。

(まさか、本当に関西呪術協会のスパイ…………!?)

無意識の内に杖を握る手が強張る。
ほんの一瞬でもネギは刹那を敵と認識してしまった。

「!・・・誰だ!？」

しかし刹那が気が付くには、その僅かな敵意だけで十分。
瞬時に夕風を取り出し構える刹那。
そのまま気配のした岩へ踏み込む。

「斬岩剣!！」

気合一閃、岩は鋭い音と共に真っ二つに切り裂かれた。

「うわ!?!岩を!?!」

切り裂かれた岩はネギたちの方へと吹き飛ぶ。
そして落下地点にいたのは

「おわっ!！」

悟空だった。

岩はそのまま悟空の頭上へ落下。

受け止めることも叶わず岩は悟空の脳天に直撃した。

「く「逃がさん!」「!?!」

すでに刹那はネギの眼前まで迫ってきていた。
とっさにネギは呪文を紡ぐ。

「つく!ラス・テル マ・スキル マギステル 風花 武装解除!
!」

「!?!」

魔力により編まれた風は刹那の手から夕風を弾き飛ばした。

「ふっ」

しかし、武器を奪われた程度では刹那は止まらない。

刹那は相手の判断を的確だと思いつつ同時に、武器を奪うだけに留ま
った甘さを笑った。

刹那はさらに踏み込みまんと足に力を籠める。

しかしそれは叶わなかった。

「よつと！」

「つぐふ！？」

刹那は横から伸ばされた悟空の腕によって止められた。

腹の辺りに腕を回され、勢いを殺すことが出来なかった刹那はそのままくの字に折れ曲がる。

だがすぐに腕から逃れようと必死にもがく刹那に、悟空は声をかけた。

「おい、セツナ！オラたちだぞ！」

「貴様ら何者だ！？そうかお嬢様の護衛である私が邪魔で先に仕掛けてきたか！だがここには貴様らなど足元にも及ばん強さを持った方がいる！そして私とてそう簡単には！！！！ってオラ？」

「おお、オラだ！」

そう言つて笑いかける悟空。

刹那の斬撃やネギの魔法によって湯気が晴れ、見晴らしがよくなった露天風呂で、刹那は悟空に片手で抱えられた状態で周りを見渡した。

警戒した様子で刹那を見つめるネギ、そして近場の岩に避難した力モが刹那を睨んでいる。

「え？ネギ先生に悟空さん？……」

顔を上げれば呆然とする刹那を不思議そうに見つめる悟空の顔。お腹からは、傍から見ても分かるほど鍛えられた悟空の腕の感触が伝わってくる。

背中越しに感じる胸板の厚さはこれが初めてではない。しかしこれほどはつきりとした感触は生まれて初めてだ。それもそのはず、悟空も刹那も全裸である。

(ああ、お風呂やし当然やわ)

他人事のように思考しながらも刹那の顔はみるみるうちに紅く染まっ
ってゆく。

そして完全に状況を脳が認識したとき

「きゅ」

「うわ！？セツナどうした！？」

「わああ！？刹那さん！？」

刹那は意識を手放した。

風を感じる。

ゆっくりとした、心地よい優しい風。

「……………うん……………」

夢を見ていた気がする。

他愛ないそれでいて幸せな夢。

その夢には必ず同じ人が出てきた。

自分と同年代くらい、いつも朗らかに笑い、いつも一緒にいた、大切な友達。

うすく開いた目が最初にとらえたのは心配そうにこちらを覗き込む夢の人の顔。

「大丈夫？せつちゃん」

「うん、大丈夫だよ。心配せんといてこのちゃ……………!!」

驚いて一気に飛び起きた。

刹那が先ほどまで眠っていたのは木乃香の膝の上である。見ると刹那は浴衣を着せられ寝かされていたようだった。

木乃香は団扇片手に心配そうな顔で刹那に言う。

「せつちゃん！無理したらあかんよ！」

「い、いえ！もう大分良くなりました！そんなことより御無礼誠に申し訳ありませんでした！お嬢様にあのような事！……失礼します！！」

「あ！せつちゃん……」

刹那は一気にまくし立てるとそのまま木乃香に背を向け走っていく。脱衣所の外の廊下ではネギ、明日菜、カモ、悟空が椅子に座って待っていた。

「あ、刹那さ「失礼します！」」

声をかけたネギを振り切り刹那は廊下の向こうへ行ってしまった。

「ああ、行っちゃった……」

「桜咲さんどうしたの？なんかすごく焦ってたけど」

「せつちゃん……………」

脱衣所から出てきた木乃香は刹那が去って行った方向を寂しげに見つめた。

そんな木乃香に悟空が声をかけた。

「なあ、コノカ。オラおめえに聞いてえことがあんだけどよ」

「ん？なんや悟空さん？」

表情を笑顔に戻し、悟空に向き直る木乃香。
そんな木乃香を明日菜は訝しげに見た。

「セツナがよ、いつも言ってるお嬢様ってコノカのことか？」

「！……………うんウチのことだよ。悟空さんせつちゃんと知り合い
やったん？」

「ああ、まあちょっと話したぐれえだけどな。それでよ、あいつが
なんであんな風に悩んじまってんのかおめえ知らねえか？」

「……………どういふこと？」

「刹那さんと何かあったんですか？」

ネギと明日葉は状況が分からず一様に疑問符を浮かべる。

「……うん。アスナにもちゃんと話してへんかったね……」

一瞬木乃香は考えたが意を決して話し始めた。
幼い頃の刹那との思い出を。

いつも一緒に遊んで、怖い犬からも自分を守ってくれた。
川で自分が溺れたとき誰よりも心配してくれて、泣いてくれた大切な友達。

「でも、その後せつちゃん稽古とかで忙しうなってもうて、あんまり合えへんようになって。ウチも麻帆良に引っ越してもうたし。久しぶりに再会できたときはもう……」

いつの間にか、木乃香は目に涙を湛えていた。
それに気づいた木乃香は恥ずかしそうに目を拭う。

「ウチ、せつちゃんに嫌われてもうたんかなー。せつちゃん昔みたいに話してくれへんよーなあって……」

寂しげな照れ笑い浮かべて木乃香は言った。

「このか……」

「このかさん……」

ネギと明日菜は木乃香を心配げに見つめた。

そんな二人に気づいて、木乃香は明るく笑って見せた。
自分は大丈夫だと伝えるために。

「大丈夫！大丈夫だ！おめえが心配することなんてねえぞ！」……
え？」

しかしそれは悟空によって遮られた。

驚いて木乃香は悟空を見る。

悟空は笑顔でさらに続けた。

「セツナはよ、今ものすげえ悩んじゃってる。自分じゃおめえのこ
と守れねえんじゃないやねえかってよ。でもあいつは強えぞ！いつか自分
の答え見つけて、必ずおめえの所に帰ってくる！」

「あ……」

悟空は木乃香の頭をそう言って撫でた。

父親を思わせる大きな手。

包み込んでくれるような暖かな手。

「だからよ、おめえはあいつのこと信じて待っててやってくれ。あいつがおめえと胸張って一緒に居られるようになるまでよ！」

につ、暖っかい笑顔だなあ、木乃香はぼんやりそんなことを思った。不安も哀しさも全部、溶かし込んでしまえる。そんな笑顔だなと。

「あ！でもおめえがあいつと一緒にいてえって思うなら、じゃんじやん一緒にいりゃいいぞ！」

「え？でもウチせつちゃんに……」

「ん、あいつはおめえのこと守りてえって言ってたんだし嫌いなわけねえって！なあ、ネギ！」

「はい！僕、刹那さんのこと、ほんの少ししか知りません。でもあんなに必死になってこのかさんのことを守ろうとした人がこのかさんのこと嫌いなはずないです！」

「なんかよく分かんないけど、このか！あんな弱気になることなんてないのよ。桜咲さんがどうとかじゃなくて、あんながどうしたいかでしょ！」

ネギと明日菜もまた笑った。

友達の哀しそうな顔なんて見たくない、一緒に笑顔でいて欲しいから。

迷いもある、不安もある。
でも、もう木乃香は哀しくはなかった。

「……ありがとうな、悟空さん……ネギ君もアスナも」

心にいつもあった不安は、暖かな優しさに触れて、ほんの少しだけ溶けたような気がした。

第10話 一緒にいたくて(後書き)

悟空お悩み相談室！

戦闘が・・・無い・・・。

次はちょっとお猿のあの人登場です。

悟空はやっぱりキレるのか！

それでは読んでくださりありがとうございました！

第11話 静かに怒れるサイヤ人

木乃香を部屋まで送り届けたネギと明日菜は、話を聞くため刹那を探していた。

そして玄関ロビーに差し掛かったとき、入り口に札を貼り付けている刹那を見つけた。

「あ、刹那さん！何やってるんですか？」

「これは式神返しの結果です。用心に超したことはないでしょうから……あ、神楽坂さんには話しても……？」

「ああ、大丈夫大丈夫！もう完全にはれちゃってるから」

近場の椅子に腰掛けた三人は改めて向き直る。
しかしそこでふと、刹那は気が付いた。

「……………あの、悟空さんは？」

「あ、悟空さんは今エヴァンジェリンさんに電話してます」

「あの人はエヴァンジェリンさんとも知り合いだったんですね。でも今連絡とは……もしかあつたのですか？」

少々の警戒心を抱き、表情を引き締めて刹那は問う。

そんな刹那に首を捻ってネギは答えた。

「うーん、なんでも修学旅行の間は一日一回は連絡しろって言われてるみたいです」

「はあ………?」

「大方悟空さんがいなくて寂しいから声が聞きたいんじゃないの?」

茶化すように笑って明日菜は言う。

「あははは！まさか、エヴァンジェリンさんがそんな子供みたいなこと」

「ええ、そうですね。おそらくこちらの状況を知っておきたいのでしよう」

「えーそうかな?」

ネギと刹那はそう言うが、明日菜は納得がいかないのか腕を組み想像を巡らせ続けた。

『へっくち!』

「ん？風邪かエヴァ？腹出して寝てっ　と体冷えちまうから気い付けろ」

公衆電話の並ぶフロアで悟空は一人電話をかけている。
電話の相手、エヴァンジェリンは怒ったように声を上げた。

『は、腹など出しておらんは!!!.....たまにしか.....
そそんなことよりそっちはどうなのだ!西の者が早速仕掛けてきた
だろう?ぼーやお前のことだ、大方ぼおっ　として何の対策も立
てぬままここまで来たのだろう!』

「ははは、わりいわりい。でも結局カエルと酒ぐらいしか無かったぞ?」

『.....油断するなよ。おそらく西の者が仕掛けてくるのは
今夜あたりだ。そして奴らが狙うのはあくまで近衛木乃香というこ
ともな。奴らが出来ることなど高が知れているが、近衛木乃香を奪

われれば厄介なことになる……………」

エヴァンジェリンは声を低めて悟空に忠告する。

木乃香に秘められた力は絶大だ。

こと戦闘に関して言えば利用価値は計り知れないだろう。

「……………分かったぞ。コノカとネギとアスナとセツナと他の奴ら皆守りゃいいんだな！」

しかし悟空にとってはそんなことはどうでもいいことで。

初めから悟空のすることに変わりは無かった。

エヴァンジェリンは呆れたように溜息を吐いて言う。

『はあ、お前は……………ふふふ、ああそうだった。お前はそんな男だったな』

呆れの混じった声色にはどこか楽しげな雰囲気が籠っていた。

『ま、せいぜい用心することだ。ぼーやだけじゃ不安だがお前や……………そつちには桜咲刹那もいたな……………お前達でなんとかするんだな』

「おおー！」

悟空は笑顔で勢いよく返事をする。
受話器越しでもエヴァンジェリンには悟空の表情が分かった。
どこまでも単純で誰よりも優しいバカな顔。

『それではな……あ、あ明日もちゃんと連絡するんだぞ
！絶対だぞ！忘れたら駄目だからな！』

「ああ、んじやな！ちゃんと布団かぶって寝ないと駄目だぞ！」

『だから！腹など出しておらんと言っとろつが！！「ガチャン！プ
ー、プー、プー、」

「うわ！？」

突然の大声に驚き、耳を押さえながら受話器を見つめる悟空。
悟空は頭に疑問符を浮かべ、首をかしげた。

「なんで怒ってんだエヴァのやつ？」

ガチャリと受話器を戻し、悟空はその場を離れた。
そしてそのままネギたちの所へ向かおうとする。
ネギ、明日菜、刹那の気は、今バラバラに動いていた。
ネギは外へ、明日菜は木乃香と同じ場所へ、刹那は旅館内を移動し
ている。

悟空は腕を組みこれからの予定を考える。

「さて、どうすっかな。ネギと一緒に外に出るか。ん？でもコノカ守るにゃ一緒にいた方がいいんか？それかセツナと！……コノカの気だ……外にいいのか！」

次の瞬間、高速でコノカの気が移動し始めるのを感じた。そしてその近くには見知らぬ気がもう一つ。悟空は外へと走った。

「ネギとアスナとセツナ達は合流したみてえだな……よし！」

人差し指と中指を額に当て、集中する。行き先は

「おや？悟空殿、どうされたでござるか？そんなに急いで」

悟空は廊下を歩く楓とすれ違った。

全力疾走する悟空に楓は不思議そうに声をかけた。

「あ、わりいなカエデ！オラちょっと急いでんだ！また今度な！」

ピシュンッ

言うが早いか悟空は楓の目の前で掻き消えた。

楓は呆然と悟空がさっきまで居た空間を見つめている。

そして数秒後

「はっ！？ 悟空殿！今まったく動きが見えなかったでござるよ！？今の技はなんでござるか！？悟空殿！？何処でござるか！？悟空殿おおおおお！！！！」

魔法でも忍術でもない未知の技に驚愕と疑問が一気に押し寄せてきた楓の頭は、しばらくオーバーヒート状態だったそう。

「刹那さん！こっちの熊っぽいのはこっちに任せて、このかを！！」

「はい！神楽坂さんも気をつけて！」

「つく！？ウチの猿鬼を！？」

猿の着ぐるみを着た女によって近衛木乃香はさらわれた。

いち早く事態に気付いたネギたちは猿を追ってここ京都駅にたどり着く。

幅の広い階段の上から着ぐるみ女、天ヶ崎千草は憎々しげに毒づいた。

（ガキが何であないに強いんや！？ええい！）

「お嬢様を返せ！！！」

刹那はそんな千草に肉薄せんと一気に踏み込む。

（打ち込むと同時にお嬢様を！）

体術の心得が無いこの相手ならば一瞬で終わる。
そう思われた時

ガキンツ!!!

しかしそれは千草の後方から高速で接近してきた陰によって遮られた。

「なっ!?!」

鋭い金属音。

刀同士を激しくぶつけ合い、両者はそれぞれ後方へ飛ぶ。刹那は瞬時に受身を取った。

「きゃあああああ~~~~~」

もう一方は暢気な声で悲鳴を出しながらごろごろと転がっていく。しかし刹那は相手のそんな様には目もくれず内心激しく動揺していた。

(この太刀筋は神鳴流か!?まさか敵方にも神鳴流が雇われていたとは……………!!)

刹那の見据える先で、二刀の神鳴流剣士、月詠は立ち上がる。

月詠は前方で身構える刹那を見て嬉しげに微笑んだ。

「どうも、神鳴流剣士の月詠言います。以後よろしうお願いします、せんぱい」

「ほな、月詠はん頼みましたえ！」

「あ！逃がさん！！」

「あ〜ん、せんぱいの相手はウチですえ〜」

逃げる千草を追おうと刹那が踏み出した瞬間、月詠は右手の小太刀を刹那へ袈裟に薙ぐ。

刹那はそれを夕凧で防ぐ。

刀が合わさると同時に月詠は左の小刀で切りつける。

月詠の小太刀を、刹那は右手に持ち替えた夕凧で弾き、空いた左手で月詠の左手首を掴む。

月詠はそれを気にすることなくさらに刹那に肉薄し、肩から体当たりをかます。

一瞬ひるんだ刹那は月詠の手首を放し、距離をとらんと後方へと跳んだ。

しかし月詠それを許さず刹那にぴったりと張り付いて離れない。

（くそ！意外とできる！！）

「ほほほ！そんな野太刀に二刀流の剣戟は相性悪いやろ！足止めは成功やったな〜！！」

高笑いをして千草は意気揚々と自身の式神に木乃香を運ばせ、逃げようと背を向ける。
だがそれを許さない者がもう一人。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ 風の精霊11人！！縛鎖となりて敵を捕まえろ！！」

「ああっしもた！？もう一人のガキ！！」

「遅いです！魔法の射手 戒めの風矢！！」

ネギから放たれた11発の風の弾丸は一気に高速で千草に殺到した。完全に不意を突かれた千草にこれを避けることはできない。

「ひ~~~~！！！！お助けえええええ！！！！」

千草はそのまま手近にいた木乃香を引つ掴み、盾にした。

「！？曲がれえ！！！！」

ネギは驚愕し、とっさに風矢の軌道を変え直撃を回避した。着弾しなかったことに安堵しつつネギは焦って声を上げる。

「このかさんを離して下さい！卑怯ですよ！！」

「え？・・・あら？・・・」

一瞬呆けた千草はすぐに事態を理解した。
理解すると同時に厭らしい笑いを浮かべる。

「はっはっん、なるほどな。甘ちゃんやな、人質がちよっと傷つくくらい気にせんと打ち込めばええものを・・・こりやええ盾が手に入ったもんやわ！ほほほほほほ！！」

「なにを！っぐ!？」

明日菜は熊鬼の鋭い爪に締め上げられながらも千草を睨みつける。

「こ、このかを・・・どうする気よ！！っぐ」

千草はそんな明日菜の様子をニヤニヤと眺めながらさも嬉しげに手を顎に当てて言う。

「せやな、まずは呪薬と呪符使て口利けへんよーしてから、なんでも言うこと聞く操り人形にするのがええな！うん！その方が使い

勝手がええ！なぐに心配せんでもこのかお嬢様の力が手に入ったら、あんたらも同じにしたる！このガキみたいにな！」

「な
」

「なんですつて？」

千草の声は特別大きいわけではない。

しかしその言葉は、その場の三人の怒りを激しく刺激する。
場の空気が凍りついたことにも気付かないまま千草は饒舌に話し続けた。

「ウチの勝ちやな！……このかお嬢様、可愛いケツしよつて・
……ほななケツの青いクソガキ共！おしーりぺんぺん！」

160

パンパンッ

軽い音を鳴らして千草は木乃香のお尻を叩いた。

ピキッ

「……………」

ネギと明日菜は千草を睨みつけ、刹那は青筋を浮かべて全身に力を込めた。

そして今まさに明日菜、刹那が動き出そうとした瞬間

ドゴオオ！！！！！

ドゴオオ！！！！！

ドゴオオ！！！！！

同時に三箇所で凄まじい轟音が響いた。

三人の意識が音のした方向へ向けられる。

音の一つは明日菜を掴み上げていた熊鬼が消し飛んだ音だった。

顔面は迫撃砲でも打ち込んだように抉られ、ゆっくりと熊鬼は消えていった。

そして熊鬼が手放したことでバランスを崩すはずだった明日菜は何者かによって地面に下ろされていた。

もう一つの音は刹那と鏢迫り合いをしていた月詠が吹き飛ぶ音だった。

とっさに自身の二刀で防御体勢をとった月詠だったが、二本の刀は無残に根元から折れ砕けている。

そして最後の音は、いつの間にか仰向けに倒れた千草の顔面の真横に伸ばされた足が、アスファルトの地面を踏み砕いた音だった。

砕かれた地面は半径2m程のクレーターを作り、千草はその中で寝転んでいるというなんとも不思議な光景だった。

クレーターの中には三人に背を向けて木乃香を抱えている人物、山吹色の胴着、黒い髪を風になびかせ、静かな怒りに身を震した男がいた。

「遅れてすまねえ。皆大丈夫か？」

振り返り三人に笑顔を向ける

「悟空さん！」

穏やかな心を持ったサイヤ人、孫悟空は怒っている。

第11話 静かに怒れるサイヤ人（後書き）

サイヤ人襲来編ばりの悟空大遅刻！

でもこれにはちゃんと理由があるんですよ。

それではまた次回お会いしましょう！

読んでいただきありがとうございます！

第12話 第一戦終了

衝撃、風圧、痛み、遅れて爆音

気付けば千草の顔のすぐ横の地面には足が突き刺さっていた。

脳が現状を理解できていない。

千草は呆然としている。

何故自分は倒れているのか、何故手元には木乃香がないのか、何故地面が抉れているのか、この男は誰だ、何故自分は全身にこんな汗を掻いているのか、この男は誰だ、何故涙が止まらないのか、この男は、何故全身の震えが止まらないのか、この

「おま……え……誰……や……」

千草は頭上の男に問いかけた。

声は震え、嗚咽を漏らす喉は先ほどのようには動いてくれなかった。男は千草をまつすぐに見据えて静かに口を開く

「オラ、孫悟空だ」

その目にまっすぐな怒りを込めて。

悟空はそう答えると干草に背を向けてネギたちの所へ向かった。

胸に抱えた木乃香は相変わらず眠ったままだが、その表情は安心したように和らいでいる。

駆け寄ってくるネギたちは一様に笑顔だった。

「悟空さん！」

「もう！遅いじゃない！私たちだけでも終わってたわよあんなの！」

「ははは、すまねえな。ちょっといろいろあつてよ」

「いいえ、お嬢様はこうしてここにいます。悟空さんが来てくれてよかったです……」

静かに寝息を立てる木乃香と悟空の顔を見て、穏やかに刹那は微笑んだ。

悟空はそのまま木乃香を刹那に渡すと再度後ろへ振り返る。

見るとそこでは、千草がクレーターから這い出ているところだった。先の一撃の恐怖を今になって脳が理解した千草は、腰を抜かして立つことができなかった。

座り込んだ状態で、千草は悟空を睨みつける。

「くそ！なんなんや！？いきなり現れたかと思たら人のもん掠め取りおつてからに！！！」

身勝手な怒りを露にする千草。

対照的に悟空は先ほど放っていた怒気を収め、今はただ冷静に千草達“三人”を見据えている。

「わりいがおめえ達じゃオラに勝つことはできねえ、闘わなくても分かる。無駄な闘えはしたくねえ、さっさと帰えれ！」

「な！？なんやと……！！！」

いよいよ千草は頭に血が上り始めた。
途中まで完璧だったはずの計画を邪魔された拳句のこの言葉は、千草にこれ以上ない屈辱を与えた。
瞬時に懐から式神の御符を取り出そうとする千草。

「あきまへんよ、千草はん。あのお人はあきまへん」

しかしそれは、いつの間にか千草の眼前に移動した月詠によって遮られた。

折れた小太刀を構え、千草を守るようにして立つ月詠が口を開く。

千草は月詠の行動に驚きの声をあげた。

「月詠はん！？なんのつもりや！？この男はこの先障害にしかかなりえへん！！ここで仕留めな・・・・・・・・！！！」

「このお人相手に？・・・・・・・・それは無理やわ〜千草はん。このお人と闘えいうだけやったらそれこそお金なんて要りまへんよ けど、このお人に絶対勝たなあかんいうんやったら・・・・・・・・ウチはこの仕事降りさしてもらいます〜」

朗らかな笑顔で言う月詠。

しかしその目は、暗い喜びと微かな恐怖によって歪に光っていた。
千草はそんな月詠に気圧され息を呑む。

千草と違い月詠は悟空の拳を直接受けた。
だからこそ感じられる。

かつて無いほどの強大な力が。

そして自身の刀を砕いた一撃が全力とは程遠いということが。
頬を赤らめ、妖しく笑う月詠は悟空を見つめる。

「ウチは月詠言います。お名前聞いてもええですか？」

「ん？オラ孫悟空だ」

「そんごくう？うふふふ、ごくうはんやね」

月詠は口の中で「ごくうはんごくうはん」と何度も繰り返す。
悟空は不思議そうにその様子を見ていた。

「貴様、何のつもりだ？」

木乃香をネギたちに任せ、悟空の傍らに駆け寄って来た刹那が月詠
を睨みながら言う。

手は夕風に向け、いつでも抜刀できるよう構えている。

そんな刹那を見て、また月詠は嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、そうやったわ。ごくうはんだけやのうて、せんぱいもお
るんやね うふふふ、ウチは贅沢もんやな。でも今日の所は引か
して貰いますえ」

「ふっ、逃がすと思うのか？・・・！」

言つと同時に刹那は月詠に踏み込もうとする。

「な！？何故止めるんですか悟空さん！？」

しかしそれは悟空の手によって阻まれた。

驚いて刹那は悟空を見る。

悟空は依然、前方をじつと見据えたまま静かに口を開いた。

「あいつは近づいた瞬間攻撃してくる。今おめえあのツクヨミってやつしか見てねえだろ？」

「え？あいつって

」

「まったく、付け入る隙さえないか」

その時、抑揚の薄い声が響いた。

この場にいる誰の声でもない、まだ幼さの残る少年の声。

千草と月詠の傍らにはいつの間にか水溜りが出来ていた。

小さく波打ったかと思うと、それはだんだんと人の形を成していく。白い髪に学生服のような出で立ちの少年、フェイト・アーウェルンクスは溜息混じりに言った。

「新入り!？」

「あら、どうも」

「無事なようですね」

フェイトは傍らの二人をチラリと確認するとすぐに視線を悟空に向ける。

いつでも不意を衝けるように。

「まさかとは思ったけど、本当に転移魔法よりも速く動けるなんてね。噂どおりの出鱈目さだ」

「新入り!こいつのこと知ってるんか!？」

「その筋では比較的新しい部類の噂ですよ。麻帆良学園に突如現れた正体不明の人物。『瞬の拳闘士』『蒼い焔』『金色の戦士』なんて、すでに異名まである。唯一つ共通して言えるのは、彼に仕向けられた使い魔や式神はどれ一つとして帰って来なかったということ」

「なっ……」

淡々とフェイトは語る。

千草の表情はみるみるうちに青ざめ、月詠の顔は興奮に紅く染まっていた。

刹那もフェイトの言葉に驚き、悟空の顔を見る。

「ご、悟空さん！？警備の仕事も！？っていつかあれは本当ですか！？」

「へえ、オラそんな風に呼ばれてんのか。初めて聞いたぞ」

相も変わらず暢気に悟空は言った。

刹那はそんな悟空の様子にがくりと肩を落とす。

「今回は引きましょう。目的はあくまでも『奪取』。それが叶わない今ここにもう用は無い」

そう言うとフェイトは水のゲートを開き瞬時に千草、月詠を包み込む。

そしてゲートに自身を包む瞬間、フェイトは悟空を見据えて言った。

「では、今度はせいぜい君に気をつけるとしよう、孫悟空」

言葉だけを残し、フェイトは水と共に消え失せた。

「あの少年は一体……」

構えを解きながら刹那は疑問を口にした。
姿を見るまで刹那はフェイトの存在にまったく気付かなかったのだ。

(.....強いな.....)

神鳴流剣士に続き敵側の思わぬ戦力に刹那は唇を噛んだ。
今日のような実力行使に出られれば、このかお嬢様をより危険に晒してしまう。

知らず夕凧を握る手に力が籠る。

刹那はじつと自身の手を見つめていた。

ぼんっ

頭に手が載せられた。

刹那は顔を上げる。

そこには、まっすぐに刹那を見つめる悟空がいた。

笑顔はいつも通りなのにその目はどこまでも真剣で、刹那は内心ドキリとした。

「悟空.....さん.....?」

「焦んなよ。強くなんのは修行してからだ。それによ、コノ力のこ
と守りてえのはなにもセツナだけじゃねえぞ! なっ! そうだろ?」

そうして悟空は刹那の背後に声をかけた。

刹那が振り返ると、そこにはネギと木乃香を抱えた明日菜が立っていた。

二人は同時に頷きながら笑顔を向けてみせる。

「刹那さん、僕はこのかさんの先生です。でも生徒である前にこのかさんは僕の大切なお友達です！何が何でも僕らでこのかさんのことを守りましょう！」

「当たり前よ！刹那さんもさ、まだそんな水臭いこと考えてたわけ？このかは私の親友なんだから守るのなんて当然じゃない！！」

力強く二人は宣言して見せた。

行動する理由などその程度で十分。

友達と一緒に笑っていたい、友達を助けたい、木乃香は二人にとって大切な友達だから。

刹那は初め驚いた。

魔法使いといってもまだまだ幼いネギ、つい数週間前まで魔法どころか戦いの場にさえ立たなかった事がないだろう明日菜。

なのに二人は言葉に出さなくとも、一緒に戦ってくれると言ったのだ。

「でも……」

刹那は次に複雑な気持ちになった。
図らずも自分は二人を巻き込んでしまったのだ。
本来は自分の使命であったはずのこのかお嬢様の守護に。
何者でもない自身の未熟のせいでも……。。
そんなことはさせられない、危険だ、これは自分の仕事であなた達
には関係ないことだ。
そう口に出そうとした。

グシグシッ

出来なかった。

ネギと明日菜のまつすぐな目がそれを躊躇させた。
そしてなにより、自分の頭の上に置かれた力強い手が、不安も迷い
も取り去ってくれる。
そんな気にさせられるのだ。

「ありがとうございます……。ぎぞいます……。!」

嬉しげに笑うネギ、照れくさそうにそっぽを向く明日菜、そして悟
空は俯く刹那の頭を撫で続けた。

おまけ

「ん……………」

「あ、このか起きちゃった？」

「悟空……さ……ん……いきなりお姫様抱っこやなんて恥ずかしいわ……………」

「はいはい、悟空さんじゃなくて悪かったわね」

「なんやすごい胸板やったから、てつきり悟空さんや思ったわ〜」

「そういえば、悟空さんってよく見たら筋肉すごいわよね……………」

「・

「ん？そうか？」

(胸板……………あ)

「そうですねえ、腕なんて凄く頑丈そうです！」

(腕……………！)

「？ せつちゃん、どないしたん？顔赤いえ」

「い、いえ！？全然全くホントになんでもありません！！！」

「「「「？」「」」」

第12話 第一戦終了（後書き）

フェイトと初顔合わせ。

あんまり話は進みませんでしたね・・・遅筆ですみません！

悟空の麻帆良での話はその内書きたいと思っています。

それでは読んでいただきありがとうございました！

第13話 奈良 悟空ぶらり食べ歩き 前編(前書き)

2話連続投稿です。

無駄に長かったので二つに分けました…………。

よかったら読んでやってください！

第13話 奈良 悟空ぶらり食へ歩き 前編

修学旅行二日目 朝

がっもぐむしやがぶらぐむしや

「うっ〜！修学旅行初日に寝ちゃっうなんて〜！くやっ〜！…！」

「今日は寝ないよ〜！」

ぐべぐべぐべぐべぐべぐべぐべぐべ

「ネギ君ちよっと眠そやな〜」

「あ、このかたな。おはようございませう。」

がっがっがっぐべぐべぐべぐべ

「んっ、やあ、おはよう悟空様……………」

「見つけたでござるよ悟空殿！昨夜の技についてお……………」

「あ、せつちゃん！なんで逃げるん？！一緒にご飯食べよー！」

「刹那さん！」

「わ、私は別にー！！」

ズルズルごくがつつがつむしゃ

「……………」

「なにに！？刹那さんどうしたの？」

「なんか修学旅行に来てから刹那さんの反応がすごい新鮮だよ！」

「昨夜なんかあったのかな！？あーん今日は絶対夜通し遊ぶー！！」

ずず、んぐかぶむしゃもがつ

「……………」

「ネギくん！今日うちの班と一緒に見学しよー！！」

「わーっ！？」

「な！？まき絵さん！？そんな抜けが

っこほん、ネギ

先生は忙しいんですよ！……………ですがよろしかったら是非うち

の3班と!!!」

「あ!?!いいんちよずるいよー!」

「お!ネギ君争奪戦!?!」

むしゃむしゃむぐもごがつバリッ

「.....」

「あ.....あの、ネギ先生!!!よ、よろしければ今日の自由行動.....私達と一緒に回りませんか!?!」

「「え?」」

「み、宮崎さん!.....」

かつぷかつぷ、ふうふうずず〜

「.....」

「わかりました宮崎さん!今日は僕5班の皆さんと一緒に回りますね!」

「おおー!」

「本屋が勝った!!」

「よくやったのどかー!!」

「です!」

はふはふむぐぐっくんむぐ

「……………悟空さん……………」

「ん?ふあんふあまは?はえふえも(なんだマナ?カエデも?)」

「あ……………美味しいかい?……………」

「おお!うめえほ!!おめえはふおぶうは?(うめえぞ おめえらも食うか?)」

「い、いや今日は遠慮しよう……………」

「うむ、拙者もちよっと……………」

「ほづふぁ?(そうか?)」

朝、賑やかな生徒達をよそに、悟空は朝食をせっせと食べていた。悟空の背後には今現在も空の食器がうず高く積み重ねられている。真名は苦笑いを濃くし、楓は呆れを通り越して感動さえ覚えていた。

「むむむ、もしやこれが悟空殿の強さの秘訣……!?」

「……まあ、なんだ、お腹を壊さないよう気をつけて」

「おお、わはっふぁほ！（わかったぞ！）っんぐ、すんませーん！
お代わりたのんまーす！」

恐怖する従業員。

旅館の食材のストックは残り少ない。

「あ、悟空さーん！探しましたよ！」

「よおネギ、どうかしたんか？」

他の生徒と同時刻に『朝食』を終え、ロビーで寛いでいた悟空にネギが駆け寄った。

「実は今日の予定の事で……」

「今日か？今日は確か、ナラっちゅう所に行くんだろ？」

「はい、僕は今日宮崎さん達の斑と一緒に回る事になって……
それで、悟空さんはどうするのかなって」

「おお、そっぴや決めてなかったな」

ネギは木乃香の護衛の徹底と言う意味も込めて5班に同行することを決めていた。

刹那の意見から敵方が今日攻めてくる事はないとのことだったが、念には念をとそこにネギも加わったのである。

「そ、その……やっぱりこのかさんのこともありますから出来れば皆一緒の方が……ああ！でも悟空さんにもし予定があるんなら仕方ないです！……で、でももしよろしければ、その……」

内心、ネギは悟空も一緒に来ることを望んでいた。

戦力とか護衛の確実性とか色々口にするけど、心中で抱く子供らしい葛藤は途中から観光予定の羅列へ変わった。そして最終的に晩御飯のメニューを決める談になって、悟空は腕を組み考えを巡らせた。

「（うーん、どうすつかなあ。別にやることなんてねえしネギたちと……！）あ、そうだ！エヴァと茶々丸の土産だ！」

ぽんっ、と悟空は一つ手を打つ。

家を出る時、悟空はエヴァと確かに約束したものと思っている（エヴァの真意はまったく別だが）。

「オラ、エヴァと約束したかなあ……わりいなネギ、オラは行けねえや」

「そう……ですか……」

それを聞くと、ネギは目に見えて残念そうに顔を俯かせ肩を落とすた。

悟空はそんなネギの様子に苦笑い。ネギの頭をグシャグシャと撫でながら悟空は力強く言った。

「あ……」

「コノ力たちの事、任せたぞ！」

まっすぐにネギを見て、悟空は笑いかけた。その相変わらざる笑顔は、どうやら消沈していたネギを元気付けるには十分だったようで、ネギの目に俄かに活力が湧いてくるのが分かる。

「……………分かりました！任せてください！ちゃんと守ってみせますね！」

俯かせていた顔を上げ、ネギもまた力強く答えて見せる。悟空は満足げに頷いた。

そして突然、悟空はなにやら楽しげに笑みをこぼし始める。ネギはそんな悟空に首をかしげた。

「悟空さん、なんかだかすごく嬉しそうですね？」

「ん？いやだつてよ、ここに来るまでいろんな店見て回ったけど、どの店もすんげえうまそーなモンばっかだったかな！今から楽しみですよ！何食うかな……………」

目を輝かせ、拳を握り、若干涎も垂らして、子供のように語る悟空。悟空の脳内は今『食』で満たされていた。

ネギは悟空のそんな様子にとろとろ吹き出した。

「う〜ん〜ん……………んぐ……………土産つってもあいつら何買って
きや喜ぶんだ？……………あむむぐむぐ……………きふのわふれてふ
あほ（聞くの忘れてたぞ）」

所変わって、ここは土産物屋が並ぶとある大通り。

和菓子、置物、燈花器、茶器、地酒、漬物などなど、多種多様な土産物屋が所狭しと並ぶ中、悟空は一人通りを歩いていた。
周りは修学旅行生達やカップル、家族連れなど多くの人で賑わっている。

一種祭りのような雰囲気悟空も物珍しげに店を冷やかす

バリッ「む〜、やっぱりくひもんほつふぁいは？（やっぱり食いモ

ンの方がいいか?」

大量のお菓子を携えて。

悟空の両手にはすでに大きな紙袋が4、5袋ずつ提げられている。店をはしごする側ら、目に付いたうまそーな物を次から次へと買い込み、そのまま露店でも開くかのような域にまでその量は達していた。

袋から奈良銘菓ねぎみそ煎餅を取り出し、口に頬張りながら悟空は頭を捻る。

そしてそんな悟空の頭で女性に対する気の利いた土産など思いつくはずも無く、やっぱり最終的には食だった。

バリツバリ「んぐ……よし、んじゃさつき食った ならまちだんご にすつか!ん、いややっぱ ならまちるーも美味かった かなあ〜。……………う〜〜〜ん」

そんなことを呟きながら、悟空は唸っていた。

「止めてください!」

「?」

その時、悟空は聞き覚えのある声を聞いた。

「あいや………マナ達か？」

少し時間は遡る。

龍宮真名、大河内アキラ、和泉亜子、佐々木まき絵、明石裕奈ら4班は奈良公園から程近い土産物屋通りをぶらついていた。

土産など最終日に買うのが常道と、冷やかしのつもりで店を覗くも秀囲気の所為なのか、財布の紐が少し緩くなっているもの有一名。

「うっん、どないしょ………ちょっと買いきりすぎてもうたかな………」

「そうだよー！そんなにお菓子買っても、食べ切れないでしょ？」

「でもでもめっちゃ美味しそうやったやん！ほら ならましろーる
」！

「だからって一本丸ごと！？・・・太るよ」

「また昨日の肉まんみたいに食べ過ぎてお腹壊すよ」

「うっ・・・なあ一緒に食べてえな〜！」

亜子の両手は紙袋で塞がっている。ここにも一人、お菓子に執り付かれたものがいたのである。

裕奈とアキラは亜子の様子に苦笑いする。

「ははは、まあ雰囲気がそうさせるんだろう。私にも一つ貰えるかい？」

「龍宮さん・・・ありがとうございます！！これさっき見つけたんや！
うさぎのお餅！」

「わあ、かわいい・・・」

「ホントだ〜！私にもちょうだい！」

何はともあれ、5人は修学旅行を堪能していた。

「ねえねえ、君ら修学旅行生？」

そこへ

服を着崩した、年齢はおそらく大学生程の青年が数人話しかけてきた。髪を染めピアスや指輪、シルバーアクセサリーの眩しい少々軽薄な印象を垂れ流す男達。

その一人が亜子達に近寄ってくる。

「俺達さ、大学の空手サークルの打ち上げ旅行なんだけどね。君ら自由行動？ねねね一緒に飯とか行かない？」

「え、いえあの………」

所謂ナンパ。

周知の通り彼女らはいくまで中学生である。しかし、お世辞にも彼女らの容姿、プロポーション（真名、アキラ等顕著）は中学生には見えない。

一方的に話しながら明らかに年齢を見誤っているであろう男を他所に、男慣れしていない亜子は戸惑う。

そんな亜子の前へ真名が立ち塞がった。

「申し訳ないですが、集合時間がありますから、他をお探しください。行こう」

「う、うん」

真名はあくまで微笑みを崩さぬままに答えた。

だがその微笑には感情がカケラも無い。普通ならそれだけで相手は拒絶の色を理解出来るだろう。

真名達はさっさとその場を去ろうとした。

しかしここに、それが理解できない男達が一束。

「いいからいいから、時間なんて気にしなくていいじゃん！絶対楽しいってー！」

「奢るからさ。ね！」

進路を阻むが如く男Aは道を塞いだ。

そしてもたついていた亜子の腕を掴む。

「あー！」

「ね、行こうよー！」

強引な男の対応に、裕奈は腹を立て、とうとう声を荒らげた。

「ちよ、ちよっとー！止めてくださいー！ー！」

アキラは身構え、まき絵を自身の後ろに押しやり、真名は冷たい視線を男に向けながらポケットから小銭を取り出そうとした。その時

「おめえふあはにやつへるんふあ？」

その場の全員の視線が一箇所に向けられた。

第13話 奈良 悟空ぶらり食へ歩き 前編(後書き)

前編終了です。

後半へ続く。

では！

第13話 奈良 悟空ぶらり食へ歩き 後編(前書き)

後編です。

ではではー！

第13話 奈良 悟空ぶらり食べ歩き 後編

5人はさも助かったと安堵して声の主を見やる。

「悟空さ」

「よかった悟空せ」

「悟空せんせ〜！」

「 また、リス」

そして言葉を失った。

リスの如く口一杯にみたらし団子を頬張り、口の周りはみたらしのタレで汚れ、両手に紙袋を壱子の5倍は携えた悟空は、ものっそい間抜けに見えたことは5人だけの秘密である。

悟空はゴクンツと団子を飲み下し、5人に改めて尋ねた。

「おめえらどうしたんだ？ 買いもんか？」

「いや、そうじゃないでしょー！」

「 ぷっ！ふふふ あ、あの先生 はっ
くくくっ 助けてください！」

裕奈が悟空にすかさずツッコミを入れる。

亜子は助けを求めているが、悟空の顔がツボに警ストライク！笑いを堪えるのに必死だった。

悟空はそんな亜子に疑問符を浮かべながら、側らで悟空の登場に驚いた男達を見た。

「ん？こいつら誰だ？おめえ達の知り合いか？」

（んなわけないでしょ！ナンパだよナンパ！）

「ナンパ？」

（そう！ナンパ！執こくて困ってたんだ〜）

小声で悟空に事情を説明する裕奈。

すると真名が悟空の傍らに移動して男達を見据え、口を開いた。

「悪いね、先生が来たことだし今度こそ私達は失礼するよ。さっさとその手を放してくれるかい？」

「そ、そういう事！さあ、亜子も早く行こー！」

「う、うん」

もう一方の手を引いて裕奈は亜子連れ出そうとする。

しかし、男Aは相変わらず手を握ったまま。

傍らのもう一人の男Bが薄ら笑いをAに向ける。

「くはははは、おい！お前とは嘔吐いでも行くの嫌なんだってよ
」！
」

「ちっ、うるせえよ！たく優しくしてりゃ好き勝手言いやがって
よ……」

周りに群がる残りの3人もニヤニヤと笑みを浮かべていた。
アキラは不可解に思い呟いた。

「嘘？……」

「はあ？何言ってるの？私達嘘なんか吐いてないわよ！」

「吐いてんだろが！そいつが教師に見えるかよ！もっとマシなこと
と言えや！」

「……」

5人は何も言えなかった。

若干キレ気味の男Aは強引に亜子の手を引っ張る。
裕奈は驚いて手を放してしまった。

「あ！亜子！」

「ちよ、ちよっと！」

「もういいだろ？別に取って食いやしないって。あ、でも食っちゃうかもしないわ！」

下卑た笑いを浮かべ、周りの男達のニヤついた顔にも拍車が掛かる。アキラは焦って前に出ようと男に踏み込み、真名は絶対零度の視線を男に向け、足の付け根に取り付けておいた法的にあらぬ物を取り出そうと手を伸ばす。

ガシッ

唐突に男は動きを止めた。

いつの間にか悟空が男の手を掴んでいる。

一瞬驚くも、男はすぐに人を小馬鹿にしたような笑みを

「何？せんせ、離してくれま

！？……………つく、

あれっちよ……………！？」

「アコが嫌がってんぞ。その辺でやめとけ」

浮かべることは叶わず、驚愕し冷や汗を流し始めた。

必死に悟空の手を振りほどこうともがくも、腕は掴まれた点だけピ

クリとも動かなかった。

「おいおい、何やってんのお前？」

傍から見ればそれはパントマイムの出来損ないのようで、男達は声を上げて笑う。

だが実際に腕を掴まれているAは段々と恐怖に顔を歪めていった。そして叫びに近い声でさらに激しくもがく。

「ちよつ放せよ！！くつそ！！」

「ん？おお」

悟空は素直に男Aを放した。

突然支えを失った男はそのまま仰向けにのけぞる。

「うあ！？」

「あ！亜子！！」

そして手を掴まれたままの亜子もまた引っ張られ、あわや倒れんと思われた。

「おっと」

それは悟空によって防がれた。

悟空は亜子の手を引っ張りこみ、自身に抱きかかえる。

「あ……………」

思わず悟空にしがみついた亜子は、悟空の胸に顔をうずめた。

ビダンッ！

激しい音を立てて男は背中をしこたま地面に打ちつけた。

声にならない声をあげ、男は地面をのた打ち回る。

そんな男Aを見てようやくやく異常に気付いた男達は悟空を睨む。

「てめえ！何してくれてんだおい！？」

「俺らに喧嘩売ってんの？女の子の前だからって粹がない方がいいよ〜？へへへ〜！」

悟空を囲むように男達は近寄ってくる。

悟空は少々混乱するも男達の敵意に気付き、身構えながら声をかけようとした。

「いやおめえらじゃ多分無理」無駄だろうな。あんたたちじゃこの人に指一本触れられずに終わる。賭けてもいい」お、おいマナ・・・」

そこにすかさず真名が口を挟む。

口元にはこれ以上ないほどの嘲笑と余裕を浮かべて。

それを聞き、男達の大して丈夫でも無い堪忍袋の緒は引き千切れた。ような音を裕奈は聞いた。

「！！！！ふざっけんな！！ああそこで見てろやこのアマ！！」

ずんずんと男の一人が悟空に近づく。

悟空は頭を掻き、仕方ないとばかりに亜子から身を離そうとした。すると

「ん、悟空先生・・・！！」

「ん？」

消え入るような声で亜子は悟空を呼び止める。

そしてその手はしっかりと悟空の胴着を握っていた。

亜子は目に涙を溜め、必死に懇願するように首を振る。

「あかん、喧嘩なんてあかんよ！……ウチはもう気にしてへんから、だから先生……！」

和泉亜子という少女は元来喧嘩が嫌いだった。

人と人が傷つけ合うという行為がこの少女には何よりも耐え難い苦痛だった。

それが自分の知り合いなら尚更だ。

この人は自分の先生で、自分を助けようとしてくれている。

（そんな人に……傷ついて欲しくない……誰かを傷つけて欲しくなんかない！）

和泉亜子という少女はどこまでも優しい少女だった。

悟空は一瞬だけ驚いた。

悟空は図らずも亜子の想いを感じ取ったのだ。

自分よりも他者が傷つくことを怖がって、誰とでも仲良くありたいという微かな願い。

悟空は嬉しげに笑った。

そして亜子の頭を（悟空にしては珍しく）優しく撫でた。

「あ……」

「ああ、わかったぞ。心配すんな」

亜子の目をまっすぐ見つめて悟空は頷いた。
亜子はぼおっと悟空を見つめ

「余裕扱いてんじゃねえよ!！」

唐突な怒声にハツとした時には、亜子は真名の腕に支えられていた。

男は腕を振りかぶり拳を悟空の顔面に叩き込む。

ドゴォ!

「悟空先生!！」

まき絵と裕奈は目をつぶり、真名は啞然とした。

拳は悟空の顔面に突き刺さった。

悟空は男の拳を避けなかったのだ。

「あはははははは!！おいおいめっちゃ痛そうじゃん!手加減ぐらいしろよ!なあ?」

「うわあ、直撃……まあこれに懲りたらあんま調子乗らないようにな!！」

周りの男達は口々に悟空を皮肉り嘲る。

「ちよちよつと龍宮さん！？指一本がどうのって言ったじゃない！？」

「う、うむそのはずだったんだが……」

「ご、悟空先生！！大丈夫ですか！？」

亜子がすぐに悟空へ駆け寄ろうとする。

「待って亜子」

「え！？アキラなんで！？」

「あれ……」

だがそれをアキラが制した。

アキラはそのまま悟空を殴った男を指差した。殴った当の本人は先程からずっと口を嚙み、腕を振りきった状態で身動き一つしなかった。

否、よく見れば体全体が小刻みに震えているのだ。

悟空は顔で拳を受け止めたにも関わらず、微動だにしていない。そして突然男はその場に蹲った。

「あ……あ……が……お、俺の俺の手が、ていつてえええええ！……俺の手がああああああ……！！！！……？……！！」

絶叫。

周りの男達の表情が凍った。

先程悟空に腕を掴まれた男に至ってはガタガタと震えだす始末である。

悟空は頭を掻き、困ったように口を開いた。

「わりいな、やっぱおめえらじゃ無理だったろ？喧嘩してえわけじやねえんだ。ここは引いちゃくんねえか？」

手を押さえて蹲る男から、すすり泣く声まで聞こえだしたところで

「う……うあ……うあああああ……！！！！……？……？」

「化物だっ……！！！！」

ナンパ青年達は男を引きずるようにして逃げ出した。

青年達が見えなくなると裕奈がいきなり叫ぶ。

「すっごいよ悟空先生……！！！！」

「うわ!?!」

驚いて仰け反る悟空にかまわず裕奈は詰め寄る。
その目はピカピカと輝き、悟空は若干引いた。

「強いつて聞いてたけど、何もしないで勝っちゃうなんて!?!」

「うん!?!すごいすごい!?!」

「…………でも怪我が無くて本当に良かった…………ね? 龍
宮さん」

「一番焦ったのは私だよ? あんな自信満々に宣言して…………
ふふふ、まったく、相変わらずだよ悟空さん」

裕奈に加わりまき絵もまた悟空に飛び掛らんばかりに喜びを表現す
る。

アキラは心底安心したように微笑み、真名は楽しげに悟空を見つめ
た。

そして亜子はようやく我に返る。

「……………あ! 悟空先生!? ホンマに大丈夫なん!? ウチがあ
んなこと言つたばかりに!」なあ、アコ「え?」

悟空は亜子に近寄ると腰を曲げて視線を合わせる。
そしてまっすぐ亜子を見つめて、笑顔を向けた。
亜子は顔を赤らめ不思議そうに悟空を見返す。

「う、悟空先生……?」

「約束通りちゃくんと喧嘩しなかったぞ!……あり?でも
そついや一人怪我しちまったんだよな?これって約束守れなかつた
んか?うん??」

笑顔はすぐに考え込むような表情に変わる。

腕を組んで真剣に悩む悟空。

亜子は悟空のその様子に微笑んだ。

目には涙。

嬉しいのか、可笑しいのか、亜子にもよくは分からなかった。
でも

「ありがとうね……悟空先生……!!」

亜子は悟空の腰に抱きつきながら思い出した、胸を締め付けるよう
な甘い感覚を。

おまけ

キュピーン！

「む！？」

「ん？どうかしたですかパル？」

「今……今どこかで甘酸っぱいラブの波動が！！」

「……はあ？何を言ってるですか……あ！のどかが動いたですよ！！」

「あれ？……っかしいな……あ！待ってよ夕映！」

「・・・・・・・・・・」ギョッ

「ん？どうかした刹那さん？」

「え・・・・・・・・い、いえ！？何でもありませんよ！？本当に！？」

「そ、そうっ？？」

「はい！そんなんです！！・・・・・・・・・・（悟空さん・・・・・・・・・・
何してるんだろ・・・・・・・・・・）」

第13話 奈良 悟空ぶらり食べ歩き 後編（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

本筋と全く絡んでませんね！……すみません……。

いつか悟空にはチンピラに絡まれる生徒を助けて欲しいなあって勝手に思ってた……妄想もね、大概にしるとね……。

ここまで読んでくださった方には感涙です！

では良かったら次回も読んでやってください。

第14話 悟空の贈り物 前編（前書き）

……今回も長くなってしまい前後編に別れています。

どづか暇な時にでも。ではどづぞー！

第14話 悟空の贈り物 前編

「いい！？カズミにばれちまったんか!？」

「は、はいい……」

夜も更け、就寝時間も近付いた頃、悟空が驚きに声を上げた。

なんとネギが魔法使いであることが麻帆良のパパラッチこと朝倉和美にばれてしまったというのである。

悟空はエヴァンジェリンに釘を刺されているので、基本的に魔法が秘匿されなければならないことは知ってる。

ネギは申し訳なさそうに俯いた。

「ま、まあ朝倉も一応秘密は守ってくれるとは言ってるし、多分大丈夫……だと思う……」

「ちょっとちょっと、信用しなって！報道部突撃班朝倉和美はネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力するからさ！悟空先生もこれからよろしく」

「あ、朝倉さんもこう言ってくれましたし、悟空さん……」

「はあ、そっか。じゃしゃあねえな！よろしくなカズミ！」

しかし、そもそも悟空は力の秘匿などしたこともない為、特に気にすることなどないと言わんばかりに笑顔の下この話を片付けた。

「ははは、はぁ………」

「……と、とりあえず悟空先生のそれが素だつてことにまず驚いた………」

明日菜と刹那はある種予想通りの反応に苦笑いと溜息を吐く。そしてそれは和美も同じだったらしく、呆れたように悟空を見た。

とそこへ、風呂上りの明石裕奈、佐々木まき絵、雪広あやか、那波千鶴がやって来た。

まき絵とあやかはネギを見つけるとまっすぐに向かってくる。

「どうしたんですのネギ先生？なんだからとっても嬉しそうですわ」

「あ、皆さん！解りますか？実は今朝倉さんと仲良くなったところなんですよ！」

「そーそー」

「な！？」

ネギの一言に二人は激しく反応を見せ、今にも和美に詰め寄ろうとした。

「ちよつネギ先生！？朝倉さん！それはいった「こらお前達！もうすぐ就寝時間だぞ！ネギ先生も悟空先生も生徒をあまり甘やかさないでください！」

「は、はい。すみません……………」

「ははは、わりいな新田のおっちゃん」

しかし新田先生の登場によりそれは叶わず、二人は悔しげにその場を後にした。

「よし！んじゃパトロールっちゅうやつに行くか！」

「ええ、神楽坂さんは私と、悟空さんはネギ先生とで二手に分かれましょう」

「それじゃ三十分後に僕の部屋で落ち合つという事で」

「ああ、そんじゃ行くとすつか！」

そのまま悟空たちは旅館の外へと歩を進めた。

「ふふふふふ……………」

「へへへ……………そいじゃ朝倉の姉さん、始めるぜ！」

「了解！」

一方、悟空たち不在の旅館内、3 - A生徒達は

「まったくお前達ときたら！昨日は珍しく静かかと思えば、今日になってこれだ！！いくら担任のネギ先生や悟空先生がやさしいからと言って学園広域生活指導員のワシがいる限り好き勝手はさせんぞ！！！」

説教の真っ最中だった。

修学旅行の夜。

それは生徒にとって至福であり、重要なイベントの一つである。

古式ゆかしく枕投げに始まり、怪談話に花を咲かせ、恋の話に現を抜かし、怪談から猥談へ話がシフトしたあたりでとうとう麻帆良の鬼、新田先生が吠えた。

「これより、朝まで斑部屋からの退出は全て禁止！！見つけたら口

ビーで正座だ！！わかつたな！！」

「くくくくくえくくくくく！！！！？？」くくくくく」

一通りの説教を終えると、新田先生は怒った様子で持ち場へと戻った。

帰り際しずな先生が申し訳なさそうに会釈して行くのを3-A生徒達は呆然と見送る。

「ぶー、つまんなーい！枕投げしたかったのにー！悟空先生がいれば絶対負けないよ！」

「ネギ君と猥談したかったなあー．．．．いや？あえて悟空さんとも．．．．．？」

「ネギ君と一緒に布団で寝たかったのにー．．．．．」

「あなた達は．．．．．」

皆思い思いの夜を想像してただけに不平不満は後を絶たず、あやかは呆れて何も言えなかった。

「くくくくく、怒られてやんの．．．．．」

「ぬっ、朝倉！」

とそこに、一人新田先生の説教から逃れ様子を窺っていた和美が、壁に寄りかかりほくそ笑んでいる姿が。

あやかを初め、他の生徒もその様子に文句たらたらで食って掛かる。

「ムキー！！今まで何処に行っていましたの！？このヒキョー者！！」

「まあまあ落ち着きなっていていいんちょ。私から皆に提案があるのよ！！」

「？ 提案って？」

「このまま夜が終わるなんて勿体無いじゃない？一丁派手に3・Aでゲームをしないかってね？」

「な！？そんなことクラス委員長として許すはずが！」

「賛成ー！！」「反対ー！！正座イヤー！！」

「ゲームって？どんなゲームなの？」

ニヤリ、その言葉待ってましたとばかりに和美は口を開いた。

「名付けて！『くちびる争奪！！修学旅行でネギ&悟空先生とラブキッズ大作戦』！！」

「「「「「おお〜！！！！」」」」」

「ネギ君とキス〜！！？」

「悟空先生ともなん！？」

どよめき驚き歓声をあげる生徒達。

和美はその反応に満足しながら概要の説明を始めた。

「結局なんもなかったな〜」

「そうですね。でも、それが一番ですよ！」

ここは教員に宛がわれた個室の一室、ネギの部屋である。パトロールを終えた悟空達は一度ネギの部屋へ集合した。

「……………今日のところは敵側も仕掛けてくる気はないようですね……………。一応パトロールは続けていきますが、そんなに気を張らなくてもいいかもしれません」

「そうですね……………うーん、でもやっぱり心配です！僕これからもう一度行ってきますね！……………それにさっきから変な殺気みたいなのを感じるんです……………」

若干身を震わせながら言うネギ。そして刹那もまたそれに頷いた。

「確かに……………言われてみれば異様な気のようなものを感じますね……………害意はないようですが……………」

「ん？そうか？今んとこ知ってるヤツの気しか感じねえぞ？」

刹那の言に悟空は首をかしげた。

悟空の気による索敵能力は並ではない。

違和感があれば気付くはずなのだが、これは悟空内のどのカテゴリにも属さない気である。

「ふむ……………ではこの紙型をお貸ししま「ネギ先生！そろそろ寝ましたか！！あら悟空先生も！」

唐突に襖が開かれた。刹那と明日菜は慌てて襖の死角へ身を潜める。そして、そこに立っていたのはしずな先生だった。終始にこやかにネギと悟空を見やるしずな。悟空は不思議そうにしずなを見る。

「あつ、どうも。今寝る所です」

「そうですね！生徒達の事は私達に任せてくださいな！ネギ先生はまだ10歳ですものみんなと一緒に寝てくださいね！悟空先生もです！新任でまだ慣れない事もあってお疲れでしょうから今日はどうぞ早めにお休みになって！」

「は、はい……………」

「ああ？解ったぞぞ？」

「それでは私はこれで！二人ともちゃんと部屋にいてくださいね〜
〜！！」

一気にまくし立て、嵐のようにしずなはその場を後にした。

「……………凄い勢いでしたね」

「なんか急いでるみたいだけど……………」

「でもそうですね、悟空さんは休んでください！今日は僕が頑張りますから！」

「うーん………そっか、わかった！頼んだぞネギ！」

「はい！」

力強く言う悟空、元気良く返すネギ。

しかし二人はこれから起こる事を何一つ知らない。

(………それにしても、カズミのヤツなんであんなかつこしてんだ？)

一人不思議そうに首をかしげる悟空だった。

その頃3 - Aは………

3班代表選手

雪広あやか、長谷川千雨の場合

「ぐっ、なんで私がこんなこと！……あいつら逃げやがって……！」

「つべこべ言わずに援護してください！ネギ先生の唇は私が死守しなければ！」

運動能力並み、チームワーク悪、千雨にやる気無し、形勢不利。

2班代表選手

古菲、長瀬楓の場合

「……クー、解ってるでござるな？」

「当然アル……狙うは悟空さんただ一人ネ！」

「うむ、あの御仁の隙を突くには並の攻撃では意味を成さないでござる……重要なのは連携でござるよ？」

「分かってるアル！……むふふふ、覚悟するアル悟空さん！」

運動能力超高、チームワーク良、形勢有利、（ただしキスは頭に無し）

1班代表選手

鳴滝風香、鳴滝史伽の場合

「お姉ちゃん！どうするですか!?!」

「そつだなあ、悟空先生なら油断してるかも!」

「ええっ!?!確かかえで姉が、悟空先生には隙と言う隙がないって前嬉しそつに言つてたです!?!」

「む!?!そ、そつか……で、ではエモノはネギ先生に変更!行こう!」

「あ!?!待つてよ!?!」

運動能力良、チームワーク高、標的変更。

5班代表選手

綾瀬夕映、宮崎のどかの場合

「全くウチのアホどもは……せつかくのどかが告白したと言
うですのに……」

「ゆ、ゆえ……いいよ、これはゲームなんだし……」

「いいえ、絶対に勝つてのどかとネギ先生をキスさせるです!?!のど

かはもつと自信を持ってもいいんです」

「ゆえ……うん、がんばる……!!」

運動能力低、チームワーク高、狙うはネギ。

4班代表選手

佐々木まき絵、和泉亜子の場合

「えへへへ、ネギ君とキスカ　んふふふ」

嬉しげにそう呟くまき絵。

しかしその傍らで並んで歩く亜子は顔を真っ赤に染め、落ち着き無い様子でアタフタとしている。

本来こういったイベントには真っ先に参加しそうな裕奈が珍しく身を引いたかと思えばこれである。

「ごごご悟空先生とき、キス……っっっ!!」

「あ、そっか。アコは悟空先生狙いなんだ!お互い頑張ろうね!」

「えええ!?!でもその、一目にして色んなプロセス無視してそないいきなり!?!」

「ええ、でもこれチャンスだよ!アコの思いを今日一気に伝えち

やおつよ！ほら、悟空先生の部屋って確かネギくんの部屋の近くだし、途中までだけど私も協力するから！」

「ふ、ふええ〜！？」

素っ頓狂な声を上げる亜子。

副担任として赴任した当初、悟空のことは授業中寝るだけの変な先生だと思っていた。

しかし今日見た悟空の顔はいつもの温和なそれとはまた違う、力強くてカッコよくて自分の苦悩や心の傷まで包み込んでくれるようで、その顔が今の今まで頭から離れないでいる。

と、口を滑らせたのが運の尽き、裕奈は嬉々として亜子の出場を決め、普段なら味方になってくれるはずのアキラまで出場を薦めてくる始末。

真名はさも面白いといった面持ちで事の成り行きを見てるだけ。ある種味方だらけなのに嬉しくない不思議であった。

「うっ〜〜！！！」

「あははは、それじゃ急ごう！こうしてる間にもネギくんの唇が奪われて無いとに限らないし！」

唸る亜子を他所にまき絵はずんずんと歩を進めた。

「オラどうすりゃいいんだ……このままじゃ……」

悟空は窮地に立たされていた。

並み居る京都の刺客達、生徒達の安全、刹那の悩み、木乃香の護衛、様々な困難に立ち向かう覚悟をした悟空でさえ二の足を踏んでしまう難問中の難問が今目の前に広がっている。

眉間に皺を寄せ、真剣な面持ちで悟空は眼前に広げた物の一つを手を取った。

「……やっぱ兎の形した餅なんて珍しいよなあ……
エヴァも喜びそうだぞ。でも茶々丸は飯食えねえんだよなあ……
……どうすりゃいいんだ？」

お土産である。

前回は亜子達のこともあり有耶無耶になってしまっていたが、悟空はまだエヴァンジェリン達へのお土産を決めていなかった。

部屋には昨日今日と購入したお土産に類するありとあらゆる物がズラリと敷き詰められている。

割合的に食べ物が若干多くを占めているのはご愛嬌。

「エヴァのヤツもあんなに楽しみしてたしな……約束だからな！……どうすっかなあ……」

そしてまた唸る。

部屋に戻ってから悟空はこれを繰り返していた。

結論が出ないまま小一時間、悟空は一つ溜息を吐く。

「しょうがねえ、明日ネギたちにも

ん？」

その時、悟空はすぐ近くに気を感じた。

気の出所は部屋の扉の前。

しかしその気は部屋の前から動こうとせず、なにやらじっと扉を見つめているようだった。

「誰だ？え〜っこの気は……」

悟空は不思議に思いながら扉に近付き、そして一気に扉を開けた。

「え……」

「よお、亜子じゃねえか？」

扉の前に立っていたのは和泉亜子その人だった。
右手はノックしようとしていたであろう体勢のまま、亜子はしばし
呆然と悟空を見上げていた。

第14話 悟空の贈り物 前編（後書き）

前編終了です。

後編もよろしければどうぞ！

第14話 悟空の贈り物 後編(前書き)

後編です。

第14話 悟空の贈り物 後編

小一時間前、亜子はまき絵とはぐれた。

亜子・まき絵ペアはネギと悟空の部屋へ行く途中あやか・千雨ペアに遭遇し、そのまま戦闘へ。

早々にあやかを裏切った千雨が帰り際に新田先生に捕まり、その悲鳴を聞いてから必死になって逃げた結果、見事に亜子はまき絵とはぐれた。

しかしなんの偶然か、なんと亜子は運良く悟空の部屋の前までたどり着いたのである。

道中、双子の忍者を二冊の本で殴る少女を見たような気がするが亜子はそつと視線をはずしただけでその場を後にした。

そして今に至る。

扉の前で唸っている間に当の本人が現れてしまった。

「こんな時間にどうしたんだ？オラになんか用か？」

「えええつとああのそののつつつ！?!?!？」

キスをしに来ました。言えるわけが無い。

顔はテールライト並に真っ赤に染まり、舌は思つようには回らず、亜子は傍目からは気の毒に思えるほど慌てふためいた。

(・・・・・・無理や・・・・・・言えへん・・・・・・怖い・・・・・・!)

思い出すのは人生で初めての告白。それはそれは見事にふられた。あれからだろうか、自分がこんなに消極的になったのは。

恐慌状態から一変して、今度はすっかり消沈する亜子。悟空は首を捻った。

「・・・・・・すみません、なんでもないです・・・・・・」

ここまで来ておいてこれだ。まったく、意気地が無いにも程がある。これから先の人生も自分はこの風生きていくのだろうか？知らず亜子は顔を伏せ、唇を噛んだ。

「？　そうか？新田のおっちゃんが怒っちゃまうからなあ、ばれねえように帰れよ」

「・・・・・・はい、おやすみなさい・・・・・・悟空先生・・・・・・」

か細い声でなんとかそれだけを言い残し、亜子はそのまま背を向けようとした。

「・・・・・・あ、そっだ！アコ！」

「え・・・・・・?」

ぞ〜〜〜！！』

「すごい……亜子頑張ってるよ！」

「嘘！？亜子！！すごいよ！まさかこのまま昇っちゃう！？大人の階段昇っちゃうの！？私だってまだなのにな〜〜！！！」

「明石、落ち着きなあって……ふふふ、それにしても和泉も案外大胆じゃないか　でも悟空さんのあれは筋金入りだ。生半可なアプローチじゃ気付くことも無かったからなあ……さあ、どうする和泉？」

「……龍宮さんも楽しそうだね……え？」

「ん？」

「わりいな、手伝わせちまってよ」

「ううん、気にせんといてください。……でも一杯ありますね……」

亜子は今男の部屋にいる。

こう書くとなにやら色のある話のようだが全く違う。

亜子は何故か悟空のお土産選びを手伝うことになったのだ。目の前に広がる土産物たちに、亜子は感嘆とも呆れともつかない呟きを漏らした。

「ああ、どれがいいんか全然解んなくてよ……美味そうなものは一通り買ったぞ！」

「つづ、あははは！それお土産言いませんよ。買い食いですよん！」

いつも通りの悟空の笑顔を見て、亜子も思わず笑った。

そして改めて二人は考えを巡らせる。

「うーん、やっぱりお土産が食べ物って言うんは味気ないと思います。形に残る物の方が絶対エヴァンジェリンさん喜ぶと思うし」

「そっか……食いモンじゃ駄目か……」

シユンとする悟空。

亜子は苦笑い。

「あははは……そない落ち込んでも……ん？」

そこでふと、亜子は目の端に何かを捉えた。

土産の山に視線を這わせ、目的の物を手に取る。

それは鉄扇くろがねだった。

澄んだ鉄の扇を赤い紐で縛ったそれは、所々に複雑な模様が彫られ、留め金の部分には深い蒼色の宝石が埋め込まれていた。

「ああそれか？鉄で出来た扇子なんて初めて見たかな、珍しくてよ！そう言ったら店のおっちゃん gave くれたんだ」

「いやくれたって……でも凄く綺麗やし……高そう……
……うん！エヴァンジェリンさんのお土産はこれがいいです！」

「おお！これが、分かったぞ！」

まずは一つ、エヴァの土産が決まった。

悟空は嬉しそうに鉄扇を受け取る。

「次は茶々丸さんやね……うっくん……あ、これ」

再度、亜子が見つけたのは簪かんざしだった。

全体に黒く、飾りの部分だけ透き通った山吹色のそれは、小菊を模っており、慎ましやかな佇まいを醸している。

「これ可愛いなあ……それに上品やし、茶々丸さんにぴったりや！悟空さん、これどないしたん？」

「うん？ええつと確か……ああそうだ、土産屋の姉ちゃんによ、土産渡すの男か女か聞いてきて、そんで女だって言ったらこれくれたぞ」

「またくれたて……これすごい高そうやよ!？」

「そうか？」

ちなみにこの二つ、学生などでは到底手が出せないお値段であることを悟空と亜子は知らない。

「でもこれでやっと決まったな！サンキュー、アコ！おかげで助かったぞ！」

悟空はそう言って嬉しげに笑うと、亜子の頭をぼんぼん撫でた。

「あ……えへへ、どういたしまして……」

微かに頬を赤らめてくすぐったそうに眼を細め、亜子は嬉しそうに微笑んだ。

無骨で大きな手の感触は、昼間に感じた時のまま、とても暖かかった。

「あ、そうだ！」

「え？・・・あ」

突然、なにやら閃いた悟空は亜子の頭から手を放し、土産の山へと向かった。不意に消えた暖かい心地よさを少しだけ惜しみながら、亜子はガラガラと山を崩してはひっくり返し、何某かを探す悟空を見る。

亜子は不思議そうに声を漏らした。

「あの・・・悟空さん？」

「え〜っと確かこの辺に・・・あ！あつたあつた！ほれ」

「え、それって・・・」

「さっきのカンザシくれた姉ちゃんがこれも一緒にくれてよ」

悟空の手に収まった小さくて鈍い輝き。それは、鮮やかな赤の漆塗りに金箔で桜の花びらを描いた塗櫛だった。

考えるのも止めて、差し出された赤を亜子はぼんやりと眺めていた。

「これア」にやるぞ！」

「ふえ？・・・で、でも！こんな高価な物もらえへん！！」

「ん？でもオラ金払ってねえぞ」

「いやそうやけども……」

土産を選んだだけ、それもエヴァンジェリン達へ贈る物をだ。

それなのに自分がこんなものを貰ってしまうのは、亜子には、何故かとても卑怯に思えた。何故そんな風に思ったのかは解らない。でも、どうしてか躊躇してしまう。

しかし、悟空にそんな微妙な乙女心を配慮出来るはずも無い。悟空は亜子の手を取ると、塗櫛を亜子の掌の上に乗せた。

「いいからいいから！こいつはオラからの礼だ！……ん？それとも、これじゃ気にいらねえか？」

「そんなことあらへん！！」

そんな懸念を口にした途端、亜子が間髪いれずに大声を上げた。思わぬ亜子の剣幕に悟空は意図せずたじろぐ。

亜子は櫛を胸に抱き、悟空をまっすぐに見つめて言った。

「ありがとう、悟空さん……ウチ、一生大事にする……」

「！！」

「……そっか」

内心は乱れに乱れて、亜子は驚きとも喜びともつかぬ感情に混乱していた。それでも、ただただ口にした決意、願いは本場で、今胸に抱くものは自分にとって掛け替えの無い大切なものになった。それだけははつきりと解るのだ。

万感の思いが籠った言葉。心を読まなくとも悟空には伝わった。静かに亜子を見て、悟空は嬉しそうに笑った。

そして悟空はそのまま亜子を抱き寄せた。

「へ………つつつつ!?!?!?!?!?」
悟空
さん!?なん
「！」

焦りまくる亜子を無視して悟空は亜子ごと右へ体を反らす。

次の瞬間には悟空と亜子のすぐ横を小柄な影が高速で通り過ぎる。

「あばばば!?!?!?!?!」

背後から来たその影は避けられたことに驚愕してか、着地に失敗。部屋の奥へと転がっていった。

しかしそれでもまだ悟空は止まらない。

亜子を抱えた悟空はその場からさらに床を蹴り、入り口側へ飛ぶ。

トンッ トンッ トンッ

風切音と共に小気味よい音を立てて、先程まで悟空達のいた畳には三本の苦無が深々と刺さっていた。冷えた夜風が入り込む窓を軽く睨む。

「…………おめえら一体なにしてた…………？」

「何、ただのゲームでござ…………おりよ？お主は…………」

「え！？楓さん!？」

そう言つて窓からもう一人の影、楓が姿を現した。手には枕でなく苦無を持って。

楓は亜子を見ると何事もなかったかのように苦無を懐に仕舞った。

「いや〜おじやましたでござるなあ、これは失敬失敬 では拙者はこれで……………」

「いやいやいやいや!?楓さん隠せとらんよ!?!ばつちり見えたよ!?!」

楓の白々しい行動にも律儀にツツコム亜子。不意に、悟空は亜子から身を離れた。

「アコ、ちょっと離れてる……」

「え……悟空さん？」

弛緩した空気が重みを増す。夜風の温度が急激に下がったようだ。その癖、首筋をじっとりと伝う汗。

楓と古菲、二人は無意識に身構えていた。しばしの沈黙。

「クー！」

「応！！」

声は悟空のすぐ懐から発せられた。

八極拳 活歩

部屋の端から端までの距離を一瞬にしてゼロとする。そして勢いはそのままに握り込んだ拳をまっすぐに、崩拳を突き出す。

同時に楓は二人の分身と共に悟空を襲う。気で強化した掌底で三方から踏み込んだ。

「四つ身分身 臙十字・菲！！」

「……」

そして悟空が動いた。

まず背後の分身楓を振り向くことなく蹴り飛ばす。

その膝を折り古菲の拳を、右腕で楓の掌を防ぎ、左手に固めた気で分身楓の腹を打ち抜いた。

「「!?」」

驚愕した二人は瞬時に距離を取らんと後退。

しかし悟空はかまわず古菲と楓の腕を掴むと、窓の外へと放り投げた。

「「のおおおおおお!?!?!?!」」

体勢を立て直す暇もなく、古菲と楓は旅館の窓から投げ出され

グイッ!

なかつた。

「ぐえっ!?!」

「つぶぐ!?!」

悟空は空中の二人の襟首を掴んで、そのまま部屋へ引つ張り込んだのだ。

襟首を掴まれて床に下ろされた二人は ストンツ と畳に正座。文字通り一瞬の出来事を亜子が視認できる筈もなく、古菲は混乱状態、楓は一連の悟空の動きを呆然と反芻していた。そして、悟空はそんな二人の前で腕を組んで立つ。

「カエデにクー」

「・・・・・・・・あ?あい?」

「・・・・・・・・あえ?何アルか?」

不思議そうに悟空を見上げ二人。
拳を上げる悟空。

ゴンツ! ゴンツ!

悟空は二人をグーで殴った。

「ふもつ!?!」

「もきゅ!? な、何するアルか」

「おめえらが危ねえことすつからだ。亜子に当たってたたら大怪我じやすまねえんだぞ?」

いつになく真剣な面持ちの悟空は、ジッと二人を見つめた。

「うぐ……」

「むむむ……」

途端に二人は押し黙る。

知らなかったとは言え、亜子を危険な目にあわせたのだ。もし悟空が一人でこの部屋に居たのなら戸惑いはすれ、嬉々として勝負を受けたらう。しかし今回は亜子が一緒に居た。亜子は勿論ながら、戦闘など出来るはずも無い。

「悪いことしちゃったら、まずしなきゃなんねえ事があんだろ?」

「うむ……・……・亜子殿、すまぬでござる。拙者の不徳の致すところ……」

「ごめんなさいネ!! 許してほしいアルヨ!」

「えええ!? あのつえつと……」

正座して頭を下げる、所謂土下座を人生で初めて受け、亜子は大層戸惑いを見せた。
しかし、誠心誠意謝罪する二人を叱咤する心算など亜子には最初からなかった。

「えっと……二人とも、ウチは大丈夫やから、ね？そら危ないことはして欲しないけど、悟空さんが怒ってくれたから……だから気にせんといて！」

「亜子殿……かたじけないでござるー！」

「非常感謝！！アコ〜！！」

「わぶ！？」

古菲は亜子に抱きついて満面の笑顔を向ける。

悟空もそれを見て笑顔で一つ頷くとその場にドカツと胡座を掻いた。

「ふい〜〜、動いたら腹減っちゃった！おめえ達も色々あつからよ、なんか食おうぜ！」

「おお！マジアルか！？おごりアルか！？やたー！！！」

「ふむ、ならば拙者も一つ……む！？これは！かの純米大吟醸！」

「おお、食べ食べ！ほれ、アコもだぞ」

「ふつつ、はい！いただきます！」

なんの目的でここへ来たかなど亜子はとうの昔に忘れていた。騒がしくも健啖家な三人はお土産を手当たり次第に空けていく。そこには笑顔が絶えなくて。亜子はただ楽しげに微笑んだ。大切な贈り物を胸に抱きながら。

第14話 悟空の贈り物 後編（後書き）

更新が遅れました・・・すみません！

なかなか書く時間が取れなくて・・・言い訳です、すみません！

しかし読み返すと亜子さんばかりで・・・バランスって難しい。

もう少しキャラクター達の登場バランスを考えて行きたいと思いません。

それでは、読んでいただきありがとうございました！

第15話 分岐点

「へえ、これが豪華商品か」

「本屋の絵が描いてある」

「ねえ！見して見して！」

「……あーん！ええなあ、のどか……触らして、貸して」

「はい」

「やっぱりネギ君とキスするとカード貰えるや」

「このかさん！まったく、グッズには目がないんですから……」

「そやった……このかがもう告白してんもんね……
・！　ってそうや！なら悟空さんとキスすれば！！」

「このかさん……」

修学旅行三日目、朝のロビーは賑わっていた。

話題は言わずもがな昨夜のゲーム大会について。優勝者は本屋こと宮崎のどかだった。パトロールから帰ってきたネギと、夕映の足払いによりキスに成功した彼女の手には優勝商品であるカードが握られている。

「うんうん、大会の優勝商品に相応しいねこれは。でも、亜子は残念だったねえ……キス、できなかつたんでしょ？」

「ああ、惜しかったよね！皆が混戦してる中で知らないうちにどんだん先に行っちゃうし……本屋ちゃんどどつちに賭けるか迷ったなあ……」

「……桜子……私はあんたが恐ろしい……」

芳しい結果を得ることは出来なかったのだらうと裕奈は声の調子を落として亜子の肩に手を置いた。

しかし、亜子はなにやらギクリと身を震わせると、取り繕うように幾分ぎこちない笑顔を見せた。

「あ、あははは！そ、そやね！残念やったわ〜！ウチ何にも貰えへんかったよホンマに！」

「……？ どうしたの亜子？……あんなんか隠してない？……」

「えええっ！？べべべ別に！？ウチ悟空さんからなんも貰ってへんよ……っは！」

キラリと光る無数の眼。今度こそ亜子の顔は引き攣った。耳ざとく亜子を振り返り目を輝かせる木乃香。

「悟空さんからプレゼントもろたん！？それはそれでええなあゝ・・・
・・・亜子は何もろたん！？」

「あの悟空さんがプレゼントって・・・すっごい気になるんだ
けど」

「ナニナニ！？悟空さんなんかくれるの！？ボクももらおう！」

「お、お姉ちゃん！」

木乃香に留まらず、色恋、出歯亀、ゴシップ大好き3-Aの元気な
子供達は皆一様に亜子を取り囲んでいた。

ああそうそう、あたかもつい今しがた思い出したと言わんばかりに、
穏やかな笑みを浮かべて、真名がそつと口を開いた。

「和泉、今朝はいつものブラシじゃなく和櫛を使っていたね？いつ
買ったんだい、あんな高価そうな物？・・・ふふふ」

優しさに溢れ、年齢不相応に美しい、悪魔の微笑みを亜子は見た。
騒騒、波のように伝播するざわめき。
耳を塞ぎたくなった。

「ええ！？それホント！？」

「悟空先生が櫛……うわっ、すごいミスマツチ！」

「でも櫛っていいよねえ！それ絶対女の子にプレゼントする物じゃん！」

「ふふふ、ねえ亜子さん。髪梳きってね、昔の愛情表現なのよ？知ってた？」

「あう！？」

きゃぴきゃぴと楽しげに、そしてひどく勝手なことを言い合うクラスメイト達を亜子は半ば諦観していた。このクラスに掛かればどんな秘め事であろうと一発で雲を突き抜けてフライアウェイするのだ。それが分かっていたから、そして想い人との秘密の共有に少女らしい嬉しさを抱いていたからこそ、友人達にさえ黙っていたのに。

「そっだ亜子、私実は夕べ寝ちゃったからあの後亜子がどうしたのかわからないんだ……そこんどこ、どうなの？」

「部屋には帰ってないよ。所謂、朝帰りってやつだね？和泉、一体何処にいたんだい？心配したんだよ」

「龍宮さ………ん……！」

「……話を聞かせる………！！……」

「まったくもー……どうすんのよネギ！こんなにいっぱいカード作っちゃって！」

「ええ！？僕ですか！？」

賑やかな一団から少し離れ、休憩所には数人の人影。

「まあまあ、姐さん」

「そーだよアスナ。儲かったってことでここは一つ」

「朝倉とエロガモは黙ってて！！」

「はい………」

朝倉とカモによって開催されたこのキッズ争奪大会、真の目的はクラスメイト達から得られる仮契約カードだった。紙型ネギ達の暴走

によるスカカード5枚と、のどかとの成立カード1枚が現在明日菜の手にはある。

明日菜は朝倉・カモの両者に一通りの説教を終えると、苦笑いする刹那と欠伸を噛み殺す悟空に向き直った。

「……………そういえば、悟空さんのカードはないのね？」

「ん？おお、オラそのキスっちゅうやつはやらなかったかな。でもそっか、だからアコ達あんな時間に来たのな」

「……………ほう……………あ」

説明されるまで『キス』の意味さえおぼろげにしか覚えていなかった悟空である。

そして悟空の隣でなにやら息を吐く刹那。自身の行動に気付くと途端に顔は赤く染まり、繕うように刹那は咳払いを一つ。

「と、とにかく！今は今日の予定についてですね。ネギ先生は親書を受け渡しに本山へ、私はお嬢様の護衛をそのまま続行すると……
・神楽坂さんはネギ先生に付いて行かれるんですね。それで、
悟空さんは……………？」

「オラか？そうだなあ……………」

悟空は腕を組んで頭を捻った。

木乃香を守るのなら近くに居た方がいい。しかし、近右衛門からは

ネギの親書受け渡しの手助けも頼まれている。それならばネギに付いて行く方がいいのだろうか。だが刹那一人だけに護衛を任せるのは負担が掛かるのではあるまいか？
珍しく悟空は頭を抱えた。

「う~~~~ん……………」

「あ……………悟空さん」

「ん？」

不意に、ネギの声によって思索を断たれた。

多少強張った口調。それでいて聞き漏らせない、耳朵を打つ声音。

「……………なんだネギ？」

まっすぐな視線を悟空はネギへ向けた。ネギもまたその視線を正面から受け止めて、はつきりと口を開く。

「僕、アスナさんと行きます。だから……………悟空さんは、このかさんのことを守ってください」

決然とそう告げるネギに明日菜は戸惑ったように声を上げた。

「ちよちよつとネギ、いいの？いつもなら一緒に来ましようよ〜って泣き付くくせに……それにあいつらってその親書も狙ってるんでしょ？そんな簡単に決めちゃっても……」

「……う〜、ひどいですアスナさん……そ、そりゃ僕も悟空さんとは一緒に行きたいですよ！……でも、それじゃ駄目なんです。それだけじゃ……」

「駄目ってあんたね「そつか、分かった！長つちゆう人によろしく言っといてくれ！」悟空さんまで!？」

躊躇する明日菜を他所に悟空は膝を一つ叩くと早々に結論を出した。そして、ネギの頭に手を乗せてグシグシと少し乱暴に撫でる。ネギが首をすくめた。

「あう……」

「……頑張れよネギ。おめえなら大丈夫だ!」

何時も通りの優しさを宿す瞳。しかし、それだけではない。何時もよりほんの少しだけ突き放した言葉には、大きな信頼が籠められているのだ。

それはネギが欲しかったもの。今までずっと、得られなかった温かさ。

「は、はい！」

明日菜は溜息を吐く。しかしその口元は笑みを浮かべている。刹那はそんな二人の姿を微笑ましげに見つめた。

嵐山嵯峨野 ゲームセンターにて

(……………なあ、いいんか？あいつら付いて来ちまって)

(なんでアスナさん達以外の人がいるんですかあ……………!?)

(ごめん！パルに見つかっちゃった！)

「お、プリクラあるよ！皆行こ！」

ちよつといい話で物事は終わらない。

ネギ達の作戦は頭から失敗に終わった。本来は他の生徒達に気付かれぬように動くはずだった今回、前方には嬉々として歩を進める早乙女ハルナ、淡々と謎ジューズにストローを刺す綾瀬夕映、本とにらめっこを繰り返す宮崎のどかの姿がある。

「まあ、ネギとアスナは隙見て抜けだしやいだろ。そんなに焦ることねえって」

「そ、そうよね！ほら、悟空さんもこう言ってる事だし早く行くわよ！」

「は、はあ………」

「せつちゃん！一緒にプリクラ撮ろ！あ、ほら悟空さんも！」

木乃香はそう言うのと焦る刹那とキョトンな悟空の手を取り、嬉々とせずんずん進む。

「い、いえ！？私は………」

「おお、いいぞ！………んで、ぶりくらってなんだ？」

そんなこんなで、ネギ達は一時ゲームに興じた。ゲーム機や筐体、遊具にアスレチックなど多種多様な『遊び』を集めた施設は、個々の筐体達が発するBGMや効果音によって雑多な音に満ち満ちていた。

ネギとハルナ達はカードゲームの筐体へ、木乃香・刹那・悟空らは近場のゲームを、それぞれがゲームの大音量に負けぬほどの元気な声を上げて駆けて行く。

「ネギ君ネギ君！このゲームなんてどう？魔法使いのカードゲームだよ！」

「へえ、魔法使いですか……僕やってみようかな」

「じゃあ、お貸ししますです」

「悟空さん、あっちのパンチングマシンやて！やるやる！」

「おし、これ殴りゃいいんだな？」

「う、悟空さん！？本気出しちゃ駄目ですからね！？」

しばし遊技を楽しむネギ達。

ネギはハルナの指南を受けつつ、カードと画面とのにらめっこを繰り返した。すると

「なあ、隣ええか？」

「え？」

ネギの背後から、学ラン姿にニット帽をかぶった少年が隣の椅子に腰掛けてきた。手にはカード。

思わぬ挑戦にも、途端に湧き立つハルナ達。

「おお、勝負だよ先生！地元の子になんか負けるなー！」

「ネギ先生、ガンバレー！」

「よ、よし！」

声援に応えようと悪戦苦闘するネギ。

が数分後、ネギの操る魔法使いキャラは敗北。画面上に転がる自機じぶんにネギは苦笑いした。

「あー、負けちゃいました……」

「いやいや、初めてにしてはよくやったよ？」

残念そうに呟くネギにハルナは笑いかけた。隣でカードを集め終えた少年は椅子から立ち上がると一つ不敵に笑みを浮かべた。

「なかなかやったは。ほなな、ネギ・スプリングフィールド君」

「え！どうして僕の名前を！？」

「自分で入れたやろ？ゲーム始める前に」

そう言って画面を指差すと、少年はさつさと背を向けて駆けて行く。しかし、少年のすぐ背後にはネギ達に近づく人影、悟空がいた。

「おっと」

「うわっ！」

咄嗟に避けることが出来なかった両者はそのままぶつかり、体格的な差もあり少年の方が転んでしまった。悟空は身を屈めて、少年を起こそうと手を伸ばした。

「わりいな、大丈夫か？」

申し訳なさそうに首を傾げる悟空に少年は笑いながら、その手を取った。

「あ、ああ平気平気！大丈夫やさかい。こつちこそ
・・・」

「？」

瞬間、少年は金縛りにでもあつた様にピタリと動きを止めた。視線は握ったままの悟空の手に注がれ一切逸らされることはない。少年の一種異様な反応を見て、刹那は不思議そつに首を傾げた。

「あの、どうかしましたか？体の具合でも？」

「！ いやなんでもあらへん！ほなさいなら！」

刹那の言で漸く我に返った少年はそのまま急いで駆け去って行った。少年の行動に皆疑問符を浮かべるも、ハルナ達は気を取り直してゲームへ向かう。

悟空はしばらくの間、少年が駆けて行った方向を見据えた。微かな笑みが浮かぶのを自覚する。

「・・・あいつなら、ネギも・・・」

眩きはあまりに小さく、刹那は聞き取ることが出来なかった。

「え？なんですか悟空さん？」

「ん？いや、なんでもねえよ」

「？」

口笛を吹きながらそっぽを向く悟空は、それはそれは怪しかった。後に刹那は語る。

人通りの無い路地裏。

そこには奇妙な組み合わせの人影が四つあった。

「名字、スプリングフィールドやったわ」

「ふんっ、やはりサウザントマスターの息子やったか……相

手にとって不足はないなあ。一昨日の力はキッチリ返させてもら
うえ……そして、孫悟空あんたにもな……!!」

着物姿の女、天ヶ崎千草はその形のよい唇を歪めながら呟いた。先
の作戦において戦闘とさえ呼べないあの屈辱的な結果を千草は思い
出す。圧倒的な力と恐怖を刻まれ、今まで自分が必死に練ってきた
策など嘲笑うかのようにねじ伏せられたのだ。

「タダでは済ませへん!……」

拳を握っていきり立つ千草。しかしその傍らで少年、犬上小太郎は
いつになく静かに、じっと自身の手を見つめていた。

「? どないしたんやコタロー?」

「……とんでもないわ、あの兄さん……へへっ!
えっとなんや?孫悟空やったっけ!?なあ、千草の姉ちゃん!そ
いつの相手俺にやらせてんか!」

「はあ?なんやの突然……」

「俺あんな初めてや……手握ってやっと分かったで……
ぱっと思ちよつと強そうなだけやけどあれはちゃう!あんな氷
山の一角とかいうレベルやないで!」

そんな小太郎の言に妖しく笑うは月詠。

「あゝ、やっぱりコタローはんもわかるんやね？……ごくうはんもイケズやわあ、ずうっと力隠しはってるみたいやし……はよ仕合たいわゝ！ああ、でもせんぱいとも……ふふふ」

目を輝かせ興奮した様子で語る二人は、傍から見るとかなりアレであつた（特に月詠）。千草は呆れて溜息を吐く。そして、三人の雰囲気を用意にも介さず淡々とした調子でフェイト・アーウエルンクスは口を開いた。

「いや、君には親書の方へ当たって貰う。近衛木乃香の奪取には僕らで向かおう」

「な！？なんでや！？」

「君の戦闘スタイルでは絶対に近接、それも肉弾戦がメインになる。相性を考えると、魔法使いであるネギ・スプリングフィールドに君をぶつけるのが無難だろう……。それに孫悟空の力を量りたいというのもある」

「あ？それ一体どういう？……」

抗議の言葉も忘れて疑問符を浮かべる小太郎には答えず、フェイトは静かに、凍てついた視線をゲームセンターへ投げるのだ。

第15話 分岐点(後書き)

全然話が進みませんでした・・・すみません・・・。

次話からは戦闘中心にしたい、とは思ってます・・・頑張り
ます！

それでは読んでいただきありがとうございました！

第16話 いざ、シネマ村へ！（前書き）

更新が遅れてしまいました……すみません！

第16話 いざ、シネマ村へ！

京都の街道にて、店を覗くでもなく観光を楽しむでもない奇妙な一団がいる。

「ハア、ハア、ハア、なんでついきなりマラソン大会に!？」

「ちよちよつと！桜咲さんも悟空先生も何かあったの!？借金取り!？それともまさかの三人で駆け落ちとか!？」

「・・・・・・・・」

「コノカ、大丈夫か？」

「う、うんっだいじょうぶ・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・でもどないしたん二人とも？」

悟空達は走っていた。

ネギ達と無事ゲームセンターで別れる事に成功した悟空達は、途中

で抜け出したネギ達や居なくなってしまったのどかについて疑問をぶつけてくるハルナと夕映をのりくらりとかわしながら、しばしその場に留まっていた。

刹那は級友と無邪気に戯れる木乃香を、距離を置いて嬉しげに見つめていた。木乃香にはあくまで一人の少女として友達を作り、笑顔で学園生活を平穩に暮らして欲しい。それは刹那の何よりの願いだっただ。今、目の前には楽しげな木乃香の笑顔。

（良い笑顔だ……このかお嬢様にはこのまま友人に囲まれて何も知らず平和に生きていたくのが一番だ……今
回、私は近付きすぎた……麻帆良に帰ったら、私はまた影からお嬢様を見守って「セツナ！これ美味えぞ！」うひゃああ！？」

唐突な背後からの声に刹那は30cm程飛び上がった。
振り返るとそこには、両手にお菓子の詰め合わせを携えた悟空が立っている。早鐘を打つ胸を押さえて刹那は軽いデジャヴを感じていた。

「？ どうしたんだおめえ？らしくねえぞ、ぼおっとしちまって」

「す、すみません少し考え事を……って言うか、どうしたんですかそのお菓子？」

「へへっ、さつきゅーほーきゃっちゃんっちゅうやつで取ったぞ！でもボタン押して機械動かすだけでこんなに貰えるなんて、なんか

わりい気がしてよ。つつうわけで刹那も食べえ！」

「あ、ありがとうございます……って、そんな簡単に取れるものでしたっけ？」

UFOキャッチャーの難易度など知るはずのない刹那も軽い疑問を抱きつつ、悟空から棒状の巨大なお菓子袋を受け取る。

二人は手近なベンチを見つけるとそこに並んで腰を下ろした。相変わらずゲームを楽しんでいる木乃香達を見ながら、お菓子を美味しく口に頬張る悟空。子供のようなその笑顔を見て刹那は微笑んだ。そして刹那もまたお菓子を食べる。スナック菓子独特の噛み応えと濃い味付けは、刹那には少し新鮮だった。

でも、違う。

いつもなら感じなかった味だ。剣の修練の後や警備の仕事の後にお腹を空かせて食べるときとは違う。暖かくて安心する味。

「……………おいしい……………」

「だろ？やっぱ誰かと一緒に食う方がうめえや」

「あ……………」

周りの喧騒が少し遠のいたように刹那は感じた。刹那は悟空の言葉に内心で納得する。

なるほどそうか、隣に座るこの人がいるから自分は今こんなにも安らいでいるのだろうか。

「……………悟空さん」

「ん？なんだ？」

だからだろうか、僅かでも夢見てしまっ。

「……………こんなふうにも、一緒にお菓子、食べたいです……………」

「うん？ああ、勿論いいぞ！でもそんな時は、ネギもアスナもコノカも一緒にだぞ！」

「……………ふふ……………ええ、そうですね……………」

刹那は淡く悟空に微笑んだ。

悟空は刹那の笑顔を見て、不思議そうに首をかしげる。

「セツナ？おめえ……………！……………セツナ行くぞ！」

「え……………！？はい！」

瞬間、二人は自分達に向けられた殺気に気付いた。今尚多くの客が出入りしているゲームセンター内においてあまりに危険な気。二人は駆け出した。刹那はまず真つ先に木乃香に近寄りその手を取る。木乃香はあまりに突然だったために驚いて刹那を見た。

「！　せつちゃん！？それに悟空さんも!？」

「申し訳ありませんお嬢様！しばしご足労願います！」

「……………結構多いぞ……………氣い付けろセツナ」

シネマ村前

駐車場まで走り続けた悟空達は一先ず息を吐く。しかし追手は相変わらず、付かず離れずの距離を保ちながらぴったりと悟空達を追い続けている。そして時間を追うごとにその数は増え、すでにかかなりの数を悟空自身も捉えていた。

「あれ!?!ここってシネマ村じゃん!桜咲さんシネマ村に来たかったんだ。それならそうと……………」

(……………！ 悟空さん、二人と距離を取ります！危険に巻き込まれかけにはいきません。シネマ村へ！)

(分かった！「コノカ、セツナ掴まれ！わりいハルナ、ユエ！オラ達三人だけにしてくれ！」

「え？なんや

「はい！……………え？

言うと同時に悟空は二人を小脇に抱え、地を蹴る。外壁を軽々と越えた悟空はそのままハルナ達からは見えなくなつた。

「……………なんですか、あのジャンプ力……………てか金払えです」

「むむむ……………つは！？まさか生徒と教師で禁断の三角関係！？いや！それとも一夫多妻のハーレム！？いやいやそれとも……………」

「パル」

シネマ村、路地裏

刹那は壁越しに周囲を見渡す。行楽シーズンと言っこともあり、客の入りは結構な数に達していた。

「……これだけ人がいれば流石に見境なく襲ってくることはないでしょう……。ここで時間を稼ぎ、ネギ先生達の帰りを待つほうがいい……。敵の攻撃で式神との連絡も切れてしまいましたし……。」

刹那は再度、式との連絡を試みる。しかし完全に繋がりは断たれているらしく、目を瞑りながら刹那は眉をひそめた。傍らでは悟空もまた自身の額に指を押し当て、ネギ達の気を探っている。

「……ああ、ネギも大分やられちゃったみたいだ……。でも、よくやったなネギ！」

「！ 分かるんですか!？」

「おお、まあネギは魔力つちゅうのを使うかなあ。気はそんなにでかくねえから、ちよつとしか分かんねえんだけどよ」

「でも無事なんですね!……よかった……。」

悟空の言葉に刹那は安堵した。しかしすぐさま表情を引き締める。

（まだまだ安心は出来ない・・・悟空さんがいるとはいえ、敵もそう易々と諦めるはずが「せつちゃん！悟空さん！」はい？

「なんだコノカ？」

額に指を押し当てたまま目を瞑っていた悟空と思案にふけっていた刹那は同時に木乃香の方へ振り返った。

「お、お嬢様！？その格好は！？」

「お〜」

「じゃ〜ん その更衣室で借りてん！えへっどっどっ？せつちゃん、悟空さん？」

そこには髪を結び上げ、淡い紅色に菊や鞠の刺繍が施された着物を着た木乃香が、和傘片手に微笑んでいた。木乃香は両手を広げ、その場をくるりと一回転して刹那や悟空に問いかけるようにして視線を送る。

「いや、そのっ・・・ととてもお綺麗です・・・！」

「キヤー やったー！」

「ああ、すげえなあ！なんかすげえぞコノカ！」

「つぷ、あははは！ありがとうな悟空さんも。むふふ ウチはなんかすごいんやね！」

二人の反応に上機嫌で木乃香は笑った。刹那は頬を染めて木乃香にしばし見とれ、悟空は悟空で木乃香の雰囲気の変わり様にいつまでも驚いていた。すると木乃香はそんな二人の手を取り、ずんずんと引っ張っていく。行き先は言わずもがな更衣室。

「ホレホレ二人も着替えよ ウチが選らんだげる〜！」

「え！？いえお嬢様！？私はこういのは ……！！！」

「い？オラモか？」

二人は木乃香に手を引かれずると更衣室へ消えていった。

数分後

「あ、あのそのっ……………わ、私にはこんな……………似合わないですよ……………」

「何言ってるん！せっちゃん似おうとるで！すごい綺麗やよー！」

サイドテールを解いた髪を桜の花の髪飾りで留め、白を基調とした生地これまた桜の花びらを淡く散らせた着物、濃紺の帯、長大な竹刀袋。羞恥に身をよじるも、刹那の佇まいはその場の誰よりも上品であった。

木乃香の言葉で刹那の頬に紅が注す。

「ううっ……や、やっぱり駄目です！！こんな姿悟空さんに見せられ！？」「オラがどうかしたか？」つつつつ！?!?」

二度あることは三度ある。古人の言葉は馬鹿にはならない、刹那はふとそんなことを思った。

シヤランッ

錫杖の遊環を涼やかに鳴らし、黒い袈裟をかけ、雨笠を被った遊行僧。悟空は笠を押し上げて不思議そうに木乃香の背後に隠れる刹那を見た。

「わあ、うん、やっぱり悟空さんはお侍さんって感じやないねえ！力持ちなお坊さんや」

「坊さんってクリリンみてえなやつか？まあ、はかまっちゅうのよりこっちのが動きやすいかな！……んで、セツナはなんで隠れてんだ？」

「いえっそのあのええっと!!」

「まあ、せつちゃん、悟空さんにもちゃんと見てもらわな?ほら」

「あっ!?!お嬢様!?!」

必死になって自身の背中に身を隠そうとする刹那を木乃香はヒョイと体をずらして押し出した。支えを失った刹那は二、三步よろけてようやく踏みとどまる。そして、見上げた先には不思議そうに刹那を見下げる悟空。

木乃香は刹那の肩に手を置いて悟空に尋ねた。

「どっ?悟空さん」

「あっ!.....っ」

「セツナおめえ.....」

刹那は俯きながら恐々と悟空の様子を窺っていた。悟空はじいっと刹那を見つめ

「おめえ.....桜餅みてえで美味そうだぞ!」

「は?.....」

「え？・・・」

静寂が降りた。二人はキョトンとして悟空を見る。

悟空はうんうんと自身の言葉に頷いた。本人に他意はなく、あくまで真面目な表情の悟空。悟空にとって自身に出来得る最大の贅辞は、やっぱり食べ物関連だった。

二人は顔を見合わす。そして悟空のあまりにもあんまりな褒め言葉と真剣な表情に堪えきれず、吹き出した。

「っぶ、ふふふっ・・・！」

「アハハハハ！ふふふふ　悟空さんはやっぱり悟空さんなんやね
！」

「うん??」

お腹を抱えて笑い続ける二人を悟空は不思議そうに眺める。しかし、しばらくすると悟空もまた嬉しげに微笑んだ。

「アハハハッ！はあはあ・・・？　悟空さん？どうかしたんですか？」

「・・・うん、やっぱりセツナはそういつぶつに笑ってんのがいいと思っぞー！」

「え・・・」

「……………悟空さん」

悟空の言葉に刹那は戸惑い、木乃香は柔らかに微笑んだ。そして木乃香は刹那の肩にそっと手を乗せる。

「……………せっちゃん、ずうつとなんか悩んでもうてて……………全然笑ろてくれへんかったから……………」

「お嬢様……………」

「だから、よかった！」

喜びを一杯に湛えた笑顔で木乃香は笑った。

その時

一両の馬車が猛烈な蹄の音と車輪を轟かせ、木乃香達に迫ってきた。

「ひゃあ!?!」

「お嬢様!」

「……………あいつ、あん時の……………」

馬車は悟空達の眼前で止まった。そして、馬車から降り立つ者が一人。

扇子を口元に当て、洋装に身を包んだ少女

「どうも〜神鳴流です〜……………じゃなかったです〜。東の洋館のお金持ちな貴婦人でございます」

「お、お前は!?!」

神鳴流剣士月詠はそう言って微笑んだ。

第16話 いざ、シネマ村へ！（後書き）

次話でやっところさ戦闘に入ります・・・戦闘主体の話のはずなのに・・・。

今更なのですが、作者の更新頻度はご覧の通り一定しておりません。ややこしくて申し訳ございません！

次はもう少し早く更新できると思われます。

ちなみに、刹那の着物のイメージなのですが直死の魔眼なあの人で・・・はい、完璧に私の嗜好です。

それでは読んでいただきありがとうございました！

5月15日

本当に申し訳ございません。一身上の都合で更新が遅れてしまっか
もしれません・・・。

第17話 守るモノ（前書き）

どうも足洗ですこんにちは。

まずは……………更新遅くなりました、すみません！

第17話 守るモノ

シネマ村正門横「日本橋」

橋の上に佇む人影は二つ。

一つは小太刀と小刀を構え、嬉しそうに微笑む神鳴流剣士・月詠。

一つは錫杖を下段に構え、眼前の月詠を見据える遊行僧・孫悟空（仮）

両者は言葉を交わすこと無く、静かに相手の動きを見ていた。橋の外では刹那と木乃香が心配げに悟空を見つめる。そして

「がんばれ〜！悟空せんせー！借金取りになんか負けるなー！」

「ふっふっふ、いいねいいね！町娘を権力者の魔の手から守るさすらいの修行僧！画になってるよ！」

「あらあら悟空先生つたら、両手に華ね」

「お二人の愛はしかと理解いたしましたわ！この雪広あやか、全力でお三方の恋を応援しますわよ！」

「はぁ……何をやってんだコイツら……」

「ホントに皆さん何してるんですかぁぁぁああ！?!?!?!」

ガヤガヤと賑やかな外野に向けて刹那の叫びが木霊する。

事の発端は、ここ日本橋を舞台に月詠が悟空達へ木乃香を賭けた決闘を申し込んできたところから始まった。

すぐにも前に出ようとする刹那を制して決闘を受けたのは悟空だった。月詠は微笑み、刹那は焦る。

「うふふふ、ごくうはんが仕合うてくれはるんやね？」

「ああ、オラが相手だ。セツナはコノカのこと頼むぞ」

「しかし……」

未だ迷う刹那を他所に月詠はゆっくりと口角を上げた。先程まで浮かべていた微笑が、隠すことなく狂喜で塗り潰されていく。

「ほな、日本橋でお待ちしとりますよ……ごうは
ん」

「っ！」

一瞬だけ視線が交差する。木乃香はビクリと身を震わせた。無差別に無遠慮に撒き散らされた明確な殺意は、木乃香に恐怖を与えるには十分だった。知らず木乃香は刹那の着物を握り締める。

「？ コノカ……」

「あ、別に助けを呼んでもかまいまへんえ〜〜！」

月詠はそのまま表情を元の微笑に塗り替えると、馬車へと乗り込み猛烈な勢いで走り去っていった。

月詠が去って行った道を睨みながら刹那は顎に手を添えて考え込むように俯いた。

「……30分後に日本橋……でも、悟空さんは徒手空拳が主体でしょう？やはり相性を考えれば私が……」

「ん？ おお、それなら大丈夫だ。オラにはこいつがあるぞ」

悟空はそう言って錫杖を振るった。右手で回し、突き、左手に持ち

替えて横に一閃。具合を確かめる。鋭い風切音を鳴らしながら振られる錫杖の一撃一撃には、確実に相手を打倒するだけの威力が秘められていた。

『型』をあらかた試し終え、遊環をまた一つ鳴らした悟空は動きを止めた。明らかに使い慣れたその様子に刹那は感嘆の息を漏らす。

「ご、悟空さん！棒術の心得があられたんですか!？」

「ああ、昔オラのじっちゃん教えてくれてよ！でもこうして使うのは久しぶりだぞ」

「その動きでブランクがあると……ふふっ本当にあなたは……」

刹那は思わず呆れて溜息を漏らし、同時に口には笑みが浮かぶ。常に自分達の予想の先に行く悟空はこれ以上ないくらい頼もしかった。とその時、突然悟空は考え込むように腕を組んだ。刹那はその行動を怪訝そうに見る。

「悟空さん？どうされたんです？」

「ん？いや、やっぱりあいつらも付いて来ちまうだろうから、どうすっかなあ〜って思っただよ」

「へ？あいつらって……うん？」

どどどどどどどどどどど！！！

近付いてくる足音に刹那は背後へ振り返った。確実に見覚えがあるその面々は、凄まじい勢いでまっすぐに悟空達に向かってくる。

「・・・・・・・・あ、あれは・・・・・・・・」

「ハルナとユエと・・・・・・・・カズミにナツミ、チツルもチサメもいるぞ。なあ、あれってアヤカか？」

悟空達の元へたどり着いたカズミ達は、しばらく間それはそれは騒がしかったそうな。

「悟空は・・・・・・・・」

「ん？」

構えながら悟空は振り返った。そこには刹那の着物を握り締め、不安げに悟空を見上げる木乃香の姿。

「……………なんか、あの人こわい……………ねえ、悟空さん大丈夫やよね？……………」

「……………お嬢様」

「せつちゃんだつてそうや……………！」

刹那にもまた視線を向ける木乃香。すると刹那はそんな木乃香の視線をまつすぐに受け止め、そのまま微笑んだ。

「大丈夫です。悟空さんは絶対負けません。悟空さんの強さは、私がよく知ってますから！」

「せつちゃん……………」

「悟空さんは負けない。そしてお嬢様のことは私が命に代えても御守りします……………だから安心してください」

木乃香の不安を拭きたい。安心して待っていて欲しい。刹那はそん

な願いを込めて笑いかけた。

しかし木乃香からすればそれが危険なことに変わりはない。状況を完全に理解していなくとも、二人が今自分のために戦おうとしている事は痛いほど理解できた。そして刹那の誓いの危うさも。木乃香は未だ刹那の着物の裾を放せないでいた。

「心配すんなコノカ。オラが二人とも守るぞ！」

「「え？」」

悟空の突然の言葉を木乃香は一瞬、理解出来なかった。それは刹那と同じだったようでキョトンとして悟空を見ている。そんな二人の様子など気にも留めず、悟空は二人の頭に手を置いた。

「コノカ、おめえセツナが怪我しちまうのが嫌なんだろう？ だったらオラがセツナのことを守るぞ！ セツナはコノカ守って、オラがコノカもセツナも守る。絶対だ！ …… だから、そんな顔すんな。な？」

「あ……………」

「悟空さん……………」

悟空の目を木乃香は見た。

どこまでも力強く、どこまでも真剣で、どこまでも優しい目。いつもとは違う悟空を木乃香はしばし、ぼおっと見つめる。そしてだ

んだんと熱くなる頬の熱に、速まる胸の鼓動に戸惑った。
しかし次の瞬間にはその表情から陰りは消え失せ、代わりに喜びと
も羞恥ともつかない微笑みが浮かぶ。

「……………約束やよ？悟空さん」

「ああ！ 刹那もだ。コノカこと頼んだぞ！」

「はい！」

三人はそう言つてまた笑い合つた。

不安も怖さも頭から感じる手の暖かい優しさに溶けていく、そんな
風に木乃香と刹那は感じていた。二人はくすぐつたそうに目を細め、
遠くに拍手の音を聞きながら存分に悟空の手のひらの感触を

「……………ん？拍手？」

いち早く正気に戻つた刹那は周りを見渡した。

そこにあつたのは人人人……………見渡す限りのギャラリ
ー達。老若男女問わず、生暖かい視線が三人に向けられている。日
本橋は歓声と拍手で包まれていた。

「なななんななんな！？！？！？」

「悟空さんカツ」いいー!!」

「わぁ、普段と全然雰囲気違っよー!!っっていうか刹那さんも!」

「あらあら」

「お坊さん頑張ってー!!」

「女の子二人とも可愛いな、なあ後で声掛けねえ?」

「お坊さん役の人、私ちょっとタイプかも」

衆目に晒されていたなどは微塵も意識していなかった刹那は顔を真っ赤に染めた。

一方、木乃香は相変わらず上機嫌に微笑み、すでに悟空の背中を見送っていた。

そして改めて悟空は月詠に相對する。

「よお、待たせちまったな」

「うふふふ、全然かまいまへんえ〜……むしろ、なんや素敵などこ見れて嬉しいぐらいや」

「?……よく分かんねえけど、とにかくさっさとおっ始めっか!」

「はい〜 ではこっちから行きますえっ」

言い終わると同時に月詠はその場から弾けた。瞬時に距離を詰め刀を振りかぶる。

「にとーれんげきざんてつせーん」

「ふっ！」

悟空は二連撃を同時に錫杖で弾いた。そして間髪入れず下段から斬り上げる。

月詠は体を反らしてそれをかわし体を半回転、横薙ぎに悟空の米神を狙う。

「そ〜れっ！」

だが悟空はタイミングを合わせて刀の軌道を錫杖の柄で逸らした。柄を滑る様に刀が流された所為で、思い切り振りかぶった状態の月詠。

「あららっ？」

「おりゃあー！」

悟空は気合と同時に体重を載せた突きを放つ。
咄嗟に月詠は自身の胸を剣の腹で守った。

衝突

月詠は吹き飛ばされた。

そも筋力と言う点において、悟空と月詠にはとてつもない差がある。

「あらら〜〜!?!」

暢気な声を上げながら月詠は空中で一回転、体勢を立て直しそのまま橋の欄干に着地。と同時に欄干を蹴る。切先を悟空へ向け、再度月詠は斬りかかった。

『おおおおお〜〜〜!!!!』

ギャラリーからは歓声上がる。

「すごい殺陣だ!」

「女の子がえらい距離吹き飛んでたような……ワイヤーとか見えなかったけど……?」

「CGだよCG!いや〜さすがシネマ村!」

「そっかCGか！悟空さんが一瞬浮いたように見えるのもCGなんだね！」

「いやそれでいいのかお前ら!？」

思わず千雨は叫んだ。

およそ人間離れした速度で繰り広げられる闘いはギャラリー達を湧き立たせる。

しかしそんな興奮した場の雰囲気を用意にも介さず、刹那はじつと考えていた。

(混乱に乗じてお嬢様を連れ去る算段か……だが、これ程の人の数なら……!)

意を決して刹那は木乃香の腕を取る。

「お嬢様、こちらへ！」

「え？あ、せつちゃん!？」

刹那はそのまま木乃香を連れて人波へ分け入った。

注目が一箇所に集まっている今の内に刹那は木乃香を安全な場所へ匿うつもりだった。道を走りながら目ばしい場所を探す。

「……………！ あそこへ！」

「せつちゃんそこって!?!」

そのまま刹那達は天守の裏口へ入って行った。

シヤンツ 月詠の小太刀を受けて遊環が鳴る。

両者は同時に動きを止めた。月詠の左手にはすでに小刀はない。悟空の気で強化された錫杖の一撃に小刀は耐えきれず、先ほど碎け散った残骸が二人の足元に散らばっている。

両者の顔が間近に迫り鏢迫り合いを繰り返す中、ふっと月詠は微笑んだ。

「あゝあ、せつかく新調したんにまた壊れてもうたな。もうっ、ごくうはん強引やわあ」

「わりいな、オラもコノカのこと守らなきゃなんねえ。手え抜く訳にゃいかねえぞ」

「うふふふ、嬉しいこと言ってくれはるねえ……でもやっぱり、ごくうはんはイケズな人、やっ！」

「うん？」

言うと同時に月詠は小太刀を斬り払った。そのままバックステップで距離を取る。

悟空は構え直しつつ月詠の言葉に首をかしげた。

「とぼけても駄目や。ごくうはん、初めて会った時からずうずうつと力出してへんやろ？……隠したって解りますえ。ごくうはんの中にある、とつてもあつうゝいの……どうしても見してくれへんのん？」

「いや、隠してるわけじゃねえんだけどよ……」

「ふう、じゃあしゃあないね……力尽くでも見してもらいます」

月詠はその瞬間に悟空の眼前に跳んでいた。

小太刀を両手に持ち替えて全体重を乗せて踏み込み、上段から打つ。

「ざんがんけん」

「つぐ!？」

悟空は咄嗟に錫杖で受けた。刃と柄がぶつかり合い凄まじい衝撃を撒き散らすも、悟空は耐えた。

ピシッ

「!？ やべっ

」

だが今回耐えられなかったのは悟空の錫杖の方だった。度重なる剣戟の交差の末、気の強化でカバー出来る許容範囲を超えた錫杖は、とうとう折れた。

そんな悟空へ月詠は容赦なく小太刀を振り下ろし、その切先は悟空の肩から脇腹までを切り裂く。

同時に、悟空は陽炎のように消え去った。

「え!？」

月詠は驚愕に声を上げ、思わずその動きを止めてしまった。

シヤランッ

「!!!」

音源は自身の左後方。

瞬時に月詠は時計回りに回転、右手の小太刀を横薙ぎに振り切った。
金属音

小太刀は予想通り錫杖に命中した。悟空の『左手に』握られた柄に、
月詠は目を見開き息を呑む。

悟空はそのまま月詠の小太刀を捻り上げ弾き飛ばす。

「しまっ!?!」

「伸びろお……!」

悟空の右手には錫杖の半身が握られている。右腕に引き絞られた弓
の如く並々ならぬ力を込めて

「如意棒!?!」

気合とともに悟空は一気に錫杖を衝き出した。

「っ!?!」

月詠は来るべき痛みと衝撃に、硬く目を瞑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あら？」

しかし、いつまで経っても何も起きない。恐る恐る月詠は目を開けた。

最初に目に入ってきたのは錫杖の先端部。顔面すれすれで停止したまま錫杖は微動だにしていない。悟空はそつと錫杖を下ろすと頭を搔きながら口を開いた。

「ま、伸びねえんだけどな。へへっ」

「・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・？」

止めを刺さなかった悟空に月詠はさも不可解と言いたげに視線を向ける。そんな月詠に悟空はあつけらかなとした様子で答えた。

「ん？ いや、別に勝負ができりやそれでいいんじゃないのか？ おめえ。それで、今回はオラの勝ちだな！」

キョトンとして月詠は、齒を見せて子供のように笑う悟空を見た。数瞬前まで殺し合いをしていたとは到底思えないほど穏やかで優しい、曲りなりにも敵である自分に向けるには不相応な目。そんな悟空の行動が月詠には不思議でならなかった。

「…………ふふっ、せやね。ウチ、負けてもったわ」

そして、それを悪くないと思ってしまっている自分が、なによりも不思議でならなかった。だから

「せやから、次は負けまへんえ」

また闘いたいと思った。

悟空はそんな月詠に嬉しげに笑顔を向け

「ああ！いつでも相手

！？ セツナ！コノカ！！」

唐突に悟空は頭上を見上げた。釣られて月詠やギャラリー達も悟空の視線を追う。

「おい！あれ見ろ！城の屋根！！」

「あ！さっきの女の子達じゃん。うわっ、なんだあれ！？」

「鳥人間だ！？それに怪獣みたいなのもいるぞ！」

「二人ともなんであんなところに!？」

「スゴイ!あれもCGなの?」

天守閣の屋根に『人』影は四つ。内二つは刹那と木乃香の二人のもの。残り二つは西の刺客、天ヶ崎千草とフェイト・アーウエルンクスのもの。

そして屋根の上は、人外の者共で溢れ返っていた。千草・フェイトの両側にはそれぞれ五体ずつ鬼が、空中には烏族数十体が群れを成している。皆一様に弓を構え、正確に刹那と木乃香を狙い済ましていた。

千草は背後の鬼を眺めながら口を開いた。

「し、しかし新入り ようこないな数の式神用意できたな……」

「

「ええ、呪術関連の伝手があったもので……距離は約100m、式の数は五十体……こんなところか」

「? ま、まあええわ……」

それに対し、フェイトは無表情に答える。感情の読めない冷たい声音に少々気圧されつつも、千草は気を取り直して眼下の悟空を睨む。その口元は笑みで歪んでいた。

「くふふふつ、見えとるか孫悟空！！ここにおける式神全部の矢が二人を狙つとる！一歩でも動いてみい？奇怪なオブジェ二つこさえる事になるでえ！アハハハハ！！」

「！！」

「悟空さん……………くっ！！」

刹那は唇を噛み締める。知らず、夕凧を握る手が震えていた。

(……………なんと云う無様つ。お嬢様を守ると約束した、任されたのだ……………他ならぬ悟空さんから！それなのに……………！！)

城に木乃香を連れて入り、奥の部屋へ向かった先で二人を待っていたのは天ヶ崎千草達と夥しい数の式神だった。どのような方法を用いてか、五十体余の式神の気配を完全に隠し、下の騒ぎによってまんまと追い込まれてしまったのだ。

「さあ、桜咲刹那 大人しくお嬢様を渡してもらおか？こつちかて命まで取るような事はせんさかい……………」

「誰が！そんな言葉を聞くと思つか！？」

「せつちゃん……………」

刹那は夕風の切先を向けて、千草達を睨みつける。

現状、背後の木乃香を庇いながら戦闘を行うのは如何な刹那と言えど不可能だった。下手に動けば数十矢の矢の餌食。術者だけを狙い瞬動を用いての一撃必殺が刹那の頭を過ぎるが、相手に木乃香を殺す意思が無いとは言え、みすみす木乃香を危険に晒す選択など刹那には出来なかった。

刹那は現状の打開策を必死に模索する。

(この距離じゃいくら悟空さんでも……………どうする、どうすれば「大丈夫だよ、せつちゃん」え?)

刹那は振り返る。そこには穏やかに微笑む木乃香の姿があった。命の危険が伴うかもしれないこの状況には似つかわしくない、優しい笑顔。

それは、自責の念と焦りに苛まれている刹那を安心させたいという願いと一つの確信が籠った表情でもあった。

「悟空さん、守るって言うてくれた。約束してくれた……………だから絶対大丈夫や!」

「お嬢様……………」

「はんつ!何クズクズ言うとるんや!状況理解できひん程オツムが弱いんか?さっさとこっちに来んかい!!」

痺れを切らし、懐から自身の符取り出しながら千草は怒鳴る。そして今にも二人に式を差し向けようとした。

「頃合か……。では見せてもらうよ。君の力を」

そう呟くと同時に、フェイトは小さく指を鳴らす。

その瞬間、鋭い風切音を響かせ、五十の矢は一斉に放たれた。

「んなっ!?!なにをやっ тоннねん!?!?」

「!?!お嬢様!?!!」

「せつちゃん!?!」

刹那は自身を盾に、木乃香を抱きかかえる。木乃香は硬く目を閉じ、心の中で叫んだ。

(悟空さん!)

刹那と木乃香を貫かんと矢が迫り来るその時

「はあああああああああああああああ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

金色の閃光が辺りを包んだ。

「ななんやああ!?!?」

「!?.....これは.....」

唐突に刹那達と矢の間に現れた光からは凄まじいまでの衝撃波が放たれ、五十の矢は全て粉々に消し飛んだ。気の余波を受けた千草は堪らず吹き飛ばされる。

「! 屋根に誰がいる.....」

「誰あれ!?なんか燃えてるよ!あれもCG?」

「あれ?悟空さんは!?!」

「え、ホントだ!何処!?!」

「.....あははっ!ぐくうはん!ああ、それなんやねえ!それがごくうはんの力なんやね!うふふふ 素敵やわあごくうはん ホンマに素敵や!?!」

衝撃が止み、木乃香と刹那はそつと目を開いて眼前を見た。

そこには、金色に輝く逆立った髪をなびかせ、金色の炎を全身に纏った男が立っている。その男は振り返ってその碧の瞳を刹那と木乃香に向けた。姿はまるで違うその男。しかし間違いなく二人はその人物を知っていた。

「悟空……さん……?」

「ホンマに、悟空さんなん?」

「ああ、二人とも怪我ねえか?」

その言葉に、呆けていた刹那はハツとして木乃香を見た。

「! は、はい! 私は。それよりお嬢様もご無事ですか!？」

「うん! ウチは大丈夫だよ」

「そっか、よかったぞ! じゃ、わりいけどちょっと待っていてくれ」

悟空はそう言っつていつもの笑顔を二人に向けた。

「……うん、待つとるからね。悟空さん」

圧倒的な力を目にして、千草はつい最近知ったものと同じ恐怖を思い出していた。しかし悟空はそんな千草には目もくれず唯一人、フェイト・アーウェルンクスを睨みつける。そこには確かな怒りが込められていた。

「いい加減にしろ、散々無茶苦茶なことしやがって……！」

「ふむ……金色の戦士が」

フェイトは再度指を鳴らした。

今度は式神達自らが一斉に悟空へ襲い掛かる。

「なっ！？悟空さん！？」

「悟空さん！！」

刹那と木乃香が叫ぶ。

だが次の瞬間、フェイトに向かって爆風が駆け抜けた。ちょうどフェイトの射線上にいた者はその爆風に巻き込まれ、一匹残らず送還されていく。

フェイトのすぐ目の前にはすでに悟空が立っていた。フェイトは僅かに目を見開いて悟空を見る。

(まったく……見えなかった……)

「おめえ、態とコノ力とセツナを撃たせただろ？」

「……ああ、君の力の程を知りたくてね。欲しいのはあくまで『近衛木乃香』、矢傷程度なら、最悪肉体だけ生かすことぐらいは出来るだろう」

淡々とフェイトは言った。言外に、それが何でもない事であると言いたげに。

悟空は拳を握り込む。悟空の全身を蒼い稲妻が走った。

「そうか……」

そう呟くように言うと、掌を開いた。同時に、凝縮される蒼い気。極限まで高まる稲妻。

「おめえはもう謝っても許さねえぞ……このクスやるおお！

！……！！」

「っ！？」

気を最大限に集中させた掌を叩きつけた瞬間、蒼い奔流がフェイト

を飲み込んだ。
奔る悟空の気の余波は、瓦を吹き飛ばし、屋根を抉る。
辺りは衝撃で満ちた。

「のわあああ!?!」

「くっ!お嬢様!掴まって下さい!」

「わわっ!?!」

気功波はそのまま角度を変え、空高く雲を貫いて消えていった。

しかし、悟空は未だ眼前を睨み続けている。

悟空の視線の先には体の下半分を失いながら無表情に悟空を見据えるフェイトの姿。その体は段々と形が崩れ、ただの水へと変じている。

313

「本当に噂通りだったよ。瞬きの内に敵を打ち負かし、蒼い炎を操る金色の戦士……収穫はあった。今回はこれで失礼するよ」

「……………」

言葉の終わりと共に、フェイトは水のゲートで自身と未だギャーギヤーと騒ぎ続ける千草と城下にて恍惚とした表情で悟空に熱っぽい視線を向ける月詠を同時に包み込み、消え失せた。

超サイヤ人を解いてしばらく、悟空はその場で立ちつくしていた。

視線は自身の掌を見つめ、その表情からは軽い驚愕さえ読み取れた。

「悟空さん!」

「あ」

背後からの声に悟空は我に返る。刹那と木乃香はすぐさま悟空に駆け寄った。

「よっ、二人とも無事みてえだな?」

「はい!悟空さんも、月詠に勝たれたんですね!」

「ははっまあな」

照れくさそうに悟空は頭を掻いた。

「………悟空さん」

「ん?どうしたんだコノカ?」

そこで、木乃香が静かに口を開いた。その改まった木乃香の態度に悟空は首をかしげる。

「……約束守てくれたから、なんかな？悟空さん来てくれてな、すっごい嬉しかったん……。だから、あんな、ホンマに……。ホンマに、ありがとうね！悟空さん！」

「おっとっ」

木乃香はそう言っつて悟空の首に抱きついた。目には涙を湛え、心の底から安堵を噛み締めるように、腕に力を込めて。

刹那はその光景に微笑みながら一歩踏み出そうか出すまいか心中で激しい葛藤を繰り広げ、悟空は笑って木乃香の頭をポンポンと撫でた。

ギャラリーの声援は遠く、三人がかなりの注目を浴びていることに気付くのはもう少し先の話。

第17話 守るモノ（後書き）

やっそこ書けました……お待たせして本当に申し訳ございません。

。 戦闘描写が多かったのですが、大丈夫だったでしょうか……。

ちょっと今回は妙に長くなってしまいました。お時間のあるときにも読んでいただければ幸いです。

それでは読んでいただきありがとうございました！

第18話 実家に挨拶（前書き）

今回短いです。

第18話 実家に挨拶

「よく頑張ったなネギ！解るぞ。アイツと闘って、おめえはずっと強くなった」

「悟空さん……でも、まだまだダメです……僕……
・僕、もっと強くなりたいです！」

「ああ、勿論だ！麻帆良に帰ったら修行すつぞ！」

「はい！頑張りましょう悟空さん！一緒に！」

「……ああしていると、まるで本当の親子みたいです」

「ふふふ、そやねえ。ネギ君すつこい嬉しそうや」

「うん、そうね……
れないわよ！！なんで朝倉達までいっしょに来てんのよ……！
！！؟؟？」

「んふふふ 私から逃げようなんて百年早いよ」

若干現実逃避気味のネギ・刹那・木乃香？を、明日菜は全力でツッコんだ。

シネマ村での戦闘を終えた悟空達は衆人環視の中での自分達の行動に一しきり赤面し、笑い、大騒ぎし終えると、他の生徒達に気付かれぬよう園内を後にしようとした。この際、悟空が自身の得意技である瞬間移動の使用を提案したが、木乃香の居る手前それは望ましくないとの刹那の意見により、単純な足の速さで切り抜ける事に。来た時と同様に二人の意見を聞くことなく悟空が高速でその場を離脱。達人でさえ追いつくことの叶わない高速移動に一般人である和美達が追いつけるはずもなく、逃走は成功に思われた。が

「科学の進歩は怖いねえ、携帯電話を応用すればあら不思議！即席の発信機の出来上がり！ってね」

「朝倉あんたねえ！この危険さ全然わかってないでしょ！？」

「あ、あははは……すみません……」

刹那の鞆からGPS携帯を取り出しながら和美は悪戯っぽく笑って見せる。そんな和美に明日菜は怒ったように詰め寄った。刹那は自嘲気味に苦笑いする。

しかし、そんな二人を気にすることもなく、背中にネギを背負った悟空はずんずん石畳の参道を進んでいく。それに続く木乃香達。

「あ、見て見て！あれ入り口じゃない？」

そう言つてハルナが指差した先には巨大な楼門が静かに佇んでいた。道の左右に鬱蒼と茂る雑木林によって門の辺りは光が遮られて薄暗く、ある種不気味でさえある。

「おお、何か雰囲気あるね〜 それじゃレッツゴー！」

「ええ！？ちよつと！そこは敵の本拠地！」

「だ、ダメですよ！何が出てくるか

」

ネギと明日菜の静止も空しく、一団は楼門を潜つた。

薄闇から日の下に出たことで皆一瞬目が眩む。そして改めて目を開いたその先には

「
「
「
「
「
「
「
「
「
お帰りなさいませ、このかお嬢様
「
「
「
「
「
「

「
「
へ？
「
「

「
お、人が一杯いんど
「

白い小袖に緋袴、所謂巫女姿の女性数十人が、厳かに辞儀して一行を出迎えた。

「はあく、これ全部コノカの家か？でっけえなあ〜！」

「はい、関西呪術協会の総本山。この山全てがお嬢様のご実家に当たります」

「あ……悟空さん、ウチの実家おつきくてひいた？……」

「うん？なんでだ？すげえじゃねえかコノカ！こんだけ広げりゃ目一杯修行できんぞ！」

不安げな視線を送る木乃香に悟空は目を輝かせて笑いかけた。ネギ達一行は現在広大な広間に通され、並べられた座布団に腰掛けられている。ハルナや和美、夕映などは物珍しげに周りに待機する数多くの従者や絢爛豪華な内装を眺めた。

「んでよ、長つちゅうのはどんなヤツなんだ？」

「いやヤツって……長はこのかお嬢様のお父上です。……私にとっては、返し切れない多大な御恩のあるお方ですよ」

「へえ、そうなんか……おっ、なんか強え気が近付いてくるぞ」

「お待たせ致しました」

声は悟空達の正面に位置する階段の上から発せられた。ゆつくりと階段を下りてくる宮司姿に眼鏡をかけた壮年の男は、ネギ達を見ると穏やかに微笑んだ。

「ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトの皆さん。そして担任のネギ先生に悟空先生」

言い終わるが早いか、木乃香は走り出していた。

「お父様〜!!」

「おっと、これこれこのか」

笑顔のまま飛びついた木乃香を近衛詠春は抱きとめる。

「……………」

「？ アスナ？どうした？」

悟空は不思議そうに問いかけた。見ると、明日菜は詠春を真剣な表情で食い入るよう見つめている。ハルナや和美など、何事かと驚いた様子で明日菜を見た。

そして明日菜は、口元に手を当てて震えるように口を開いた。

「し……………」

「し?」

「渋くて……………素敵、かも!」

沈黙

「えええええええ!?!」

「あなたの趣味はわからんわーっ!!」

「ちよっ、失礼ですよ」

明日菜の反応にすかさず盛大なツッコミが入る。

姦しいハルナ達を他所に、ネギは詠春の前に立った。手には近右衛門から預かった親書を携えて。ネギは親書をそつと差し出した。

「東の長、麻帆良学園学園長・近衛近右衛門から西の長への親書です！お受け取りください」

「確かに……」

詠春は親書を受け取ると、そのまま封を切った。数枚の紙片を途中苦笑いを浮かべながらも読み進め、おおよそ読み終えると改めてネギに向き直る。

「いいでしょう……東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの改善に尽力するとお伝えください。……任務ご苦労！ネギ・スプリングフィールド君！」

「あ……はい！」

詠春はネギをまつすぐに見据え、力強く頷くと労いの言葉を送った。ネギはその言葉に元気な返事をする。

『おお~~~~!!』

「なんか知らんけど先生おめでとー!!」

「ご苦労さま!!」

事情を知らないハルナ達は、それでもネギの成功を祝った。戸惑いながらもネギは嬉しげに微笑む。

詠春はそんなネギ達を微笑ましげに見た後、今度は悟空へ視線を向けた。

「あなたが孫悟空さんですね。お義父さんからお話は伺ってますよ。私は近衛詠春と申します」

詠春はそう言って、悟空に握手を求めた。

「ん？ああ、よろしくな！孫悟空だ」

悟空もまた笑って手を握り返す。

その時、詠春の顔から表情が消えた。視線は握った掌へ。そしてそ

の目はその場の雰囲気には似つかわしくなく、ほど鋭く光っていた。

(強い……)

傍目からは判断できないが、詠春は内心に激しい驚愕を覚えていた。現役を退いているとは言え詠春の実力は正しく百戦錬磨と言えるものだ。だが、過去幾多の強力な力を持った敵、或いは味方と剣を交えてきた詠春でさえ悟空の力は未知数と言えた。底が、見えないのだ。

(ナギと同程度……いや、まさかそれ以上……!?)

「? なあ、どうしたんだおめえ?」

「! いえ、失礼しました! 少し考え事を……」

知らず詠春は僅かに身構える。近右衛門から確かに信頼の置ける人間であるとは聞いていた。しかし、目の前にいるかつてない強大な力は、おおよそ無視できるレベルではなかった。さらに、詠春はこの接触を以て初めてそれに気付いたのだ。気をこうまで巧妙に隠し通せる人間などそうはいない。詠春は警戒心を隠せずにいた。

(……果たして今の私が太刀打ちできる相「グゴアアアアアアア!?!」!?なんだ!?)

「まさかまた襲撃!？」

竜の唸り声のような凄まじい音が広間に響き渡った。詠春は瞬時に木乃香を自身の背後へ押しやり、周りへ視線を走らせ、刹那は夕凧を構える。

(まさかこのかを狙って直接本山に!？仕方ないここは「はあく、オラ腹減っちまった」……………「へ?」

「い、悟空さん?」

悟空はそう言つと腹を押さえてへたり込んだ。

「え?なに?今の悟空さんのお腹の音だったの!？」

「ん?ああ、昼間は色々あつて飯食えなかつたかな〜……………オラ死にそうだぞ……………」

「あははは!僕、地震かと思つてビックリしちゃいました」

「いや、あの音量は普通ありえないでしょう!？そもそも腹鳴りとはガスや水分の停滞が……………」

「ありやりや、大変や。お父様、今日は皆家でご飯食べてもらたらあかん?」

木乃香が問いかけてくる中、詠春は悟空を呆然と見ていた。そして次の瞬間には、自身が抱いていた警戒心や危機感、その他もろもろの雑多な感情を思い返し

なんとも馬鹿らしくなった。

「ふっ、ふふ……はははははは！」

「？ お父様？」

「お、長？どうされたんですか？」

突然声を上げて笑い出した詠春を木乃香と刹那は不思議そうに見上げた。

「ははっ！いいや。なるほど彼は確かに、信用に足る人物だ」

気分の晴れた表情で詠春は言う。そんな詠春に首をかしげながら、木乃香は笑顔で言った。

「うん！悟空さん、ちゃんと約束守る人やもん。ウチのこともせつちゃんのことも守るって言うてくれた！ね、せつちゃん！」

「は、はい！悟空さんは強くて……本当に強くて、優しい方

です。……私も、最初は……」

尻すぼみになっていく刹那の言葉を聞き、詠春は驚いた様子で刹那を見た。

「！……ははは、顔に出ていたかな？すまなかつたね、妙な気を起こして……」

「い、いえ！？そんな滅相もない！？関西呪術協会の長として当然のことです！」

「ありがとう、刹那君……。それに、君の信頼をそこまで勝ち取った人だ。それだけでも十分だよ。悟空先生とは何かあったのかな？」

意味ありげに微笑みながら、詠春は刹那に問う。一瞬の間を空けて刹那は顔を真っ赤に染め、目に見えてうろたえだした。

「いいいえ！？べべ別にそんななにも！」

「え？せつちゃん、悟空さんとなんかあったん！？教えて教えて！」

「お、お嬢様まで！？」

刹那に質問を浴びせかける木乃香。ちなみに悟空達は夕映の『胃の

腹鳴りに関する講義』を受けている最中だった。
詠春はその妙な構図に笑みを深くする。

(お義父さんの言つとおりだな……あのバカ・サウザンドマスターを思
い出す)

大騒ぎの一行を見ながら、詠春はそんな望郷にも似た感情を思い出
していた。

第18話 実家に挨拶（後書き）

はい今回短いですね（二度目）。それに進展もしないという……。

山が無いというか、華が無いというか……すみません！

主に詠春の悟空に対する心象を書いてみました。

今回は修学旅行編最終局面ということで、ちょっと無茶な設定が出てくるかもです……悟空の強さをどうしよう!? って感じ……。

では読んでいただきありがとうございました！

第19話 心配と約束

「ちっ！」

夜も更けて月光が淡く照らし出す、桜の舞い散る庭園を眼下に置いた松の枝の上で、天ヶ崎千草は苛立ち隠すこともせず舌打ちした。

「コラ新入り！追わんでええ言うから放つといたら本山に入られてもうたやないか!？」

千草はそう言って、自身の隣で静かに佇む少年、フェイト・アーウエルンクスを怒鳴りつけた。

「大丈夫、それは大したことじゃないですよ」

しかし、フェイトは千草の怒声を意にも介さず、相変わらずの淡々とした口調で言う。

「大したことないて……あなたならどうにかできる言うんか!？」

「ええ、本山へ侵入してお嬢様を奪取するだけならば。でも、その前にやることがある……」

「はあ？何を？……」

フェイトの言葉に千草は訝しげな視線を投げた。

「障害の排除……」

千草が目を見開いてフェイトを見やる。

懐からそっと一枚符を取り出すと、フェイトは眼下の屋敷に向けて冷たい殺気を放った。

『で、結局は西の本山に泊まりか。ふふっ、詠春のヤツはお前を見てどんな様子だった？』

「うーん、なんかよく分かんねえけど、最初は妙に警戒されちまっ

てよ。あ、でも今はそんなことねえんだよなあ……なんでだ？」

『はっはははは！それはお前の力を恐れたからだ。じじいがどういう説明をしたのかは知らんが、大方信用できるだの、穏やかな性格だの、見合い写真並みにどうでもいい情報しか渡らなかつたのだから。くつくつくつ、お前に会った時の詠春の間抜け面は是非拝みたかつたものだ』

電話越しでも解るほどエヴァンジェリンは上機嫌に笑った。

詠春との邂逅を終えた悟空達一行は、帰宅の時間を考慮して今夜は近衛邸に宿泊することと相成った。

その後開かれた宴会で悟空を交えての無謀な大食い大会や風呂場での全員エンカウトなど、様々なイベントを乗り越えた悟空は、今現在恒例の電話報告の真っ最中である。

『……それにしても、護衛と言いつつ桜咲刹那も十分、旅行に現を抜かしておるではないか……』

「お？そうなんか？ああそっぴゃあ、着物着て嬉しそうにしてたなあ」

『……ぷつくつく！そ、それで、お前は桜咲刹那になんと言つてやつたんだっけ？』

「ん？いやだから……桜餅みたいで美味そうって」

『桜餅！くははははは！桜餅だと！？ぷつくくく、真面目腐った顔で出てきたのが桜餅とは！……そういつ時、男は嘘でも女に綺麗だと一言くれてやればよいのだ。っははは』

「ふくん、そういうもんか？」

心からの贅辞の言葉を否定されたのが納得いかない悟空である。しばらくの間、受話器からはくぐもった笑いが漏れ聞こえ続けた。

『はあく笑った笑った………ところで、敵方はもう動きを見せてはおらんのか？』

先程までの雰囲気を一変させ、幾分落ち着いた声色でエヴァは悟空へ問うた。

「ああ、今んところはな。………でも、これじゃ終わんねえ。一人厄介なのがいんど」

『ほう………お前が言うのだ、一筋縄でいく相手ではないようだな』

「うん、まともにやり合えりゃ何とかすんだけどよ………」

『ん？………ふんつ成程、裏でこそそと嗅ぎ回るタイプか。それはお前とは相性が悪いな』

不快そうにエヴァは吐き捨てた。闘わずに結果だけを得ようとする手段をエヴァは良しとはしなかった。

しばし顔をしかめていたエヴァは唐突に口角を上げる。

『そんなもの、圧倒的力の前には全て無意味だと言うことを骨の髄まで思い知らせてやれ！！生半可な小細工が龍の逆鱗に触れればどうなるかをな！アハハハハハハハハ！！』

「……………エヴァ、なんか気味わりいぞ……………」

受話器を耳から遠ざけても尚聞こえる高笑いにちよつと引き気味の悟空。悟空の呟きにハツとしてか、エヴァは咳払いを一つ。

『ま、まあ、確かに力押しをとことん無効化する手段はある！……………その最たる物が結界だ』

「結界？」

聞き慣れない用語に首を傾げ、悟空は受話器を持ち直すと、エヴァへ問い返した。

『“結界” 本来は聖域と俗域を別つモノ、或いは場所を指す。常世と現世、二つの世界を結ぶ禁足タブーを視覚化したものとも呼ばれる。まあ大概は自身を囲って壁として使うか、一定範囲を覆うことで防衛

線とすることが多いな。厄介なのは対象を完全に隔離してしまえる点だ。こうなると結界の基点を破壊するか結界の許容容積以上の力で中から破裂させるしかない・・・後者については無謀を通り越して馬鹿のやることだ。効率が悪い上にガス欠起こして終了が関の山だからな』

「へえ、便利なもんだな」

『お前なあ・・・』

或いは、これは最大の危険事項であり懸念でもある。下手を打てば死。紛う事無い最悪がそこにあるというのに、その暢気な態度をまったく崩すことの無い悟空。

エヴァは苛立ちと焦燥を隠すことなく声を荒らげた。

『これを応用すれば、それこそ一生出ることの叶わん監獄を作り出すことも可能なのだぞ！！？』

「うへえ、そりゃ困るな」

『つつつつ！！解っているのか！！？世界から切り離すことも出来る！！殺すのではなく存在を消し去るんだぞ！！お前が警戒するほどの敵なら尚更だ！！』

「エ、エヴァ？どうしたんだ？なんか変だぞ？」

エヴァのあまりの剣幕に悟空は思わず受話器からたじろいだ。それ

でもまだ、エヴァの鈴を転がすような声はその激しさを強めて

『お前まで!!……………お前まで私の前から居なくなる気か?……………!?!?』

初め激しかった声は次第に消え入るように弱々しく、結果哀しげな響きだけを残すのだ。

待つのはもう懲り懲りだと、言外にエヴァは心の内で叫んだ。

長い月日を生きてきたエヴァンジェリンにとって、他者との繋がり、まして『人』とのそれは、常に儚く、危うく、消えた。別れなど、彼女にとって日常茶飯事なのだ。

しかし、それでも一緒に生きたいと思った男がいた。すぐに終わってしまう一瞬の夢であっても構わないとさえ思った。

その男の死を知った時のことをエヴァは今でも忘れてはいない。心で何かが音を立てて瓦解するのだ。その後の12年間はただただ苦痛でしかなく、後に無事だという報せを實際耳にするまで憂いはずっと心に漂い続けた。

奇妙なものだ。電話の向こうのとぼけた男に自分はひどく執心らしい。らしくも無く大声を上げて喚いている。

エヴァは他人事のように、そんなことを考えていた。

「……………心配すんな、オラ居なくなったりしねえぞ」

穏やかに悟空は言った。まるで駄々をこねる子供をなだめるように。涙を流す少女を慰めるように。

『そ、そんな口約束なんて、信用できるか！……………』

これではあの時の二の舞だ。内心でエヴァは焦りを覚える。しかしその時

ポンッ

自身の頭にいつもの手が載せられるのを感じた。驚いて顔を上げた先には

「じゃ、これで約束な！」

いつもの笑顔の悟空がいる。

突然の事に言葉を失くして、エヴァは呆然と悟空を見上げていた。

「なんで……………あ」

「へへっ、瞬間移動ってやつだな。もしエヴァが地球の裏っかわにいても、これならすぐ会いにいけっぞ！安心したか？」

安心した。並べられたどんな言葉よりも、頭に感じる温かい手の感

触は、そつと心を包んでくれる。

さっきまではひどく遠くに感じていた距離の行き成りの縮まりように、エヴァは思わず笑った。

そして改めて、悪戯が成功した子供のような笑顔を浮かべる悟空を見て、急に羞恥に見舞われたエヴァは赤くなつた顔を隠すようにそつぽを向いた。

「ふ、ふんっ！相手の気を掴まなければ遠距離移動は出来ないはずだろう？もし気を遮断されたらどうするのだ？」

「え！？……………ど、どうっすかな？」

先程までの笑顔を一变させ、悟空は目に見えてうるたえだす。エヴァは一瞬呆けた。先刻の頼もしさは何処へやら。うんうん唸りながら真剣に頭を捻る悟空のそのあり様はどうにも可笑しくて、とつとつ声を上げてエヴァは笑った。

「ふふふっははははは！……………まったく、締まらん男だよお前は」

「うん？」

「……………約束なら前にした。私の京都観光に付き合っ、必ずな。忘れたとは言わせんぞ！」

「おお、そっか。楽しみだなあ！」

「……………うん、楽しみだ……………」

不意に浮かんだ微笑みと共に、小さな咳きが無意識に漏れる。ただ、心からそう思えたのだ。

「？ 何か言ったか？」

「っ！なんでもない！！それより、お前は今警護の最中だろうが！持ち場を離れてもいいのか！？」

「いけねっ忘れてた！じゃ、オラ行くぞ！……………」

悟空はそう言つて、人差し指と中指を揃え額に当てる。しかしふと、悟空は眉根を寄せた。それをエヴァが怪訝そうに見上げる。

「どづした？」

「……………こいつは……………あの白い奴の気だ！！どんどん近付いてる……………わりいエヴァ！じゃあな！」

「あーおいー！」

ピシユンッ

引き止める間さえなく悟空はエヴァの前で掻き消えた。エヴァはし

ばらくの間先程まで悟空がいた空間を見つめる。

「……………茶々丸」

「はい、マスター」

呼びかけと同時に茶々丸はエヴァの背後に現れた。

「準備しろ、じじいのところへ行くぞ！」

「？ 了解。ですが何故？」

「うん？ ああ、京都に行きたくなった」

悪戯っぽく笑うエヴァに茶々丸は首をかしげた。

鬱蒼と茂る雑木林の真っ只中で、フェイトは近衛邸に向かってゆっくりと歩を進めていた。先程の殺気は鳴りを潜め、今はただ静かに気配だけを消して。

ピシユンッ

「……………やあ、君なら見つけれらるだろうと思ったよ」

そう言ってフェイトは背後の悟空を見やった。
悟空はフェイトをまつすぐ睨みながら口を開く。

「……………おめえ達、まだ諦めてねえみてえだな？」

「当然だ。本山へ逃げ込まれた程度では、ね」

その瞬間フェイトが仕掛けた。
瞬間からの肘打ちで悟空の腹を狙う。
しかし肘は空を切った。

「っ!？」

同時にフェイトは腹に衝撃を感じた。

眼下には身を低くした悟空のカウンター気味の拳。

「だりゃ!!!」

フェイトは吹き飛んだ。

木の枝や幹に体を打ちつけ薙ぎ倒す。

10m程の距離を飛び、ようやく止まった。

腹を押さえてフェイト立ち上がった。その感情の希薄な目は、貴重にも驚愕に見開かれている。

「君の前では障壁は意味を成さないと心に刻んでおくよ……まさか強化さえしていなかったとは予想外だけ……」

「ん?ああ、そっぴゃ何かつつかえたな?あれおめえが張ってたのか」

悟空は自身の拳を不思議そうに眺めた。

フェイトが展開する魔法障壁は生半可な攻撃ならば物理・魔法問わず100%防御可能なほどの密度を持っている。しかしそれを悟空は単純な腕力のみで無力化して見せた。

フェイトは改めて、今回の案件における最大の脅威を認識した。

「……君の力は脅威だ。戦闘という場において君に匹敵する程の人間が何人いるか……。それだけに、奇妙な話だね」

「？」

フェイトの言葉に悟空は疑問符を浮かべた。そんな悟空へ回答を寄越すかのようにフェイトは朗々と続ける。

「君は“気”に関して言えば誰よりも優れている。探知も操作も絶対量もね。それなのに……。こと“魔力”に関しては素人以下だ」

「おめえ何言つて

！？コノカ！！」

その瞬間、悟空は木乃香の気が動くのを感じ取った。そして木乃香のすぐ傍で発せられる感じ慣れない力も。

「驚いたよ。魔力だけで編んだ分身の方には見向きもしないで、まっすぐにこちらへ来てくれた。……。ヴィシユ・タルリ・シユタル ヴァンゲイト……。」

「くそっ！」

フェイトの眩きを気にも留めず悟空は屋敷に向けて地を蹴るうとした。フェイトに背を向けて

「背中を見せるなんて君らしくないな『石の息吹』」

「!?!」

詠唱の完了と同時にフェイトの周囲数十mは魔力の霧に包まれた。咄嗟に悟空はその効果範囲から全力で飛びのく。が

「うわ！ 石になっちまった!?!」

しかし悟空の両足の膝から下は全面を石に覆われ、悟空は思わず動きを止めてしまった。

背中に何かが押し付けられる。

悟空が振り返った先には、無表情に立つフェイトの姿。

「では舞台から下りて貰うよ、孫悟空」

フェイトの言葉の終わりを待ち受けていたかのように符は眩い光で悟空の体を包み込んだ。

「しまっ！！」

「

光は一層輝きを強め、悟空の声さえ飲み込んだ。

そして、光が止んだ雑木林に立っていたのは、ただ一人、フェイトだけだった。

「っ！？」

雑木林を全力で駆け抜けていた刹那は、唐突にその場で動きを止めた。

「刹那さん！？どうしたんですか？」

ネギと明日菜は驚いて刹那に振り返る。

刹那は目を見開き愕然と虚空を見つめていた。

「悟空……さん？……」

第19話 心配と約束（後書き）

どうも足洗ですこんには。

ではあとがき（言い訳）です。

結界云々のくだりは無い頭を捻ってねじって考えた有様です。無理
繰りですすみません……。正直悟空がいると全部吹き飛ばす
方向にしか考えが行かないアホな作者です……。

次の話も はあ！？ ってなるかもです……。お目こぼししてい
ただければ本当に幸いです。

それでは、読んでいただきありがとうございました！

第20話 信じて待つのは……

枝葉を踏みしめ駆け抜ける三つの影。

三者の先には木々の間から光が見て取れる。

「見つけた!!」

「このかさん!!」

「このか!!!!」

雑木林を抜けた先、広大な川面が広がるその上流、台座を思わせる岩の上に、ネギ・明日菜・刹那は木乃香を見つけた。傍らには天ヶ崎千草が不敵な笑みを浮かべて自身の式神に木乃香を抱えさせている。

「そこまでだ!!お嬢様を放せ!!」

足が濡れるのもかまわず飛沫を上げながら三人は底の浅い川の中へ。明日菜は木刀を、ネギは杖を、刹那は夕凧を構え、鋭い視線を千草に向ける。

「天ヶ崎千草!!明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ!無駄な抵抗は止めて投降するがいい!」

「ふふっ、応援やて？」

制止の声を上げる刹那に対し、奇妙にも千草はさらに笑みを濃くした。刹那は訝しげに千草を見る。

「応援が何ぼのもんや。あの場所にさえ行けば！……くっくっくっそれになあ」

千草は口の端を吊り上げ、喜色を隠すことなく言い放った。

「孫悟空がおらん今、あんたらガキ共に何が出来るいうんや？」

千草から放たれた言葉を、ネギは聞き逃さなかった。こみ上げて来る驚愕と焦りに杖を握る手を震えさせ、声を張り上げる。

「ど、どういことですか！！？悟空さんに何が！？」

「ん？なんや、坊や知らんかったんか？はっ、なら教えたる！孫悟空はもうこの世にはおらん！消えてなくなつたんや！もうあんたらに頼れるもんはあらへん！！」

「「「！？」」「」

「……やはり、さっきのは……」

ネギと明日菜とカモは驚愕に目を見開き、刹那は夕凧を硬く握り締めた。

明日菜はすぐさま千草に食って掛かる。

「ご、悟空さんが死んだって言うの!!??そんな!」

「いいえ違います!悟空さんは絶対に生きています!戦闘で悟空さんが負けるはずありません!.....おそらくは結界に.....」

幾分冷静な刹那の判断に千草はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「ふんっ、その通りや。孫悟空は死んでへん。今頃は隔離結界の中で大人しうしとるやろ」

「結界って.....」

「兄貴!昼間オレっち達が閉じ込められちまったヤツのことだ!」

「ふふふっそうやその通り。でもなあ、この結界はあんたらに使いたのとは物がちゃうで!そこらの術者が敷くもんとは比べ物にならん程強固で高度な呪や!(新入りがなんでこないなモン持つとったかはさて置き.....)常世と現世の狭間に孫悟空はおる。もうあいつが戻ってくる術はあらへん永遠にや!何も無い無明の世界で、今頃は悪夢でも見とるんとちゃうかあ?あっははははは!」

「そん、な……悟空さんが……」

ネギは愕然と言葉を失った。

明日菜は歯噛みして千草を睨みつける。それを千草は満足げに眺め、そして視線を刹那にもまた向ける。
しかし

「大丈夫です」

「あ？」

期待していた恐怖も、驚愕も、焦りもそこには無い。
刹那は静かに夕風を構え直すと、まっすぐな瞳で千草を見返した。
先程まで見て取れた焦燥は、もうそこには無かった。
ネギと明日菜は不思議そうに刹那へ視線を向ける。

「刹那さん……?」

振り向いた刹那の表情は、とても穏やかだった。そしてその瞳に確
信めいたものが宿っているのが分かる。

「悟空さんは大丈夫です。あの人なら絶対に戻ってきてくれます」

「でもさっきあの猿女がトコヨとウツシヨがどっのって！」

それでも」 え？・・・・・・・・」

「あの人なら、悟空さんなら、どんな状況だってなんとかしてくれる・・・・・・・・そう思いませんか？」

刹那は微笑んだ。

心から信じているから。あの約束を覚えているから。今までずっと、守る為に強くなるうとしてきた、そんな自分のことを守ると言ってくれた強くて優しい人。悟空さんは

「きつと来てくれます！」

内に宿る不安を押し殺して、刹那は二人に決然と頷いた。

ネギと明日菜は呆気にとられて刹那を見つめる。しかしそれも一瞬。ネギは杖を硬く握り締めて力強く頷き返して見せた。

「僕も・・・・・・・・僕も！信じます！」

「ああもう！！そうよね！あの悟空さんがそうそうやられちゃうなんてあり得ないわ！何焦ってんだる私！ そう言うことよ猿女！ あんたがどんな結界だか鉄塊だか使ったって悟空さんは戻ってくるんだから！！」

「な！？」

自身の優位が揺るがないことを示すどころか、ネギ達は息を吹き返したかのようにまっすぐ千草を見据えてくる。口の端をピクピクと震わせ、軽く額に青筋を浮かべた千草は懐から符を一枚取り出すとそれを木乃香の首元へ放った。

「……………ああさよか、そやったら勝手に信じてなはれ。下手に出とったらいい気になりおってからに……………もう辞めや、去いね」

その瞬間、木乃香の体は一層強く輝きを放った。川面には異国の文字が轟き輝く。

「んっ!?!?んう!?!」

輝きが強まるにつれて木乃香は声を上げて悶えた。

「お嬢様!?!」

「なっこのか!?!」

川を覆いつくした光からは徐々に、人ならざる者共がその全容を現し始めていた。

「ガキや思て手加減してやろうか思たけど、どうやら必要ないみたいやな。ま、殺さへんように“だけ”は言つといたったわ。ほな楽しみなはれ」

「あつ！待て！！」

それだけ言い残すと、千草は木乃香を抱えた式神を連れて飛び去っていった。

居並ぶのは巨大な鬼、烏族、狐女、その他槍や刀を携えた妖がずらり。計200体前後の化物達はネギ達三人を取り囲み、現れた。

『何や何や、久々に呼ばれた思たら……』

『相手はおぼこい嬢ちゃん坊っちゃんかいな』

『悪いな嬢ちゃん達。喚ばれたからには手加減できんのや。恨まん
と「風花旋風 風障壁！！」 おおつと！？』

鬼の言葉を聞く事無く、ネギは即座に風障壁を展開。

巨大な竜巻は渦を上げ、近くの妖を吹き飛ばしながらネギ達三人を完全に包み隠した。

『……なんや、いきなりな坊っちゃんやなあ……』

そう寂しげに鬼が呟いたのは本人だけの秘密だ。

唸りを上げる竜巻内部で三人は改めて向き合った。

「これで少しは……でも2、3分しか持たないよ！」

「よおし！手短かに作戦会議だ！これからどう動く？悟空の旦那がいねえ今、戦力的には駄々下がりだ！」

「はい、強行突破のような力技はこのメンバーでは厳しいです。ですから……ここは二手に別れましょう。私がここに一人で残り鬼共を引き付けます。その間にお二人はお嬢様を追ってください！」

「「ええっ!?!」」

刹那の危険な申し出にネギと明日菜は声を上げた。

「そ、そんなつ刹那さん!?!?!?!じゃあ……じゃあ私も一緒に残る!?!」

「「ええっ!?!」」

明日菜の意外な発言にネギと刹那が声を上げた。

「で、でもアスナさん！」

「いや、バランスとしちゃその方がいいかもしれねえ……現状このか姉さんを搔つ攫えばいいだけだし、兄貴一人だけなら杖で一つ飛びだ！」

「しかしカモさん！アスナさんには気や魔力の加護が無いんですよ！？ここまで付いて来られたのが不思議なくらいです……」

「ああ、アスナの姐さんにや強化の類ができねえからな……せめて防御の手段がねえときつ　　！　　そうだそうだそうだ！オレっちとしたことが忘れてたぜ！！」

「か、カモくん？何か思いついたの？」

カモの豹変ぶりにネギは疑問符を浮かべた。そんなネギを他所に、カモはギラギラとした視線を明日菜と刹那に向ける。

「簡単なこつたぜ兄貴……兄貴と二人がサラツとブチユツとやりゃいいんだよ！！！」

「……なっ！？」

興奮気味のカモの全身をすかさず明日菜はアイアンクロー。

「な・に・をこの状況で！！！！！」

「ままま待て姐さん！！仮契約！仮契約だよ！！！！出る中身出る！！」

「え？・・・ああ、仮契約」

息も絶え絶えにカモは明日菜の手から逃れた。

「はあはあはあっそ、そうだ。兄貴の魔力供給で姐さんの身体能力、最低でも魔力での防御がまわせりゃ格段に戦闘力が違うぜ！カードを使えば連絡も取れるしな」

「で、でもそれってキ、キスするってことよね？・・・」

「それこそこんな状況だ！！ほらさっさとしねえと障壁がもたねえぜお二人さん！！」

言いながらもカモは目にも留まらぬ速さで地面に魔方陣を描いていく。

「キ、キス・・・」

そんな中、一人刹那はひっそりと物思いに耽る。

頭を過ぎるは山吹色の背中、振り返った笑顔が太陽みたいに眩しい、
悟く

「刹那さん？」

「つつつつ！！！？！？いいいいえ！！私はべべ別に！！あの方はあくまでも先生です！生徒と教師がそんな！！？ってそうじゃなくて！そ、そうですあの方は私の恩師です！！こんな邪な思いなど抱いていいはずがない！それに私などではあの人強さには吊りあわないです！！って違う！私は何を言って！あのあのですね！！」

「

顔を真つ赤に染めて刹那はまくし立てた。

ネギと明日菜はそれを不思議そうに見るが、カモは何やら得心いったという様子でニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべた。

「はっはくん……大丈夫ですよセツナのお嬢さん……」

「えっ！？ななんですかカモさん！？」

「兄貴は言ってもまだ10歳の“子供”だ。カウントにや入らねえよ。それよりも、なんだったらオレっちが何かと理由つけて悟空の旦那と一気にブチユっとなせつぐぎゃぶ！！？」「何コソコソくっちゃべってんのよ！！いたいけな乙女を唆すな！！！時間無いんでしょうが！！」 わ分かった分かった姐さん！！潰れるマジで潰れる！！！」

「あ、あはははは……」

どんな状況でも変わらない風景にネギは乾いた笑いを漏らす。

刹那は、まだ赤の余韻が残る顔を虚空に向け、静かに、祈るように手を胸に抱いた。

（待ってます……悟空さん！）

届くかどうか分からない、刹那なる思いを抱きながら。

「ん……………うう……………っ！ セツナ！……………か？」

目を覚ました悟空は、即座に身を起こした。

「……………そうだ、あの白い奴の、え〜と魔法で石になっちまって……………お、戻ってる!？」

足に視線を落としてみれば、石だった痕跡など何処にも無かった。元通り問題なく動いてくれる。

悟空は立ち上がり尻の埃を払う。

「それしても……………ここ、何処だ?……………ネギもセツナもコノカモアスナの気も感じねえ……………」

悟空の周りには文字通り『何も』無かった。

雑木林の湿った土も木も、植物どころか生き物の気配さえない。

見上げた空は黒。夜空ではない。月もなければ星さえない、絵の具をぶちまけた様なべた塗りの黒。そしてそれは悟空が立っている場所も同じだった。地面とさえ呼べない黒い世界がただただ無限に続いているようだ。

奇妙なことに、自身の姿だけが闇に浮かび上がっているかのようにはっきりと見て取れた。

「……そうか、これがエヴァの言ってた結界っちゅうヤツか！」

悟空はフェイトの手によりままと結界に閉じ込められてしまったのだ。戦闘で鎮圧するのは難しいといち早く判断を下したフェイトは、なによりも封じることには重点を置き、より広大でより強固な結界を張った。並の術者、魔法使いでは絶対に破ることの叶わないであろうモノを。下手を打てば永久に出られないこの結界。一度閉じ込められれば術者を殺すか餓えて死ぬかしかない絶望的状况。

「へえ、すげえ広れえなあ。精神と時の部屋黒くしたみてえだ。重力はそんなでもねえし、暑くも寒くもねえや」

悟空は暢気に元気に物珍しげにあちこちを見て回った。

地面を叩き、空高く飛び上がったたり、気功弾を放ってみたり（気功弾が後ろから戻って来たのに驚いてみたり）。

悟空は出来うる限り思う存分結界を遊ん調べた。

「はははは！面白れえなここ！修行すのにちょうどいいかもな……ん？」

黒い地面に着地したところで、ふと、悟空は我に返った。

何故自分はこんな所にいるのか？自分は何をしようとしていたのか？そもそもここは何処なのか？

「あれ？オラなんか忘れてねえか？……！！？
コノカ！！そうだオラはあいつに！！ネギ達がやべえ！」

唐突に自分の状況を悟空は思い出した。そして眼前の空間を睨みつける。

「早えとここつから出ねえとコノカが！……仕方ねえ、本気でぶつ壊すぞ！！はああ……！！！」

拳を握りこみ、悟空は徐々に気を開放していった。

悟空の気が高まるにつれ、黒い空間全体が軋みを上げるように揺れる。

「ぶっ！！！」

黒い空間を金の光が照らし出した。

金の髪を逆立て、金の焰を全身に纏う。出し惜しみはしない、悟空は全力で結界を破壊するため気を限界まで高めようとした。

その瞬間、悟空の全身を青い電流が走る。

「！？なんだ！？」

思わず悟空は超サイヤ人を解いた。
そして急いで自身の腕や体を見下ろす、が何処にも異常は見られな
い。
いやそれどころか

「まただ……強くなってる……今が、限界だと思
つてたのに！こいつは……もしかして！？……
ん？」

驚きに震えていた悟空は、その時頭に何かが響くのを感じた。ノイ
ズ交じりのそれは徐々に鮮明に、はつきりとしたものになっていく。

「声か？こいつは……」

『お……！こえて……！！……返事を……！悟空！
！！』

そして一層大きな声が悟空の頭に響き渡った。

聞き覚えのあるその声の主が誰なのかを悟空はすぐに理解した。

「エヴァ！エヴァじゃねえか！」

『！ やつと通じたか！……この……このアホんだら
ああ……！！私の忠告をなんだと思ってるんだ！！？』

「つつ！？いつちいい！エヴァ、あんま大声出さねえでくれ。頭ん中にもものすげえ響くぞ……………」

開口一番の大ボリユームに思わず耳を塞いで悟空は悶えた。しかし今のエヴァはそんな言葉などに聞く耳は持たず、怒りのままに声を張り上げた。

「なにが痛いだ！？カツコつけて約束した男がなんだこの様は！！」

「へ、へへへっ……………わりいわりい、まさか石になっちまうなんて思わなくてよ。それよか、よくオラの場所が分かったな〜」

「ただでさえ馬鹿でかい気を垂れ流してるお前の位置など痕跡を辿ればすぐに分かるわ！！人がどれだけ！！どれだけ心配したとつ……………」

「……………わりい、エヴァ」

先程までの大声より、悟空にはエヴァの涙声がなによりも堪えた。ぐすぐすと鼻をすする音を頭で直接聞きながら、悟空はそつと微笑んだ。

「……………もういい……………ぐすっ……………お前は無事のようにだしな……………今じじいに呪いの一時的開放を試みさせている。私

がそつちに行つて結界をぶち壊してやるから……お前を閉じ込めたヤツもついでに……だからちよつと待たせ、「いや、オラは大丈夫だ」……は？」

「この結界つちゆうヤツはオラ一人でなんとかする」

『お前……』

普段のエヴァなら何を勝手なことをと激昂するところだ。しかし、悟空の声音には揺ぎ無いものが込められているのをエヴァは感じ取った。強くて頑なでまっすぐで純粹な想い。

エヴァは悟った。この想いは文字通り揺るがない。

『……はあ……分かったよ。お前の好きにしる』

諦めたようにエヴァは溜息を吐く。

悟空はエヴァの言葉を聞くと、これ以上ないくらいの笑顔を浮かべた。

顔を見ずとも、エヴァには手に取るように悟空の表情が解った。エヴァの口元に苦笑いとも微笑みともつかない笑みが浮かぶ。

「サンキュー！エヴァ！」

『まったく……まあ、どつちにしろ私もそつちへ行く。……ぼーや達は二手に別れた。桜咲刹那と神楽坂明日菜が鬼共の相手を……ぼーやはちよつと白いの方へ行つたところだな。』

あれは今のぼーや達では少々荷が重いだろっ……ふっ、せっ
さと出て来い。お前の力を見せ付けてやれ!』

「……………ああ!」

悟空は表情を引き締め、拳を握る。

目に力強い光を宿し、まっすぐに見据えた。

黒い空間の向こうで待っていてくれる者達を、それを傷付けようと
する自身の敵を

「……………すまん!今行くぞ!」

両腕を腰で構え、気を開放する。

掛け値なし、手加減なし、迷いを捨てた悟空の全力に黒い空間は悲
鳴を上げた。

黒い大地は激しく震え、黒い空には次々に音を立てて亀裂が走る。

「はあああああああああああああ!……!……!」

響き渡る咆哮、走る稲妻、迸る金の閃光

瞬く間さえ与えず、悟空の気は結界を粉々に砕いた。

第20話 信じて待つのは……（後書き）

徐々に徐々に執筆速度が亀からゾウガメになりつつある足洗ですこんにちは。

遅くなつてすみません……。

今回、話は進まないは、悟空が活躍しないはで、なんかこう華が……次回こそは超サイヤ人孫悟空の活躍を！……書けるよう努力いたします。

では、読んでいただき本当にありがとうございます！

第21話 限界突破（前書き）

大更新が遅れてしまいました・・・すみませんすみませんすみません。

今回、無駄に長いです。後々切り分けたりするかもしれないですが、どうかお時間のあるときにでも読んでいただければ幸いです。

第21話 限界突破

「てやあああああ!!!!」

「奥義 雷鳴剣……!!」

ハリセンが、触れた傍から鬼を消し去る。
雷を纏った斬撃が、狐女と烏族を焼き消す。

互いに背を預け武器を構える二人。

「大丈夫ですか明日菜さん!？」

「うん! 敵ももう半分以下だよ!」

明日菜はそう言って刹那へ笑いかけた。

明日菜と刹那は圧倒的物量の差を物ともせず、それぞれの武器を駆使して戦闘をこなしていた。200体近かった妖共もすでにその半ば以上が送還されている。

「あまり無理はしないでください! あくまでも時間稼ぎが目的です

から！」

素人であるはずの明日菜の戦闘力に驚嘆しながらも刹那は明日菜をたしなめる。いくら妖の数を減らしたといっても現在の状況は未だ予断を許さなかった。

そんな刹那の思いを知ってか知らずか、明日菜は幾分余裕の出てきた様子で力強く頷く。

「大丈夫いけるよ！後はネギがこのかを取り返して戻って来れば！」

「

その時

明日菜の背後から影が迫る。

大刀を振りかぶり烏族の男は明日菜へ斬り掛かった。

「ぎゃっ！？」

明日菜はハリセンを手繰り刀の一撃をなんとか防いだ。しかし、その後にも二撃三撃と斬撃は続く。

「きゃあああああ！？」

同じく明日菜もハリセンを振るうが、大刀の勢い全てを殺しきるこ

とは出来ない。

「！！明日菜さ　　！つく！？」

明日菜へ注意を逸らした刹那にすかさず狐女が斬り付けた。
トンファーを思わせる小刀での出の早い斬撃。
長刀夕凧を巧みに駆使し、刹那も応戦する。

『なかなかや嬢ちゃん達！だが某、今までのとはちと出来が違うぞ
！？』

押され気味の明日菜の隙を突き、烏族の男は懐に入った。
器用にも自身の大刀の柄で明日菜のハリセンの柄を打つ。

「え？」

仰け反り胴体を晒した明日菜へ男は容赦ない連撃を見舞った。

「あつぐあうああ！！？」

痛みに思わず目を瞑り、堪らず明日菜は倒れこんだ。
ネギの魔力の防御により、切創、刺創のような致命的な傷を負って

とはないとは言え、明日菜の体には痛みもあればダメージの蓄積も見られる。

刹那は狐女をトンファーごと斬り払うとすぐさま明日菜を見やる。

「明日菜さん!？」

「あつく!・・・だ、大丈夫。これくらい・・・ネギの魔力が守ってくれてる・・・でもこの人(?)強い・・・」

明らかに消耗が見え始めている明日菜だが、それでもよろよろと立ち上がりハリセンを烏族へ向けようとす。

しかしそんなふらつく明日菜の腕を烏族は即座に掴むと、明日菜ごと持ち上げた。

「あ!?!この!離しなさいよ!!!」

宙ぶらりんの状態で明日菜は烏族の男の腹を蹴りつけるが、強靱な腹筋によりそれはびくともしなかった。

「明日菜さん!今行きます!」

刹那が急ぎ明日菜の元へ向かおうと踵を返す。が

「!!」

後方からの一撃を咄嗟に刹那は夕凧で防いだ。
上段から振り下ろされた棍棒の重い一撃に顔を歪めるもなんとか受け流す。

『神鳴流の嬢ちゃんの相手はワシらや』

肩に狐女を乗せた巨大な鬼は油断無く棍棒を刹那へ向ける。

(!?!?こいつらも別格・・・!)

烏族の男は明日菜を宙吊りにしながら言う。

『よくがんばった、といったところか。もはや手詰まりのようだな
』?』

「くっ!」

もう刹那は動揺を隠すことが出来なかった。明日菜は囚われ、妖の数も少なくはない。そして目の前に立ちはだかる化生の力は明らかに他の者を上回っている。

刹那一人のみでそれら全てを相手取るのは不可能だった。

その時

「なっ!?!」

『ほっほ、こりゃ見物やなあ』

木々の向こう、湖の方角から、一筋の光が天に差した。そしてその光からは徐々に巨大な何か蠢き出でている。

「あれは!?!」

「雇い主クライアントの千草はんの計画が上手くいつてるみたいですねー。あの可愛い魔法使い君は間に合えへんかったよっや」

「ネギ先生!?!? お前は!?!」

背後からの声に、ギクリとして刹那は振り返った。

そこには二刀を両手でだらりと携え、ゆっくりとこちらへ歩を進める月詠の姿。嬉しげな微笑はそのままに月詠は刹那を見つめていた。

「まあ、ウチには関係あらへんけどな。刹那センパイ……………あのお人がおらへんのは残念やけど……………」

「月詠!?!」

刹那の瞳が驚愕に見開かれる。
もはや形勢は完全に敵方へと傾いていた。

(どうする どうする どうする!!? あれはこのかお嬢様の力を使つて召喚儀式を!? ネギ先生は無事なのか!? 早く明日菜さんを助けなければ! しかしこの鬼に背を向けることは出来ない! 瞬動を使う? 月詠がいる! 『入り』を見切られれば一撃で極まる! それ以前に隙が無い! 力を、使えないのか !)

頭の中であらゆる戦法を考えては消し続け、必死に打開策を模索する。

内心で一層強まる焦りを刹那は頭を振って必死に頭の外へ追いやり、夕凧を硬く握り締めた。

額の汗が頬を伝い、顎から一滴川面へ落ちる。小さな波紋は消えることなく、やけに長い間刹那の足元を揺らし続けた。

(あの人ならこんな事で諦めはしない! あの人なら絶対に! あの人ならこんな時どうする!? あの人 人、なら)

そこで唐突に、刹那は気が付いた。

どんなに強がっても、どんなに信じていると口にしても、刹那の心は今も不安で押し潰されそうだった。

頭の中では、ずっと同じことばかり考えている。

(・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・・・・・・・・・)

自身の抱えているモノ全部を軽々と包み込んでしまふような、優しい笑顔が

悩み苦しむ自分を勇気付けてくれた、暖かい手が

ずっと心を占めているのだ。

(・・・・・・・・あなたがいないと、やっぱりダメみたいです・・・・・・・・)

379

刹那は幼い頃から、一人で闘い続けてきた。誰の手も借りず、強くなつて大事なものを守りたいと、ただそう願つてきた。

だからこそ木乃香とも距離を置いたのだ。寄り掛かる甘さを捨てるため。孤独でもより強くあるために。

哀しくて。寂しくて。

あの人はそんな自分の在り方を認めてくれた。そして変えてくれたのだ。

(・・・・・・・・助けて・・・・・・・・ください！・・・・・・・・)

刹那は生まれて初めて、ただただ誰かに希った。
剣士としてではなく、一人の少女としての純粋な願い。

(悟空さん！)

瞬間、轟音が世界を包んだ。音は山全体を震わせ、川は激しく上下する。

「っ！？」

「な、なになに！？なんなの！？」

『これは！？』

『なんやなんや！？地震』

『つな！？』

そして遙か森の奥、木々の間を突き抜けて、金色の光が一筋空へと走る。

刹那や明日菜、月詠やその場に居並ぶ化生達全てがその光を見た。

「ちよ、ちよつとちよつと!!またなんか出てくるの!?!」

「いいえ……あれは……あの光は」

驚きに声を上げる明日菜の言葉を否定しながら、刹那はじつとその光を見つめていた。

焦燥に満ちていた刹那の表情は、みるみる内に喜びで塗り変わっていく。

光が止むと同時に何かが高速で川面を目指し、飛んでくる。ものの数秒でその影は川面へ、飛沫を上げて降り立った。

碧に光る双眸、金に光る髪は風に靡いている。その男は刹那を見つけると笑顔で口を開いた。

「よおセツナ!すまねえな、遅くなっちまっおっと!」

「悟空さん!?!」

悟空が言い終わるのを待たずに、堪らず刹那は悟空に飛びついた。悟空の胸に顔をうずめ、くぐもった声で刹那は言う。

「悟空、さん!よかつたつ、無事つで……よかつたあ……」

っ！」

「……わかるかったな、セツナ……ははは、泣くな泣くな」

静かに涙を流す刹那の頭を悟空はぐしぐしと撫でた。

求めていたものの一つを頭の上で感じる。刹那はそれだけで心の底から安堵できた。

悟空の胴着をキュツと握り締め、童女のような笑顔で刹那は悟空を見つめ続けた。

「……せ、刹那さん、なんか凄く大胆になってない？……
……ってか悟空さん無事！！あとなんで金髪!？」

『いや、ええなあ、感動の再会シーンや……これが今流行の韓流いうやつか？』

『韓流ってあんたもう古いわな。でももうすつかり21世紀やねえ、昔はこんな人が仰山おる中であないなこと出来へんかったわ』

『せやな、最近の娘っ子は恥じらいいうもんが足りひんとワシは常々思とったんや……って人ってお前、ワシらどう鼻屑目に見ても化物やがな!』

『戦いの最中になんだ!? 見つとも無い!……ふむ』

『わ、ねねねキス? キスするの?』

「あひゃ〜、センパイも隅に置けへんわ〜 ホンマに……………」
妬けるわ……………」

「……………」

外野が非常に盛り上がりを見せているのを刹那は必死に見ないようにした。耳まで赤く染まった顔を必死に悟空の胸へ押し付け、隠れるはずも無いのに無駄な抵抗をしばし続ける。

悟空はそんな刹那に疑問符を浮かべるが、改めて自身の周りを見渡す。そしてそのまま視線は烏族の男に吊るし上げられている明日菜に止まった。

視線を受けて烏族の男は身構え

「アスナもすまねえ、随分遅れちまってよ」

「「え？」」

『『!?!?』』

明日菜は既に悟空の腕に抱えられていた。そのまま悟空は明日菜を刹那の傍らへ下ろす。明日菜は何が起きたのか解らず、頭に？マークが乱れ飛び、刹那は刹那で混乱を呈している。

烏族の男は先程まで明日菜の腕を掴んでいたはずの自身の右手を思わず凝視していた。

『……………ほう、確かにこりゃ、嬢ちゃんが泣くほど嬉しがるわ

「けや……」

『ああ……そのようだ』

にわかに場の雰囲気を変貌する。

鬼は槍や棍棒を構え、烏族達は陣を成して大刀を抜く。視線の全ては孫悟空ただ一人に集中していた。

『そう言う訳や。悪いがお前さ 「あきまへんえ〜」 ! 神鳴流の嬢ちゃん?』

大鬼を制して前に出てきたのは月詠だった。小刀を片手で遊びながら吐息を漏らす。

「ふっふっふっふ、ああ……いきなりそのお姿で会えるなんて嬉しいわぁ……」
「くうはん」

狂喜を顔に張り付かせ、三日月のように口元を吊り上げる。その目に映っているのは悟空だけ。

月詠は一步一步、ゆっくりと悟空へ近付いていく。

「おめえか。わりいな、あんまし時間掛けてらんねえんだ……
・ネギのヤツ無茶してやがんな……」

悟空は月詠を一瞥すると視線を虚空へと向けた。その先にある光る湖へ。

「あつはは そんなこと言つても、逃がしてあげへん」

笑顔のまま月詠は二刀を振りかぶった。傍らで明日菜と刹那が息を呑む。

「ざんがんけん……！」

右上段から袈裟懸けに切り裂かんと刀が迫る。

「ふっ」

だがそれを、悟空は左腕をかざすだけで受け止めた。

「っ!?!ははっ!」

刀と腕とが衝突し、川面で激しく波紋が広がる。月詠はその衝撃を利用して即座に後ろへ飛び退った。

「っはは！ホンマに悟空さんらしいわぁ……こっちが痺れてもうた……」

見れば月詠の柄を握る手は小刻みに震えている。

しかしそれでも月詠の笑顔は変わらない。それどころか、むしろ頬の赤みが増したようにさえ見える。

「でも、まだまだ足らへん……もっともっと楽しみましょ？
ごくうはん」

「……しょうがねえなあ……先に謝っとくからな？」

「え？」

月詠が不思議そうに首をかしげた時には、悟空は月詠の背後にいた。

トンッ

首筋に手刀を受け、月詠の意識はそこで途絶えた。

糸が切れたように倒れ掛かる月詠の体を悟空は支えると、近場の岸へと運ぶ。目をパチクリさせて呆然とその光景を明日菜と刹那は見ている。

悟空は再度自身の周りにいる化生達を見渡した。眼光は鋭く、纏う空気は明らかな強者のそれだ。

「わりいがおめえ達とまともに勝負してる暇はねえ……ちよつとずつこいけど勘弁してくれ」

気を開放し、悟空は構えた。

化生達が皆一歩後ずさる。

『……はっ！がっはははは！ええ度胸や！！』

『舐められたものだな……まるで、一人でこの数を倒し切れると言っているようだ……いや、事実そうか？』

『ぐわっはー、ホンマもんの反則キャラやないか……ワイ帰ってええ？』

奇妙に高揚した空気

鬼も烏族も狐女も、そして悟空も、皆一様に笑い

間髪入れず、それぞれの武器を携え、化生共数十体は一斉に悟空へ踊りかかった。

胸に掌を押し当てた。

相手はキョトンとしてこちらを見る。

口元に悪戯っぽく笑みを浮かべて、ネギは言い放った。

「ひっかかったね？」

「!？」

掌から光が迸る。

「解放 魔法の射手 戒めの風矢!!」

光の鎖はフェイトの全身を覆い、縛り上げた。

杖を呼び寄せ両の手でしっかりと握る。ネギはフェイトには目もく

れず祭壇へと急いだ。

「へへへ！流石兄貴だぜ！まだ20秒ちよつとだが遅延呪文をあ
白髪相手に完璧に極めちまうなんてよ！」

ネギの肩に乗ったカモが嬉々として言った。

「でもまだ油断できないよ！戒めの風矢は数十秒しか持たない！早
くこのかさんを！」

焦りながら水煙を掻き分け、ネギはようやく祭壇にたどり着いた。
しかし

「な！？このかさんがいない！？」

そこには空っぽの台座がただあるだけだった。

「んなバカな！？確かに姉さんはここに
！」
！？兄貴！上だ！

「！！な、なんだあれ！？」

水煙が晴れたその先、ネギの頭上、夜空が、光る巨体によって覆い隠されていた。

上半身だけが大岩から這い出た、30m強はあるその鬼神は小さなビルほどもある長大な二対の腕を湖に付いて、ゆっくりと半身を起こした。

そして鬼神の肩口には、木乃香と共に浮遊する千草がネギを見下しほくそ笑んでいる。

「オイオイオイ！！ちょっと待てよ！デケエっ！！！デカ過ぎるぜ！！！」

カモの叫びを聞きながら知らず杖を握る手が震えた。

目の前の鬼神の威容、その巨躯が揮うであろう力の大きさは、ネギにも十二分に理解できた。そしてその危険さも。

「ど、どうするよ兄貴！？あんなデカブツ相手じゃ戦いようがねえぞ！！！！！」

「つく！！！」

ネギは震える手を必死に押さえ込んだ。そして恐怖する自身の弱さを心で激しく叱咤する。

（震えるな！怖がるな！逃げるな！あの時だって僕は泣いてばかり

だったじゃないか！)

歯を食いしばり、ネギは鋭く鬼神を睨みつけた。

頭の中でネギは幾度も言葉を反芻する。

同時に思う。つい数週間前に硬く決めた自身の最大の目標。

(・・・修行するんだ・・・頑張るって約束したんだ・・・強くなるって・・・！)

《おめえはまだまだ強くなれる！本当だ！》

杖を左手に持ち替え、右腕全体を腰溜めに構える。

「ちよっ！？オイオイ！！兄貴まさか！？」

そして思い出す。

あのエヴァンジェリンさえも上回って見せたあの人の強さを。

頭の中を木霊するように重なるあの人の声を。

「！ラス・テル マ・スキル マギステル！！」

《かあ！》

本当は両手が良かったのだけれど、自分には杖がある。これだって

大切な目標の一つだ。

「来れ雷精！風の精！！！」

《めえ！》

でも、今はただ、あの人に追いつきたい。追いつくことは出来なくても、せめて一歩でも近付きたい。

「雷を纏いて吹きすさべ！！！」

《はあ！》

だからこんなところで立ち止まってなんかいられない。こんなモノに大切な人達を傷付けさせちゃいけない。

「南洋の嵐……………！！！」

《めえ！！！》

悟空さんなら絶対に！

「そんなことさせない！！！」雷の爆風』……………！！！」

《波あああああ！！！！》

体中の魔力という魔力を極限まで凝縮した雷は狙い変わらず鬼神の胸へ直撃した。

「のわああああ!?!?!?!?!」

鬼神の肩口で浮遊する千草は衝撃をもろに受けて吹き飛びかけるも、木乃香を抱えてなんとか踏ん張る。雷は尚も鬼神を吹き飛ばさんとその激流を強めた。しかし

「ぐうっ!?!?!」

「兄貴!?!やべえぞ!?!このままじゃ魔力が!?!」

びくともしない、傷一つ付けられないのだ。

その間にもネギの魔力は刻一刻と底を突きかけている。しかしそれでも、ネギは力を弱めない。

「まだっ!?!?!まだああああ!?!?!」

右腕に力を籠める。限界だと分かっているけど、決して諦めたりしない。

「だあああああああ！！！！！！」

「な、なに！？」

ネギが吼えた。鬼神の体は徐々に雷によって焼き尽き、その痛みに鬼神がもがく。

千草が驚愕に声を上げた。

自身でさえ驚かされるほどの巨体が、本当に微かにだが、押され始めたのだ。

だがそれだけでは、この鬼神を倒しきることなど出来はしない。痛む右腕を無視し、空になりかけの魔力を振り絞る。ネギはさらに自身の体に鞭打った。

「まっだ！！もう少し

！？」

その時ネギの全身を悪寒が走った。『雷の爆風』が掻き消えるのもかまわず、その場から体を全力で投げ出した。瞬間、閃光がネギのすぐ隣を過ぎる。

「うっぐー！！」

「おわあ！？兄貴！？」

ネギは受身を取ることも叶わず、ゴロゴロと棧橋へ転がっていった。カモはネギの肩から振り落とされ危うく橋を落ちかけた。ネギがようやく動きを止め、顔を上げた先にいたのは、冷たい視線をこちらへ向けるフェイト・アーウェルンクスの姿だった。

「その年であるの気転、そしてこの威力か……成程、認識を改めなければならぬようだ、ネギ・スプリングフィールド君」

「はあはあはっ！くっはあはあ……！？」

息も絶え絶えに、ネギは自身の右腕の肘から先の感覚が無いことに気付いた。ゆっくりとだが確実に石化が進行している。フェイトはネギに手をかざし、魔力を籠める。

「殺しはしない。けれど、相応の代償は払ってもらおうよ……彼が来る前に、ね……」

「やべえ！？逃げる兄貴！！！」

「はあはあ！っは、はあはあはっ……」

魔力はもうほとんど残っていない。数cm火を灯す事さえままならない。

体力はもう限界に近い。立ち上がるのさえ億劫だ。

眼前でゆっくりと歩み寄ってくるフェイトを、ネギは蹲って見てい

ることしか出来なかった。

(.....僕は、やっぱり弱いままだったのかな?.....)

ぼやけ始めた意識の中、ネギはぼんやりとそんな事を考えていた。立派な魔法使いを目指し、父親の手掛りを求め、麻帆良学園で教師として自分なりに頑張った。失敗はあったし、苦労もした。でも自分の目指し求めるものは変わらないはずだった。

だのに

何時からだろうか?強くなりたいたいと思いだめたのは?

迫るフェイトの姿。蹲る自分。

その時ネギは思い出した。橋の上で初めて会った、誰よりも強い、誰にも負けない、『今の』自分の目標。

ピシユンッ

目の前からフェイトが消えた。否、目の前に何かがあるのだ。オレンジ色の胴着と紺のシャツ、そして絶対に忘れない頭に乗る暖かい手。

ネギはもう、涙を堪えられなかった。

「悟空、さん.....!」

「遅れてすまねえ。大丈夫か?ネギ」

碧の優しい目を向けて悟空はネギに笑いかけた。ネギもまた泣き笑いでそれに応じた。

「ネギイーーーー!!!」

「ネギ先生!!」

ネギと悟空目掛けて刹那と明日菜が全力で駆けて来る。二人の姿を確認すると刹那も明日菜も目に見えて安堵した。

「もう!!悟空さん!途中で落とすからビックリしたじゃない!!
つてネギ!あんたその腕!!」

「っ!?先生!」

「はっははは……だ、大丈夫、掠っただけです。これくらい……」

弱々しく笑って見せるネギはどう見ても大丈夫とは言えない。明日菜はネギの態度に怒りとも焦りともつかない感情を覚え、思わず声を荒らげた。

「あんたねえ!ガキなら痛いとか辛いとかもっとはっきり言いなさいよこのバカ!!」

「あつす、すみません！痛いです！アスナさん痛いですよ〜!？」

同時にネギの両頬をぐにぐにと引き伸ばす。

二人の遣り取りに悟空は笑った。そして静かに口を開く。

「…………ネギは休んでろ。アスナ、セツナ、ネギの事頼むぞ」

「う、うん任せて！」

「……………」

刹那は正面に視線を向け、また悟空に視線を戻すと黙って首肯した。悟空はそのままネギ達に背を向けた。そして眼前の敵をまっすぐに見据える。

「15分、持ったほうか。粉々にされるとは思わなかったけど……
……召喚した鬼が全部一瞬で還ったね。あれも君の仕業かい？」

「……………」

フエイトの問いに悟空は答えない。一步一步ゆっくりと、悟空は歩を進める。

「……………ヴィシユ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト
小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ」

「やっべ！？旦那！！」

咳かれたその文言だけでカモは戦慄した。

「姐さん！！ヤツの詠唱止める！！そいつぁ石化の！！」

「

カモは必死に声を張り上げ、ネギ達の下へ全力疾走する。
刹那と明日菜はフェイトを見た。そして尚も歩みを止めない悟空を見た。制止の声を上げようとするが間に合いはしない。

「『石化の邪眼』！」

「『悟空さん！？』」

フェイトの指先から閃光が走る。照射された魔のレーザーをもちに受け、光が悟空の体を、橋を包み込む。
その瞬間、その場にいる誰もが石に成り果てた悟空の姿を想像した。
フェイトでさえも

「な」

フェイトは微かに声を漏らした。確かに当たった、直撃したはずだ。

「……………何故？」

「……………」

悟空は歩き続けていた。

石化は痕跡どころか、予兆さえ見られない。その体に金の炎を纏った悟空は、フェイトをまつすぐに睨みながら歩いている。

「（抵抗^{レジスト}？いや違う。では……………）ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト！……………」

さらにフェイトは呪文を紡ぐ。内心に本人でさえ気付かない程の驚愕と焦りを抱きながら。

「『石化の邪眼』！！」

再度、フェイトの魔力光が悟空を襲う。先の一撃とは比べ物にならないほどの魔力を籠めてだ。

ネギ達は思わずその光に目を覆った。

そして光が止んだ先に

「終わりか？」

「っ!？」

悟空は静かに佇んでいた。

「……………そうか、気で僕の魔力を……………」

目を見開き、悟空を見据えながらフェイトは呟いた。

悟空とフェイトの距離は最早数m。どちらにせよ十分な間合と言えた。だがフェイトは知っている。正攻法で挑めば、自身が勝てる見込みが薄いだらうことを。

フェイトは瞬動に『入った』

「!?!？」

フェイトの着地点は数十m先のネギ・明日菜・刹那の背後。三人のうち辛うじて反応出来たのは刹那だけだった。

「まずは君達からだ」

眩くと同時に魔力を籠めた手を振り上げ

「っ!？」

傍らの悟空にその手を掴まれた。振り上げた姿勢のままフェイトの手はびくともしない。

怒りに眼光が鋭さを増し、握る手に力が籠められ、フェイトの腕をぎちぎちと締め上げていく。ネギも明日菜もそんな悟空に息を呑んだ。

「おめえはもう……許さねえって言っただろ!!」

空いた左の拳を悟空はフェイトに叩き込んだ。

フェイトは湖面を盛大にバウンドして飛沫を上げながら吹き飛んで行く。

そして、湖面を背にフェイトが見上げた先に、悟空はいた。

「なっ」

「今のはネギの、こいつはコノカ的分だ!!!!」

怒号と共に、右の拳を叩き込む。巨大な水の柱が天を衝いた。

棧橋に降り立った悟空に三人と一匹は駆け寄った。目に喜びと安堵とを湛え飛びつくように声を上げる。

「悟空さん！無事だったんですね！」

「旦那ああああ！待ってましたぜ！！あの白髪野郎をあんな簡単にノシちまうなんてよ！？」

「ってそうよ！初めから悟空さんがいたらこんなややこしいにならなかったわよね！？」

「ははは！わりいわりい、ちょっと油断しちゃった。でも、うん！よく頑張ったなネギ！後はオラに任せておめえ達は休んでくれ！」

ネギの頭をポンポンと撫でると、悟空は鬼神を、そのすぐ傍で浮遊する干草と木乃香を見た。

「まずはコノ力を取り返えさねえとな。巻き込んでしまう……」
額に指を当て、悟空は瞬間移動の準備に入った。文字通り一瞬で木乃香を取り戻し、力を試す。みすみす怪我など負わせるつもりは悟空に無かった。

「じ、悟空……さん……」

「うん？なんだセツナ……」

先程から沈黙を保っていた刹那の、おずおずとした呟くような声に悟空は振り返った。

「……どうした？」

そして不思議そうに首をかしげた。
泣きそうで、辛そうで、迷っているようで、決意したような、複雑な感情が入り混じった刹那の顔。刹那は夕凧を握り締め、悟空と目を合わせては外しを繰り返す。

「……私は……実は、隠している事が……あ
ります……」

「？ 隠してること？」

「お嬢様が囚われているこんな時に申し訳ありません！……でも……これ以上、悟空さんに……このかお嬢様の為に必死になっているネギ先生達に、隠すことは……」

「刹那さん？……」

今や刹那の心は罪悪感で満ちていた。

一般人であるはずの明日菜をここに来るまで多くの危険に晒してしまった。

魔法使いと言っても10歳の幼い子供であるはずのネギの右腕は石になった。

全ては、本来の役目を全うできなかった自分に責があるのに、この上まだ、自分はこの人たちを騙し続けているのだ。

そして、悟空には

(……いや、違う。っはは、言い訳だ……私はただ、嫌われるのが怖かっただけ……)

刹那は相変わらずキョトンとして自分を見る悟空の顔を見た。今から行う行為によって、その顔が嫌悪に歪むかと思うと怖くて怖くて堪らなかった。

しかし刹那は動いた。唇を噛み、自身を掻き抱くようにして前のめりなる。制服が捲くれ、背中から感じるもう一つの自身の一部。純白の翼がその姿を現した。

突然に広げられたそれをネギと明日菜はアングリとして見る。

二人の視線を受けて、刹那は自嘲的に笑った。

「ご覧の通りです……私は人間ではありません。奴らと同じ化物です……で、でも！信じてください！私がお嬢様を御守りしたいという思いは本当なんです！……ただ、こんな醜い姿をお嬢様や皆さんに……知られるのが、嫌われてしまうのが、怖かったんです……！」

熱くなる目を隠し、刹那は震えた。先程から意図的に視線を避けている人物を見ることが出来ない。

何を言われるだろうか。恐怖され、忌避される？いや、この人は強い。嫌悪し、或いはその手で調伏されるかもしれない。

(ああ、でも……この人にだったら……)

半ば諦めと絶望に埋まる意識。そんな中でとうとう悟空は口を開いた。

「セツナ……」

「っ……」

ビクリと身を震わせ、硬く目を閉じる。次いで紡がれるであろう拒絶の言葉に刹那は備えた。

「キレイだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

飾り気も無い、色気も無い、ただただまっすぐな言葉なのに、刹那
はそれが理解できなかった。
思わず刹那は悟空を見る。

そこにはいつもの笑顔をこちらに向けて、なにやらジッと刹那を見
る悟空。

「・・・・・・・・・・う〜〜ん、喜んでねえな・・・・・・・・なあエヴ
ア、やっぱり桜餅の方がいいんじゃないかねえか？」

「え」

悟空はそう言つと自身の影に視線を向けた。

「っ！！ふふっふ！はははははははははは！！何をバカやつとんじやお
前ら！？つぶ、あつはははははは！！！」

「こんばんは、ネギ先生、明日菜さん、桜咲さん、悟空さん」

ズルリと悟空の影から這い出したのは、腹を抱えて笑い転げるエヴ
アンジェリンと静かに辞儀する茶々丸だった。

「エヴァンジェリンさん！？なんでここに！？」

「ちゃ、茶々丸さんまで！？」

二人の唐突な登場に悟空以外の混乱する面々。エヴァは笑いながらなんとか悟空の手を借りて立ち上がった。

「ふっふふ、じじいに呪いの精霊を騙させているっふふ！別に助けに来たわけじゃないからなっぷ！ははっ」

「エヴァ、どうした？なんか悪いもんでも食ったんか？」

「お前のせいだ！っははは！お腹痛いっ！ふふふふっ……………」

少々壊れてきたエヴァに首をかしげるも、悟空は改めて刹那へ向き直った。

「セツナ」

「は、はいっ！」

「おめえがなんで悩んでんのか、正直言つとオラ解んねえ。でもおめえ嫌われちまうのが怖いって言ったよな？」

「え？・・・・・・・・はい」

神妙な顔でそう尋ねてくる悟空を刹那は不思議そうに見返した。悟空は腕を組むとうんうんと唸り、頭を捻る。

「・・・・・・・・やっぱどう考えてもコノカがおめえのこと嫌いになるとは思えねえんだよね・・・・・・・・アスナどう思う？」

「え？そりゃ・・・・・・・・なるわけないじゃない！刹那さんさ、一体このかの何見てきたの？このかがこんな事で誰かを嫌いなるなんてありえないわよ！」

明日菜はそう言って力強く刹那へ笑いかけた。それを刹那は呆然と見る。

「うん、やっぱそうだよな。それによセツナ、人間じゃねえってんならエヴァも吸血鬼っちゅうやつだ。チャチャマルはロボットだよ。オラだってそうだ。だからよ、別に気にすることなんてねえさ！」

にっ、歯を見せて悟空は笑う。

あの夕暮れからずっと自分を惹きつけて止まない、あの笑顔だった。胸のつかえが取れたようだ。嬉しくて嬉しくて、刹那は声を殺し泣いて、笑った。

「……………行けるな？セツナ。コノカのこと頼んだぞ！」

「……………はい！」

刹那は地を蹴る。重荷はもう無い。足取りは軽い。大切な人を助ける為に刹那は羽ばたいた。

刹那を見送った悟空は、今度は鬼神だけを見据えた。今夜最後の自身の相手を。

「んじゃ、ちよっくら行ってくつぞ！」

そして悟空は飛び上がり、鬼神の待つ舞台を目指した。

悟空を見送ったネギはそこでふと、首をかしげた。明日菜が訝しげにネギを見る。

「どうかしたの？ネギ」

「え、いえ、確か悟空さんさっき……………人間じゃないって……………」

「？ 何を今更言っている。あいつこそ本物の化物だぞ？」

「「え？」」

眼前には巨躯の大鬼神。悟空はただ静かに空に浮かんでいた。

傍らの千草は手ぶら。木乃香は既に刹那が取り返した。

額に青筋を浮かべて悟空を睨みつけ、千草は口の端を吊り上げる。

「あのガキが居らんかてな孫悟空……今日があんたの最後の日に変わりは無い！このスクナの力さえあればあんた所か関東魔法協会かて敵やない！！……今まで散々コケにしてくれたなあ！？」

千草は怒りのままに声を張り上げた。過去に受けた屈辱と恐怖は関東魔法協会への復讐心と混じりあい、奇妙に歪んだ感情を形作っている。憎悪を孕んだ瞳は力を入れた興奮に光り、見る者を圧倒する迫力があつた。

しかし、悟空の眼中には無い。

「よお、おめえ口利けねえのか？」

悟空はスクナへ問う。鬼神は物言わぬ彫像のようだった。悟空がここに来る前に出会った鬼達のように愉快的な会話も出来はしない。でも

「そっか、まあいいや。これからオラ、全力でおめえと闘うからよ。おめえも全力で応えちゃくんねえか？」

構わず悟空は続ける。鬼神は何も答えず、動きもしない。

「オラ孫悟空だ。本気の勝負だかな。手え抜くんじゃねえぞ」

鬼神は何も答えない。

「ふっ！」

悟空は気を開放し、金色の炎を纏った。鬼神はピクリとも動かない。

「っ！はああああ………！！！！！！」

拳を握りこみ、両腰で構え、悟空はさらに気を高めていく。鬼神が

拳を握りこむ。

「がああああああああああ!!!!!!!!!」

金色の炎はその勢いを強め、その都度バチバチと稲妻が悟空の全身を走った。鬼神は微かに身じろぎする。

「あああああああああああ!!!!!!!!!」

『グウ………ア………!!』

悟空の気が高まっていく。

山は鳴動し、風が吹く。湖が波立ち、雷を呼ぶ。

悟空はまた一つ、壁を超えた。

「うわあああああああ!!!!!!!!!!!!」

『ガアアアアアアアアアア!!!!!!!!!』

呼応し合うかのように、悟空と鬼神は吼えた。

「悟空殿……………ははは！これはこれは、なんとすごい御仁でござるよ……………」

「はあ！？あれがあの子ちゃんなんか！？……………なんやねんそれ……………反則やわ……………」

「……………ふふふ、悟空さんも目一杯張り切ってるね」

「や、やはり私の目に狂いはなかつたアル！！悟空さーん！私と闘うヨ……………」

「おやおやこちらもか」

「せつちゃん、あれって……」

「はい……悟空さんです」

「そっか、すごいなあ悟空さん……ふふふ、なんちゃキラキラ
しとってすっごい綺麗やねえ」

「……うん、そうやね……」

鋭利に逆立った金の髪、バチバチと走る蒼い稲妻。

鬼神は明確に眼前の脅威を睨んでいた。感情を読み取ることが出来ないその目に悟空だけを映している。

悟空は不敵な笑みを向け、鬼神を指で招く。

「今度のオレは、ちよつと強えぞ?」

『ガアアッ!!!!!!』

鬼神はその大樹の如き長大な腕を振るい、岩の如き拳を悟空へと叩き込んだ。

衝突

衝撃が激しく大気を震わせる。

『!?!?』

しかしそれでも拳は止まった。悟空はびくともしていない。

「そんなパンチじゃ効かなねえぞ……本気を出せ!!」

『!!グウオオオオ!!!!』

悟空の言葉に激情したかのように再度鬼神は腕を振りかぶる。先の一撃以上の力を乗せて悟空へ拳を振り下ろす。

「だありゃああ!!!!」

迫る拳に対し事も無げに、悟空は応じた。拳と拳がぶつかり合う。

そして大樹が折れたかのような破碎音を響かせ

ピシュンッ

唐突に青い光が辺り一面を照らし出した。

腰溜めに両手を構え、尋常ならざる気を籠めて
迫り来る鬼神を悟空は見上げる。

「じゃあな！！波ああああああああ！！！！！！！！」

青い極光が鬼神を飲み込んだ。

『ガアアアアアアアアアアツ！！！！ツ・・・オ・・・エ・・・ゲ・・・！』

『

大気を震わせ雲を蹴散らし、大鬼神スクナノカミは跡形も無く、この世から消え去った。

「ふんっ、手間取りおって・・・ばか・・・」

「はあはあはあ！へっへっへっ、でも、はあ、オラの勝ちだ！」

悟空は橋に体を預け、そう言っただけでまた笑った。

第21話 限界突破（後書き）

はい、やっとこスクナ戦終了です！……. どんだけ掛かってんのって話ですね…….

今回学んだ事なのですが……. キャラクターを一度に動かすのは至難です。いや死なんです。面白いぐらいうまくいかない！

作者の力量の限界が見えたので、どうぞご意見御感想などおありでしたら、遠慮なく言ってやってくださると本当に嬉しいです。

それでは、読んでいただきありがとうございます！

第22話 笑って終わって

湖に掛かる棧橋の上で、悟空は膝に手を付いて立ち上がった。額からは汗を流し、呼吸は未だ乱れたままだ。

「はぁ・・・はぁ・・・へえ・・・ふいっ、へっへへ、やっぱまだ、体が付いて行かねえや・・・」

「当たり前だ。あんな大質量の気を体内で一気に爆発させたんだからな。普通なら体がバラバラになるか、はたまた破裂するかといったところだ・・・お前らサイヤ人はやはり化物だな・・・」

呆れ、驚嘆、畏怖、様々な感情を混ぜてエヴァは最大限の皮肉を悟空に見舞った。エヴァの言葉に悟空は苦笑いする外ない。

「へへへ、ひでえなエヴァ」

「ふんっ！知らんわ！・・・散々心配かけおって・・・」

そっぽを向き、唇を尖らせたエヴァの咳きは悟空には聞き取れなかった。それでも、悟空にはエヴァの在り方がひどく懐かしく見えた。何度と無く自分を助けてくれたが一度としてそんな言葉は口にしなかった、自身と同じサイヤ人の誇り高き王子。何とはなしに悟空はエヴァの頭を撫でていた。

「……サンキューな、エヴァ！」

「べ、別につ……気にするな……」

「ははは、そっか」

少々乱暴な悟空の手を、エヴァは振り払うことはしなかった。子ども扱いするなどが、髪が乱れるとか、そういう言い訳を用意していない事もない。しかし、高々数十分前に感じていた感触はどういう訳か懐かしくて、しばらくの間浸っていたいと、エヴァは思った。暖かい手はどうにも心地よくて、そっと目を閉じる。

「マスターったら、あんなに嬉しそうになさって」

(え?え?じゃあじゃあエヴァちゃんってもしかして……!!?)

(へへへへ!いい勘してるぜアスナの姐さん!ありや確かに脈アリだ!悟空の旦那はまったくこれっぽっちも気付きやしねえあたりらしいっちゃらしいがよ……。エヴァンジェリンの奴内心じゃそれこそ天にもものぼ「そんなに食われたかったのだな下等生物。煮るか?焼くか?或いは刺身がお好みか?悟空好きなのを選べ、私が直々に調理してやるう」……)

黒く塗られた爪がその半ばほどまで肉に刺さり、真っ青を通り越し

て紫色に変色を来たし始めたカモの顔を、エヴァは素敵な笑顔で見やる。

少女とはいえ見目麗しい美貌の持ち主であるはずのエヴァの微笑に、何故か震えが止まらなかつたのだとネギは後に語る。

「うん？そう言やオラ、イタチは食ったことねえな．．．．．美味えかもしんねえな．．．．．？」

「旦那あああああ！？！？オレつちが悪かった！！だから助けて！！食わないでええええ！！そしてオコジヨっす！！！」

比較的真面目にそんな呟きを漏らす悟空にカモは戦慄し叫び懇願した。ばつが悪そうに明日菜も乾いた笑いを漏らす。

「はっはは、じょ冗談だ！冗談！ホントだって、な？はははは．．．」

「．．．．．だ、旦那．．．．．ホントに勘弁してくれよ？いやマジで．．．．．」

命からがらエヴァの手から逃れたカモは、孫悟空という新たな脅威を認識した。

「はははは．．．．．うん？．．．．．ネギ？．．．．．」

「ん？どうした？」

その時、悟空は気の揺らぎを感じた。

それは如何にも弱々しく、蠟燭の炎のようにゆらゆらと頼りない。

ゴトリ

重い右腕を橋に打ち付けながら、ネギはその場に倒れ付した。

「ネギ！..！」

「ちよちよつとネギ!？」

「はあっはあっはっ、うっ……」

瞬時に動いた悟空がネギを抱き起こす。ネギは浅い呼吸を繰り返し、額からは大量の汗を流している。右腕はすでにその全体が石と化し、肩へと進行を始めていた。悟空は驚愕に目をむく。

「悟空さ〜ん！ネギく〜ん！アスナ〜ん！」

「悟空さん！ネギ先生!？」

「コノカ！セツナ！」

「このか!..！」

棧橋の向こうから二人が駆けて来た。タオル一枚を羽織った木乃香とその後ろから追従する刹那。全速力で二人はネギと悟空に走り寄った。

茶々丸が傍らで触診を始めた。その感情に乏しい表情は徐々に焦りで染まっていく。

「ネギ先生の魔法抵抗力が強すぎるため、石化の進行が異常に遅い。このままでは、石化が首を覆った時点でネギ先生の呼吸は止まり・・・死に到ります」

「!？」

「そんな!？どどどつすればいいの!？」

明日菜は目に涙を湛えて声を上げ、悟空はネギに気休めでもと自身の気を分け与えながら表情を鋭くした。焦りの色は濃いままだ。

「どつしたでござるか!？」

「どないしたんやネギ!？」

「ネギ坊主!？」

「!・・・」

小太郎を含め、合流した楓達が急いで駆け寄ってくる。悟空は拳を握りながら首を巡らせてエヴァを見た。

「エヴァ！なんとかなんねえのか！？」

「わ、私は治癒系の魔法は苦手なんだよっ……その、不死だから」

必死な悟空にオロオロとエヴァは首を振った。だがそれでも悟空はらしくもなく頭を捻り続ける。

ここには仙豆もドラゴンボールも無いのだ。ネギを助けるにはどうすればいい。ピッコロの言葉がひどく頭の中で響いた。

「応援部隊ならなんとか治せるだろうが……くっそ間にあわねえぜ！」

「そ、そんなっ！？じゃあネギは！？」

カモの言葉に明日菜はいよいよ泣きそうになった。他の面々も一様に表情が強張る。

「お嬢様……」

「うん……」

その時、刹那に促されるように木乃香が一步前に出た。全員の視線が木乃香に注がれる。

「コノカ?・・・」

「あんな、アスナ。ウチこれからネギくんにチューしてもええ?」

「はあ!?こんな時に何言ってるのか!?!」

「ちゃうちゃう!あのホラ、ぱ、パクテオーとか言うのやよ」

「え・・・」

「そ、そうか!その手があった!!!」

激昂しかけた明日菜は木乃香の言葉にハツとした。そして力モはすぐさま陣を描いていく。

木乃香は周りのクラスメイト達を見渡しゆっくりと口を開いた。

「悟空さん・・・皆も、せっちゃんからいろいろ聞きました。ありがとうございます。今日はウチを助けるためにたくさんの人にお世話になりました。ウチにはこれくらいしかできひんから・・・」

木乃香はそう言うとネギを抱える悟空の傍らへ屈んだ。悟空がまっ

すぐに木乃香を見る。

「……………頼む」

「……………」

木乃香もまた悟空の視線をまっすぐに受けて、無言のまま決然と頷いた。ネギの頭に手を添えて唇を寄せる。

「しっかり……………」

小さな呟きを最後に木乃香はそっとネギに口付けた。

瞬間、光が満ちた。

柔く暖かな光は湖を覆い、山を覆い、山の向こうの邸を覆う。

その場の全員が眩しさに目を細め

そして徐々に光は弱まり、束の間の静けさの後、ネギはゆっくりと目を開けた。

「あ……………このかさん……………よかった、無事だったんですね」

「ネギくん!」

「ネギ!」

石の箇所など何処にも無い。ネギは木乃香や悟空を目にすると、柔らかに微笑んだ。本当に心底安堵を噛み締めるように。

古菲は飛び上がり小太郎は安堵に息を吐いた。楓と真名は微笑み、エヴァはそっぽを向き茶々丸がそれを茶化する。明日菜は笑いながら気恥ずかしげに涙を拭い、刹那は思わずガッツポーズ。そして悟空は

「よかつたなあネギーー！！！！そんですっげえぞコノカーー！！！！ははははー！！」

「あわわわ！？ご、悟空さん！？」

「わあ〜！アハハハハハ」

ネギと木乃香を抱き上げてくると振り回す。戸惑うネギも結局笑い、木乃香は元より喜びを隠すことなく笑っている。そして子供のように、満面の笑顔を浮かべて、悟空は笑った。

カーテンを開け放った学園長室は、その広大な窓から差し込む朝の暖かな陽光によって明るく照らし出されている。そして室内には数人の教員と生徒達。

葛葉刀子は溜息を一つ吐くと、今しがた頭の中でまとめた情報を口にした。

「死傷者ゼロ、被害も最小。石化についてもネギ先生自ら治癒に当たり事無きを得たと。応援部隊の意味がなくなりました」

「ふおおおお、それが何よりじゃろて……（このかにも、いずれ知らねばならん時が来たじゃろうしの……或いは、今回の事件はその良い機会じゃったのかもしれない）」
ペタコンッペタコンッ

そう言つて近衛近右衛門は笑みを濃くした。報告書片手に、それにつられて他の教員達も微笑んだ。

しかし、刀子は再度の溜息。

「……………」
「……………」

「ふおおおお、無論その過程から目を逸らすことなぞせんよ。さ

てはて、一体何をしてくれたんじゃ悟空くんは？」
ペタコンッペタコンッ

酒の肴にでもしかねない近右衛門の態度に教員達の苦笑いはその深さを増した。ガンドルフィーニなど思わず眉間に皺を寄せ米神を押しさえて唸っている。

「……まずはおの大規模な気の放出、もとい爆発で、西の本山の結界が消し飛びました。人払いや認識障害のように局地的に展開していた物がその効力を如何なく発揮してくれたおかげで、一般人が現場に居合わせるといふ最悪のケースは間逃れましたが、爆音、地響き……いえ地震ですね……は思い切り外へ。震源地高度数百m上空・震度5弱という地震大国日本始まって以来の珍事として、報道機関、気象庁が混乱状態です」

「ふおおお！悟空くんは地を震わせたか！なんとも豪気じゃわい！」
ペタコンッペタコンッ

「コホンッ！」

心底愉快げに学園長は笑った。刀子は咳払い一つでそれを一蹴。

「う、うむすまん………して、彼の大鬼神は？」

「……封印処理に向かった者の報告によれば『跡形も無く』
だそうですね………」

「ほう……」
ペタコンッ

一瞬、近右衛門の目に剣呑な光が宿った。俄かに室内がざわつく。飛騨最強の鬼神が完全に“消滅”したと言っただ。するとその時、少女が一人前へ出た。少女、夏目 萌は自前の眼鏡の位置を直しておずおずと続けた。

「そ、それから悟空先生が放った……気による収束砲？でしょうか？……は昨晚未明、関西呪術協会本山より結界を越えて上空へ……ものの数秒で大気圏を突破後、地球軌道を離れました……」

「……は？」
ペタコンッ

「さらに今しがた天文部から報告が。『謎の流星は惑星の間を縫って現在太陽系を脱した』と……。幸いその時刻、奇跡的に各国の人口衛星が射線上を避けて航行していた為、あの極光の正確な情報を掴んだ国はありません……。ただ、地域の住民はバツチリ目撃したようでして、ネット上では『日本政府が秘密裏に保有する兵器の実験』『超巨大生物の放射能による白熱光』『有名バンドの解散ライブで使用したネオン光』などなど噂が絶えません。現在最も有力な説は『UFOの帰還』ですね」

そう言っつて萌の背後から明石教授が続いた。

さしもの近右衛門もあまりの規模のデカさに絶句。口を開けてポカ
ンとしている者も少なくない。

「……………悟空くんは都市伝説まで作ってしもうたか……………」

「
ペタコンッペタコンッ

「僕は個人的には超巨大生物が好きですねえ。子供の頃よく映画見
に行きましたよ」

「古き良き特撮ですか、いいですね〜。でもアメリカ版だつて捨て
たモンじゃないですよ？CG技術を駆使した迫力がまたなんとも・

……………」

「……………一体何の話をしているんですか……………」

少々の現実逃避に走る式集院ら他教員達。そして頭痛を催し始めた
ガンドルフィーニは、とうとう声を荒らげた。

「学園長！彼の、悟空先生の今回のやり方はあまりに短絡過ぎます
！力の行使は今回のケースを考えれば致し方無いとはいえ限度と言
うものがあるでしょう！！全世界、宇宙規模で魔法をばらす気です
かあの男は！！？」

「ふおふおふお、確かにのう。いや〜本に悟空くんは派手じゃな。
遠く離れたこの学園まで気の余波が来るんじゃないから〜」

ペタコンッペタコンッ

「またそんな暢気な……それから聞きましたよ!? あの闇ク・エヴァンジェルの福音を解放したそうですね!!!?」

「いやいや一時的にじゃぞ? エヴァにもちゃんと約束を取り付けておる。心配せんでも大丈夫じゃ」
ペタコンッペタコンッ

「悠長に言ってる場合ですか!! 奴は悪の魔法使いなんですよ!?!」

のらりくらりと返す近右衛門へガンドルフィーニは眼光鋭く詰め寄った。規律を重んじる彼の性格上、悟空のハツチャケ・魔法バレの危機・エヴァ解放(子供時代の悪者刷り込み)はおよそ看過できるレベルではない。

室内の空気が重みを増す。近右衛門もまたガンドルフィーニの視線にまっすぐに応じた。

そこでふと唐突に、空気の重さに気付くことなく、弐集院は思った。

「そう言えば、悟空先生と半解放状態のエヴァンジェリン二人なら、この学園でも案外簡単に落とせちゃうかもしれないですね? はははははは!、はは? ……あれ?」

「……………」

「へっくち!」

「ん? エヴァ、やっぱり風邪引いてんじゃねえのか? 無理すんな」

「封印されているなら兎も角、今の私が風邪なんぞ引くか……
・いや、なにやら現在進行形で絶好の機会を逃しているような気が
してな……?」

「うん?」

近衛邸の寝所、その縁側に悟空とエヴァは居た。竹林を背景に、見事に彩られた庭園を眺めながら二人は湯飲みから茶をすすする。

「ふう……. ようやっと静かになっ たな…….」

「ああ、セツナもアスナも、ネギのヤツも結構無茶したかな。ま、寝て食えば元気になんだろ」

「お前の基準で語るのはどうかと思うが……近衛木乃香の力で傷は癒えた。存外お前の言う通りかもな」

そのままエヴァは悟空の胸にもたれ掛った。

現在二人は、悟空が胡座を掻いて座りその上にエヴァが座るといふ体勢を取っている。座ってポウっとしていた悟空に、猫よろしく擦り寄ってきたエヴァ。悟空座椅子をエヴァはひどく気に入ったようだ。

「……今日一日は、観光に付き合えよ……こんな機会、もう無いかもしれんし……」

「ああ、いいぞ。何処行つかな？」

「まずは……清水の舞台……次は銀閣寺……それ、から……京料理つまんで……」

背中を包む暖かさ、早朝の柔らかな陽光。それらはどうしようもなく眠りを誘う。

徐々に徐々に、エヴァの瞼は重くなっていった。

「飯な。いろいろ食うぞー！」

「ふっ……お前は、そればっかだな……」

そんな笑顔の悟空を見て、エヴァは柔く微笑んだ。

「まあな、ははは！あ、そう言やオラ、まだエヴァに土産やってなかつたな。いいもん選べたからよ、楽しみにしてろ？」

「ああ……」

コトリ、と湯飲みを傍らに置き、エヴァは悟空へ身をゆだねた。気持ち良さそうに丸まる様は正しく猫のようで

「……少し、寝る……時間になったら、起こせよ……」

「ん？おお」

「……すう」

それ程の間もおかず、エヴァは静かに目を閉じた。穏やかな寝息を聞きながら、悟空は一人朝食のメニューを考える。眠る少女の髪を悟空はそつと撫でた。ほんの少しだけ昔、自身の息子にそうしたように。

おまけ

「わわわ！なんだか悟空さんとエヴァンジェリンさんが急接近します！」

「ほほうう……撮つとこ〜」

「ううん、でもあれってどっちかって言うとお父さんに甘える娘と
いうか……」

「休日に遊ぶ約束をして、いざ遊ぼうとしたものの結局寝てしまっ
た、といった風情かな？」

「あいあい 微笑ましいでござるな。だからクーも今は自重するでござるよ」

「ふむっ！ぐも！うう〜！」

「その通りだよクー。ふふふ、刹那もそんな顔してないで、今度悟空さんに頼んでみればいいさ。座椅子」

「なっ！？べべ別に私はそんな！？確かに気持ち良さそっじゃない！！龍宮！私は！」

「あははは！せっちゃん顔真っ赤やえ？ええやん、今度二人で頼も」

今日も今日とて出歯亀に余念が無い、元気な面々なのだった。

第22話 笑って終わって（後書き）

どうもお待たせして申し訳ございません。

今回で修学旅行編は終了と言うことで、ホントにようやくと次の話へ行きます……。ネギのお父さんのアジトのくだりとか省きます、すみません！

なんかエヴァとの絡みが若干多くなってるとような気がしてる今日この頃です。

学園サイドの動きとかも、拙いくせに書いてみました。如何でしょうか？大丈夫でしょうか？……不安です。

それでは、読んでいただき本当にありがとうございました！

第23話 弟子入りお断り

小鳥がさえずる。風が木々を揺らす。朝の清澄な空気が冷やりと肌を撫でる。

芝生の上で胡座を掻いていた悟空は瞑想から帰った。体内では流動する気が鋭さを増し、精神はピンと張り詰めている。

「よし………」

立ち上がり中段に構えた。眼前を静かに見据え、ゆっくりと息を吸う。

「っー」

短い呼気と共に拳を放つ。

そして続けざまに上段へ右脚を蹴り上げ、回転を加えて左脚を薙ぐ。着地と同時に突きを二連。身を屈めて足払い。

拳を、脚を、気を放つ。目にも留まらぬ速度で繰り広げられる武踊。周囲の空気は震え、森の木々はその枝葉を揺らした。

「だあー!!」

正拳を虚空へ一突き。悟空の前方に位置する木々がその進路を譲る

が如くそれぞれ左右へと傾いた。悟空はしばしその姿勢のまま動きを留める。

轟と風が唸り、悟空の髪を揺らして雑木林を駆け抜けていった。

「……………よっし！こんなもんか」

悟空は構えを解いた。そして腰に手を当てて背を反らす。頭上に広がる青空を、悟空は笑顔で仰ぎ見た。

「うん、今日もいい天気だ！」

誰にとも無く、嬉しげに悟空は言った。

マクダウエルさん家の朝は早い。

キッチンではすでに茶々丸がエプロン姿で朝食の準備に取り掛かっていた。もはや習慣になっっている朝の『型』を終えた悟空は、茶々丸を見つけると掌を上げた。

「よっチャチャマル！今日も早えな」

「悟空さんもです。おはよございます」

包丁の手を止めて、茶々丸は微笑んで丁寧に辞儀した。

悟空はそのまま定位置になりつつある自身の席に座る。そして隣に座る小さな少女を見やる。

「チャチャゼロ、おめえまた酒飲んでたんか？」

「ケケケ、二日酔い二八迎工酒ツテカ。マ、酔ワネエケドヨ」

傍らの少女、人形チャチャゼロは酒瓶に差したストローを揺らして嗤った。見た目の愛らしさは酒瓶に書かれた極太の『大吟醸』の文字が綺麗に相殺し、なんともシユールな光景を醸している。

「ケケ、オマエモ一杯付キ合ワネエカ？ソモソモオマエガ買ツタンダシヨ。アト手足動力ネエカラ飲ミニクイ、手伝工」

「今か？うん……いや、オラはいいや。今は飯食いてえぞ

「！」

「ケケ、コノ大喰ライ。マア今晚アタリヤロウヤ。買イ過ギタ所為
デ量ダケハヤタラアルゼ。全部飲ムケドナ、ケツケツケツ！」

チャチャゼロはそう言ってまたケラケラと嗤い、悟空が差し出した
ストローを器用に啜えた。

その間にも茶々丸は続々と盛り付け終えた料理をテーブルに並べて
いる。

ふと、茶々丸は顔を上げた。

「あ、悟空さん。マスターを起こしてきてくださいますか？そろそ
ろ支度が出れますので」

「ん？おお、わかったぞ」

悟空は席から立ち上がり階段を目指す。

朝の早いマクダウエル家において最も起床が遅く、朝に弱い家主、
エヴァは未だ微睡まどろみの中にいた。タオルケットを跳ね飛ばし、枕を足
蹴に、赤子のように丸まって眠るエヴァ。

「……………にゃむ……………ぐくう、そりゃ餃子じゃない……………八
橋だ……………」

トンチキな寝言を呟いて、エヴァは幸せな夢を見る。
そこへドタバタと階段を駆け上がり、悟空は元気よくエヴァのベッ
ドの傍へ。

「エヴァ！！朝飯だ！！」

「うひゃあ!?!」

なまじ肺活量と声量が人の数倍はある悟空の声にエヴァはベッドの
上で飛び上がった。

「なななんだ!?!何事だ!?!」

「よっ！エヴァ、朝飯だぞ」

寝癖の混じる長い金髪を振り乱してキョロキョロと周りを見回すエ
ヴァ。そんなエヴァに変わらぬ笑顔に向けて掌を上げる悟空。

エヴァは悟空の顔を見ると、そのまま脱力してベッドに突っ伏した。

「お前は………もっと起こし方というものがあるだろう………
」

「? 起こし方って、どんなのがいいんだ?」

「うん?」

頭に疑問符を浮かべて悟空は首をかしげた。エヴァはベッドに胡座を掻いて腕を組む。

「そりゃまあ、色々と……ま、まず、お、お姫様抱っこしてだな……」

「抱っこすりゃいいんか？」

「そうそう、ってそれじゃ私が赤ん坊みたいだろうが！違う違う！こっ膝の下に腕を通して、もう片方で背中を……そうだそうだそれでいい……」

悟空は紛う事なくエヴァをお姫様抱っこした。エヴァの小さな体軀は悟空の腕にすっぽりと収まっている。

自分でやらせてはみたものの、エヴァの頬には矢庭に朱が差した。間近に感じる悟空の体温、鼻をくすぐる日向の匂い。

しかしそれでもエヴァの顔はだらしなくほころんでいた。屈強な二本の腕から伝わる絶大な安堵感をエヴァは存分に享受する。

「んで、こっからどうすんだ？」

「んあ！？あ、ああ！え〜とだな……その……そ、そのまま耳元に……か、顔を近づける……」

「ああ？」

悟空は素直に言葉通りエヴァの耳元へ、ギリツギリまで顔を近づけた。数cmにも満たない距離。微かな息遣が耳を伝い、甘い刺激が背中を駆け巡る。エヴァはビクリとその小さな身体を震わせた。最早顔を耳まで真っ赤に染めて、首に回した腕に力が入り、自然と悟空にしがみつくエヴァ。そして変わらずキョトン顔な悟空。

「ひうつ……そそ、それから……耳を、そつとくわ」失礼します。マスター、悟空さん、どうかなさいましたか？いつもより降りて来るのに時間が………」あ

唐突に階段を登って茶々丸が寝室へ一歩足を踏み入れ、たところで急停止した。

交差する主従の視線。

「……………」

「?」

無言で見つめ合い微動だにしない両者。しばし、重い重い静寂が部屋を支配した。

「・・・・・・・・」

とその時、静寂を破って、無言のまま茶々丸は動いた。

茶々丸は部屋の奥へ入ると半開きのカーテンをしつかりと閉め直し、乱れたベッドを丁寧に整えた。そのまま階段口に立ち、悟空とエヴァに改めて一礼

「では、ごゆっくりどうぞ」

「待て待て待て待て！！！！茶々丸！勘違いしてる！お前絶対ベタな勘違いしてる！！」

「いいえ、ノックもせずマスターのお部屋に入った私に責がありません。私の事などお気になさらずどうぞ続きを」

茶々丸が踵を返して階段を降りようとするのをエヴァは腕を引っ掴んでなんとかとどめた。しかし茶々丸は尚も、階段を目指してエヴァを引き摺りながらずんずん歩を進める。

「ただ、マスター。カーテンはきちんと閉じて下さい。マスターは確かに600年の歳月を生きているとはいえ、現在の肉体年齢はあくまで10歳のままですので、悟空さんとの年齢差や世間体を考慮した場合、行為を見られるのはいささか「己は日々一体何を学んでおるんだコラー！！！！？？？」」

赤い顔を更に紅く染めたエヴァの絶叫が雑木林を木霊する。人に見られたのは勿論のことながら、茶々丸の気の遣い方がその実かなり正鵠を射ているという事実が、エヴァの羞恥心を一層殴打した。腕を引き合う二人は互いに一步も譲らない。

「なあエヴァ。今みたいのだったら別にいつでももやってやっからよ、早く飯食おうぜ！」

「え………つつつ!? あ、アホー!!! そんな軽々しくおま!! 意味解ってるのか!!!?」

「ではマスター、朝食はラップしときますからチンして召し上がってください。それでは」

「アンマ声出スト近所迷惑ダゼ御主人。ケツケツケツケツ！」

「………お前ら、ホントいい加減にしろ………」

そろそろ限界が見え始めたエヴァの堪忍袋の緒は（多少ふざけ始めた従者達の言によって）プツリと音を立てて、切れた。マクダウェルさん家は、今日も賑やかだ。

色々紆余曲折ありながら、悟空達は無事朝食を終えた。
食後の心地よさに浸る悟空に反して、リビングのテーブルに頼杖を
付きながらエヴァは溜息を一つ漏らす。

「はああ……最近、私に対する茶々丸の対応が雑になってる気
がする………」

「ん？」

頭に乗っかるチャチャゼロを揺らして悟空は首をかしげる。エヴァ
は悟空のその如何にも「なんかあったっけ？」的な様に、心底羨望
を抱いた。
と

ピンポーン

多少間の抜けた呼び鈴の音が響いた。急須を置いて、玄関へ即座に

茶々丸が応対に向かう。

エヴァは怪訝そうに、壁に掛かった振り子時計を一瞥した。午前中半ば程のこの中途半端な時間帯に来客とは、エヴァには心当たりが無い。

悟空の方はいえば、顔を上げて玄関の扉を見やっている。

「お、ネギとアスナだな」

「何？」

果たして、扉を開けて姿を現したのはネギとネギの杖を担いだアスナだった。ネギは悟空とエヴァを見止めると姿勢を正して一礼する。

「悟空さん！エヴァンジェリンさん！突然お邪魔してすみません！」

「おじやましま〜す」

「よお、ネギ、アスナ」

「朝っぱらから一体何の用だ？」

笑顔を見せる悟空と、対照的に気怠るげなエヴァ。しかしネギはそんな様には目もくれず、まっすぐに二人を見据えながらその場に跪いた。

「今日は、お二人に是非お願いしたいことがあって参りました！」

「？ おねがい？」

悟空もエヴァも、双方不思議そうにネギを見つめた。ネギは膝を付いた状態でさらに居住いを正すと、その瞳に力強い光を宿して決然と言葉を紡いだ。

「僕を……僕を、お二人の弟子にしてください！！」

「イヤだね。メンドイ」 「わりいなネギ。

そりゃちよつと無理だ」

.....

サラリと瞬時に元気よくほぼ同時に、ネギの全霊の言葉は切捨てられた。一切の巡査も思索も無く発せられた二人の言葉に明日菜は危うく杖を取り落とすところだった。

対して、ネギは比較的冷静だった。

初めから了解を貰えるだろうなどとネギは樂觀してはいない。目の

前でお茶をすする、軽く全世界で十指に選ばれるであろう人間に弟子入りを志願するのだ。そうそう上手く事が運ぶはず無いのだ。ちよっとシヨックで涙目になりつつあるのはきつと気の所為なのだ。力強い声色に涙が混じるもネギはさらに食下がろうとした。しかし耳にした言葉に、ネギは微かな疑問を抱いた。

ぐすっ「じ、悟空さん。“無理”ってどういう………?」

「ああ、おめえ達の鬪えを見て分かった。多分、オラがネギに教えてやれんのは組み手とか体の鍛え方とかだけだな」

「ま、そうなるか」

悟空の言にエヴァが続く。頭を掻いて笑う悟空をネギも明日菜も怪訝そうに見やった。

「で、でも！悟空さんってばめちゃうちゃアホみたいに！強いじゃない！なんで駄目なの!?!」

「ちよちよつとアスナさん!?!失礼ですよ!?!」

「………ぼーやが氣を扱うなら何の問題も無かったんだろっが………」

「ネギがなりてえ強いヤツってのは魔法使いなんだろ?なら、おめえが理解しなきゃなんねえのは『魔法使いの鬪え方』っちゅうやつだ。オラが使えんのは氣だけだかな」

ネギの目を真つ向から見据えて悟空は言う。

魔力と気。人が扱うことの出来る超常の力。だが、これら二つは在り方を異にするモノである。

大気に満ちる自然のエネルギーを人に従える魔力。人の内包する生命エネルギーを燃焼する気。

どちらを習得するかにより、術者の戦闘におけるスタイルは大きく変わるだろう。

「高次のレベルになってくれば気だろうが魔力だろうがお構いなしに使う場合もあるが、ぼーやは今更だろうな。(……ま、コイツの場合内包する気量は論外な上“外から”も持ってこれる訳だが(……)」

「使える力が違つとよ、闘え方もガラツと変わつちまうからな。だからオラが知ってる修行の仕方ネギに教えても、あんまし意味ねえと思うぞ?」

「そんな……」

悟空の言わんとすることをネギは確かに理解できた。しかしそれ以上には断られたのが残念過ぎて消沈の度合いが半端ないネギだ。苦笑いを浮かべて悟空はネギの頭を少々乱暴に撫でた。

「ははは！んな顔すんなって！何も一緒に修行しねえって言うてんじゃねえぞ？それどころかよネギ、おめえには魔法以外

「でやんなきゃなんねえことがあんだ」

「え……は、はい！で、でもやんなきゃなんねえことって……」

消沈から一変、輝くような笑顔を浮かべながら器用に疑問符を乱れ飛ばすネギ。そんなネギに晴れやかな笑顔を向けて悟空は言った。

「ネギ、おめえは弱え！」

「」「……」「」

沈黙が重かった。

ネギは両膝を付いた。そのまま両手を床に付け、蹲る。頭に寄せられた暖かい手が、ひどく重く感じるのは気の所為ではないのだろうか？

カランツと明日菜は杖を手放し、エヴァは微妙な表情で悟空を見ている。

「ちょっとちょっと悟空さん!？」

「ケツケケケ。マ、アン時死ニ掛ケテタノハオマエダケダシナ」

「うう……わ、解ってます……解ってますけど……」

そも、こうして弟子入りの為に押し掛けたのは修学旅行における自身の弱さを嫌と言うほど痛感したからである。故に悟空の言葉をネギは甘受しなければならぬのだ。というか必死にネギはそうしようとして努力しているのだ。でもやっぱりシヨックは隠せない。ネギの壮絶な葛藤を知ってか知らずか、悟空は続ける。

「今のネギじゃ、これから相手にしていく奴らにや絶対勝てねえ。ネギ、おめえ拳法ってやったことあつか？」

すんっ「拳法ですか？……いいえ全然です……？」

首をかしげて答えるネギ。悟空は得心いったとばかりに一つ頷いた。

「そつか。じゃあオラにいい考えがあんだ！明日から始めっぞ？」

「え……じゃ、じゃあ弟子入りは！？」

「いやだからよ、弟子とかそんなの関係ねえって。一緒に修行するって前約束したる？」

何を今更とばかりに今度は悟空が首をかしげる。ネギの表情は、みるみる内に喜びで染まっていった。何より、口約束程度に交わした約束を悟空が覚えていてくれたのが嬉しくて仕方ないのだ。

ネギは立ち上がり悟空に相對した。そして腰を折って深々と頭を下げた。

「あの！よろしくお願いします！」

「おお、よろしくなネギ！ぜってえ強くなるうな！」

嬉しげに楽しげに、悟空はこれからの修行を夢想して笑った。

「よっし！魔法のことはエヴァに任せりゃバッチリだ！頑張ろうなネ」「ちよつと待てえい！！」「お？」

振り返ればそこには仁王が、もといエヴァが仁王立ちして悟空を睨んでいた。刷り込みの如くネギは瞬時に悟空の背中に退避。

「勝手に決めるな！私は一言も弟子を取るなどとは言つとらん！」

「？ なんでだ？魔法使いつてヤツの強さはよく分かんねえけど、エヴァがものすげえ強えつてのはオラ知ってつぞ？」

「む？ま、まあな……ってそう言うことじゃない！なんで私がそんなメンドイことをせにゃならんだ！？」

あたかも当然であるかのような悟空の物言いにエヴァは吼えた。

そもそもネギの修行にエヴァが付き合う理由はない。ついでに義理もない。そしてなにより面倒くさい。

一番の本音を多少ぼかしながら、エヴァは眼光を鋭くする。

「でもなあ、エヴァよりいい師匠ってのもなあ……………」

「な、なんだ？ 煽てたってやらんものはやらんぞ？……………」

「エヴァはすげえぞ。オラなんかとは比べ物になんねえぐれえ色んなこと知ってるしよ、人に教えるのも上手え！」

「む……………」

キョトンとしてエヴァは悟空を見やった。悟空は尚もネギと明日菜に向かって力説を辞めない。

「そんで、いつもはこんな風に怒ってるみてえに言うけど、ホントは優しいヤツだ！」

「なつ……………」

心とは揺らぐ物である。

「んでなによりエヴァは強えんだ。解るかネギ？ エヴァはよ、『ホントに強え』んだぞ？」

「・・・・・・・・」

心とは傾く物である。

「は、はい！エヴァンジェリンさんはとっても強いです。僕も見てましたから。魔法使いの戦い方を学ぶならエヴァンジェリンさんしかいません！」

「うーん、そういうことじゃなくてよ。なんつうかこう・・・・・・・・」

身振り手振りでもネギに何かを伝えんとする悟空。エヴァは何ともしなずにそれを眺めていた。

(そう言えば、私はコイツを『知って』いるが、コイツは私を何も知らない・・・・・・・・はずなんだよな？・・・・・・・・)

もう遙か過去に追いやった記憶。この身を形作り成している様々なモノ。この男がそれらを見て知った時、一体どんなことを思うのだろうか？

「・・・・・・・・」

「めげねえつつうか、へこたねえつつうか、ああ！あと人形作るのがすげえ上手え！」

「お人形ですか？あ、そう言えば部屋に一杯ありますね」

「俺ノコト忘レテネエカ？」

「いや、何の話よ！？」

そろそろ馬鹿話に花が咲き始めた頃、エヴァは盛大に溜息を吐き出して唸った。諦めたような観念したような、筆舌に難い声音で半ばヤケクソ気味にエヴァは言う。

「あ~~~~~！わかった！やりやいいんだろやりや！！」

「え！？エヴァンジェリンさん！」

「ホントか！？」

一瞬で目を輝かせる二人。然しものエヴァも若干怯んだ。

「た、ただし条件付でだ。それから試験も課す。それに合格できないようなら弟子の話も無しって抱っこすんな！？」

「ははは！サンキューなエヴァ！」

エヴァを抱え上げて悟空は高い高いした。エヴァは顔を真っ赤にして必死にもがき逃れんとするも、間の抜けた攻防はまだまだ続きそうだった。

おまけ

「あ、あのお嬢様。やはり人の物を勝手に食べてしまうというのは……」

「ええからええから。それにはよ食べてまわんとチヨコ溶けてまうし、ね」

「いえ、でもですね　はむ!?!」

「はい、これでせつちゃんも共犯や〜　あむ」

ピシユンッ

「おし、着いたぞ。ん？よっ！セツナ、コノ……………二人とも
どうした？顔赤えぞ？」

「「あ」」

「……………ふふ、悟空さん」

この日、麻帆良学園女子寮の寮生が夕焼けの中を走る数人の人影を
見たと見なかったとか。

第23話 弟子入りお断り（後書き）

俺に最も足りないもの、情熱でも思想でも理念でも頭脳でも気品でも優雅さでも勤勉さでもない、速さです！

本当に申し訳ございません。

日常話と修行話云々で一話使っつて……。次でやつとこ！修行&弟子入り試験です。もっとテンポアップしなければならぬのは分かってるんです！……。遅筆は、精進させていただきませぬ……。ヘルマンさんにはいつ会えるやら……。

言い訳ばっかしか書けないですすみません！

こんな小説ですが、読んでいただき本当にありがとうございます！

第24話 試験

「ネギ坊主は格闘戦に関しては全く素人アルからな。まずは単純な套路から始めて、後は徹底的に組み手を繰り返すアル！」

「はい！」

「試験つちゆうのまでちょっとしかねえから、今はとことん殴り合っつてことがどういいう事が体に覚えさせんぞ」

「は、はい……！」

風は清涼だ。

雲は白く、空は青い。青々と茂る芝生はよく手入れを施され、均一に整った葉が風によってさらさらと流れゆく、そんな爽やかな小高い丘の上。

ネギは踏み込んだ。同時に決して軽くはない拳で以て古菲の腹を狙う。しかし

「ほい」

「あ!？」

古菲は半身に体を反らして拳をやり過ぎ、ネギの目を手の平で包む。

視界を奪われ驚愕するネギ。透かさず古菲がネギの足を軽く払ったため、堪らずネギはその場で背中からすっ転んだ。目を白黒させて横たわるネギを、頭上から腕を組んだ悟空がうっすら笑みを浮かべて覗き込む。

「ダメだ。腕だけで突っ込んじまったから足元隙だらけだったぞ？ もっと体ごと、体重乗せて打つんだ！」

「は、はい。足元・・・っと!？」

悟空は手を取ってネギの体を起した。引きの強さに思わずネギはよろめく。

「いやいやしかし悟空さん、それにしたってネギ坊主は凄いアルヨ。ものの数時間でもう形出来てるし、天才少年極まれりネ。世の中不公平アルな・・・」

傍らで古菲は少々不満気に呟きを漏らす。特殊な体捌きを必要とする中国拳法、八極拳を、ネギは拙いながら我が物とし始めている。古菲の不平に肯きながらも悟空は豪快に笑った。

「はははは！ああ、ネギはものすげえ飲込みが早えぞ。修行次第で何処までだつて強くなれる！よっし！もうしばらくはクーとそのちゅーごく拳法の練習だ。あらかた動けるようになったら今度はオラとも組み手やつぞ？」

「は、はい！！よろしくお願いします！」

「むむむ！？悟空さん！私との勝負も忘れたらダメアルヨ！！」

「はは、分かってるって！」

マクダウエル邸での弟子入り話から翌日。

授業終了直後、悟空は真つ先に古菲の元へと向かった。開口一番拝み手に頭を下げられ、古菲本人は勿論の事、クラスの生徒達は何事かと驚愕したものだ。

しかし事情を聞いてみれば何の事もなく、古菲は迷わずネギの修行を（対悟空決闘フリーパス修行付）快諾。膳は急げと今まさにネギは古菲との修練に取り組んでいる。

広げられたビニールシートに腰を下ろして、刹那は顎に手を添えて一つ肯いた。

「成程、それで悟空さんはクーさんに……………」

「ああ、オラが教えてもよかったんだけどよ。でも多分、ネギには

クーの技が一番ぴつたりだと思ったんだ。アイツ頭いいかな。クーのややこしい技もすぐモノにできつぞー！」

今もって激しく拳を交えるネギと古菲を悟空は嬉しそうに眺めた。

「ほえ〜そうなんや〜。ネギくん頑張つとるんやねえ。あ、クツキー焼いたから悟空さんもどつぞ〜」

「お、サンキューこのか！」

「ほれほれ、亜子らも食べてな〜」

木乃香はそう言うつと小振りのピクニックバスケットを同じくシートに腰掛ける亜子、裕奈、アキラ達三人に差し出した。

「ん〜うまうま あんがとこのか！いや〜それにしてもよかったねえ亜子。悟空さん修行だつて、クーちゃんとはなんとも無いつてさ？」

「えう！？ゆゆ裕奈〜！！」

「大丈夫、チャンスはきつと来るよ。亜子」

「アキラまで〜！〜？」

クッキーにパクつきながら人の悪い笑みを浮かべる裕奈。比較的真剣な面持ちでエールを送るアキラ。

対する亜子は顔を赤くするばかりで言い訳の仕様も無い。そも、古菲と悟空の密会（誤）に頑として付いて行こうと訴えたのは誰あるう和泉亜子その人である。孫悟空という男の性質を理解し始め、才チが読めていた3・A生徒達の中で、一等激しい動揺に見舞われた数少ない人間の一人でもあった。

「うふふふ　せつちゃんもよかつたね〜」

「っ!?!　な、なな何のことでしょうか?おじよ嬢様」

「え〜。だつてせつちゃん、すつつ……つごい!!心配そうな顔しとつたえ?ほんで今は物凄い安心しとるもん。ウチとおんなじやな〜って思とつたのに」

「え!?!えつとそのですねあの………そ、そう!私は悟空さんと修行すると確かに約束していました!ですから悟

空さんがくーさんと修行を行うと聞き居ても立ってもいられずに

「………今、このか結構明け透けなこと言つて………
「?」

他方で、少数派の二人。猛弁解を勞する刹那とそれを嬉しそうにおちよくる木乃香。そして傍らにて、無い頭を捻って首を傾げる明日菜。

姦しい女生徒達をクツキーの味に浸りながら悟空は眺めていた。但し、会話の内容が2割も頭に入って来なかった為、早々に視線はネギと古菲に移っていったが。

「……やっぱ面白え動きすんだな。亀仙流にも、ちっとだけ似てるか？」

避けると思わせて突き、攻めると見せて絡め取る。攻戦も防戦も許されず、ネギはただただ古菲に弄ばれているようだ。さりとして、それだけに終わるネギではなかった。古菲の突きを、蹴りをその身に受ける度、次の瞬間には動きに、本当に僅かにだが、精彩が現れるのだ。

「へっへっへっ、すげえなあ、ネギ……」

尋常ではない速度で成長するネギに、悟空は眼を細めた。何処までも広がり、何処までも深く、ネギには多くの可能性を見出せる。それはひどく心を湧き立たせた。それはひどく懐かしくもあった。

「今頃、皆どうしてんだらうなあ……」

一緒に修行して、一緒に強くなって、多くの闘いを共にした仲間達。そして、一年余りの間ずっと一緒に修行した自身の息子。思い出すことは沢山ある。どの記憶も一筋縄では語れない。それで

も、やはり

「……………おっし！オラもやっぞー！！」

「ええ！？も、もう！？悟空さん！もうちょっとだけ待って下さいよー！！」

「おお！！遂にやるアルな悟空さん！！負けないアルヨーー！！」

「あんま無理して怪我すんじゃないわよー！」

「あ、ネギくん！悟空さん！頑張れー！」

今この瞬間と同じように自分はワクワクしていたと、それだけははつきりと、悟空は思い出せるのだ。

マクダウエル邸での弟子入り話から数日後。

夜の帳は既に下がり、昼間の喧騒は彼方へ消えた。

深夜0時、人の絶えた世界樹広場へと続く広大な階段のエントランスで、徐にエヴァは時計塔を見上げた。月明りだけが唯一の光源にも拘らず、時刻を確認することは存外容易だった。

傍らの、少々落ち着きの無さが見え隠れする従者に向き直る。

「時間だ。茶々丸、重ねて言うが手加減するんじゃないぞ」

「は。しかしこの短時間では、ネギ先生が私に追い付ける確率は……」

此度の『試験』の内容は単純にして明快だった。エヴァンジェリンの従者、絡繰茶々丸に対してネギ・スプリングフィールドが自身の体術で以て一撃、決定打を打ち込むという。

しかし、単純ゆえに困難でもある。ネギと茶々丸の体術的技量の差は一朝一夕で埋められるものでは断じてない。

先程から幾度も試しては打ち出される演算結果はネギの絶対的不利で終始している。茶々丸は意図せず、自身の主人にそれを進言していた。

「百も承知だ。だからこそ『一撃だけ』なんて破格の条件を与えているのだ。それに試験なんてのは半ば建前。ぼーやの才の芽が果し

てどれ程が見るのが今回の主眼

と云っておこうかな？」

「？」

悪戯っぽく主人は笑った。茶々丸は困惑の体で首をかしげる。

エヴァは茶々丸の率直な反応に満足すると、眼下の人影を見やりながら口元を微かに緩めた。

「あの小利口にまとまったぼーやの石頭を今更どうにか出来るとは思っていなかったが……ふふっ、バカは感染るからな」

「ケケツ、サスガ感染者八言ウ事ガ違ウゼ。ナア御主人」

「……蹴り落として欲しいのかチャチャゼロ」

眼下で並んでこちらを見上げる大小の二人。

片や警真面目でガキで真直ぐな堅物。片や最強でバカで優しい強戦士。方向性という意味合いでなら真逆を行くこの組み合わせを、エヴァは妙に面白いと思った。

だがしかし、と内心で思考を切り替える。

「全身打撲程度は覚悟の上だろうからな。ふふふ、ぼーやには悪いが、じっくり観賞させてもらおうでしょう……」

口の端を吊り上げ、くつくつと喉の奥から笑いを漏らす。その嗜虐

的な笑みは深さを増して、より他者の恐怖を掻き立てる黒い気配を辺りに放出した。

「恐怖と緊張に歪んだぼーやの顔はさぞ見物だろうよ」

「オ、マジデヒツサビサニ悪ダゾ御主人」

チャチャゼロの茶々もサラリとかわし、エヴァは、悟空と顔や裾から覗く肌の殆どを絆創膏と湿布と包帯で覆われたネギを視界に

「エヴァ、来たぞー！」

「よろひくおねがいしまふ！」

「なんでハナからボロボロだぼーや!!!?」

「いや、ホントすまねえなネギ……つい楽しくつてよ。手加減すんの忘れちまって……」

悟空は手を合わせて、これで何度目かになる謝罪をネギへ。

拳を交える度に見られるネギの成長が嬉しかったために、悟空は「ちよつとだけ」加減を誤った。

明日菜からは烈火の如き怒りを盛大に浴びた。そしていくらなんでもやり過ぎなのはネギの満身創痍を見れば明らかで、悟空はなんとなくチチを吹っ飛ばした日を思い出していた。

ネギの方はといえば特に気に留める様子も見られず。頭を下げる悟空に対して少々気恥ずかしげに頭を掻き、晴れやかな笑顔を見せる。

「あははは、いいんです。これだって立派な修行ですよ！それに、僕嬉しかったです。ちよつとでも悟空さんの力を間近で見られましたから！あ、でも何回か判子持ったすつごく大きなおじさんに会いました。『お前はまだまだ』って言われて追い返されちゃいましたけど……なんだったんでしょうか？光の玉がすつごく長い行列になって……」

「？ どつかで、聞いたこと、あつか？……」
「……ないか！」

二人のそんな会話を尻目に、エヴァは盛大な溜息を吐いた。

「……なんか、もう疲れた。さつさと始めるぞ……」
もう後ろのにツツコムのもメンドイ……」

「ネギくん！負けるなー！！」

「氣い付けてなー！」

「ファイター！ネギくん！」

佐々木まき絵を新たに加え、ギャラリーはわいわいと賑わっている。最初から視界に入っていたため文句の一つも垂れようかと内心画策していたが、先の遣り取りで体力の無駄と判断。早々にエヴァは諦めた。

既に定位置へ移動したネギと茶々丸は、互いを見据え合いながら構えを取った。

周囲に緊張が空気を伝って広がっていく。生徒達の声援も鳴りを潜め、ただ始まりの時間を固唾を呑んで見守る。そんな中、悟空は一人階上のエヴァの傍らへ。

「エヴァ、一コ確認しときたいんだけどよ」

「うん？」

神妙な顔をして悟空はエヴァを見る。悟空のそんな顔を不思議そうにエヴァもまた見上げた。

「要は、茶々丸に一発、ネギがでけえ一撃を当てられりゃ勝ちなんだろ？」

「ああそうだが……と、言っておくが、防御の上からでも当たったから合格、なんて虫のいい話を聞いてやると思っちなよ」

「ああ、分かったぞ」

ジロリと念を押すように悟空の目を睨み返す。しかし、悟空がそれに気圧される様子も無く、一転して満面の笑顔を浮かべるのだ。怪訝そうに視線で問いかけてくるエヴァには答えず、悟空は顔を上げてネギを見やった。

「ネギ！」

「あ、はい！」

唐突な呼びかけに慌ててネギは悟空へ振り返った。そしてすぐ、真直ぐな視線を正面から受け止めた。優しげでありながらとても力強くもある、そんな目だ。

「ぶちかませ。おめえならやれる、絶対だ！」

「……………はい!!!」

腹の底から気合を放つ。

視線の交差はそれきりで、ネギはもう悟空を見ていない。目の前の茶々丸に全神経を集中させている。

纏う空気は一瞬前のものとは最早一変していた。普段の幼い容貌など欠片もない。ギャラリーが息を呑んだ。

「……………化けた」

口の端がまた吊り上がる。今度は隠すこと無く喜色を浮かべて。

エヴァは息を吸った。気怠るさは何処へやら、今は兎も角見たいのだ。傍らの男が、この高が数日で一体どんな風にあのガキを変えたのかを。

「では……………始めるがいい！」

澄んだ声が場内を響き渡るのと、茶々丸が踏み込んだのはほぼ同時だった。

ネギの目を茶々丸は見た。

声を掛ける間さえ惜しむべきだと、茶々丸のAIは告げていた。

「契約執行60秒、ネギ・スプリングフィールド……………！」

茶々丸が左拳を放つ。ネギは肘で拳を流す。

そして既に、引き絞られた茶々丸の右拳。本命のストレートは肘の

連結部に搭載されたブースターで更に威力が上乘せされ、まともに受ければ一撃死も有り得よう。威力は勿論速度をも備えた突きがネギの鳩尾を狙う。にも拘らずネギは踏み込んだ。

「!?!」

「ふっ!」

胸のすれすれを過ぎる弾丸を遣り過ごし、半身に肘打ちで茶々丸の胴を穿とうとする。

踏み出した右足を軸に茶々丸は半回転してそれをかわした。それだけに留まらず回転からネギの後頭部に裏拳。

しかし前転の要領でネギは密着状態から退避していた。拳は空しく空を薙ぐだけに終わる。

立ち上がりからネギが仕掛けた。

小さな体軀を活かし、出の速い小振りの打撃を繋いでいく。力で勝る茶々丸だが、『一撃』の条件上力技では制約があった。

進展はないまま高速の攻防は膠着状態を余儀なくされ繰り広げられていく。

「すすすご!?!ネギくんっていつか茶々丸さんも強!?!」

「ナニこれ!?!ただの殴り合いとちゃうよ!?!」

ギャラリー達の驚嘆が木霊する。エヴァは両者の攻防を興味深げに

見ていた。

「成程、策は捨ててひたすらに攻め続ける気か。確かに技量的な差を鑑みれば無くは無い手だ。『攻撃する瞬間の隙』を撃とう、なんてのはお前の考えそうなことだ」

「へへ、まあな」

「だが、今回ばかりは当てが外れたな。茶々丸に隙を期待するのは、甘い」

僅かばかりでも大振りになった動きを茶々丸は見過ごさない。透かさず茶々丸から放たれた強烈な蹴りをなんとか防ぐも、ネギはよけて数歩後退した。

「あれの正確さは折り紙つきだ。極限まで無駄を排した体捌きと動作判断。対敵の守りが手薄な箇所などあれには全て筒抜けになる。勿論、攻めの弱点もな。せんさーとかいうらしいが……それはお前ももう体験しているだろう？」

「ああ、茶々丸はすげえ目がいいかな。だから多分、ネギのカウンターは当たんねえ」

あまりにあっさりと、悟空は言い放った。エヴァはあんぐりと口を開けて悟空に振り返ってしまった。

「な……それが狙いではないというのか？」

「ああ、クーにやりわりいけど、アイツには一コだけ教えたんだ」

茶々丸は踏み込んでネギとの距離を一気に詰めた。対するネギも先程と同様、踏み込むためやや前傾の姿勢をとる。ただだつた。

「！」

迎撃の構え。茶々丸はもうネギの間合いへと踏み出してしまった。

止まれば隙を生む。振り被った拳は今更退けない。

超加速の突きをネギは避ける。それだけに留まらず、ネギは茶々丸の右腕をがっちり掴んだ。

（うまい！そこでカウンターアル！！）

思わず感嘆して内心歓喜する古菲。

茶々丸の右腕を引き寄せ、固めた右肘は小さく速く。踏み込む足には全体重だけを乗せて。

地を踏み鳴らし、渾身の一撃は

(?打頂肘!!)

空を打つのみに終わった。

「「「な!?!」」」

驚愕は観戦者達のそれ。

これ以上ないタイミング、これ以上ない最高の一撃は、街灯の台座を蹴り上げ、ネギの頭上を舞う茶々丸には決して届かない。

掴まれた腕はそのまま、茶々丸は腕を支点に振子の要領で回転。背後から膝のハンマーでネギを打ち据えんと迫り来る。

あと一瞬、コンマー秒程度もあれば、ネギの小さな体躯を吹き飛ばすことなど、重力加速的威力を備えた苛烈極まる膝蹴りの前には甚だ容易些末小事簡明。

「 ? 」

だが

瞬間の更に間。思考さえ叶わぬ静止画の世界の中。茶々丸は見た。

この奇襲、迎撃、カウンターは失敗に終わる。それは揺るがない。されどネギの表情を占めるのは焦りではなく

拳を握っていた。こちらの腕を放していた。別段それに問題はない。勢いは今更殺せないのだ。このまま押し切れるはずだ。なのに

ネギは笑っていた。

「!?!」

「!?!?!」

迫り来る敗北の一撃をネギは避けない、避けられない、避けるつもりが無い。

限界ぎりぎりまで握りこんだ拳へあるだけ集められるだけの魔力をちから籠めて

茶々丸の膝蹴りを全力で殴り付けた。

「やっぱりどう頑張ってもあんな短え時間じゃ、ネギがチャチャマルに勝つなんて無理だ。魔力の供給^{りき}ちゆうので力上げて、やっぱりチャチャマルにや追い付けねえ。攻撃もカウンターもぜんぶ避けちまうかな！ははは！んでよ、どうすつかなくってネギと一緒にすっげえ考えて、こうすることにしたんだ」

「……つまりなんだ。正攻法は当たらない。攻撃の瞬間を突くカウンターも見切られる。速度で上回るなど論外。『じゃあな』から攻撃に攻撃当てちまおう』ってか？……」

「おお！」「はい！」

雄々しく掲げられたピースサインが二つ。悪戯が成功した子供の笑顔が二つ。

「でよチャチャマル。おめえ、まだ闘えつか？」

自身の背中に負ぶさる茶々丸に悟空は問う。茶々丸は静かに首を振った。

「膝部関節の損傷で稼働効率が半減しています。戦闘行動は困難で

す

「あの、茶々丸さん……すみませんでした！本当は当てるだけで成功になるはずだったのに……」

笑顔は一瞬で陰り、一気に消沈してネギは頭を下げた。それに対して茶々丸はもう一度首を振った。薄っすらと口元に笑みを浮かべて

「いいえ、どうか気になさらないでください……ネギ先生、おめでとうございます」

「あ……はい！ありがとうございます！」

ぱっと、晴れやかにネギは笑顔を見せる。茶々丸と同様、悟空もそれを見て笑うと、今度はエヴァに片目を瞑って見せた。

「だってよ、エヴァ」

「……へえへえ、解ったよ。ああ、ホントに、バカは感染る……」

「はははは！ひでえ」

笑いが込み上げてくる。これからの想像してワクワクしてくる。仏頂面と笑顔と微笑み、それから遠くからぞろぞろドタバタ駆けて

来る賑やかな面々。

望郷は再び訪れた。でもそれはただ、ひたすらに懐かしくて、
どうにも楽しい。

また一つ、悟空は笑って歩き出した。

第24話 試験（後書き）

ごめんなさいすみません申し訳ありませんもうあの駄目ですね。
最遅記録更新

お久しぶりです。長らく更新出来ず本当に申し訳ありませんでした。
さんざん遅筆がどうのと言いつを言ってきたにも拘らず時間も取れ
ずこの無計画。愚か者。阿呆。雑種。贗作者。罵詈なんでもどうぞ！

今回、ようやく弟子入り試験まで漕ぎ着けました。

……無理矢理の感が著しいです。いずれ改訂を考えます。

個々の小説に割ける時間が本当に無いんです……。言い訳
すみませんが本当に無いんです。その癖欲張って他作品に手を出
す馬鹿です……。

読んでくださった方々には感謝のしようもございません。本当にあ
りがとつございました！！

第25話 恐竜がいくたら〜 (前書き)

皆々様のお陰を持ちまして、100万アクセスを迎えることが出来ました。泣きそうです。狂喜です。乱舞です。

本当にありがとうございます！

第25話 恐竜がいくたら〜

「う〜ん〜んっ……………よつく寝たあ〜！」

伸ばせる限界まで背筋を伸ばし、悟空はベッドから身を起こす。

美しいドレスに着飾られた大小様々な人形達が静かに見つめる薄暗い部屋の中。肝の小さな者ならば足を踏み入れることさえしないだろう地下室で、悟空は比較的快適な目覚めを迎えた。

紺のアンダーシャツ姿で立ち上がり、軽くストレッチでもと屈伸した所で、漸く目が合う。

「ん？おお、オッス！チャチャゼロも昨日はここで寝てたんか？」

「オッス。何度モ言ッテンダロガ、俺ハ眠ラネエツテ。酒ガ切レタ
ンデ暇潰シニ御主人イジツテタラ、放リコマレタ」

自身の腹から転げ落ちたであろうチャチャゼロを拾い上げ、掌を上げて挨拶を寄越す悟空。宙吊りのまま返すチャチャゼロ。

「オメエ寝ルノモ早エケド起キルノモ早エノナ」

「ああ、朝修行すんのすっげえ気持ちいいかな！チャチャゼロも一緒にやつか？」

「無理ダッツノ。オメエト殺り合ウノ八面白ソウダケドナ……
・別荘ナラデキツカ？」

「べっそう？野菜かなんかか？」

頭の上にチャチャゼロを乗せると、ストレッチは辞めて悟空は階上へ上がることに。大理石の階段を裸足のままひたひた登る。

程無くして悟空とチャチャゼロは地上、マクダウエルさん家のダイニングに出た。

カーテンを透過して淡い陽光が無人の室内を照らす。そしてこれまで照らし出される多種多様な人形達を通り過ぎて行き、玄関の戸口へと向かった。

「今日はどうすっかなあ……ん？」

「ドシタ」

ノブに手を掛けた姿勢のまま、悟空はふと戸口の窓の外を見た。板張りのテラスを降りてすぐ、青々と茂る芝生に立つ人影が一つ。悟空は扉を開いて外へ出た。

「よっチャチャマル！」

「あ、悟空さん。おはようございます」

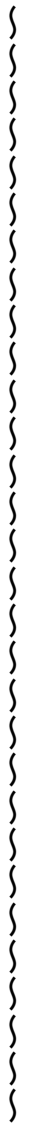
丁寧な辞儀はいつもの通り、しかしてそわそわと落ち着かぬ様子で茶々丸は一人ポツリと佇んでいた。

「こんなトコでどうしたんだ？チャチャマルも修行か？」

「いえ、私は……………あの、悟空さん、実は……………」

「？」

何時に無く歯切れの悪い茶々丸に首を傾げる悟空。共に揺れるチャチャゼロ。暫し思索に耽る茶々丸。
そしてとうとう意を決して、茶々丸はとつとつと語り始めた。



「へえ、その図書館島ってところにネギの父ちゃんの手掛りがあるのか？」

「はい、そのようです。昨日お部屋に伺った際、綾瀬夕映さんと宮崎のどかさんが来られて、地底図書館の地図を解読されたとか」

関西呪術協会の長、近衛詠春からネギは父親であるサウザンドマスターの手掛りとして、学園の地図を受け取ったのだ。そしてここ最近、ネギはその地図に記された難解な暗号の解読へ非常に熱を上げていた。

「ご丁寧な似顔絵付き『オレノテガカリ』を数日間に亘ってネギが見落としていただけなわけだが。

それは兎も角とて腑に落ちない、といった体で悟空は疑問符を浮かべた。

「ん？でもよ、よかったじゃねえか。これでちつとでもネギは父ちゃんのこと分かるかもしれないねえんだろ？」

「ええ……………はい、それはとても喜ばしいことなのですが……………」

「うん？……………あ、そっか、ははは」

唐突に悟空は笑った。そのままぽんぽんと茶々丸の頭を撫でる。今度は茶々丸が小首を傾げた。

「心配なんだな、ネギのこと」

「え、その、あの、えつと……………」
「はい……………」

狼狽もそこそこに、茶々丸は観念して頷いた。

図書館島はその貴重且つ稀少な蔵書と歴史的文化的価値を持つ遺跡群を護る目的から、無数の罾が仕掛けられている。子供騙しの悪戯的なものから洒落にならない非常識なモノまで種々数多。そんな魔窟へネギは出掛けていった。

勿論、茶々丸に看過出来るはずが無い。

しかし同時に、茶々丸には一つ懸念があった。

「うっし、んじゃ行くとすつか。ちよっくら覗いてくるだけ。見付けんのはネギ達だ。……そんなら、別にいいだろ？」

悪戯つぽく片目を瞑って悟空は茶々丸へ笑いかけた。悟空の言に虚を突かれ、茶々丸は知らず呆けてしまった。

茶々丸が今なお行動できず、二の足を踏んでいた理由。

「……はい」

微笑みもまた無意識に、安堵が不思議と心を満たす。茶々丸は静かに肯いた。

(はあく、深つけえなくこの穴！どこまで続いてんだ？)

(地底湖、いえ、地下図書室までこの回廊は続いています。ネギ先生のお父上の手掛りは更に下層ですが)

(ドウデモイイケド蜘蛛ノ巣取レヤ、才前ラ)

深い、尋常を超えて深い回廊の遙か下方に米粒大のネギ達を捉え、
ごにゃごにゃと声を潜める悟空、茶々丸、チャチャゼロ。三者漏れ
なく蜘蛛の巣だらけなのはご愛嬌。

(お、やっと地面だ)

(ここからは徒歩のようです。悟空さん、どうか足元に気をつけて
ください。罌が仕掛けられて

あ

(ありゃ、ユエがなんか踏んじまってる。おお、でっけえ玉だ。転がってったな)

(今や定番化しつつあるあのギミックですが、そもそもは1981年に放映された冒険映画に端を発するもので、それ程古い舞台効果ではないようです)

(ドウデモイイケド餓鬼共死ンジマウゾ、アレ)

明らかに廊下の傾斜が意図的に傾けられ、左右とも地面と壁の接地面が玉転がしに適した反り返りを持つ。などと暢気に分析している間にネギ達は悲鳴を木霊させながら全力で逃げて行ってしまった。気を取り直して悟空は掌を岩玉へかざした。

「はあっ！」

ちゅどーん

気を一点に集中させ強烈な衝撃波のみを叩きつけた結果、岩玉は見る影もなく粉々に消し飛んだ。

「オイオイ、餓鬼共ニバレチマツテモイイノカヨ」

「つつても、ネギ達もう行っちゃったぞ？」

「大丈夫です。許容範囲です。無問題です。悟空さんナイスです」

「ほれ、チャチャマルもこう言ってることだしよ」

「ケケケ、本音が透ケテルゼ妹ヨ」

そんなこんな紆余曲折色々あつて……

地底図書館より更に下層、遙か地下深くに位置しているはずのこの場所はしかし、奇妙なほど光に満ちて、あまつさえ木漏れ日が差し込む始末。巨大な木の根に絡まり纏わり付かれた眼前の門もまた陽光に照らし出され、その全容を仰ぎ見ることが出来る。

草木が生い茂った地面を踏みしめて、ネギと夕映とのどかは遂に目的の場所へたどり着くことが出来たのだ。

道中跋扈していた様々な障害を辛くも避けて進み続け、今やネギ達はドロドロである。それでも、三人の顔には確かな達成感のようなものが窺える。

「じ、はぁ、ここが幻の、はぁ、はぁ……」

「と、とうとう、はあ、着いたです・・・はあ・・・はあ」

「この扉の奥に・・・ちょっと待っててください！」

感慨に浸るのもそこそこに、ネギは早速巨大な扉を調べに掛かった。その間、夕映とのどかは周辺を調べに回る。図書館探検部所属の彼女らでさえ、ここまで深部へ足を踏み入れたことはない。地下の環境としては非常識極まりない自然を有するこの場所。彼女らの興味は尽きなかった。

「？ ゆえゆえー、この地図なんだけど・・・」

「何ですか？」

ふと、のどかは手元の地図に目を落して不思議そうに小首を傾げている。夕映もまたのどかの視線を追って地図を見た。

『オレノテガカリ』の似顔絵の少し上に、もう一つ奇妙な絵が描かれている。

「これは・・・犬？猫？」

「『DANGER』って書いてひゃっ!？」

「どっしたですっわきゃ!？なんですか!？このベタベタは

」

突如として頭上から夕映達は粘液を浴びた。当然、夕映はすぐさま視線を上げる。のどかもまたそれに倣った。そしてそのまま固まった。

「？ 夕映さん？のどかさん？何かあつ

」

ネギが振り返ったその先、小さな二人を見下す巨躯、淡い陽光に比してキラキラと鈍く輝く凶悪な牙、木の根を掴む巨大にして鋭利な爪、腕を覆う翼。

ネギが呆けていられたのはほんの一瞬だけだった。

「どどど竜^{ドラゴン}!!!?なんでこんな所に!?!つてふ二人とも!!!逃げてください!!!」

ネギの必死の叫びが木霊する。

「わあゝ絵本ではあんまりこういう展開は」

「アハハハ成程これは翼竜^{ワイザーン}でしょうか?それとも飛竜?名前の由来は毒蛇からだそうですがやはり尾に毒が?なんでも知能はそれほど優れているわけではなく敵味方関係なく攻撃する凶悪な魔獣とされていますゲーム内では主人公とパートナー関係になるなど知的な面も描かれていますがつて私はなにをゲームなどとそもそもワイヴァ

ーンは特定の神話・伝承を持たないとされ空想上の生物として扱われてしかるべきで中世欧州の紋章の図柄によく登場するため紋章学から誕生したやはり架空の生物であるはず戦時中は強い敵意を表すことから軍隊の誇示によく使用され

「夕映さんのどかさん!!!?すっかりしてください!!!」

届くことは無くとも。

自失状態の二人は動けない。竜はその巨躯を前進させ今正に二人を踏み潰さんとしている。考える余地さえ与えられない。

ネギは二人を助けようと足を踏み出し 背後からの影に追い越された。

「あ!?!」

影、悟空は高速で二人の前に立つ。直ぐ頭上には巨大な足。数十トンの圧力の前には人間は熟れ過ぎたトマトに等しい。しかし、ここにいるのは他の誰でもない、孫悟空なのだ。悟空はヒョイと竜の足を受け止めた。片手で。

「チャチャマルー!」

「はい」

呼び掛けに応じて茶々丸はさっさと夕映・のどかの二人を回収して

ネギの元へ駆けて行った。

ネギの驚き様は一人ひとりで、あんぐり口を開けて茶々丸を見ている。

「ちゃ、茶々丸さん！？それに悟空さんも！？」

「はい、皆さん御無事で？」

「あつ！二人とも！大丈夫ですか！？」

茶々丸の言葉で漸く、ネギは驚愕を抑えることができた。勿論、抑えが利いているだけで内心は乱れに乱れているのだが。

「は、はい。特に怪我といえるものは何処にも……………」

「だ、だいじょうぶです……………」

呆として答える二人にとりあえず安堵するネギ。そんな三人の様子を確認し終わると、茶々丸は口を開いた。

「脱出します。現状の装備で竜種を退けるのは不可能です」

「は、はい！のどかさんは僕に掴まってください！ってそうだ！！悟空さんが！」

「やややべえ！いくらなんでも竜相手じゃ悟空の旦那も分が

「

「ははははは！くすぐってえっっておめえ！へっハイヤードラゴンみてえだ」

『きゅる〜』

「オイ、ヤメロ、蜥蜴、舐メンナ、ベタベタスル」

身の丈優に20メートルは有ろうかと言う巨大生物は、猫よろしくゴロゴロと喉を鳴らして悟空に擦り寄っていた。

「「「「「.....」」」」」

「おめえでつけえなあ〜！いつも何食ってたんだ？」

「オメエ並ニ喰ッテンノダケハ確カダナ」

最強種の眼前で安穩とした会話が交わされている。ネギ達は一様に溜息を吐いた。

そも、悟空は恐竜がいたら玉乗り仕込む世界の住人である。今更竜で驚くわけが無かった。

「ファンタジーを上回る孫悟空……………」

「すごいですねえ悟空先生……………」

「悟空さんに常識は通用しないんですね……………」

頭を抱える夕映と素直に驚くのが。そして諦めにも似た呟きはネギのものだった。

「……………ってそうだ！竜さんと悟空さんが仲良しなら扉を

」

そう思い至って、ネギは扉へ向かって駆けた。竜が居るなどとは露とも知らず力いっぱい狼狽してしまったが、今ならばと。

『グアアアアアアアアアア！！！！！』

目の前に火の海が出来上がった。

「ま、まああれだ。あいつはあの扉守れって誰かに頼まれたらしくてよ。勝手に近付くと今みたいなことになっから氣い付けろ?」

「遅いです、悟空さん……死んだと思いました。僕、僕ちやんと生きてますよね?ね?……」

悟空のシャツを握り締めて震えるネギの頭を悟空は苦笑いを浮かべて撫でた。

扉の前はすでに竜が陣取り、とても通る事は叶いそうにない。

「し、しかし!この先にはネギ先生のお父様について何か手掛りがあるかもしれないのですよ!?悟空先生ならあのトカゲをなんとかできるでしょう!?!?」

「うーん、いやそれじゃダメだろ。な、ネギ」

食って掛かる夕映に対してにべも無く悟空は言う。そしてそんな悟空の視線を受けて、ネギは一瞬だけ思索し、やはり頷いた。

「……………はい、そうですね。これは僕がやらなきゃいけないことです。僕がやりたいことなんです」

「ネギ先生……………」

「ごめんなさい、夕映さん、のどかさん。折角手掛りを見つけていただいたのに、結局僕の我俣に付き合せてしまつて……………でも、父さんのことは他人任せになんてしちゃ絶対ダメなんです。僕が、僕自身が、ずっと望んできたことだから……………だから……………」

尻すぼみになつていく言葉は、宙を漂つて消えていく。しかしそれでも意志を伝えるには十分なようだった。苦い顔をしながら唸る夕映とどうしてか嬉しそうに微笑むのどかは、しっかりと頷いて見せたのだから。

「いいです！分かりました！悟空先生には頼らないです！あの大トカゲは自分達の手で蹴りを付けます！いいですねのどか！」

「うん！……………ネギ先生も、一緒に頑張りましょう？」

「……………はい！」

また一つ大トカゲ退治の目標を掲げ、三人は決意を新たにす。悟空も茶々丸も思惑が達せられたことに満足げ、それでいて嬉しそうに笑い合つた。

首を傾げる一匹を置いて、四人と二体は賑やかに帰路に着いた。

おまけ

「いや〜しっかし」

「？ なんですか悟空先生？」

「……………食いであらそうだな〜、あいつ」

『ぎゅるっ!?!?』

「……………はい？」

「特に尻尾が美味えんだよな〜……………腹減ったな〜……………」

「ソウイヤ、酒ノ摘ミガ切レテナ。悟空、ヤレ」

『ぎゅるうじ?!?!?!?!?!』

「あ、逃げたです」

第25話 恐竜がいたら〜 (後書き)

お久しぶりです。こんにちは。足洗と申します。

本筋に沿ってみました。捻りが……ない……。
話を進めることができず、大きなイベントもないままぐだぐだと書いてしまいました……次こそ何かしら山を!……頑張らせていただきます。

それでは、読んでいただきありがとうございました!

第26話 仲良くケンカしよ 前編(前書き)

またも、無駄に長くなりまして前後編です。

どうかお時間が有るときにお読みいただければ幸いです。

第26話 仲良くケンカしよ 前編

「よし、では始める。刹那、気は抑えておけ。お前らの技量では魔力と気は相反するだけだ」
コンフリクト

「あ、はい」

「いきますー！」

左手に杖を、右手には四枚のカードを、丹田にて収束した魔力を言葉と共に紡ぎ出す。

「契約執行180秒間！」

光り輝くカードを握り締め、集中力を逃がすまいと目を瞑る。放たれた言霊は一つの効果を成し、その光が一列に並んだ四人、刹那、明日菜、のどか、木乃香を包み込む。

契約執行時特有の刺激にそれぞれ違った反応を示すも、それは概ね安定を見た。

矢継ぎ早にエヴァは命じる。

「次、対物・魔法障壁全方位全力展開」
アンチ
マテリアルシールド

「はいー！」

体を包む魔力光へ更に新たな光が加わる。

「次、アンチ・マジックシールド魔法障壁全力展開」

「は、はい！」

汗が額に滲む。奪われていく魔力量の許容限界が近い。勿論、エヴァは容赦を与えない。

「そのまま3分持ち堪えた後、魔法の射手199本詠唱。結界を張つてあるから遠慮は要らん」

「えっ、は、はい！」

「んで、標的だが……アレだ。アレを狙え」

言うままエヴァはヒョイと人差し指を上げた。

「で、でもマスター……」

そして此処へ来て、はつきり明瞭とネギは躊躇した。契約執行と障壁へ回している魔力量とて決して少なくはない為、余裕は確かに無い。が不可能でもない。躊躇の理由は当然別にあった。

「躊躇う必要こそ無いわ。そら、そろそろ3分だぞ」

「でも！199本なんていくらなんでも怪我を

」

「ほ～～～う！お前は、アイツに、傷を付けられると、そう言うのだな？」

ひどく愉しげに、エヴァは口の端を吊り上げた。幾分かの侮蔑も漏れなく副えられている訳だが。
うなぎ上りなネギの不安。

そして驚嘆とも呆れとも付かない納得を、その時刹那は得た。

「……………予想はしてましたが、やっぱりその為に距離を取っていたんですね……………」

「ちよちよつと、魔法の射手ってあのドバー！って出るやつでしょ……………大丈夫なの？」

「悟空さ～ん！氣い付けてや～！」

ネギの、明日菜達の視線の先には一人、只管に静粛を保ったまま目を閉じて佇む男、悟空がいる。軽く握った拳は腰の高さに。そして悟空自身はまるでネギ達の会話など耳に届いていないかのように微動だにしない。

尚も躊躇い続けるネギに、エヴァはとうとう痺れを切らした。

「アホな心配してないでさっさと撃て！そら、3分だ！！」

「っ！」

一喝に後押しされるようにネギは掌を悟空へ向ける。呪文は既に完了してしまった。後はネギの内にある堰を切るのみ。

ネギの掌から一斉に光が溢れ出す。

一点から放出される光は199の弾丸と化して定めた標的、孫悟空へ殺到する。

威力にして達人の拳と同等かそれ以上、速度はそれこそ弾丸と呼ぶに相応しい非常識さ。

中れば洒落も冗談も通じない。バラバラの身体が残るのみ。

迫り来る光共。手を伸ばせば触れられる、そして次の瞬間には自身に突き刺さっている。そんなギリギリの間。

悟空は、そっと目を開けた。

都合、199回程拳を振るった悟空は一つ溜息を吐いた。

「やっぱりダメだ」

「ダメですか!？」

と、ツツコムは刹那。

ネギが放った魔法の射手199本を、悟空は一発残らず結界の張られた空へ弾き飛ばした。キラキラと輝く魔力の光が粒子となり、一種光の雨を思わせる美しい光景を悟空は物憂げに眺める。

514

「何発か勘で弾いちゃった。魔力つてのをちゃんと掴めてねえ……
……ん〜、やっぱり気みてえには行かねえか」

「勘だけで、ですか……」

「うむ、悟空さんに攻撃当ててる、これ至難ヨ」

「す、すごいです悟空さん!!あんなにたくさん魔法の射手を全部っへみゅ!？」

「己が喜んでどないすんじゃ!?!大言吐きおって!せめて一発掠らせるぐらいの気概を見せんか!」

「あつうっ!!」

何故か悟空本人よりも喜び勇むネギをエヴァは怒声と共にポカリと殴った。

そんな様子に苦笑う面々と笑う悟空。

そう笑いながらも、悟空は腕を組んで頭を捻るのだ。

「うっうっん……」

「……近場にいる魔力を常日頃意識していれば、感覚ぐらいどうとでもなる。現に、お前はここへ着て間もない頃に比べれば、格段に魔力を識別出来ているだろう?」

「つつても、区別できるだけだ。やっぱりやるからにや完璧にしときたいしよ!」

握りこんだ拳を見つめ、悟空は口元で笑む。自分にとって全く未知の領域だった力が、少しずつであるが、しかし確実に理解でき始めているのだ。悟空にとってそれは嬉しくないはずがない。そしてだからこそ、更なる高みを目指したいのだ。

そんな悟空へ呆れたように息を吐き出しながら、エヴァもまた似たような笑みを浮かべた。

「修行バカめ」

「へへっ、まあな」

そのまましばらくの間、二人はくつくつと笑い合った。

「ふむむ……魔力と気の反発コンフリクト……あ！そうだそうだ刹那の嬢ちゃんに悟空の旦那！」

「はい？なんですか、カモさん？」

「お？なんだ、カモ？」

「あ？」

何やらぶつぶつと思案に耽っていたカモが、唐突に声を上げて悟空の肩へと駆け上がった。

「今思いついたんだがよ。魔力と気がダメだっけんなら、気と気ならどうでえー！」

「えっ……」

「……」

「？ なんかのことだ？」

声を漏らす刹那、首を傾げる悟空、そして何故かエヴァは押し黙り、その異常に鋭く研がれる眼光に気が付くことも出来ずカモはニヤニヤと語り続けた。

「へっへっへっへ、簡単な事さあ。悟空の旦那と刹那の嬢ちゃんが一発ぶちゅつとやるんだよ！」

「「ぶちゅ？」」

「ひゃ〜！カモ君、それってもしかせんでも？」

「っはあ！？かかかカモさん！？なんなナニを！」

頬を紅潮させてイヤイヤと首を振る木乃香と一瞬で頬を真赤に染め並外れてどもつた刹那。聞き捨て出来よう筈が無い。というより、この遣り取りは修学旅行の際一度交わされたものだ。

バクティオー 仮契約。高等魔法を行使用する為に難解にして長大な呪文詠唱が不可欠である魔法使い達が自らの盾として、或いは矛として従える前衛戦力を得るための手段。またの名を魔法使いマジックユーザーの従者探しの契約儀式。

契約方法：主に接吻

「そそ、それにですね！悟空さんはあくまで戦士であって魔法使いではないんですよ！？か、仮契約なんてそんな……」

「どきるぞ〜」

「そう、出来ます！だからこそ私は悟空さんとキス
はい
？」

「気の使い手でも従者は持てるぜ。ま、オレっちもやったことはねえんだが」

口を開けたまま固まる刹那。逃げの口実はあっさりと崩され、言い訳も二の句も上げられない。
カモのニヤニヤは更に加速する。カモは悟空の肩から飛び降りると手近な岩に腰掛けた。器用にも後ろ足を組み合わせ、ご丁寧にタバコを取り出して啜える。

「さあさあ問題は解決だ。後はご二人の同意次第だぜ。どうだ刹那の嬢ちゃん？とっ、そうだ古老師も気の使い手だったな！どうよどうよさらっとぶちゅっと？」

「むむむ！？私もアルか！？」

「し、しかし、その……」

「あー！いやいや皆まで言うことはない！真面目なアンタらしい話だ。でもだ、よく考えてみな？これはあくまで純粋な強さを求めて極地を目指す上で好都合な単なる『手段』だ。別段何にもイカガワしい意味は無いんだぜ？な？悟空の旦那が持つてる冗談抜きで無限大な気をもし刹那の嬢ちゃん達が使いりやどうだ？戦闘力UPは確實！仮契約時の付録機能満載！新アーティファクトの投入！急接近する乙女の純情！好い事尽くめで笑いが止まらねえ！」

愛らしい小動物の面影など微塵たりと有りはしない。刹那の眼前にあるのは甘言を垂れ流す悪魔のそれだ。決して流されてはいけない。堕ちれば終わる。それだけは熱に浮かされた頭でも解る。

しかし、拒絶の意を示さんと口を動かしても、出てくるのは「ああ」とか「うう」とかよく解らない呻きだけ。

何のことは無い、刹那は迷っている。

「ううー！」

「アイヤ！悟空さんとキッスアルか……は、恥ずかしいアルなあ、なにやら……」

後一押しだ。古菲は実際のところ満更でもない様子。それに加えギラギラと光るカモの目は明確に刹那の心情を覗き見ていた。カモは何処からともなく明らかに収納不可能な大きさの巻物を取り出し、封に手をかけた。

「そ、それは!？」

「? 何アルか？」

「そおれえにいだ、知ってるかい?刹那の嬢ちゃん。旦那は普段あんなんだからよ、色恋のイの字も見えてこねえ腕白少年も真っ青な健全男子だ、が!中々どうして隅にや置けねえんだよ。オレっちの情報源によると現在ホの字確定な娘っ子がこれこの通り。あ、ちな

みに刹那の嬢ちゃんはトツプ

「

「きゃああああ!?!?ちよちよっカモさん!?!?」

デリカシーとか思いやりとか、その他、人の大事な部分も色々^と無視して、カモは結構重要な事実をさらりと口にしよう^と

その身に五指の黒い爪が突き刺さった。

巻物は開かれること無く地面へ落下。奇妙な沈黙が続いた。

「ギヤアアアアアア!?!?!?刺さってる!?!比喻無しで刺さってるっす!?!」

「煮て食う」

「結論!?!?!?」

カモが見上げた先には……修羅が居た。冷たい、何処までもい
つても極寒の凍てついた視線はカモを射抜き、在りし日の闇の福音^{ダイクエヴァンジェル}
が威容を見せて嗤っているのだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさい……………」

「ふんっ、解れば良い。ああそれと、今後その羽よりも軽い口を私
の前で踊らせてくれるな。まかり間違つてスタスタにしかねん」

それだけ言うとエヴァはそっぽを向いてその場を歩き去って行った。即座に茶々丸が追従する。

「ん？エヴァ、もう帰るんか？」

「ああ、帰る。夕飯までには帰って来い……………それから……………」

数メートルの距離を置いてエヴァは突然振り返り、悟空にビシッと人差し指を突きつけた。

「仮契約は許さん。以上……………行くぞ茶々丸」

「……………嫉妬ですか？」

「違う！！い、いや、ちがうことも、ないことも……………」

「嫉妬だそうです！」

「なんで大声だコラ！！？」

器用に歩きながら漫才を繰り広げて、エヴァと茶々丸は広場を後にした。

残された者達は呆然とその背中を見送り

「なんでエヴァのやつ怒ってんだ？」

「あ、やっぱり気付けへんこの人」

思わず地が出ることも憚らず刹那はツツコンだ。

頭を捻る悟空だったが結論が出ることは永久に無いと何となく悟り、
気を取り直して自身の両頬を手で打った。

「うっし！修行再開すっか！クー、わりいけど組み手付き合っ
てくれ」

「おお！望むところアル！」

「エヴァちゃんったらなんや可愛らしかったな〜 せっちゃん！負
けてられへんで！」

「うっ、流してはいただけないんですね……」

多少の混乱もさっさと流し、各々がそれぞれ行動を起そうとした。
その矢先

「かつ、関係ないって今更なによその言い方！？このガキっ！！」

「わわわ、アスナさん！！！？」

「お？」

「え？」

「あい？」

「あ、アスナとネギ君や」

そこには、胸倉を掴み上げられたネギと鋭い眼光でそれを睨み付ける明日菜の姿があった。

第26話 仲良くケンカしよ 後編

麻帆良学園都市にはその敷地内の多くに西洋建築が見られる。公道、店舗、校舎、一般家屋等までも、年代を感じさせる古式ゆかしい物から、現代風モダンにアレンジされた比較的新しい物まで、様々である。ネギと悟空が歩いている坂道もまたそんな例に漏れず、左右を石造りの柵で囲い、道その物は煉瓦で以て幾何学模様を描いている。柵を越えて眼下に広がる西洋風の建物群とその先で輝く広大な麻帆良湖。景色としては一級品だった。しかし、今此処を歩く両者にとつては、その素晴らしい景観も詮無い事。

「うう……アスナさん、あれからずっと口利いてくれません……」

「あれからって、あん時の修行からもう何日か経ってっけど、ずっとか？」

重く肩を落すネギは見るからに消沈しており、今にも倒れてしまうのではないかと疑うほど足元が覚束ない。悟空は取り合えず目を放さぬようにと小さく心積もりを決めた。

数日前、ネギと明日菜が喧嘩した。

出来事としては、別段何も珍しいことでは無い。妙な所で頑固なネギと多少怒り易い明日菜は、以前から小競り合い程度の口論をよくやっていたものだ。それは一時、怒鳴り合い掴み合いの大喧嘩に発

展することもしばしばであったが、時間が経つか、或いは更なる大きな出来事イベントに飲み込まれるかして忘れてしまふ、その程度の事だった。そのはずだった。

「ああ！どうしましょう悟空さん！？僕もしかして気付かない内にとんでもないことアスナさんに言ってたんじゃない？！」

「うーん・・・かもな。じゃなきゃアスナだってあん時許してくれてたもんな」

「あううう！！」

今回はそうは問屋が卸すまじと言わんばかりに、何時にも増して明日菜は怒った。口論は掴み合いに、売り言葉には買ひ言葉とネギがまた二、三言返した末、ハリセンが火を吹いた。

その後、マクダウエル邸で開かれた『何故にアスナは怒ったの？会議』でもって発案された取り合えず謝つとけ作戦にも失敗。全裸のまま仮契約カードで召喚よびだし、高畑が狙っているとしたか思えないタイミングでエンカウントを果たし、ハリセンが火を吹いた。

現在に至っても尚、事態は好転する兆さえ見えない。ネギは徹底して明日菜から無視され続けている。

「ま、10歳の子供に女心ってのはなく、おっと此処にもいたねえ色男！」

「？」

「あああ！女の人の気持ちなんて全然解らないですよー！！このままじゃ僕一生アスナさんと話も出来ずにお別れに！？」

父親の手掛り、エヴァ・悟空との修行、魔法戦闘における種タイプの選択、山積み状態にある問題の上へ更に明日菜との確執ときて、10歳の少年のキャパシティは限界に近かった。ネギは頭を抱えて悶えている。

悟空はといえば、無い頭を悟空なりに捻っている最中であつた。現在進行形で苦しむネギをして放っておけるわけも無く、どうせ喧嘩をするにしても楽しく出来なきゃダメだろう。悟空の認識はそんな感じだつた。

（ケンカかあ……そう言や、昔はクリリンともケンカばっかだつたな）

懐かしい記憶だつた。出会つて間もない頃の親友は、どういう訳か自分を眼の敵にしている節があつた。弟子入りの時も修行の時もなんだか随分と色々やられたような気がする。遂には殴り合いの喧嘩にもなつた。お互い未熟で、ただただポカポカと拳を振るうだけの正に子供の喧嘩だ。（クリリン視点で言えばそれこそ生死を彷徨うレベル）

（あの後は結局……）

「ぶぎゃー!？」

昔に思いを馳せ始めた悟空の思考は、唐突に終わりを告げた。一台の黒長いリムジンがカモを轢いたのだ。

運転席からスーツ姿の男が一人車外へ出てリムジンの後方入り口に向かう。きびきびと、それでいて品のある動きでその男は扉を開いた。そして中から現れたのは、長い腰まで伸びた金髪を靡かせ、上品に微笑む雪広あやかだった。

「おはようございます！ネギ先生、悟空先生」

「いいんちゃん!」

「よっ、アヤカじゃねえか」

いきなりの登場にネギは少し驚いた様子。対して悟空はいつもの如く掌を上げた。と同時に、疑問が一つ。

「んでよ、こんなところでどうしたんだ？ネギになんか用か？」

「ええ！ネギ先生、それから悟空先生にも」

「「？」」

悟空とネギは顔を見合わせ、そして同時にあやかを見て首を傾げた。

まるで小動物の親子のような挙動に微笑^えみがこぼれる。あやかはクスクスと声を漏らしつつ言った。

「お二人を、南の楽園へご案内いたしますわ！」

「南の楽園？」

あれよあれよと言う間に、眼前には輝く白い砂浜と静かに波立つ碧海が悠然と広がり、青々と瑞々しい枝葉を持つ熱帯植物達と赤く軽やかに揺れるハイビスカスの花弁が穏やかに佇んでいた。そしてそれら全てを暑く照らし出す、燦々と笑う太陽。

ネギと悟空が居るのは、正しく南国だった。

「はあ、すつげえな！こんな綺麗な海オラ初めてだ」

「は、はい！すごいですねえ……」

「うふふ、ありがとうございます。雪広グループのリゾートアイランドを一日貸し切りにいたしましたから、お二人とも存分に堪能してくださいな」

ちなみに、あやか含めて三人は既に水着に着替えている。

ネギも悟空もハーフパンツタイプの水着、白と黒の色違いをそれぞれ履いていた。ネギはフード付きの上着を羽織り、悟空は紺のアンダーシャツをそのまま着込んでいる。

悟空は腕を組み、感心した様子であやかに頷いて見せた。

「うん、やっぱりアヤカはイイヤつだな」

「え、そ、そんな、うふふっ改まって言われると照れてしまいますわ」

微かにあやかは頬を染めてはにかんだ。

「照れることねえって。なあ？ネギ」

「そうですね！だって、皆さんもあんなに楽しそうにしてるんですから」

「ネギ先生までそんな……………」
「…皆さん？」

「…………海だ…………!!!」

色とりどりの華やかな水着が十二余り。はじける笑顔は太陽のように。軽快に砂浜を蹴りだし、少女達は一斉に海へ飛び込んだ。跳ねる水飛沫を陽光が照らし、戯れる少女達の満開の笑顔を一層輝かせる。

「クラスの殆どが来てんな」

「わあ〜!」

「……………」

心の底から愉しげな皆のその様に、ネギと悟空は知らず笑っていた。あやかは拳を握って震えていた。

「……………まったく、なんで私まで来なきゃいけないのよ」

「まあまあ、ちよーど新聞配達もお休みやったしえーやん」

海からは少し離れた浜辺の一角。

いかにも不承不承といった体で明日菜は溜息を吐いた。乗り気がしなかったのも勿論ながら今は少々機嫌が悪い。木乃香が宥め賺し押し引いて言いくるめ、漸く重い腰を上げた明日菜なのであった。なんだかんだと文句を言いつつもしつかりと水着は着用しているが、木乃香は幾分声を落し、傍らの刹那に顔を寄せた。

(海で遊べばネギ君とのケンカも忘れるかもしれんしね)

(・・・そうですね)

(だといいんだけどな)

(あ、悟空さん)

コソコソと声を潜める二人にそつと悟空も加わり、三人は改めて明日菜とネギを見た。

(お、ネギが話しかけっぞ)

(ネギ君！フアイトや！)

(やはり最初は歩み寄りから・・・あ)

(ありや、アスナのやつそっぱ向い　あ、行っちゃまった)

不機嫌に拍車を掛けた様子で、明日菜さっさと立ち去ってしまった。後にはポツリとネギが一人。ガツクリと肩を落としたまま、ネギはとぼとぼとその場を後にした。

「ネギ……」

ファーストコンタクト、敢無く失敗。

透き通るマリンスブルーに身を浸しながら、和泉亜子はぼんやりと海から浜辺を眺めていた。ビーチボールにやんわりと体重を預け、後は流れのままに揺ら揺らと水面を漂っている様はいかにもリラックスしているようであったが、しかし実際の所、亜子の心中では正しく漣なみが立っていた。気懸りは一つだけ。先程からずっと逸らすことなく、注視し続ける視線の先にいる。

「……………悟空さん、どないしたんやろか……………」

砂の上でジツと胡座を掻いたまま悟空は動こうとしなかった。亜子が眺め始めてから大分経つが、それでも態勢はそのまま。それに表情はむしろ物憂げでさえある。事態の進展が無いまま悶々とした状態で亜子は下手に動けずにいた。

「な〜にやってんのさ亜子！」

「ぶばっ!?!」

顔面にしこたま海水を浴びた。亜子は目を白黒させて眼前の、人を食ったように笑む明石裕奈と苦笑いを浮かべる大河内アキラを見やっただ。

「まったく、恋する乙女オーラ全開で何してやがりますか？」

「な、なんやのん突然!?!」

「はあ〜、無自覚だよ……………気になってんでしょ？」

「……………」

思わず、亜子は呻いた。余程に人目を憚らず見つめ続けていたのだ

ろつ。途端に胸が羞恥で埋まる。

「こんなところで悩んでも始まんないよ？ほら！悟空さん、今なんか悩んでるみたいだしこれチャンスだよ！チャンス！」

「ちゃ、チャンスって……？」

「勿論！落すチャンス」

「おとつ！？」

平然と語る裕奈に対し、亜子は百面相を繰り返した。
いよいよ以て面白そうに裕奈はニヤニヤと笑って言った。

「さあさあ、どーするどーする？このままもたもたしてる内に誰か口説きに行っちゃうかもよ〜」

「でで、でもお……」

「あ、誰か近付いてってる」

「「え」「」

いびりいびられている友人二人を尻目に、アキラがぼそりと呟いた。
思わぬタイミングに亜子も裕奈も完全に虚を突かれていた。二人は慌ててアキラに倣い、浜辺へと目を凝らす。

ゆっくりと歩み寄っていく影が一つ。
ポオツと海を眺めていた悟空は近付いてくる足音に気付き、ふと背
後へ振り返った。

「こんにちは、悟空先生」

「よお、どうかしたんか？チツル」

悟空が見上げた先には穏やかに微笑みながら佇む、那波千鶴の姿が
あった。

千鶴はそつと視線を悟空の隣へ移し、次いでもう一度悟空を見た。
一瞬、意図が読めずに悟空は首を傾げたが、すぐに得心いった風情
で一つ頷く。千鶴は小さく笑み、悟空の隣へ腰を下ろした。

「……ちょっと、気になったんです」

「気になった？」

「そつ、先生のこと。ずっと思いつめてるみたいだったから」

「オラが？」

悟空と真直ぐ視線を合わせて千鶴は頷いた。

「……それはやっぱり、ネギ先生のことかしら？」

「うーん、ま、かもしんねえ」

「？ アスナさんと喧嘩しちゃったって、すごく落ち込んでました
「よ

「ああ、なんか随分元気無くしててよ。ちゃんと飯食ってつかなア
イツ？……」

腕を組んで真剣に首を捻る悟空の言に千鶴はクスクスと笑った。笑
われた理由が今一つ理解できず、悟空は不思議そうに千鶴を見た。

「フフフツ、うん、そうよね。お腹が空いてたら誰だって落ち込ん
じゃう」

「だろ？だからよ、飯たらふく食って力付けられたら今度こそ……
」

「今度こそ？」

体育座りのまま膝に頬を当てて、千鶴は横目に悟空を捉えて先を促がした。

「今度こそ、思いっきりケンカし直すんだ！」

「へ？」

彼女にしては珍しく頓狂な声を上げて、千鶴は思わず悟空の顔をジッと見つめてしまった。

所変わって、林の中。もぞもぞと動く数人分の影がそこにはあった。影の一人、裕奈は耳をこれでもかと言うほど広げて集音の限界に挑戦している。

(くぅ〜！やっぱりこの距離じゃ聞こえない！)

(ああ、ちょっとだけ遠いんだよね〜。あとほんのちょっと近寄りゃ良い画が撮れるんだけど……。デジカメだとこれが限界か。ちっ、望遠レンズ持ってくればよかった……。)

(……。どういつのなんて言うんやったっけ……。)

(・・・出歯亀、かな)

出歯亀、もとい覗きに、デジカメ片手の朝倉和美が当然の如く加わった現在、傍目からは中々に不審な団体が完成しつつあった。当初、海面から事の仔細を眺めようと画策していた彼女ら一行は、千鶴が悟空に接近した時点で早々と好奇心に敗北して今に至っている。

並んで座りながら談笑？する悟空と千鶴の姿は、どう鼻屑目に見ても教師と生徒には見えなかった。そもそも、確実に成人はしているだろう悟空と並んで全く遜色の無い様子で平然としているが、千鶴は『中学生』である。誰がなんと言おうと中学生なんだから仕様が無い。

(あー・・・いや、でもむしろあのナチュラルで化物な体型に釣り合う男子っていないでしょフツー・・・)

(まあクラスじゃヤツがNo.1だ。それに草食系男子が蔓延る昨今、難しい問題ではあるけれども・・・まあ御覧なさいな)

モデル・グラビアアイドルも顔負けな容姿の持ち主である千鶴。

そしてその隣で何気なく座っている男。シャツや水着から覗く腕や足には隆起した筋肉が遠目からでも窺える。しかしそこに、無闇に膨れ上がった部分など微塵たりとて有りはしなかった。極限まで無駄な部分を削ぎ落とし、ある一つの目的のためだけに研鑽され鍛えられた体。(それは偏に『闘うこと』であったのだが、亜子達がそれを知る術は無い)

女性達にとってそれはある種、目の毒でもあった。

(うわっすっごー！悟空先生なんであんな無駄にいい体してんの！？
……運動、つかバスケットできないのかな？)

(泳ぎも速そう……ウチの部の先輩達よりすごいよ)

(ひゃっ……あう、な、なんかジツと見とるん恥ずかしくなってきた……)

(新たな収入源開拓のチャンスがあ~~~~！やっぱダメ！？しゃあない、今度直接悟空先生に交渉して……)

三者三様思い思いな感想を抱く中、和美だけはデジカメとの格闘を続けていた。デジタル画面のファインダーからはボケた画像が映るのみ。

新副担任として赴任してきた孫悟空について、那波千鶴が顕著な感情の発露を催すことは特別無かった。有るとすればそれは、精々普段から目になっている孫悟空の素行に対する感想ぐらいなもの。誰とでも、一切の隔たりを感じさせないあの明るさや優しい印象は、有体に言えば確かに好ましいものであったのだと千鶴は思う。ただ、それはそこで終わりであって、それ以上は無かった。冷たくあしらおうなんて考えは無いし、仲良くしていけたら善いとは思っている。

単に、大きく興味を惹かれなかったというだけの話だ。これからもその印象は変わらず、時間が経ち、学校生活が終わりを迎えればさつさと忘れてしまうだろう。

何となく、そうだと決め付けていたのに

『こんにちは、悟空先生』

何故自分は声を掛けたんだろうか。

何故か回想に耽ってしまっていた頭を千鶴は漸く引き戻した。目の前には先刻の体勢のまま、悟空が不思議そうに千鶴を見つめて疑問符を浮かべている。疑問を抱いているのはむしろこちらのはずなのだが、千鶴はまた少し可笑しくなって笑った。

「ふふふふつ、ふふ……………ねえ、それは、なんで
そう思うの？」

「？」

「喧嘩し直す、なんて」

「ああ、それな」

悟空は一つ頷くと幾分か居住いを正した。真剣な話をします、という意思表示らしい。その妙な真面目さに千鶴はなんとなくお座りする大型犬を想像した。

「ケンカはよ、思いつきりやらねえと意味無えからだ」

「・・・・・・・・・・そう」

解らない理屈ではないと、確かに言えるのだろう。心に留まる感情をぶつけ合うのだから、とても大切なことだ。

小さな子供達を世話する機会の多い千鶴にとっては、喧嘩はある種見慣れたもので、今回のことも（ネギや明日菜には申し訳ないが）子供の喧嘩には違いなかった。

でも

「でも、それでもし、二人がずっとあんな風に一緒にいられなくなったら、どうするんですか・・・・・・・・・・！」

自分で意識する以上に、言葉は冷たかった。口調のきつさに思わず口籠る。自分から質問を寄越しておいて、この返し方ではあんまりだ。

でも、と内心でまた言葉が反芻される。

子供の喧嘩だから、なんていう理由で千鶴がそれを軽んずることな

ど無かった。些細なことであつたとしても、重大なことなら尚の事、人との繋がりには呆気なく切れてしまう。子供達に仲良くあつて欲しい、関係に距離を、壁を作ってしまうことが何より嫌で、どうすれば仲直りしてくれるのか頭を悩ませてきた千鶴には、悟空の言葉が酷く軽く思えてならないのだ。

だからこそ少し反省した。これは自分の考え、自分だけの考え方なのに、それに照らせないからといって腹を立てるのは筋違いもいところだ。千鶴はすぐさま謝罪の言葉を探して悟空を見た。嬉しそうに笑っていた。

「おめえイイヤつだな！」

「え………」

そのままわしゃわしゃと頭を撫でられた。ポカリと口を開けたまま、千鶴はすっかり固まってしまった。

「大丈夫だ」

真正面から悟空は千鶴に視線を合わせ、微笑んだ。まるで子供あやす様に、安心させる為に視線を合わせる。いつも自分がやっていることではないか。

「アイツらのケンカは、なんつうか……こう……うん、やさ

しいんだ」

「やさしい……?」

「ああ、殴り合ったり大声出したりしてよ、すげえ派手なケンカになっちまってアイツらなら大丈夫だ。アイツらだから大丈夫なんだ。だから、心配ねえって!」

陽光のように、或いは無邪気な子供のよう。千鶴自身、今までずっと見守ってきた子供達と同じ笑顔がそこにはあった。しかし文字通り、それは『表』情なのだと悟る。

千鶴にはむしろ笑顔より、その力強い瞳こそがこの男の本質のように思えた。

理屈も何も有ったものではない。ただただそこには確信の籠った言葉が並べられているだけ。

「……大丈夫なのかしら」

「当たたりめえだ!なんつってもアイツら仲いいかな。その内ひよっこり仲直りしてら」

「……」

「そんでも心配だっつてんなら、オラが話付けて来っぞ。うん、取り合えず飯食いながら……」

「あらあら」

一転して、話が戻ってしまった。もしかしてお腹が空いているのか。笑みを浮かべて千鶴はそんなことを思ってみる。あの一瞬垣間見得た瞳は何処へやら。もうそこにいるのはいつもの無邪気な悟空だった。

しかしどうも、変わってしまったものもあるようだ。

千鶴はそつと悟空の胸に額を押し当てた。右手は悟空の左肩に置かれ、しな垂れかかる様に身を預ける。でもその情景に色はない。

「ちゃんと、仲直りさせてね。先生」

「ああ、任しとけ!」

父親に甘える子供ののように、千鶴はただ、一つだけ願った。

(っ!?!?ちよちよちよ!?!?あああれれ!?!?)

(亜子!気をしっかり持って!衛生兵!衛生兵!?)

(ゆ、ゆーなも落ち着いて!.....那波さん、だ大胆.....)

(撮りてえー!?!くっそ教師と生徒の背徳恋愛っておま!?!ゴシツプの華があああ!?!)

木々とか心とか色んなものを激しく揺らす四人が、意味深な視線に気付くことは無かった。

「フフフッ、あらあら」

「うちゅう訳で来たぞアスナー！」

「どついつわけよ!？」

時刻はすでに夜半。日も落ち、皆自身に宛がわれた部屋で思い思いの時間を過ごす頃、悟空は明日菜の部屋に居た。

「ほれ、ネギ」

「は、はい……………」

「っ!」

悟空の背後に隠れるようにしてネギはそつと顔を出した。途端に明日菜は顔を顰め、そつぽを向いて部屋の奥へ引っ込んでしまう。

「あ、明日菜さん……………」

「話す事なんて無いわよ。さっさと出てって」

「あう……………」

「まあまあ、んなこと言わねえでちつとだけ、な？」

腐る明日菜を他所に、悟空はネギの背中を押して明日菜に続いた。振り返った明日菜のこれ以上ないほど不機嫌な様はネギでなくとも尻込みする迫力がある。と悟空はひっそりと思った。

「……………今更何なのよ」

「おお、ネギがアスナに謝りてえって言うからよ、ついでにオラも付いてきた」

「いやついでにって何よ?……………今日は、疲れてんのよ。明日に就いて」

「で、でも！アスナさん僕！」

「ああもう！いい加減にしてよ！」

尚も追い続けるネギにとつとつ明日菜は声を上げた。不機嫌は最高潮に、怒り心頭といった体で思い切りネギを睨みつける。

「だいたいあんたがいつもそんなグダグダ煮え切らないのが悪いのよ！..！」

「むっ、グダグダって、僕だって.....僕も僕なりに考えてるんです！そ、そりや至らない点が多くて、アスナさん達には迷惑ばかり掛けてますけど.....だからって、だからってそんな言い方！」

売り言葉に買い言葉と、ネギもまた声を上げて明日菜に食って掛かる始末。このままでは数日前の焼き直しである。しかしこの場には二人の他に、もう一人。

「そもそもよ、なんでおめえ達ケンカしてたんだ？」

悟空が至極最もで今更な疑問を投げた。明日菜も最早怒りのまま叫ぶように答えを返す。

「コイツが！酷いこと言ったのよ！人の気も知らないで！！」

「酷いことって！僕はただアスナさんは無関係な一般人なんだから危険な目に遭うことなんてないって言ってるんです！！」

「また無関係って！今更何よ！今までだって散々人に頼ってた癖に今更粹がってんじゃないわよ！！」

「粹がってなんていません！どうしてそんな風に言うんですか！！」

「ふむふむ」

言葉のドッジボールを悟空は腕を組んで聞いていた。両者共に一歩も引かぬ言葉の殴り合い。しかし全力投球なそれらを聞いて、悟空は満足げである。

「じゃあよ、ネギ。おめえはどうしてえんだ？」

「僕はアスナさんを危険に晒したくないです！無理して裏の事情に踏み込んでまた修学旅行の時みたいことにしないために！」

「そっか。アスナはどうだ？」

「ここまで関わっというて危なくなったらはいさよっなら、なんて出来るわけないでしょ！私は私の意志で最後まで付き合っつて決めるのよ！……」

二人の本音も漸く見えて、やっと悟空は肯けた。やっぱりこの二人はやさしいのだと再確認を終えた今、迷う事はもう無い。

「おっしや分かった！んじや、今日とはことんケンカだな」

「望むところ（です）（よ）！！！！」

睨み合う二人を見て、悟空はふと懐かしい光景を見た。小さい為りで殴り合う、まだまだ未熟な自分と親友。散々ばら殴り合い体力の限界を迎えて倒れ付す二人。

（ええっとこの後は……あ、そうだ！腹減っちゃまって、なんでケンカしたか忘れたんだった）

我ながらバカだったと笑みを零しながら、再度、目の前で盛大に大声を上げ、そろそろ手が出てもおかしくない二人を見る。

「終わったらまず腹ごしらえだな！」

誰も聞くことはない呟きを、悟空は嬉しそうに口にするのだった。

「ねえあやか、厨房借りてもいいかしら？」

「え？ええ、別に構いませんわ」

「ちづ姉？お腹空いたの？」

部屋の扉に手をかけたまま千鶴は振り返り、片目を瞑る。

「私じゃなくてね、あの食いしん坊さんに」

「？」

第26話 仲良くケンカしよ 後編（後書き）

喧嘩は時折盲目的なところがありますよね。

当事者達が喧嘩の原因等をよく把握していない。或いは、周りのその喧嘩を大袈裟に風潮したり、逆に過小に判断したり。何はともあれ仲良くあるのが一番なのですが、適度なガス抜きも大切です。

皆さんもどうかお友達とは仲良く喧嘩してください。

いえ、決して更新が遅いのを誤魔化しているわけではないです。本当に。

すみませんでした………！

前後編分けたものの、これでも結構削ったんですよ？………一応ですが。

鳴滝姉妹と悟空のほのぼのとか、VS古菲の水中戦闘とか………言うだけタダというやつですね………すみません。

こんなアホな作者ですが、ご一読いただき本当にありがとうございます！

幕間1 真名と悟空と時々超包子

『麻帆良警備委員会使用中、関係者以外立ち入り禁止』

達筆な文字でそう銘打たれたビラがでかどかどか貼り付けられている扉は会議室のそれだった。麻帆良学園における警備員は『普通の学園警備』というものからは程遠く、通例としてこのような会議が開かれる際は漏れなく人払いの結果が張られるため、このビラには残念ながら意味は無い。曰く、雰囲気だと。

会議室内は十数名の人間を収容しても尚余りある広さを誇り、広々と用意された長机とパイプ椅子に各々が腰掛けていた。

「今月に入って、鬼の数は倍増。学園内における術者の動向も随分と大胆になってきている」

「先日も魔法先生が二名負傷……生徒の方にも怪我人が出ます」

「ふむ……」

室内正面に位置するデスクに腰掛けた後頭部の異様に長い老人。それぞれ居並ぶ教員、生徒達からの報告を聞き終えて、近衛近右衛門は小さく頷いた。

「西の方が動き出しておるようじゃな」

「はい、やはりこちらから修学旅行生を送り出すのに難色を示しているようで、因果関係は否定してますがね……」

「否定も何も、この時期で、このタイミングだ」

「ちよつと無理がありますよね」

ガンドルフィーニの言に瀬流彦が続いた。

麻帆良学園を中心とする関東魔法協会。京都に拠点を据える関西呪術協会。古来より争いの絶えない両陣営であるが、昨今では関西の長・近衛詠春の尽力により、比較的關係改善が成されていたはずであった。

今年、麻帆良学園女子中等部の修学旅行が京都であると決定して以来、西の術者の攻勢がより激化した。理由は言わずもがな。関西呪術協会と一枚岩ではない。穏健派と過激派、双方の対立は昔ほどの規模は無いにせよ、未だに続いている。

「ふむ、その件については申し訳なく思とる。わしの力不足でもあ
るぞの」

「いえ、そんな、学園長……」

「ふおおおお、だからこそ今、手を打つ算段を見定めておるとこ
ろじゃて。さしあたって先決なのは親書の受け渡しじゃな」

関係改善の手段として上がったのが、東と西との和平を目的とした親書だった。表立った和平宣言を上げてしまえば、いくら過激派といえど大っぴらな活動は自粛せざるを得なくなる。そこはやはり、何処まで行っても組織には違いなかった。

「西への対応はそれで決まりですね。……あとは、学園の警備か……」

「やはり当直を増やしましょう。各々の担当区域を最小にして……」

「今でも結構一杯一杯だったのに、まったく困ったもんだ」

「それでも生徒の安全には代えられないよ」

「しかし、単独行動は禁物ですよ。魔法生徒は特に。最低でも二人ツーマン一組ワンセル以上でなくては」

「回せる人手にも限界があります。それだと担当区域を広げざるを得なくなる……」

話題がすっかりシフトしたことで、室内が俄かに騒がしくなる。学園の警備態勢、人員の確保、生徒の安全、避難措置。教員、生徒含めて皆そんな事項で頭を悩ませていた。とそこで、唐突に学園長が手を上げた。一様に皆話を止めて何事かと注意を傾ける。

「その事なんじゃがの……わしに一任してもらえんか？」

「は？一任って……学園長が警備に付かれるのですか!？」

「ふおおお！この老体にそれはちと厳しいの。いやいや、そうではなくての。一人、雇いたい者がおる」

今度こそ、室内の全員が怪訝な表情で学園長を見た。そんな報告は全くもって流れてはいないのだから当然といえば当然。無理も無い、高畑はひっそりとそう思った。

一つ、小さな手が上がる。恐る恐るといった風情で佐倉愛衣は口を開いた。

「あの、それって、もしかして昨日の夜のことと関係あるんですか？……」

「うむ、皆の推察の通りじゃよ」

騒騒と、またも会議室内の静寂は途絶えた。昨夜の出来事ならば此処に居る全員が知っているし、全員が全員いつも以上に神経を使っただのだ。

ダークエヴァンジェルドールマスター マガ・ノスフェラトゥ
闇の福音、人形使い、不死の魔法使い、悪名轟く悪の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが一時的とは言え、学園結界から開放されたのだ。対処できたという報告を聞き終えた時の安堵を、その場の誰もが噛み締めたもの。

しかし、この期に及んでこの老爺は一体何を企んでいると言っのか。

胃の痛みを感じたのは自分だけではないはずだ。ガンドルフイーニの声無き声だった。

「……………気の使い手なのですね」

「うむ？おお、刀子君は気付いとったか」

「当たり前です！学園長、巫山戯ておいでですか？あんなものを学園側に引き入れるなど！？」

「む？」

葛葉刀子、麻帆良学園教員にして京都神鳴流の剣士。陰陽術にも長け、気の扱いに関してはこの場の誰よりも慣れ親しんでいると言えた。だからこそ理解できない。

「……………あんなモノを、御しきれるとお思いですか……………！」

膨大で強大で深遠、そして何より刀子が危惧したのは最後の変化。気が、力が、変わったのだ。際限なく膨れ上がる気が一瞬で明らかに異質なものに成り果てた。周りの教員、生徒達もまた、いつもならば冷静沈着な刀子の剣幕に驚き、身構えた。

膝の上で組んだ手に力を籠めて、刀子は苦々しく呟いた。

「一体、どんな化物を……」

「化物かの？」

「は？化物かい？」

対して、学園長と高畑は余りに深刻になっていく面々に、思わずキョトン。そして同時に、昨夜の邂逅を思い出す。

『オツス！よろしくな！』

満面の笑顔と底抜けの明るさ、あと多少頭の弱さ等々。

「……ふおふおふおふお！」

「くっははははは！」

「「「「「？「「「「「」

憚ることも出来ず、学園長と高畑は声を上げて笑い続けた。張り詰めていた空気が風船のように萎んでいく。疑問符が乱れ飛び、訳も解らない内に、会議は敢無く終わりを告げた。

会議に出席していた面々も皆去って行き、伽藍と静寂が降りる室内で、不意に隣室の扉が開いた。開かれた扉から室内へと足を踏み入れてきたのは、腰まで伸びた黒髪を揺らし独特の仕事着に身を包んだ少女、女子中等部3年A組18番、龍宮真名だった。

「それで？」

「うむ、早速じゃの」

「仕事はてきぱきとこなす主義なんだね」

壁際にもたれて腕を組み、真名は座ったままの学園長を見やった。

「ふむ、聞いておったと思うがの、実は新しく人手を雇うことにしたんじゃが」

「闇の福音を退けた奴を？」

「まあそうじゃ。そこでの、ここでの仕事の手順をその青年に教え

てもらいたいんじゃない。早い話が研修じゃない」

「……………」

あつげらんかんとして言つ目の前の老人に、真名は訝しげな視線を投げた。

「……………なんで私なんだ？教えるのが得意なのは他にもいるだろ」

「そうなんじゃが、真名君が適任かと思つての。なんせ面白い青年じゃ、先生達相手では少々反りが合わんじやろ」

言葉とは裏腹に学園長の声はひどく楽しげであつた。

狸親父。真名の素直な感想である。

「ま、いいさ。クライアント雇用主の要求だ。契約が果たされている限りは応えるよ」

「ふおふおふお」

「……………はあ、で？私は何時、その新人君を教育してあげればいいんだい？」

「うむ、明日の夜半の警備からじゃ。なに、教えるといつても学園警備について二、三知識を付けてくれるだけで結構。報酬は……………」

「こんなもんでございじゃ」

そう言うと、学園長は袖口から算盤を取り出しパチパチと叩き始めた。真名は触れないことにした。

叩き終えた算盤を差し出され、仕方なく幼少の拙い記憶を呼び起こして盤上の金額を読む。

「……………」

もう一度読み直した。

「……………私の読み違いか？それともそ
つちの打ち間違いか？」

「ふおおお、どっちでもないと思うぞい」

「随分と奮発するじゃないか……………」

余程に、その新人君を買っているらしい。通常の契約時よりゼロが
一つ二つ多いのだが。

学園長は真名の表情から動揺を察した様子で、笑みを崩すことはな
かった。

「……………OKだ」

「ふおおおお！では真名君、頼んだぞい。ああそれと、その青年のことなんじゃが、君のクラスの副担任を任そうかと思っとる。君とも浅からぬ縁になるじゃろう」

「はいはい、もう驚かないよ……で、その人の名前は？」

「孫悟空先生」

「ん？おお、おめえは……わりい、名前まだ覚えてねえんだ」

「気にしなくていいよ。なんせ初日なんだから。覚えていたら逆に怖い」

夕日は疾うの昔に顔を隠し、すでに辺りは闇が満ち始めている。空に浮んだ半端に欠けた月が放つ微光は、徐々に濃くなる夜闇に合わせその自己主張を強めていった。

悟空が副担任として赴任して来た初日、何故か友人（刹那）の出歯亀をした帰りのこと。真名は所定の場所で待っていた悟空と再会した。

「私は龍宮真名。好きに呼んでくれて構わないよ」

「マナか。うっし分かったぞ。オラ悟空だ。よろしくな！」

「ああ、よろしく……」

またぞろ子供のように笑う悟空をして真名は内心混乱気味だった。純朴を絵に描いたようなこんな男があゝの闇の福音を打倒したのだという。

（……成程、これは調子が狂う……）

「なんか言ったか？」

「いいや？」

そんな遣り取りを交わしながら、真名と悟空は何も居ない道を並んで歩いていた。

「学園長から少しは聞いていると思うけど、先生と私の仕事はこの学園の警備だ」

「守れてることか？なんか攻めてくんのか？ここ」

「まあ、そういうこと。事情説明は長くなるから省くよ。ああそれと、気付いてると思うけどこちら一帯には人払いの結界が張ってある。余程じゃない限り派手に動いても支障無い筈だ」

「へえ〜」

感心したように悟空は人の居ない奇妙な街並みを見回していた。

一種異常なほどの静寂。虫の声さえ聞こえない、風に揺れる枝葉がさらさらと鳴り響くのみ。これではまるで廃墟の群だと、常日頃なら真名は思う、のだが。無邪気にはしゃぐ傍らの妙な男のせいで雰囲気も糞もない。

「へえ〜！ホントに人がいねえ。遠くにいるやつも皆ここだけ避けて通ってんのな。うん？なあマナ、遠くの方にもここみてえな場所があっぞ」

「？ ああそれは、他の人間の担当区域だろう。私達の他にも警備に着いている者は大勢居る………解るのかい？」

「ああ、ぼつかり穴開いちまつてるみてえに人がいねえ場所が、ひいふうみい……うん？いや、中に二、三人いるな」

「……」

常ならず真名は驚いた。なんだ、その出鱈目な探査能力は。広大な麻帆良学園都市の人員配置をただ突っ立っただけでこの男は把握したのか。

「ん？でよ、オラ達は結局なにすりゃいいんだ？」

「っ！あ、ああ、そうだった……そろそろだろう」

気を取り直して、真名は周囲に視線を這わせた。驚いている暇も無い。時間から言えばそろそろだ。そして今日は懸念事項が二つほどある。油断など出来ない。

濃くなつて行く暗闇は何も夜だけが原因ではない。徐々に闇が輪郭を帯び始めている。周囲を囲い込むように林や建物の影ははずると壁や地面を這って移動し、遂に異国の文字を宿した光を放った。

「ちっ！場所が悪かった……」

「うお！？なんだなんだ！？」

「先生、備えて。予想はしていたが数が多い」

真名と悟空は、光の文字群によって完全に包囲されていた。それも尋常の数ではない。数えるのも億劫になるほど辺りは光で満ちているのだ。

「修学旅行前にこれは奮発のし過ぎだ……………」

光は準備を終えたとばかりに、今度は異形を吐き出し始めた。棍を、刀を、槍を携えて百体余りの巨大な化生共が顔を出す。

真名自身考慮していたとはいえ、関西呪術協会は相当に焦っているようだ。普段相手取っている数を軽く越えて、目の前に鬼共は現れた。

調伏を得意とする刹那は傍らにはいない。実力未知数の新人を抱えてこの状況を乗り切れというのか。

「成程、納得の額だ……………」

真名は諦めたようにそう独りごちた。しかし文句を言ったところで何も始まらない。むしろ状況が悪化するだけ。

自分が前に出て悟空に適当な援護を任せれば、最悪邪魔になることはあるまい。真名は結論を出すと、早速背後にいるはずの男に振り返った。

「先生！悪いが私の……………」

悟空は確かに背後にいた。別段何か妙なことをしているわけではない。右肩に手を添えてぐるぐると回し、ストレッチしているだけだ。

鬼の目の前で

『あん？なんじゃいワレ』

「オラ孫悟空だ。今からオラが相手だぞ」

そしてあまつさえ喧嘩売っているとしか思えない態度で以て、悟空はその場で構えた。鬼はそんな悟空を鼻先で笑うと、その手に持った棍を振り被る。

『なんやよう分からんけど、阿呆やなお前』

大した力も感じない無力な人間が粹がっている。鬼達の目に映ったのはそんな愚か者だろう。巨大な棍が夜空を突き上げ今正に振り下るされんと人外の力が籠められる。呆けていた真名はそこで漸く正気に戻った。

「ちっ！」

ホルスターに手を伸ばし愛銃のグリップを握る。彼女が銃を引き抜いて狙いを定め引き金を引くまで、一秒と要らない。そしてこの一瞬を無事脱したなら、目の前の馬鹿に文句を垂れずにいられようか。

一気に噴出す不満を飲み下し、真名は瞬時に銃を抜き 定め
るべき狙いを見失った。

『……………つが……………お……………この、野郎……………!?!?』

「わりいな、隙だらけだったんでつい」

そのまま悟空は鬼の腹に減り込んでいた拳を引く。眼前の鬼は棍棒を取り落とすと腹を抱えたまま消え去って行った。

悟空は、一秒と要らぬ真名の工程を上回ったのだ。

「おっし！次は誰だ！」

構え直した悟空が再度周りを見渡した。驚愕で動けずにいた鬼達は悟空のその言によって途端に怒りを露にする。

言葉を失くしたかのように、雄叫びを上げて鬼達は悟空ただ一人に襲い掛かった。

「な！？先生！逃げ」

続く言葉をどうしてか真名は口に出来なかった。そもそも、自分は酷く間違えていたことに、今更になって気が付いたのだ。

(……………はっ、自分で口にしておいて、まさか忘れるか？
普通……………)

孫悟空、学園警備の新人君、自身の新たな副担任、そして

「闇の福音を打倒した男、だったな」

眼前の光景に苦笑いが漏れる。

鬼が空を飛んでいるのだ。優に体長数メートルを軽々と超える巨躯が。それも一つ二つではない。周りを隙間無く蠢いていた化生共は強大な脅威の出現によって統制を失い続々一箇所へ攻め入り、結果空を舞う。

断続的に響き渡る打撃が同情を誘う。鬼の強固なだけの皮膚などあの拳と蹴りの前には意味を成さないようだ。

「だだだだだだだだだ!!!」

気合と共に機関銃を思わせる速度で数十発の拳が鬼に突き刺さった。鬼が消え去る寸前、足を掴んで思い切り振り回し、周りの一塊を一気に蹴散らす。

地を蹴り次の標的へ跳ぶ。振り被った拳に力を籠めて、撃つ。

「だりゃあ!!!」

『じあつ!?!』

哀れにも拳を受けた鬼はその更に後方に位置していた数体の鬼達を巻き込み、ボウリングのピンよろしく弾け跳んで行った。

弾けた鬼目掛け、悟空が飛ぶ。一瞬にして空の高みに現れた脅威に、鬼はただ呆然としていた。

驚愕を浮かべる暇さえも無い。空中の鬼数十体は風を切って飛び回る悟空に次々叩き落とされ帰路に着いた。

『調子に乗んなや餓鬼!!!』

「!」

優に六尺は有ろうかという巨大な大刀を大鬼が上段から軽々と振り下ろした。当然、その一太刀は人外の重みを秘す。

悟空は咄嗟に右腕をかざす。

大鬼は笑った。対敵の行動は暴拳としか思えない。太刀の一撃を生身の腕で受け止めるなど。吊り上げた口の端はそのまま、空気を切り裂く刃の音と共に

大刀は折れ砕けた。

『なんじゃあ！？刃が！？』

「はあ！！」

驚愕する鬼を悟空は圧縮した気の放出で以て吹き飛ばした。凶悪な烈風は大鬼に留まらず、地上で屯する有象無象さえ巻き込み、還す。

濡れ羽色の黒髪が風に揺れる。半ば呆けてその光景を見ていた真名は、傍らに着地した悟空に暫し気付けなかった。

悟空はといえば、ずっと黙りこくってしまっている真名を不思議そうに見やっっている。

「おーい、マナ？」

「……あ、なんだい？」

目の前でパタパタと手を振られて、漸く真名は意識を取り戻した。

「いや、あらかた倒しちまったからよ。これからどうすんだ？まだ他にもいんのか？」

「ああ、いや、うん、ええっと」

それでもなかった。

声を上げる間も無く、悟空と真名はその場から消え去った。

ピシユンッ

そして、次に目を開けた時、景色は一変していた。

箒を持った少女が一人、鬼に追い詰められている。

「にっ

」

逃げる。未だ碌な思考を許されぬ頭が咄嗟に紡ごうとした言葉。しかし間に合わない。鬼の爪は少女に届く、届いてしまう。ここからでは少女を逃がすことも庇うことも　少女が目の前に居た。

「はっ？」

「へ？」

「よっ、大丈夫かおめえ？」

真名と少女、佐倉愛衣は似たような顔をしていた。何が起こったのかも解らずポカンと口を開けて、暢気な声の主を見上げている。工夫も何も無い高速移動。真名の手は掴んだまま、芽衣は小脇に抱えて、空の高みから悟空は改めて眼下に広がる鬼の軍勢を見据えた。

「へ？はれ？わた、私逃げられなく？え？あなた誰？なんでここに龍宮さん？あのあの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おお、オラ孫悟空ってんだ。今日から警備うちゅうのをやることになったんで、よろしくな！」

言いつつ悟空は手近な所へ着地すると真名と愛衣を降ろした。踏みしめた地面の感触に違和感。真名は土を踏んでいた。というより、周りをいくから見渡しても、先程あつた街並みなど何処にも無い。臭い立つ腐葉土と雨露に濡れる植物の揺らぎ。自分は何時の間に森の中へ？

「ああの！？応援の方々ですか！？っていつか今突然現れて！ってああ！そっただお姉様が！」

「お、そうか。もう一人いんだっただな……。よっし、マナ、わりいんだけどよ、ここでそのええっと」「あ、さ、佐倉愛衣です」「そっか、メイと一緒に待っていてくれ……。そいつの周りにやたら気が集まってやがる」

「……………もういい。OKだ。もう驚かない。ああそっただ問題ない。ああ！問題ないとも！」

「た、龍宮さん？……………」

「マナ？どうかしたんか？」

この期に及んでこの男は「どうかしたのか？」だと。真名の笑顔にシニクな色が浮かび、愛衣が怯えた。

嘲ったのは何も目の前の悟空をではない。何より状況に流されつつある自分を真名は笑ったのだ。他人を見縊みくびっていたかと思えば、仕事は全て丸投げ、あまつさえ守られるなど……………

「この子だって仮にも魔法使いだ。自分の身ぐらい自分で守るさ……………そっだろ？」

「は、はいい！」

「だそっだ悟空さん。置いて行くのはそちらの勝手だが、私は勝手に付いて行く」

ホルスターから二挺の愛銃、デザートイーグルが顔を出す。黒光り

する長大な銃身、覗く巨大な銃口、重みを全く感じさせない軽やかな動きで真名はグリップを握り直した。

元より、初めからこうしていれば良かったのだ。悟空を侮っていたのは完全に自身の落ち度であるが、なら認めてしまえば無問題。いくら悟空が同行を厭おうと、意地でも付いて行って

「そうか。んじゃ一緒に行くぞ？」

「へ？」

「お、そろそろやべえな……行くぞマナ！」

「あ……ああ！」

出鼻は挫かれたが、真名の動きに淀みは無い。悟空と共に林を駆け抜け目前に跋扈する鬼共を視認する。まずは悟空が先陣を斬った。

「だりゃああ!!！」

『ぎいいい!!?』

先頭に行く鬼を殴り飛ばし、鬼の渦中へ身を投じる。途端に砂塵と化す化生の群。

「っ！」

出遅れて堪るか。真名は敢えて鬼の群のど真ん中へ躍り出た。悟空の牽制によって乱れに乱れた陣形の中心で上体を屈めて着地する。自身の全方位に位置する鬼の反応はそれぞれだ。呆然とする者、驚愕する者、怒り狂う者。而してその行動は一樣に同じ。棍を刀を槍を一気に振り下ろそうとしている。

「遅い」

自らを回転させ、銃爪トリガーを叩く叩く叩く。消魂しくも夥しい弾丸の雨を包囲にばら撒く。そのどれもが異形の顔面を心臓を狙い違わず撃ち抜き、刻み込まれた呪が鬼を現世へ留めてはおかない。無論装弾数10発に満たない拳銃でトリガーハッピーも糞もない。弾倉は即座に空となる。スライドが開き切った。

『ゲエアアアアアア！！！』

「つく！？」

マガジン交換ぐらい待って欲しいものだ。真名の眼前を白刃が過ぎる。

暢気に思考している暇などない。周囲の鬼の背後には更に鬼の包囲が、その背後にはまた更に……粹がすぎたか。半身になって辛くも刃を避け、再装填した銃を向けた。

横合いから蹴りが刺さった。鬼に。

「……来るのが速くないかい？」

「おめえ強えなー!!」

「っ!」

皮肉の一つでも、と思った真名の鼻先には悟空の顔。息が掛かる程の近距離で悟空は満面の笑顔を浮かべた。

「今のはすっげえいい動きだったぞ! なあなあ! 今度試合しねえか!?!」

「ちょちょっ! 悟空さ!」

「!」

悟空の背後に鬼が迫る。真名自身の背後にもまた一つ。そも此処は正しく戦場、動きを止めるなど持つての外なのだ。考えるよりも速く、二人は動いた。

背を預け合いそれぞれが互いの背後の鬼を正面に据えて、握りこんだ気弾を放り或いはブリットを眉間に撃ち込む。末魔の叫びを上げることなく二体の鬼はこの世を去った。

柄にも無く、真名は息を吐いた。そしてすぐさま背にした男を軽く睨んだ。

「……悟空さん、頼むよ……」

「ははは！わりいわりい、ついな。でも、さっき言ったことはホントだぞ？」

「え？」

疑問をそのまま籠めたような瞳で真名は改めて悟空を見た。そしてまた、驚かされている。

「……ふう、考えとくよ」

「そっか！」

射抜くような視線だった。息を呑むほど力強かった。身を切る程に鋭かった。闘争を望む戦士のそれだった。

今はもう先刻通り、またぞろ子供のような暖かい笑顔なのに。

強くて優しいなんて、少し、ずるい。

「んっ」

突っ伏していたカウンターから、真名は身を起した。何時の間にか眠っていたらしい。顔を上げた先で、朗らかな顔と目が合った。

「ごめん、どれくらい寝ていた？」

ほんのちょっとだけです。ちゃんと帰って寝ないとダメですよ？

「ふっ、すまない」

やんわりと、真名は五月にたしなめられた。自分にしては素直に謝ったものだと思う。どうも級友、教員達含めて彼女には皆、頭が上がりないのだ。

「ほ、ほきはは」

「ああ。というか、まだ食べてたのかい……」

「おお！はふきのへひあふめえはんあ！」

取り合えず真名が聞いた事の無い言語だった。聞き取れないのも仕方ないだろう。

悟空さん、ちゃんと飲み込んでから喋って

「ほほ、んぐんぐ……っは、サツキの飯は美味えかな！いくらでも入っぞ！」

はい、ありがとうございます

嬉しそうに五月は微笑んだ。悟空の如何にも飾り気の無い贅辞は、或いは最も五月が望んでいるものに近いのかもしれない。と、なんとなく分析する真名。

悟空は再び目の前に広がる料理の数々へ向かった。肉まんをかじり焼売を摘まみラーメンを啜る。一心不乱に料理を食べ続ける様は、シユウマク冬眠前に団栗を必死こいて頬袋に詰めるリスというか、笹やら竹やらをひたすら貪るパンダというか、大体そんな感じだ。間違っても戦士なんかじゃない。いいとこデカイ犬だ。お座りして餌を貰うの待ってる時のような。あ、可愛い。

「ふっ、はははは」

「ん？……んぐ、どうした？マナ」

「いいや………覚えてるかな？私と悟空さんが最初に仕事した日のこと」

「ああ、そっぴやもう結構前か。一ヶ月くらいか？早えもんだなあ」

修学旅行も終わり常勤に戻りつつある今現在、さっさと仕事を済ませた真名と悟空は超包子にいた。

「いや、あん時はタカネがえれえ怒ってびっくりしたぞ。あ、トウコもだな」

「行き成り斬り付けられたのには流石に驚いたよ………」

だらだらと駄弁るだけの気怠げな時間は、これまただらだらと過ぎてゆく。息を呑む程の力強さも身を切る程の鋭さも、今はいらぬ。

気を利かせて、五月が何時の間にかグラスを満たしてくれていた。小さく礼を言っただけでまた少し嘗める。口寂しさもあり、山盛り状態の料理を一つ拝借した。当然ながら味は完璧だ。

「……………ふむ、悟空さん」

「？」

「男女が食事をしているね？」

「ああ？」

「……………色気の欠片も出てこないのは、一種才能かもしれない……………」

「??？」

疑問符の乱れ撃ちとばかりに、悟空は返答に窮していた。真剣に悩むその様は、どうにも滑稽で、どうにも憎めない。自然と笑みが零れてくる。

色気より、食い気に優しいお店です

「ははっ、そうみたいだね」

戦場に男は要らない。男が戦場に女を求めないように。信念という

ほど深く考えたことは無い。しかし無視することも出来ない厄介な理念。

でも

「……戦友ゆうじょうぐらいは許される、かな？」

「????」

「ふふふふっ」

お代わり、いかがですか？

「ああ、いただく」

首を捻り続ける悟空を、真名はしばらく眺めていた。そして、この先生に対する印象は出会った当初から変化が無いのを知る。
ああ、本当にこの人は面白い。

幕間1 真名と悟空と時々超包子（後書き）

小説だけに止まらず、小論文や感想文や作文を書いている時、ちょうど半ばくらいに差し掛かって突然自分が何書いてたか分からなくなるこつてないですか？

日常編書いてたはずなのに……言い訳すみません。

話の趣旨は一応、真名さんの悟空に対する印象だったのですが……非常に不安です……。

何はともあれ、読んでいただきありがとうございます！

第27話 強いヤツ

窓から覗く空は暗い雲が垂れ込めて薄暗く、それに比して電灯が奇妙に明るく室内を照らしている。カツカツと黒板を叩く音だけが教室内に響き、席に着く少女達は一様に黒板を見つめていた。否、正確には黒板の端から端を行き来する男とそれによたよた付いていく少年を。

「いいか？どんなに相手の力が強くて敵わねえって思っちまっても絶対諦めちゃなんねえ。大事なのは集中だ」

「はい！」

「こつ相手の頭から胴体抜けて、体の真ん中な。ここのこと正中線つつうんだけだよ、ここを狙われりゃどんな強えやつだって怯んじまうんだ」

『へえ〜』

至極子供らしい反応を見せる生徒達。一部、真剣な表情で頷く者、何かを堪えるように震える者など変わった子らもいるが、比較的皆の態度は真面目であった。

黒板の人型らしき絵の真ん中へ縦に一本線を引くと、悟空は生徒達

の方へ振り返る。

「でも、ここ狙ったからって必ずダメージ喰らうかってえとそうでもねえんだ。うーんと、よし。ネギ、オラの腹思いつきり殴ってみる」

「え、は、はい！」

「ネギは拳法やってっからある程度は構え方わかってるけどよ、もしフウカとかフミカとかちっちええやつが殴ろうとすつと、ほれ高さあわねえだろ？こついう時は無理して上の方狙わずに自分の正面狙って……」

「っ！」

視線は鋭利に研ぎ澄まし、ただ一步の踏み込みに全体重を乗せて、ネギの高速の拳が悟空の腹に突き刺さる。室内に乾いた打撃音が響いた。

「うん、いいぞネギ。今みたいに綺麗に極まりや、大抵のやつはノビちまうさ。力無くたって同じだ。要は」

「や、やっぱり効かないですよね……」

「なかなか良い突きでござったが……ま、悟空殿ならばそうなるでござるな」

「むむむ、仮にも我が弟子の一撃。軽いモノないはずヨ……」

「うん？」

がつくりと頂垂れるネギに悟空は首を傾げるものの、気を取り直して教卓おもむろへ向かった。

徐に拳を握った悟空は、そのまま胸の前で掌に拳を打ち付ける。

「こう、拳が当たる瞬間、一気に力籠めんだ。手加減しちゃなんねえ。迷つてもダメだ。拳と相手の体が触れるほんのちよつと前に全力で気を集中させる。それが出来りゃ勝てねえことなんてねえ！」

もう一度拳を打ち鳴らすと、それが合図かのように授業終了の鐘の音が教室に鳴り響いた。

「お、時間だな。そんじゃ今日はここまでだ。皆気い付けて帰えれよ」

『はい！』

「はい、では皆さん、さよなら！」

威勢よくそう言うと、二人は戸口へと歩き出す。きびきび歩く悟空によたよた付いて歩くネギ。悟空は扉に手を掛け

「ストップ!!」

「ん？」

「はい？どこかしましたかアスナさん？」

突然投げ掛けられた声に二人はキョトンとして教室へ振り返った。振り返った先で腕組みして仁王立つ少女、明日菜は二人の暢気な対応に深々と溜息を吐き出した。

「……………ああ、うん、いいわよ。一個ずつで……………まず悟空さん」

「なんだ？」

明日菜は米神を押さえた。

「……………この授業なに？……………」

「なについて、ホケンタイクってやつだろ？」

「何処の世界に保険・体育で人の殴り方教える学校があんのよ!？」

本日6時間目最後の授業は悟空担当の保険・体育だった。教職になど着いた事がない悟空であったが、自分なりの授業というものを考えた結果、自分の技術を教えてみようという結論に至ったのである。与えられた授業時間を悟空は主に古菲監修の套路教室やじゃん拳、猿拳、狂拳等のとんでも技伝授まで、様々な武術的分野に用いている。元来、身体能力のスペックが同年代どころか大人さえ凌駕する3-A生徒達の飲み込みは異常に速く、悟空自身嬉々として教えている面もあつたわけだが。

「しかし明日菜さん、悟空さんの言うことも尤もではあるんです」

「刹那さん？……」

怒る明日菜の肩に手を置き、刹那は真剣味を帯びた瞳で一つ頷いた。明日菜もまたそれに倣うように刹那へと向き直る。

「やはり拳闘において打点に重きを置くのは基本中の基本。素人でもそれを意識するのとしけないのでは雲泥の差があります」

「うむ、そして注目すべきは悟空殿あの胆力。こちらが如何に突きを鍛えたとして、対敵が弱点を鍛えていないとは限らない。悟空殿はその良い見本でござろう」

「気の集中も重要アルヨ！」

「ああもううるさい！^{バトルマニア}戦闘狂共は黙ってて！」

刹那に加わり楓、古菲あたりも熱弁を奮い出したため收拾は困難であつた。
呆れる生徒達を置いて、明日菜は一しきり三人に叫び散らし、膝に手を付いて激しく息を切らしている。

「はあ、はあ、はあ……も、もういいわ、もう何言つたつて授業の内容が変わるわけなし……」

「あははは、まあええやんアスナ。普通の授業よか悟空さんの話おもしろいえ？」

「はあ……」

のほほんとした木乃香は明日菜の戦気を根こそぎ奪うが如く、脱力して明日菜は頂垂れた。

「わかつたわよ……でも、最後にもう一個だけいい？……」

「なんだ？まだあるんか？」

脱力した状態から、氣力を絞るように明日菜は上体を起し、徐に人差し指を勢いよくネギへ突きつけ、叫んだ。

「それなに!？」

「?.....ネギだな」

「違う!背中に背負ってるソレよソレ!！」

深緑の光沢、流線型のフォルム、ネギの背中全体を包み込み両肩から伸びた縄が『ソレ』を固定していた。

自身の席で特に関心なさげに屯たむろしていた生徒達もまた、『ソレ』に關しては物問いたげな視線を投じている。

ネギと悟空はまたも同時に首を傾げ、これまた同時に答を寄越した。

「「甲羅(だな/ですね)」「」

「」

明日菜はその場につ伏した。

しとしと降り続く雨はアスファルトの地面を黒く染め上げ、雨露に制服も心持ち重みを増しているようだ。俄かに増水した川原は土砂で薄汚れた水を吐き出して、轟々と唸っている。

「今日も悟空先生の授業は変だったね……………」

「うふふ、そうね。でも、とっても楽しそうだったわ」

苦笑いを浮かべる夏美に比して上機嫌に笑む千鶴。

一本だけの傘を千鶴が握り、夏美はそれに並んで歩いていた。

「……………なんか、ちづ姉最近悟空先生に優し」

「あら、行き倒れよ夏美」

「く、つてええ!？」

あまりにタイミングの逸れた言葉に夏美はギョツとして千鶴の視線を追った。長い間雨に晒されていた路肩の雑草はすっかり水浸しになり、その上を走る錆びたガードレールが黙して鎮座している。

そこにふと、見慣れぬ影を夏美は見た。泥の中に埋もれるようにして横たわるそれは

「犬？わっ、ちづ姉」

千鶴は無言で、制服を盛大に汚しながらその黒い犬を抱え上げた。弱々しく呼吸する小さな温もりは雨の冷たさに負けてしまいそうだ。

「さ、早く行きましょ」

二人は小走りで帰路に着いた。

石造りの白い階段を下りた先、仄かな明かりが漏れる扉のちようど壁際で、明日菜、刹那、のどか、夕映、和美、木乃香、古菲は立っ

ていた。七人の様子はそれぞれ七者七様。硬直する者、震える者、イヤイヤと首を振る者、カメラを構えてにやける者などなど。しかし七人に共通して言えるのは、皆一様に顔が真赤であることだろう。

「……………そら、もう少し我慢しろ。この程度ではまだまだ足りん」

「うあつ、で、でもこれ以上は、む、無理ですよ……………あつ……………」

「若いくせに情けない。コイツならばおそらくこの十倍は持つぞ?」

「だ、だったら悟空さんのを……………」

「コイツのは固すぎて這入らんだ……………まったく、とことん化物染みおつて……………」

「わりいな、ネギ。そういうわけだからよ、頑張ってくれ」

『……………』

姿は見えず、声だけが届くこの場所で、少女達の多感な妄想は濛々と膨らんでいき、最初の堰を切ったのはやはり明日菜だった。

明日菜は入り口に手を掛け、躍り出るように室内へ踏み込んだ。

「……………あああ……………悟空とネギにナニやらせんのだよ……………?」

「「「ん？」「」」

ネギの腕に齧り付くエヴァ、笑いながらそれを眺めていた悟空。三人の視線を受けて、明日菜はその場に突っ伏した。

「・・・・・・・・・・で？なんなのよココ・・・・・・・・・・」

「おお！なんでもここは、外と中で時間の流れ方が違うらしくてよ。外での一時間がここじゃ丸一日だってんだ！すげえだろ！」

ジト目の明日菜に悟空はそれはそれは嬉しそうにエヴァの別荘を語った。

巨大で広大で天を衝く程の巨塔が小さな島に聳え建ち、周りは紺碧の海に覆われた此処は、誰あろうエヴァンジェリンが使用する『別荘』であった。外界から見れば精巧なホログラフにも見紛い、実際

は有り得ないレベルの容積を有するこの空間をエヴァはネギ・悟空
双方の修行に宛がうため倉庫から掘り出して来たとか。

「じゃあさっきのは？……」

「授業料代わりにぼーやの血を吸っていただけだ」

「……固いとか、這入らないとか……」

「オラの体はステンレスみてえに鍛えてっからよ、今のエヴァじゃ
歯が立たねえんだと」

「はあ……」

心底疲労困憊して明日菜は手近な椅子へ崩れ落ち、ボソボソと聞き
取り難い呟きを漏らす。ツッコミツカレタダレカカワツテ。

「しかし一日が二倍とは、ネギ坊主も大変アルな……」

「い、いえそんな、僕なんてまだまだですよ。悟空さんなんて僕が
帰った後もずっと修行しっぱなしで……睡眠時間まで削つて
るそうです……」

「……ええ！？」

驚愕する面々に対し、悟空はいつもの如く笑顔だった。傍らのエヴァ

アの頭をぼんぼん撫ぜながら頬を搔く。

「まあ、エヴァにも時々怒られちまうんだけどな」

「うつ……余計なこと言わんでいい……」

「しかし、エヴァンジェリンさんが言うことも尤もですよ！そんな無茶な修業では体が壊れてしまいます……」

「ははは、大丈夫だって。ちゃんと休む時は休んでるし、そんなに無茶苦茶なことしてるわけでもねえしな。それにオラが昔使ってた修業場所に似たようなトコがあんだけど、そこと比べたらここは物凄え快適だぞ！」

嬉しそうに語る悟空は早速と、塔の屋上に位置するテラスへ飛び出た。

滞空しながら空を見上げ、次いで海へと視線を馳せる。どういう仕掛けか太陽が沈みかけた海は茜に染まりゆらゆらと煌いている。

「天気も景色も空気もいいかな！あとチャチャマルの作る飯もすつげえ美味え！」

「気温が50 からマイナス40 まで変化して且つ空気が地球の四分の一で重力は十倍、草木どころか生き物さえも居ない広大なただ白だけの空間……アレと一緒にするなアレと……」

「

「……………いつも思うんですけど、悟空さんは一体今までどんな修業をされてきたんですか？……………」

ボソツと漏れたエヴァの呟きは破天荒に過ぎてネギも刹那も意味をよく噛み砕くことが出来なかったわけだが、悟空の異常性の一端は垣間見たのだった。

と、そこでふと悟空は床に着地しながら気が付いた。

「ところでよ、おめえ達ここに何しに来たんだ？」

「あ、そうでした。私、エヴァンジェリンさんに折り入ってご相談が」

「あ？」

夕映のその一言と共に、一同はようやく本来の目的を思い出した。なまじ様々な出来事に脳のキャパシティが追い付かなかった彼女らである。

「そうだったアルな……………」

「ええ、ずっと気になっていたこと……………」

「悟空さんとネギくんに聞こえて……………」

「うむ、記者として謎は明らかにせにゃならんからね……………」

「「？」」

重苦しい雰囲気醸しながら、少女達は悟空とネギを見つめる。

「「「」その甲羅はなに？」」」

ネギの背にずっしりと、甲羅は未だ鎮座していた。

夜半に差し掛かり、ほとんどの者が寝静まった頃

「ラス・テル マ・スキル マギステル！来れ 虚空の雷 薙ぎ払え！」

小さな杖を握り、言霊と共に魔力を振り絞り、上段に構えた腕を全

力で振り下ろした。

「 雷の斧！ 」

手先に纏わせた雷光の斧は、一拳に肥大化して眼前の目標を叩く。途端に形の拉げたアルミ缶は石床を吹き飛んでいった。ネギはそつと息を吐く。

「すげえすげえ！もうエヴァから教わったやつ、形になってんな」

「いえ、まだまだです。無詠唱呪文も成功してませんし、今の呪文の威力だって全然です……」

傍で眺めていた悟空が歓声を上げるも、ネギは照れたように頭を掻いた。

「でも入り口は見えたな。後は修業するだけだ！」

「はい！」

「………なんか兄貴もだんだん旦那に毒されてねえか？」

呆れたようにカモは小さく呟く。

悟空監修の下での修業は最近では益々厳しさを増しているようであ

る。日々の基礎鍛錬から組み手、実戦訓練等も数週間前までは考えられないほどの密度だ。そしてこの珍妙なアイテムも……。

「なあ旦那、ホントにこんな甲羅で修業になんのかい？」

「なるんだよな、これが。オラだって昔はこれ付けて修業してたんだ」

ネギの背に収まる亀の甲羅は、悟空には馴染みの所謂加重装備であった。常日頃意識せずに修業できるとエヴァに頼み込んで作ってもらったのだ。その時のエヴァの微妙な顔をネギは鮮明に覚えている。

「初心者用で20kgついておい……」

「最後の仕上げは40kgだ！んで前にも言ったけどよネギ、なるだけ魔力は抑えるようにな。鍛えてえのはあくまでネギの体そのものだからよ」

「が、頑張ります！」

まだ多少よたつく体を奮い立たせ、ネギは再度空き缶へ向かう。しかし、ネギはそのまま動こうとしなかった。

「あの、悟空さん……」

「？」

怪訝な視線を向ける悟空にネギは振り返る。その真直ぐな目を正面に据えて、口を開きかけたとき

「なぐにやってんのよその二人」

「お、アスナ」

「アスナさん……………」

ワイシャツのボタンを鎖骨の辺りまで外し、幾分ラフなスタイルの明日菜がテラスへ降りてきた。多分に呆れ顔が目につく。

「アンタらは……………ホントに修業バカよ！ネギ！悟空さん！無茶して体壊した時どうしようもないの解ってんでしようが！」

「あ、あははは……………すみません……………」

「いやわりいわりい、ついな」

悟空とネギ、二人並んで頭を掻いて誤魔化すように笑うその様は多少滑稽だった。毒気を抜かれてか明日菜が一つ息を吐いたことで、その場はなんとか収拾した。

改めて悟空はネギに問うた。

「でよ、どうかしたんかネギ？」

「あ、そういえばなんか言いそびれてたわよね。なんなの？」

首を傾げる二人から目を逸らし、ネギは海上に悠然と浮かぶ月を一度見やると、改めて二人の目を見据えた。

「うん、そう、パートナーのアスナさんにも、悟空さんにも」

「「？」」

「お話したいことがあります」

（記憶、ですか）

(意識シンクロしてぼーやの記憶を見るのdarou。その方が口で言うより余程解りやすい……………とどうか)

(ふむ、ネギ坊主の昔話興味あるアル)

(ネギくんのちっちゃい頃な。多分すっごいかわええんやろな)

(確かに、ネギ先生がどのような方なのか。普段あんなにしっかりしている所以は知りたいですね……………)

(ん？桜咲が知りたいのは悟空さんのことじゃないの？)

(っ！い、いえ、そんな……………)

柱の影でぞろぞろと、少女達は声と身を潜めて件の三人を見つめていた。のどかの持つアーティファクト『いどのえにつき(ディアルム・エーユス)』は人の表層意識を絵や文章に置き換えて読み取ることが出来る読心の魔本だ。
少女達は本を囲い、そのファンシーな絵柄に若干辟易しながら事の仔細を待った。

(……………そういえばさ)

(なにアルか?)

(……………悟空さんって誰なんdarou?……………)

(? 何言つとるん。悟空さんは悟空さんやえ)

(いえ、このかさん。朝倉さんが言いたいのはそういうことではないのでは?)

夕映の言に刹那は頷いた。

(なんかいつの間にかうちの副担任つてことで来てさ。まあ来て早々クラスに馴染んでたけど……)

(ネギくんはウェールズつてところから来て、魔法使いさんで、立派な魔法使いになるために修業して……? 悟空さんて魔法使いと違うね?)

(私の知る限り、あれ程の力は見たことはありません。確実に最強クラスの達人のはず……しかし、それなのに裏世界で一度も名前を耳にしたことがない……)

(むむ、なら祖国の南の人力? 孫つて名乗つてたアルよ?)

「……………ふんっ」

絶え間なく増産される疑問をエヴァは軽く笑う。

それは、知らないのが当たり前で、知るはずも無かったことで、そして一度男の人生を垣間見たエヴァからすれば見当違いもいいところ。ただエヴァは、その胸に湧く瑣末な優越感を笑ったのだ。

(ついでに見られるかもな)

『 ？ 』

(孫悟空という男を)

階段の段差を使い、ネギと明日菜は額の高さを合わせた。足元に敷かれた陣に膝を立てて向かい合う。そして悟空はネギの頭に手を乗せた。

「ホントに大丈夫ですか？三人一気に出来ない事も無いですよ？」

「大丈夫だ。要は心読むのと大差ねえんだろ？ネギはその『しんくろ』つつうのにだけ集中してりゃいいさ」

「ってか、人の心読むのってそんな簡単なの？」

『テレパシーってのも使えるぞ〜』

「うわっ!？」

驚く明日菜を他所に、ネギは術式の構築に入る。目を閉じ、集中し、奥底の記憶を呼び覚ます。

額を合わせたネギと明日菜の頭に手を置いて、悟空もまた深みに身を投じた。

ポツリポツリと雪が降る静かな街だった。

『お父さん、遠くへお引越ししちゃったの?』

『・・・そうね。「死んだ」っていうのはそういうことなのよ』

幼いばかりの少年にその意味を飲み込むことは難しく

『じゃあさじゃあさ、もし僕がピンチになったら、お父さんは来て

くれるの？』

子供らしい、それは無垢な『願い』だった。

ある時は犬に追い立てられ、ある時は凍る湖に飛び込んだりもした。沢山の危機を自分なりに試して、微かな期待に胸膨らませた。

『だ、だってピンチになったら、お父さん来てくれると思って・・・』

熱に壓つなされながらシーツを握り締めて、期待の籠った瞳で、少年は父親を待った。

そして、街は火に包まれる。

次々に蠢き出でる異形達。その生気の宿らぬ瞳が映すのは破壊すべきモノ達。殺すべき者達。たちまち、街は異形で溢れかえった。

少年は走った。力の限り走った。姉を、知り合いを、生きている者を求めて。

そして少年が見たのは石像だった。昨日まで口を利き、笑い、生きていた人々。今はもう、物言わぬモノ達。

『僕が……あんなコト思ったから……?』

頭上には巨大な拳。泣き続ける少年。迫る死に対して少年はあまりに無力だった。

『たす、けて……お父さん……!』

『願い』を聞き届けるが如く、少年の前には現れた。

ロープをはためかせ、杖を握り締めた男。

跳梁跋扈する無数の、数多の、悪魔を絶対的な力が屠る。雷が薙ぐ、拳が崩し、蹴りが穿つ。闘争がそこにはあった。

少年は逃げた。

恐怖して、人を探して、安堵を求めて、無謀に。

そして悪魔は迫り来た。魔の光が自身を照らし、魔の手が少年の細首に掛けられた時、犠牲になったのは最愛の姉と誓いを守り続けた老人。

脆くも砕けた姉の足。無残に石と化す老人。少年は、泣いた。

火の海に沈み行く街は遠く、降りしきる雪は奇妙なほどに冷たい。傷を負った男は大きな杖を少年に託した。

ロープの袖から伸びた手が優しく頭を撫でて、そっと男は空へ舞う。

『元気に育て、幸せにな!』

少年は走った。遠くなる父を追って、どうしようもなく求めて、どうしても届かなくて。

『お父さあーん!ーん!ー!』

どうしようもなく、少年は泣き続けた。

不意に頭を撫ぜられた。ひどく乱暴で、かなり無骨で、とても暖かい。凍てつく冬空から晴天の太陽の下に来たようだ。力強い眼差しがネギを見据えていた。

「見つかるさ」

「あ、え」

言葉が見つからなかった。唐突な物言いには脈絡が無く、ネギは言葉
を失った。

それでも悟空は続ける。

「あんな強え父ちゃんなら、絶対どっかで生きてる。どっかでネギ
に会いたがってるぞ」

「・・・・・・・・」

「だからよ、そんな顔すんな」

「あ」

頬を伝う雫にネギは戸惑う。悲しかった、寂しかった、それでも今
この時泣いてしまうのは、この掌の暖かさがあるからだろう。

「オラ、罪の意識とか、難しいことはよく解んねえ。別に街が襲わ
れちまったのはネギのせいなんかじゃねえし、おめえがそんな風に
思うことなんか一個も無え」

「悟空さん・・・・・・・・」

悟空がネギから具くさぐに感じ取った感情、罪悪感つとは、悟空にはどうしても納得できなかった。

「……あなたは、別に一人で抱え込むことなんてないのよ！頼んなさいよ！私でも刹那さんでも木乃香でもクーちゃんでも夕映ちゃんでも本屋ちゃんでもエヴァちゃんでも、よしんば朝倉でも！」

「は、はい！」

「オラもな！」

勝気な瞳で明日菜はネギを射抜く。子供のような笑顔で悟空はネギを包む。対照的なようで、どちらも優しい。そんな不思議な感触にネギは笑った。

夜風は相も変わらず静かだった。耳を撫でつけて過ぎ行き、体を包んで突き放す。でもそれは、只管に穏やかだった。

「悟空さんは……」

「ん？」

不意に漏れた呟きに悟空は振り返る。

「悟空さんは、どうしてそんなに強いんですか」

「オラか？ いやぁオラだってまだまだ」

「そうじゃなくて！ そういうことじゃなくて……」

「？ ネギ？」

悟空の言葉を遮ってネギは首を振った。

ネギの様に困惑する悟空を、明日菜もまた見上げた。

「そっか、私達って悟空さんのこと何にも知らないんだ」

「オラのこと？」

「そうなんです……あの日あの時、橋で僕が師匠マスターに追い詰められて泣いていた時、悟空さんは突然現れて」

ネギの記憶はすぐに呼び覚まされた。それは未だ教師としても、魔法使いとしても、今よりずっと未熟で泣いてばかりの自身が出会った不思議な体験。

見たことも無い強さを持つ悟空に、父の影を幻視した日。

「……………」

悟空はそのまま暫し腕を組んで押し黙った。その様子にネギは慌てて言葉を繋ぐ。

「あ、あのっ、やっぱり無理ならいいんです！すみませんでした・・・差し出がまし」

「うっし！んじゃいつちよ見てみっか！」

「え、え？」

「オラの記憶な」

そつと乗せられた手を見上げて、ネギは一瞬だけ逡巡し、一つ静かに頷くと目を閉じた。

(・・・はあ・・・ま、そうなるわな)

(すんっ・・・あ?・・・あわわわせっちゃんせっちゃん！
悟空さんの話やて！)

(ぐす、え・・・は、ははい！)

(桜咲、緊張しすぎだって・・・)

ネギの記憶、そして取り分け悟空とネギの遣り取りに何やら感動していた少女らは、そこでようやく正気を取り戻した。
すでに悟空は集中に入っている。

(ずるっ・・・ほ、悟空さんの強さの秘密見られるアルか)

(すんっ・・・のどか、心しておいた方が良いでしょう・・・
ぐすっあの孫悟空ファンタジーのことですからトンでもねえですよきつと)

(う、うん。どんななんだろう・・・)

ワクワクドキドキハラハラウキウキする背後を多少鬱陶しく思いながら、エヴァはそっと悟空を見た。

閉じた瞼の下で、男は何を見るのか。この場の皆に、何を見せるのか。

(・・・リック・ラク ラ・ラック ライラック

夢の妖精・・・)

赤茶けた岩石地帯。荒涼と広がる岩山の頂には二人の人影。

毅然と相手を見据え、静かに屹立する男。

腕を組んで口元に薄笑いを浮かべる男。

『喜ぶがいい。貴様のような下級戦士が超エリートに遊んでもらえるんだからな』

『どうか。落ちこぼれだって必死に努力すりゃ、エリートを超えられることがあつかもよ？』

それが合図であるかのように二人の男は構えを取る。高まる大きな力と力。震える大気がこれから始まる死闘を予感させる。敵と敵、

双方が向かい合っているにも拘わらず、そこには確かな高揚があった。奇妙なほどの静けさを二人は同時に打ち破る。二人の男の拳が、弾けた。

それは死闘の終幕であるはずだった。多くの傷を負ったけれど、友も息子も無事である。安堵と疲労が身体を包み、後は帰路に着くだけなのだ。

優しい時間は呆気なく消え去った。死に物狂いで倒したはずの強敵が、こちらを見下ろして佇んでいる。最初に犠牲になったのは嘗ての好敵手。

そして

『や、やめる!!フリーザ!!!!』

『悟空————!!!!』

絶叫は届かない。親友の最後の求めにも応える事は出来なかった。

頬を叩く爆風、空を覆う黒煙は、先刻まで親友だったモノ。一度死んでしまった親友がもう生き返ることは叶わない。

震える拳。

怒りで霞む視界。

食い縛られた顎。あぎこ

全身で沸騰するマグマの如き血液。

『ゆ、許さん………よくも………よくもっ………』

『……………』

雷が奔る。

地が割れる。

穏やかな心が、燃え盛る黄金の焰で満ちた。

『オレは怒ったぞ………フリーザ………』

仲間達が次々に倒れていく。自分は何も出来ぬまま。
ようやく動き出した時、仲間の一人は敵の手に。

『ふんっ！闘うためだけの戦闘民族サイヤじんにそんな情があるのか？』

『オラは地球育ちのサイヤ人だぁー！ー！！！！』

『オレは弟のようにはいかんぞ……！！』

互角以上に渡り合えるのだと、闘いの中感じた油断。敵は自身の目の前で予想を遥かに超えてパワーアップを果たした。通用しない技と力。容赦なく叩き付けられる一撃一撃によって体はボロ雑巾のようだった。

それでも許せないのだと、限界を超えた怒りを解き放つ。

『いい加減にしろ。この星を滅茶苦茶にしゃがって！……』
貴様ら一体幾つの星を壊せば気が済むんだ？』

『っ！ば、馬鹿な……！！？』

圧倒的力を超える力を以て、勝利した。

『波あああああああああああ！！！！！！！！！』

そして、最期。

『やっぱりどう考えてもこれしか……地球が助かる道は思い浮かばなかった……』

絶望に暮れる仲間達に場違いな笑顔を向ける。時間も無いのだし、いつも通りの挨拶で

『バイバイ、みんな』

次に見たのは、悲嘆に暮れて地を叩き続ける息子の姿。

『よくやったな悟飯！すごかったぞ！』

『お、おとうさ………』

散々付き合わせて、仲間からは手痛い叱責を貰った。ならば自分がしてやれるのは心の底から労ってやることだろう。それと大事な伝言を一つ。

『母さんに、すまねえって言っといてくれ』

界王星にセルを運び出した時、あんぐりとこちらを見る界王には中々申し訳なかった。

次の瞬間には、傍らで限界まで肥大化する化物が眩い光を放っている。

途轍もない極光が体を焼き、バラバラに吹き飛ばしていく。

そんな死の最中

『おとうさ………ん………！………！………！』

聞こえるはずの無い声を、聞いたような気がした。

「あっ!!」

目を開いて最初に捉えたのは固く固く握り締めた悟空の胴着。ネギの全身にじつとりと滲む汗。力任せに握り締められていた手は関節が凝固している。

「う、悟空、さん……悟空さんが、死、死んじゃって……」

「ネギ……?」

俯き加減に震えるネギの表情を悟空が窺い知ることが出来なかった。声を殺して涙を流すネギを悟空は黙して撫で続ける。傍らの明日菜

にしても掛けるべき言葉が見付かるはずは無く、その瞳に小さな雫を湛えて、ネギが泣き止むのをただ静かに待つ。

「悟空さん……………」

「？」

「死ぬなんて…………死んじゃうなんて、ダメですよ……………」

「今にも消え入りそうなか細い声でネギはようやくそれだけ言つと、泣いた。」

「落ち着いたか？」

「はい、す、すみませんでした。僕……………」

また少しの時間を置いて、悟空はネギの顔を覗き込み笑って首をかしげた。

「気恥ずかしげに俯きネギは目元を拭った。」

「なあネギ」

「え、はい？」

改まった声にネギは顔を上げた。

微笑みながらも力強く、悟空はネギを見据えている。それは、記憶の中で二人の息子達が見た、父親の目。

「まあ、死んじまつといてこうこと言うのも変なだけだよ。昔オラの仲間のブルマっちゆうやつに言われたんだ。オラが悪いやつらを引き付けてるんだってな。・・・確かに考えてみるとそうなんだよな。オラがいねえほうが、地球は平和だって気がすんだ」

「そ、そんな！」

「ちよっ、悟空さん！」

悟空のそんな言葉をネギも明日菜も看過出来るわけはなかった。あまりにも荷が勝ちすぎる自己犠牲。なによりネギは、悟空という存在の死を認めてしまうのが怖かったのだ。

今にも声を荒らげて明日菜が食って掛かろうと

「って思ってたんだけどな！」

「っはえ？」

「あい？」

思い切り出鼻を挫いた。

屈託無く笑う悟空。ポカンとそれを見る二人。

「結局、なんでか知んねえけどオラ生き返っちまったかな。ははは！」

「「え、えええ……………」」

軽い。重厚に押し掛かってきていた空気などなんのその。悟空は子供のように笑うのだ。

ネギも明日菜も半端ではない肩透かしを喰らった。

そんな二人にもう一笑いして見せると、悟空はポンっとネギと明日菜の頭に手を置く。

「つつうわけだからよ、ネギの父ちゃん探すのオラも手伝うぞ。うん、少なくとも、それまではオラ死なねえ」

「悟空さん……………」

「だから安心しろーな！」

温かい笑顔を前に、どうしてかネギは自身を恥じていた。悟空という存在に自身はこうして一体何度救われて来た事か。

力ではない強さ。求めるべき目標。今はまだ遠い、憧れ。

（やっぱり、敵わないや。悟空さ
）

「も、もう我慢できないアル！」

「ちよつ、クーちゃん！？ダメだつて！」

「「「ん？」「」」

声は唐突に響いた。静けさに満ちていたテラスの石床を蹴って、矢庭に賑やかな影が飛び出して来る。

「悟空さん！私と闘うヨーーーーー！！！」

「うおっ！？」

影、古菲は猫のように身を低く悟空の間合いへ跳び込む。悟空の鳩尾を狙って撃ち出された拳は悟空の掌に収まった。しかし勢いは殺しきれず、古菲はそのまま悟空にキャッチされた。

「おお、クーじゃねえか」

「悟空さん勝負ヨ！！あの超悟空さんで勝負アル！！」

バタバタと古菲は悟空の腕でもがく。目は爛々と輝き、涎まで垂らす様には流石の悟空も引き気味である。

「つてあんたら!?!」

「やあやあ、お三方」

「み、皆さん!?!もしかして……」

「はい、失礼ながらネギ先生と悟空先生の記憶を……申し訳ありません」

「い、ごめんなさい……」

「です……」

ぞろぞろと柱の影から少女達は顔を出し、対面と同時に茶々丸は頭を下げた。それに続くのどか。バツが悪そうな夕映。

「私の目に狂いが無かたの改めて思ったアル！！悟空さん！私の婿になるヨロシ！」

「ぶっ!?!く、くーさん!?!」

「？　なあコノカ、ムコつてなんだ？」

「お婿さん？お婿さんな。．．．．うふふ　どうせやったらお嫁さんがええな。ね、悟空さん」

「お嬢様！？」

そう言つて、いつの間にか悟空の腕を取っていた木乃香は朗らかに微笑んだ。未だ暴れ続ける古菲をもう片方の手で宥めながら、悟空もまた曖昧な笑みを木乃香へ返す。

突然、木乃香の表情から微笑が消える。一変して真剣な、或いは悲しげな、それは儂い怒りだった。

「．．．．すつごい不安やったんよ。何回も何回も危ない思いして、悟空さん大怪我しとつた」

「お嬢様？．．．．」

「せつちゃんも泣いとつた。ウチも泣いたえ．．．．あかんよ、死んだりしたら．．．．」

「．．．．ああ、すまねえ。コノカ、セツナ」

少女二人の晴眼に捉えられ、悟空は観念したように笑った。見付けてしまった赤く腫れる目尻が、何とも言えず申し訳なかったのだ。不意に、悟空は片手で木乃香の頭を引き寄せた。コッソ、額を合わせて、悟空は木乃香の目を覗き込む。

「あつ」

「大丈夫だ。約束したろ？ここにいる間はちゃんとオラが守つちやる！二人ともな」

「……ふふつ」

頬を染めて、くすぐったそうに木乃香は笑う。不安が拭われて安堵が満ちる。求めていた『応え』に木乃香は大層満足した。

猪が如く興奮していた古菲は何故か随分と大人しくなった。刹那はそんな二人を見て常の通り茹蛸の如く真赤に染まっている。

全力全開で不機嫌を露に、エヴァは鼻を鳴らした。

「……此処は保育園か何かか？」

「嫉妬力？ケツケツケツケツケケケケケ！」

「そうか四肢は要らんか。それなら早く言えば好いものを。どれ、今モいでやる」

従者と取っ組み合いながらも、エヴァは視線を非常に賑やかな『ガキ共』へと移した。すでに悟空は木乃香や古菲から離れ、ネギの頭をわしゃわしゃと捏ね繰り回している。和美が悟空に何やら興奮した様子でマシンガンのように質問を投げ寄せ、それを周囲は苦笑

う。悟空はといえば、豪快に笑っていた。
またぞろ餓鬼のようだ。エヴァはひっそりとそう思う。

「まあまあ！固いこと言いつこなしで、ね？事情を知ったからにはこの報道員朝倉、全力でサポートするよー！」

「『悲しみの秘話 噂の父子先生達が語る衝撃の過去！』というメモがここに」

「げっ、茶々丸さん！？」

「不謹慎です」

「朝倉……」

「ちよっアスナ！？何そのでっかい剣怖っ！？」

「アスナさん！？朝倉さんホントに死んじゃいますよ！？」

「はははは！すげえなアスナ！」

そしてエヴァは幻視する。目の前の小さな少年の頭を乱暴に撫ぜるローブ姿の男を。或いは、目の前の男の純朴さをそっくり写し取ったかのような、藍紫の胴着に身を包んだ少年を。

今はまだ会えない、遠い親子達。

「よーし！ほいじゃネギ君のお父さん探し協力の決起となんか異世

界人らしい悟空さんの歓迎も兼ねてえ！もういっちょ

『カンパ〜イ　！！』

「ちょっとー！？皆さん！？」

「おお！んじやもっぺん食うぞ〜！」

見事に思考をぶつた切られたエヴァは歎息した。そも自分がどうして他人に寂寥なんぞ抱かにならんだ。エヴァは一度頭を振ると、妙な思考を外へと追い遣る。

顔を上げた先ですでに走り出そうとしている男が目に入った。俄かに目が合う。男は笑った。

「行くござエヴァー！」

悩んだ自分が阿呆らしくなった。

第27話 強いヤツ（後書き）

本当にお久しぶりです．．．．すみません本当にすみません。
一話投稿に一月掛かるっておい．．．．。

今回本当に難産でした。悟空の記憶がまとまらないのなんのって。
おそらく多分に違和感丸出しです。どうかご意見などお有りでしたら是非遠慮なく。

長々と書いたくせに話はほとんど進んでいないと．．．．単行本
一巻分の話を一話で書こうとしていたアホです。すみません。
ヘルマンさんはまた次回．．．．絶対更新速度上げる。これ目標。

それでは、読んでいただき本当にありがとうございました！

第28話 並んで歩こう 前編(前書き)

過去最長となってしまうましたすみません。なので前後編に分かれておりますごめんなさい。どうか是非お時間のあるときに暇つぶしにでも読んでやってく下さい本当に申し訳ありません。

では、どうぞ(土下座)！

第28話 並んで歩こう 前編

「凄い人だ。記憶など見る必要もなかったんです。だって、あんな力も肉体も、心までも強い本物の強者が」

「……あー」

何時からだっただろうか

泣きじゃくる自身を抱き締めてくれた時？

お嬢様を 私さえも守ると約束してくれた時？

醜い己の姿をただまっすぐ『キレイだ』と言ってくれた時？

ただ、どんな時でもその人は笑顔だった。暖かくて、優しくて、力強く、事実本当に強い、存在が太陽のような凄い人。眩しい人。ああ、そうか、何時からかなんて馬鹿な話だ。人を惹き付けて止まないその人を、己はその目に留めた時からずっと

「間違いだったんです。そんな人の隣に己が居座ろうなど、身の程知らずな幻想とはこの事。深く、反省する所存です」

「あの、ね、刹那さ……」

「介錯はアスナさんにお任せします。いざー！」

「誰がするか！いやいざじゃないわよ！ちよつま、刹那さああああ
ん！！」

森の中に建つ雨に濡れた一軒のログハウス。

木目独特の温かみ溢れる床に出所不明な御座を敷き、その上に刹那
が神妙な面持ちで正座している。手には先日の修学旅行中にネギと
の仮契約で手に入れた新アーティファクト『シーカ・シシクヒ首・十六串呂』がご
丁寧に白紙を巻いて握られていた。

「放して下さい。不貞は死罪だと日本国憲法にだつてきちんと明記
されているでしょう」

「どんだけ厳しい国！？それホントだつたら石 純一の生命力はマ
リ 並よ！」

「それは寛保二年の公事方御定書ですね。現代は勿論、不義密通は
平安以後厳しい処罰対象です」

「ゆえつち、火に油だよ」

「あいや、アレが有名なハラキリアルか。お隣の国でも知らんこ
と一杯アル」

「ちよつと朝倉にクーちゃん！アンタらもぼさつとしてないで刹那
さん止めつ、ええい刀放さんかい！！」

匕首・十六串呂は、刃渡り30cm程の白鞘の短刀であり、現在刹那が握る本体を含めて最大16本まで生成可能な武器である。自在に飛翔させて操るも良し、インファイトにおける絡め手として使うも良しと応用次第では幅広い戦闘が実現可能な、刀剣類を扱う刹那には打って付けの武器である。魔法具故に刃こぼれや錆付き等の諸問題にもバッチリ対応な戦場を駆ける戦士達からすれば大層な利用価値を見出せるめちゃんこ良い武器である。

「その初使用がハラキリっておい……なんでかオレっちシヨツクだ……」

「ん？じやなに？刹那さん、まさかそんな切腹モノなにゃんにゃんを悟空さんとく？おいおいニクイねこの！」

「はあっ！？い、い、いいえ！！そんな決して私は！その、ただ、懸想していたただの小娘と言いますかつ……あの……その……やはり斬ります！」

「朝倉ああ！！おまちよつと黙れ！！」

刹那の背後から明日菜が全力で羽交い絞めにかかる。短刀が頭上で翻る様にのどかは怯え、夕映は溜息を吐き、古菲は物珍しげに声を上げ、和美はカメラを構えてニヤけていた。

混沌が渦を巻き始めたここは、別荘から所変わってエヴァンジェリ

ン宅である。リビングの一角が占拠された現状、エヴァ、茶々丸、悟空、ネギ、木乃香は五人でテーブルを囲んでいた。

「なあ、ホントに止めなくて大丈夫なんか？セツナがえれえ怒ってっぞ」

「あはは……怒ってるっていうか……」

「お前に妻子がいたことを思い出したんだろ」

「？」

予想通り首を傾げる悟空をエヴァは溜息と共に見やった。同じく苦笑いのネギと、比較的落ち着いた様子の木乃香。

「でもびっくりやな。悟空さんが実は結婚しとって、その上子供までおるなんて！」

「ホントビックリしました。えっと……」

「悟飯ってんだ。年はネギと同じくれえか？」

波乱万丈、奇々怪々、奇想天外、吃驚仰天。ネギ達が垣間見たのは正にそんな大冒険絵巻のような光景だった。

闘って、闘って、また闘って、極めた強さを更に越えて、目の前に次々と現れる強者達と悟空は闘ってきた。

それら数多の闘いの記憶を見たからこそネギは思う。

「……僕が知っている悟空さんの強さは、本当に、片鱗でしかなかったんですね」

ネギはそう言つて、すぐ隣に座つてネギを見下ろす英雄を見上げた。瞳に映つた色は憧れ、脳裏を過ぎつた光景はあの雪の夜。己の目指す背中はず常に遙か遠いところにあるのだと、改めて思い知らされる。片や行方知れずの父、片や自身の師匠。でもそれは、誇るべきこと。今はまだ到底届かない極地を歩む人間を、自身は追い掛けて、目指して往けるのだ。だから

「悟飯さん……」

「ん？」

「……強い、ですね。僕なんかじゃ比べ物にならないくらい、ずっと……」

ポツリと漏れた呟き。悟空が意味を解する間も無く、一瞬だけネギの表情が陰りを帯びた。そんな風に、悟空には見えた。

「？ ネギ？おめえ……」

「ああああ！！？ちよつホントそれダメ！！シャレになんないから！！！！」

「のおおおおお！？桜咲！？それファ　ネルじゃねえから！！マジあたし死ぬから！！」

「うわああああん！！」

混沌から狂乱へとシフトし始めた姦しい少女らの嬌声は悟空の声を遮ってログハウスを響き渡った。

そろりとエヴァの額に血管が浮き上がる。エヴァは無言で木乃香を見やるとそのまま親指で少女らを、取り分け刹那を指差した。

「はいはい」

言うまでも無い意図を汲んで木乃香はドタバタへと駆けて行く。

「あのっ、ぼ、僕も止めてきますね！！」

「お？あ、ああ」

唐突に立ち上がったかと思うとネギは逃げるように木乃香の後を追って行った。

奇妙な焦燥が見え隠れするネギの顔を見ると、咄嗟に静止するのを悟空は躊躇ってしまった。しかし何故それを今ネギに感じてしまう

のか、腕を組んで悟空は首を捻る。
その時、まるで喉を鳴らす猫のように、くつくつとエヴァは笑った。
見るからに上機嫌だ。

「エヴァ？どうかしたんか？」

「くつくく、いや、まさか、あの真面目一辺倒のぼーやがなあ。あんな顔を見られるとは思わなんだ。くっ」

「？」

「……マスター、どういうことでしょうか？」

先程から沈黙を保っていた茶々丸もネギの有様に疑問を抱いていたらしく、もの問いたげに自身の主を見据えている。

しばしニヤニヤと勿体付けた後、存外にあっさりとエヴァは言った。

「嫉妬だよ」

「嫉妬、ですか」

「？ ネギがか？誰にだ？」

本当に分からないという思いが顔に出ていたか、エヴァは悟空の顔を満足そうに見ると実にシニカルな笑みを浮かべた。

「孫悟飯だろうな。当然」

「え、悟飯にか？」

その解答は一層悟空を混乱させた。

リビングに視線を向ければ、未だ暴れる子供らに混じって齷齪あくせくするネギが見える。恐々と刹那や明日菜を止める様はいつもの通りで、そしてそんなネギに嫉妬という感情はひどく当てはめ難い。

「あわわわ！？刹那さんダメです！アーティファクトはそういう使い方しちゃ！」

「せつちゃん、大丈夫やて」

「このっ、お嬢様！？……」

「この前お昼のドラマでな、お嫁さん一杯おる男の人おったやん。

「二、三人くらい平気やわ」

「それあかんヤツやこのちゃん！！？」

思考が答を導けないまま、無為な時間は過ぎて行った。

麻帆良学園中等部、女子寮

「あむっ、んぐんぐ、はぐっ」

「うひゃゝ、小太郎君よく食べるねえ……」

「んっ、おお！うまいわコレ！ちづ姉ちゃんおかわり！」

「うふふふ、はいはい」

一心不乱に料理を頬張り、続々積み上げられる食器達。ついさっきまで熱で苦しんでいたのが嘘のような様に夏美は半ば呆れて溜息を吐いた。

「どんどん食べてね。まだまだ沢山作るから」

「ホンマに！？サンキュー！」

そして当の料理人である千鶴もまた、オープンキッチンから覗いている手が止まる様子もなく、嬉々として料理を供給し続けるため、終わりが見えてこないのだった。

そんなフードファイトもかくやな有様に再度夏美は閉口する。

千鶴と夏美は帰り道の途中、雨の中怪我を負って衰弱した仔犬を寮へと連れ帰った。仔犬の怪我そのものは比較的浅く、千鶴の手当てもあつてか事無きを得た。仔犬を寝かしつけて、束の間に静かな時間過ぎていった。

突如、仔犬は人間になった。

仔犬を包んでいたはずのバスタオルの上には、代わりに全裸の少年が気を失って倒れていたのだ。

ただ、非常識極まりないそんな状況の中でも千鶴は冷静だった。少年が高熱を出していると知るや、即電話口へと走って行き、てきぱきと夏美へ指示を出す。

しかし、夏美が指示に応える間も無く、少年は目を覚ました

その一瞬でテーブルに置かれたスプーンを千鶴の手にある電話の子機へ投擲、破壊。夏美を掴み上げて人質としてしまったのだ。

鋭い爪を首筋に突きつけられ、夏美は硬直。

それでも、明らかに混乱を来しているだろう少年へ、やはり千鶴は優しく語り掛けた。

怯える獣は怯えるままに爪を振るい、結果千鶴は肩口を浅く切られたが、優しく静かな声はそのままに、仔犬は千鶴に抱きすくめられ

るとその後すぐに気を失った。

「それで小太郎君、なにか名前以外に思い出したことある？」

「うん……アカン、なんや頭に霧でもかかってもうたみた
いや……」

「すごい熱だったからかしらね。きつと一時的なものだと思うわ」

「ものつすごい回復力だけどね……」

そして現在へと到る。

猛烈な勢いで消費されていく料理に比例して少年、犬上小太郎の体調は見る間に良くなっていった。

リスのように頬を膨らませてオニギリから、豚カツ、ハンバーグ、唐揚げ、野菜炒め、南蛮漬け、麻婆豆腐、鯖の煮付け、佃煮、味噌汁、パエリア、タコス、ビーフストロガノフ、スパゲティナポリタン、締めにご飯。

テーブルにはバランスはともかくポリュームを最大限に発揮した種々数多なレシピが所狭しと並んで、いた。残り二割弱となった料理達をどんどこ類張る小太郎を見て、千鶴はテーブルに頬杖を付きながら殊更嬉しそうに微笑んだ。

「？ なんや、ちづ姉ちゃん？俺の顔になんか付いとるんか？」

「ええ、ご飯粒が沢山」

「お？」

「……ふふっ、悟空さんみたいね。食べてる時、とっても幸せそう」

「あー。ま、悟空さんはよく食べるよね。この三倍くらいは軽く」

「あら、何言ってるの夏美さん。ほんの十倍くらいよ」

「……」

あやか所有の南の島以来、千鶴は度々悟空に料理を振る舞っていた。料理の腕というのなら彼女のクラスメイトである五月などは店を切り盛りできるほど凄まじいが、千鶴もまた家庭料理全般に関してそれに引けを取らぬという凄まじいスペックを持っていた。悟空が千鶴の誘いを嬉々として受けるのも自明と言える。

自動的にご相伴をあずかることになる夏美は、幾度と無くその光景を目にしていたが、未だ慣れる事が出来ない主に物量的な意味で……。

何故か苦い顔する夏美を他所に程無く小太郎はテーブルの料理を完食した。

麻帆良学園中等部 女子寮エントランス

「うう、し、失礼しました。あんな、外聞も無く暴れまわって……」

「まあ苦勞したとだけ言つとくわ……………」

「ぐっ……………本当にすみません……………」

エヴァンジェリン邸での一悶着を終えて、ネギ、明日菜、木乃香、刹那らは今ようやく女子寮へ到着したところである。つい数分前まで狂乱状態にあつた刹那も今は凡その沈静化を果たし、先程の自身の有様に頭を抱えていた。

前回のツツコミに続き今回の一騒動を加え、明日菜の疲労度は尋常ではない。対して、木乃香の方はどうしてかその柔らかな笑顔に拍車がかかって見えるのだった。

「はあ、魔法使いだの吸血鬼だのロボだの散々出たと思ったら・・・
・・今度はナニ！？宇宙人！？」

「アスナちゃうて、さいやじんさんや」

「そうですね。悟空さん自身確かに・・・いえ、あれは地球人ではないという意味でしたか・・・そう思えばあの桁違いの強さも納得です。戦闘民族、正に戦士の末裔なわけですから。数々の強敵、並外れた修業、素敵な奥様、そしてあんな立派なお子さんまで、いや本当に・・・」

「ええいやめんかい！！」

刹那の発作に明日菜が切れる。ノーモーションで引き抜いた“ハマノツルギ（ハリセン）”で刹那の後頭部を横合いから強打した。スパンツ、と乾いた実に快音を響かせ、刹那はその場にくず折れた。

「ありや、せつちゃんせつちゃん！・・・あかん、気絶してもうとる」

「あ、ごめんつい。いいわよ、このか、刹那さんの部屋まで運びましょ」

明日菜はそのまま刹那を肩に担ぐ。木乃香も横から手を副えてそれを助けた。

そこでふと、二人は同時に違和感を覚える。

「ネギ?」

「ネギ君?」

これだけ騒いでいるにも関わらず、ネギは何をすることもなくずっと黙りこくっていた。視線は宙を彷徨い、明日菜と木乃香の声にも反応した様子は無い。すっかり呆けている。

怪訝に思いながらも明日菜は多少声を張って再度ネギに呼びかけた。

「は、はい!? なんででしょうか?」

「なんででしょうか、じゃないわよ。どうしたの? あんたエヴァちゃん家からこっち、ずうっと喋らないじゃない」

「ネギ君どなしたんや? ぼおつとしとるえ?」

「あ、あははは! なんでもないですよ。あの、すみません、僕これからまた修業の続きがしたいので先に部屋に戻ってますね。刹那さんのことお願いします。じゃ!」

「あつ、ちよつと!」

捲くし立てるようにそれだけ言い残すと、明日菜の静止も聞かず、ネギは逸るように駆け去って行った。

ネギが去って行った方を呆然と眺めながら明日菜は眉をひそ顰める。頭に浮かぶのは、やはり先の記憶だった。

「あいつ……またなんか悩んでるわね。まったく、悟空さんにあんだけ言われたのに……」

「ネギ君やしねえ。悟空さんがこつち来てからは随分子供らしいなつた思うんやけど」

「……まあね」

孫悟空という存在が、ネギにとって特別なものであることは疑いようがない。出会った当初から、孫悟空という男の在り方が如何に絶大な影響力を人々に振り撒いているのか、明日菜自身でさえ感じていたのだから。

しかしそれは外面を見た上での、所謂一般論でしかないのだ。

「……そんなに似てたかしら。ネギのお父さんと」

「どうなんやろねえ。でも、今は悟空さんが、ネギ君にとってのお父さんなんやろなあ……」

「……」

父親に飢えた子供。

非現実が跋扈するこの学園において、それはひどく、寂しい残響を明日菜の胸にもたらした。

不定形のソレは、三人の少女らを窺うように配水管の影からそつと顔を出した。ずぶりずぶりとりノリウムの床を這いずりながら、ゆつくりと少女らの足元に忍び寄る。

「はあ、じゃ、ちやつちやと運んじやいませよ！」

「はいな。……へっ？あ、アス」

「え」

瞬間、ソレは津波のように肥大し、少女らを一気に飲み込んだ。

『へへっ、ちよろいちよろい。三人様ごあんな〜いダナ』

『よろしい。君はその足でこちらに来てくれ。残りもじきに片がつく。くれぐれもハイデライトウオーカーには気付かれぬように。そして……。「彼」の相手は私がする』

『了解』

水面に飲まれるように、ソレは床へと潜って消えた。

「やっぱりよく分かんねえ」

「だろうな、お前なら」

にべも無いそんな遣り取りは果して何度目だったろうか。椅子にもたれたまま悟空は腕を組んで天井の照明を仰いだ。緑茶を啜りながら、エヴァはそんな悟空の様を面白そうに眺めている。

ガタリと椅子を鳴らして元の姿勢に戻っても、悟空の唸りはそのままだった。

「だってよ、ネギはネギだし悟飯は悟飯だ。同じじゃねえぞ?」

「それを解つていても、というやつだろ。あのガキは父親とはかけ離れた頭をしてるからな。くっくくく、本当にお前ら親子達はよく似ている」

「へえ」

妙な感心が漏れるが、それでも納得には未だ到らず。

ネギの憂いはもつと別の何かではないのか。悟空にはそう思えた。そんな悟空の考えを、エヴァは僅かばかり見て取った。

「父親を持っているからじゃない」

「ん？」

「父にあれだけ期待を寄せられる。そんな当たり前の在り様が、ぼーやには遠いんだろ」

「.....」

記憶は勝手に想起した。

孫悟飯。凄まじい力を秘めた戦士。自分には無いもの（頭など）を持った自慢の息子。

期待していたのだろう。精神と時の部屋で一緒に修業を積んでいた時から、違う、もつと幼い頃、サイヤ人の兄ラディッツが地球に來襲した時から、自分は何処かで悟飯に望みを抱いていたのかもしれない

ない。

圧倒的強さを手に入れたセルを相手に、誰もが絶望に震える中、悟空は一人、息子である悟飯に命運を託していた。

「今じゃ、悟飯はオラよりも強くなっちまったかなあ。ははは」

「京都の一件で超サイヤ人の壁はお前も超えただろうが。能力値が同程度なら経験則でお前が勝る」

「ん？」

悟空が視線を寄越すとそっぽを向いてエヴァは茶を啜った。まるで拗ねたような口ぶりに悟空はまた笑った。

「でも」

「ん？」

反言は悟空のそれ。しかし続く言葉が悟空の口から紡がれることはなかった。

確かに期待していた。でもそれは実は間違いで、結果悟飯を苦しめてしまったのだ。闘いを望まない悟飯を駆り立てて、皆にも色々迷惑を掛けてしまった。そして何より

「ピッ」口に怒られちゃったかな」

「.....」

ようやく発せられた悟空の言を、エヴァは黙して、ただ聞いていた。

「だからよ、分かったこともがあんだ」

「？」

静かだった声音に、突然力が籠る。静かだった室内に、何かが屹立したようだ。

悟空は椅子から立ち上がり窓の外を見た。未だ雨が止まない黒い空はなにやら現状を表しているようで収まりが悪い。じっとしているのが我慢なら無い。今すぐ体を動かしたい。そんな衝動。

「悟飯に頼りきって、オラ肝心なこと忘れてたぞ」

「ほっ」

その変化は変化とさえ言えない。エヴァはそんな風に思った。これは変化ではなく元に戻ったに過ぎない。孫悟空という存在に。振り返った悟空の顔は、ここ最近エヴァが何度も何度も見てきた餓鬼の笑顔。何物にも負けることの無い、最強の笑顔。

「要は、オラが強くなりゃよかつたんだ！」

「また安直な……あの時点では、セルとか言う化物を越える時間は無かつたんだろうが」

「それでもだ！諦めずに必死こいてりゃなんとかなつたかもしれねえじゃねえか！どっかで諦めてたから止まっちゃまった。

だから今、オラは修業すんだ。ネギと『一緒に』な！」

答えを得たとばかりに悟空は満面の笑みを浮かべた。雨など文字通り吹っ飛ばせるだろう笑顔。

微笑みは無意識に、よく分からない満足感に、エヴァは鼻を鳴らした

「っ！」

突如として、弾かれたように悟空は窓の外へと振り返った。眼光是鋭さを増し、虚空を見据えながら一瞬で集中を研ぎ澄ませる。

「エヴァ！」

「ふふふ、魔力の探知も大分モノになってきたな。ああ、侵入者だ」

ひどく上機嫌にエヴァは口の端を吊り上げた。

「……………この感じ、人間じゃねえな」

「どこの魔獣か、はたまた悪魔か。一匹とは限らん。覆いをした雑魚を何匹か連れているかもしれんが……………」

エヴァのそんな言葉を聞いているのかいないのか、悟空は感覚をさらに深く這わせている。

エヴァは湯飲みをテーブルに置いて立ち上がると、今にも飛び出さんとする悟空に向かって手を伸ばした。

「まあ待て。今日のところは……………」

「チツル達の気だ！うん？それにこいつは……………どんどん近付いてやがる。悪いエヴァ！先行くぞ！」

「え」

ピシユンッ

伸ばした手は空を切り、軽い風切り音と共に悟空は消え去った。

しばしの間、虚空に手を伸ばしたまま固まるエヴァ。気配を察してか、キッチンから顔を出した茶々丸は自身の主の姿に首を傾げた。

「マスター、新しいダンスかなにかでしようか」

「……………あのつバカ……………元気になったと思っただけで安心したらこれだ！人の話を聞けえー！！！！」

「……………外出の支度をします」

ものの2秒ほどで状況を理解した茶々丸は、主人の外套をクローゼットへ取りに向かった。

黒い拳が鳩尾を捉えた。巨大なハンマーで殴りつけられたような衝撃に小さな体軀は吹き飛び、手近なクローゼットに決り込んだ。

「がふっ!?!」

「小太郎君!?!」

未だ朦朧とする頭に夏美の叫びが木霊する中、小太郎はよろよろと立ち上がった。

眼前には男が立っている。黒い外套に黒い皮製のズボン、黒のシャツに黒い手袋、最後の仕上げと黒いハットを目深に被り白い髪と口髭をたくわえた黒尽くめの男が。

「どうだね少年。大人しく瓶を渡す気になつたかね？」

「へっ」

男の言葉に小太郎は鼻で笑って返した。

突然にこの部屋へ足を踏み入れて来たかと思えば、訳も分からぬまま問答無用で殴り飛ばし、あげく（記憶が曖昧とはいえ）意味不明なことをのたまう男の言う事を

「聴く訳あるかい!?!」

「!?!」

気で生成された己が分身を四方へと散らせた後、一気に男へと襲い掛かった。

出の早い男の拳が数発、先頭の一人を貫いた。続いて左右から同時に殴りかかる二人も同じく叩き潰された。そして再度正面から真直ぐに放たれる小太郎の拳は

「！」

男の鼻先で急停止した。虚を突かれて硬直する男。

小太郎の本体はすでに男の懐に潜り込んでいた。男の腹へ突き上げるように渾身の一撃を見舞う。

「ぐう！」

「へっ、終わりや……！」

右手に気を集中させ止めの一撃、狗神の力を顕現させんと気を練り上げる。

しかし、

(っ！？狗神が出)

「ふむ、力を封じられていることも忘れていたようだね」

振り上げた右腕を男は固く握み上げた。小太郎は宙ぶらりんの状態で男を睨む。

「いやいや、素晴らしいセンスだよ。これは天性のものだ。それとも山で培った野生の勘かな。ふっ！」

「がつ！！・・・あつぐ」

そんな小太郎の腹に男の拳が容赦なく減り込んだ。受身さえ取れぬまま打ち込まれた衝撃に小太郎はその意識を手放した。右腕を解放され、床に倒れ伏す小太郎を男は踏みつけて見下ろす。

「未だ途上にある少年の行く末には興味が尽きないが・・・悪く思わないでくれたまえよ」

煌めく眼光。口腔に満ちる魔力。男は最後の止めを放たんと

「あぶっ！？」

平手が男の頬を捉えた。

何事かと見てみれば、気丈な眼差しが男を射抜いている。理不尽な暴力を振るう侵入者にも屈しない凜とした少女。

「訳も分からずいきなり現れたかと思えば、子供にすることではありませんわ」

背後でおろおろする夏美を尻目に、千鶴は男を見据えていた。男の顔にやおら笑みが浮かぶ。隠しようもない上機嫌な笑み。

「ふふふ、いや中々気骨のあるお嬢さんだ。ちょうどいい、君にも是非来て頂くとしよう」

「ち、ちづ姉!？」

笑みを湛えたまま男は千鶴へと黒い手を伸ばす。

対する千鶴は、そんな男を前にしても決して臆することはない。先からの男の行動を容認できようはずがないのだから。相手が何を目的として、何をしようとしているかも。

それは断じて子供に手を上げて良い理由になりはしない。

ピシユンッ

「え」

「む!？」

眼前の手が凝固した。見れば男の腕は横合いから伸ばされたもう一つの手に掴まれ、微動だに出来ていない。

見慣れた紺色のリストバンド、山吹色の胴着とそこから覗く屈強な腕。常ならば温和な瞳は、力強い光を宿して黒の男を睨み付ける。悟空の拳が弾けた。

「だりやああー!!」

「ぐお!!!?」

男の右頬を悟空の左拳は正確に捉え、大の男の体躯は錐もみしながらガラス窓を突き破り吹き飛んで行った。沈黙が降りた室内で、悟空は小さく息を吐くと、背後の二人へと振り返った。

「よっ！危ねえとこだったな」

「い、ごくう先生え！」

声を上げると共に夏美がその場にへなへなと座り込む。なまじ非常識な状況に頭は追いつかず、恐怖は手に負えず、矢庭に訪れた安堵を持って余したのだ。

千鶴はと言えば、先程の屹度した視線からは打って変わって、穏やかな微笑を悟空に向けている。

「うふふ、凄いタイミング」

「ん？」

キョトンとして千鶴を見る悟空。千鶴はそんな悟空の胸に手を副えると、いつかそうしたように、そつと自身の額を押し当てた。静かに響いてくる暖かで優しい鼓動を聞きながら、束の間の安堵を噛み締める。

何のことは無い。どれ程に強い心を持つとも、千鶴もまた少女なのだ。

「来てくれて、よかった……………」

「…………そっか」

小さな呟きに帯びた感情を悟空は感じ取った。だから笑って頭を撫ぜる。いつも通りの自身の笑顔で。まだ少し慣れない感触に千鶴の方もころころと笑った。

「あ、あの……………」

なんとなく大いに怖ず怖ずと、夏美は口を開いた。

「おおそうだ。ナツミも怪我ねえか？」

「は、はい私はなんとも……ってああ！そつだ小太郎君！！」

「お、コタロー！」

気を失つたまま倒れている小太郎に悟空は駆け寄つた。屈んで軽く頬を叩くが、一向目覚める気配はない。

「ダメか。氣い失つちまつてる……」

「あ、あのあの悟空先生つ、小太郎君は……」

「怪我も大したことねえし、氣もそんなに減つてねえから大丈夫だ。安心しろ」

「ホント！？ふえ……よかつたあ……」

再度、夏美はへたり込んだ。

悟空はその場に立ち上がると、砕け散つて原型を止めていない窓を見やる。

「オラはこれからあいつの相手してくつからよ。おめえ達はここでじつとしてろ」

「え、ええー！？ご、悟空先生やめなよ！危ないよ！」

「心配すんなって。すぐ片あつくからよ。チツル、すまねえ、コタローのこと頼むぞ！」

「はい」

「ちづ姉まで!?!」

千鶴は静かな眼差しで悟空を見た。悟空はそれに片手を上げて応えると、窓から雨の夜空へと飛び去って行った。

「い、行っちゃったよ!?!ちづ姉どうしよう!」

「悟空さんなら大丈夫よ。さ、小太郎君を運びましょ。あやかっただら玄関で寝ちゃってるわ」

「うう、ちづ姉なんでそんなに落ち着いてるの……なんか私の方がおかしいみたいだよ……」

「うん?ふふふ、そうねえ……」

半泣きの夏美に微笑みかけながら、千鶴は悪戯っぽく片目を瞑った。

「悟空さんが来たからかしら」

「来たかね、金色の戦士」

「・・・・・・・・」

落雷が一筋空に走り、相対する男達二人を照らし出した。雨に晒されることも厭わず、ただ対する者を見据えて、まんじりともせず動きを注視し合う各々。

中等部女子寮から程近い公園広場。濡れた黒いアスファルトにはそこかしこに水溜りが出来上がり、反射した街灯の光が薄闇を臙に照らしていた。

「いやいや、中々に手痛い挨拶だったよ。直前に受けていたのが少年の拳だった所為かな、あの鋭さは身に沁みた」

「おめえ、一体何モンだ」

「人に名を尋ねるときはまず己から、というのが礼儀ではないかね？」

男は大仰に肩を竦めて、悟空へ口の端を吊り上げて見せた。

「ん？それもそうか。オラ孫悟空だ。んで、おめえ何モンだ？」

「……ふむ」

あからさまに解り易い皮肉を、悟空は大真面目に返す。

出方を窺うどころか出鼻を挫かれ、男のほうは一瞬呆れたかと思うと、豪快に笑った。

「はははは！いやいや分かった！君にこの手の会話は無駄以外の何物でもないようだね！」

「？」

「ふふふすまない。自己紹介が遅れたが、私の名はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。今は没落したただの雇われの身だ」

言い終わるが早いか、男、ヘルマンは両拳を握って構えを取った。顎の前に拳を置き、脇を締めてステップを踏む様はさながらボクサーである。しかし、その拳は岩をも砕き、その拳は地を割る程の非常識な威力を孕む。

「さあ、来るがいい。それとも拳での語り合いはお嫌いかな？」

指を立ててヘルマンが招く。

悟空は、笑った。

「いいや、オラもそっちのが好きだ」

足を開き、上体を低く、ヘルマンを睨み上げるように悟空は構えた。そして数秒の間、両者は動きを止めた。空気が止まり、呼吸が止まり、時間が止まる。五月蠅い程の雨の音さえ遠のいた世界。それを最初に斬り破ったのはヘルマンだった。

デーモンシエア・シユラーク
「悪魔パンチ！」

「っ！」

黒い拳から溢れる魔力は砲弾と化して悟空へと撃ち出された。

悟空は半身に反れて避け、瞬時にアスファルトを蹴りつける。一瞬でヘルマンとの距離が詰った。上段から右拳を撃ち落とす。

ヘルマンはその拳を弾き、左拳の高速のジャブで応戦。

だが悟空は、滞空状態で無数のジャブを全て避け切った。のみならず、脇腹を過ぎたヘルマンの腕をがちりと捕まえる。

「ぬっ!?!」

「おりゃああああ!!」

ジヤイアントスイングの要領で掴んだ腕をぶん回し、悟空はヘルマンの偉軀を上空高く放り投げた。

「ぬうううう!?!」

ばたばたと風に叩かれるコートを羽のように広げ、ヘルマンは空に投げ出された体勢を立て直し、急ぎ眼下に視線を注ぐ。
しかし悟空の姿は無い。

「なっ、く!?!」

「はあ!」

ヘルマンの上空、すぐ背後に悟空は現れた。瞬間移動にも見紛う高速移動。ヘルマンの背を悟空は直上から蹴り落とした。

一瞬で地面に到達したヘルマンの体は容易くアスファルトを抉り、隕石もかくやというクレーターが出来上がった。

「つぐ……速く、途轍もなく重い、か……」

クレーターの中からよろよろと瓦礫を掻き分けてヘルマンが立ち上がる。地面に着地した悟空はクレーター内のヘルマンを見下ろす形になった。

「……前情報の忠実さがこれほど憎らしく思えたことはないな。まあ、噂の『黄金』は拝めそうにないが。ふははは」

「どっする、まだやるか？」

「……いや。あわよくば、と樂觀していたが見当違いもいところだったようだ。今は一旦退散するでしょう」

そう言うとヘルマンは跳び上がり、クレーターの対岸へと降り立った。正面に佇む悟空からは決して視線を外すことなく、何処からとも無く現れた液体がヘルマンの足元を包み始める。唐突に、ヘルマンは笑みを浮かべた。

「ソン　ゴクウ君、実は今晚余興があつてね」

「？」

「今ちようど君の生徒達を集め終えたところだ」

「っ何!？」

驚愕する悟空の顔をして、ヘルマンは実に愉快と言いたげに笑みを

濃くする。液体はそれを見計らったかのようにヘルマンの体全体を覆いつくした。

「なっ、待て！」

「ではまた会おう！金色の戦士！」

瞬間に拳を突貫させる、が、悟空が貫いたものはすでにただの水。雨の中、広場には悟空だけが取り残された。

「くっ！本当にアスナ達の気が一箇所に集まってやがる……
待ってる、今！」

即座に悟空は額に人差し指と中指を押し当て瞬間移動の体勢に入る。

「待て」

「ん？あ、エヴァー！」

「ったく、本当に厄介だな。その瞬間移動とか言うのは……
」

振り返った悟空の見上げた先には、空に闇色の外套を棚引かせるエヴァとそれに付き従う茶々丸の姿があった。エヴァはふわりとその

場に降り立つと、つかつかと悟空に歩み寄る。

「エヴァー！ちようどよかった。さっきの奴にどうも皆攫われちまったみてえなんだ」

「何？・・・なるほど、ぼーやおびき寄せる算段か・・・」

「ネギを？まあよく分かんねえけど、とりあえずオラは皆を助けに行く！おめえ達も来るか？」

指を再度額に当てると、悟空はもう片方の手をエヴァーに差し出した。しかし、エヴァーはその手を取ろうとはせず、逆に悟空の腕をがっちり引つ掴んだ。

疑問符を浮かべる悟空。

溜息を吐くエヴァー。

「？ なんだ、エヴァー？」

「瞬間移動は使っつな。お前に任せると相手の目の前に跳ぶはめになる」

「お？お？」

そのままぐいぐいと悟空の腕を引っ張り、浮遊するに到って、ようやくエヴァーは悟空の腕を放した。先行するエヴァーを追って飛びながら悟空の疑問符はさらに数を増している。

「なあエヴァ、どうしたんだ？早えとこ皆を助けねえと」

「その事だ」

飛行しながらエヴァは器用に悟空の方へ体を反転して腕を組んだ。
結果二人は真正面から睨み合う。
そしてエヴァは言った。

「今回、お前は手を出すな」

第28話 並んで歩こう 後編

世界樹の巨大な威容はステージを覆い隠さんばかりに夜空へと枝葉を広げ、雨と風によって静かな葉の音色を響かせている。ステージ上には奇妙な球体が二つ鎮座していた。水で出来たそれは空気中でありながら固形を成し、正しく堅牢として役割を果たしている。そして内部には数人の人影。

一つには、両手足を拘束された刹那が未だ眠ったまま浮遊している。一つには、木乃香、のどか、夕映、古菲、和美らが閉じ込められ、内部から水牢を叩くも、それはびくともしない。ちなみに木乃香以外は大浴場から直接連れ去れた為、皆全裸である。

「はう、あああああ!!?」

そしてステージ中央には、両手を頭上から下りる長いスライムで拘束された明日菜が、苦悶の声を上げて立っている。

「アスナさん!!」

「ネギ!来るぞ!」

黒い外套がネギと小太郎の眼前で翻る。魔力の籠められたジャブはさながらショットガンと化して二人に襲い掛かった。

観客用のベンチが粉々に破壊される中、辛くも回避する二人。

「くっ、小太郎君！ラス・テル マ・スキル マギステル 闇夜切り裂く一条の光！」

「応よ！」

一瞬の視線の交差。ネギは魔力を小太郎は気を、己が右手に集中させる。
対する男に向けてそれぞれ左右から仕掛けた。

「白き雷！！！」

「犬上流・空牙！！！」

少年達の掌から迸る光弾は黒い男、ヘルマン目掛けて空中を奔る。にも拘らず、ヘルマンはそれを避けるどころか防ぐ素振りさえ見せない。程無く、二条の光弾はヘルマンの 眼前で掻き消えた。同時に明日菜の悲鳴が木霊する。

「くっそ！またや！？完璧に掻き消されとる！」

「アスナさん！？」

並び立つて驚愕する少年二人にヘルマンは口の端を吊り上げた。

「魔法無効化。マジックキャンセルカグラザカ嬢の能力を逆用させてもらった。この能力を前に君達の術や技は無意味だ。例外は無い」

明日菜の胸元でペンダントが光る。

つい先刻ネギがヘルマンに対して用いた『封魔の瓶』もまたこれによって意味を成さなくなつたのだ。ステージの端の方で転がる瓶を見やり、ネギは苦虫を噛み潰す。

「ネギ、しゃあない。ここはゴリ押しで通すで」

「う、うん。なんとかして動きを止めて、先にアスナさん達を助け出そう！魔法が効かない今は分が悪い……」

「素手は好みなんやけどな……」

ネギの傍らに小太郎が立つ。思いがけず組んだ共闘に戸惑った様子は有れ、ネギと小太郎の連携は概ねバランスに長けていた。

小太郎は拳を握り直して構える。口の端を流れる血を舐め取りながら、矢庭に地面を蹴りつけた。

「というか悟空のあんちゃんは何しとんねん！？ちづる姉ちゃん先行つとる言つとつたやんけ……」

「・・・・・・・・・・」

地団駄を踏み付ける小太郎に、しかしネギは答えなかった。視線をヘルマンから逸らし、一瞬だけ、己の内奥を覗き見るように瞳は焦点を解いていく。そしてすぐさま頭を振った。

「悟空さんに頼ってばかりじゃダメだ。ここは僕達だけで切り抜ける！」

「え、あ、ああ！んなもん分かつとる！当然や！」

多少の戸惑いを覚えるも、小太郎は即座に好戦的な笑みをネギに向けた。

「相談は終わりかね？」

「「っ!?!」」

二人は同時に息を呑んだ。数瞬前には数十メートル先に佇んでいたはずの男の音がすぐ背後から発せられたのだ。振り返る間さえありはしない。二人は跳んだ。

「悪魔パンチ!!!」

砲弾と化した拳はコンクリート製の地面を穿ち、破片を辺りへばら撒いた。

宙を舞う瓦礫。

小太郎が動いた。小太郎の体から溢れるように飛び出した分身体は瓦礫の影に沿って駆ける。

ヘルマンの四方、取り分け死角から、決りこむように各々は仕掛けた。

「ふっ」

「!？」

その全てに黒い拳が突き刺さる。ヘルマンは分身体を瓦礫ごと砕いたのだ。連続発射される機関銃のように拳は踊り、目暗ましたる瓦礫が晴れる。

小太郎本体が曝け出された。渾身の右ストレートが狙い打つ。

杖がヘルマンの右腕に刺さった。

「やああ!！」

「ぐう」

横合いからの杖の一撃で拳の弾道は反れ、小太郎は横っ飛びにそれを避けた。反れた砲弾は大量のベンチ達を吹っ飛ばす。

ネギはその一撃から刺突を連続で繰り出した。それに続くように小

太郎も加勢。

しかしネギの杖は程無くヘルマンに掴み取られた。

「しまっ

」

「ふんっ！」

杖を手放さないネギをヘルマンはハンマーでも振るうように一度振り被り、そのまま小太郎をネギで打ち据えた。

「ぐあ！！？」

「がふっ！？」

二人は衝突し、打たれたボールが如く数十メートルを吹き飛んだ。小さな体躯をコンクリートに叩き付け、ばらばらと倒れ込む。

「くっ……小太郎君、大丈夫？ごめん僕の所為で……」

「はっ、あないな一撃ぐらいっぐ……まだまだ！！」

懸命に立ち上がった少年達。しかし体のそのそこかしこには確実なダメージ傷が刻まれいた。体力の損耗もまた激しく、動きは精彩を欠いていく。

構えて二人の少年を眺めていたヘルマンは、不意に溜息を吐いた。

「まったく、オの芽は十分と年甲斐も無く浮かれていたのだが、とんだ期待外れだよ」

ネギ君」

小太郎の腹に男の拳が入っていた。

「へ？」

すぐ隣にいたネギは半拍遅れてその光景を視界に収める。

小太郎に到つては、ヘルマンの拳が己に突き刺さっていることさえ気付いていなかったかもしれない。

男の咳きはひどく静かだった。

「悪魔パンチ」

凄まじい轟音を轟かせ、小太郎の体躯は客席の遙か反対側まで地面を抉って吹き飛んだ。

「小太郎君！！！」

「ウソ……小太郎！！」

「こ、こたろう、くん……？」

「犬っころ！？やべえぜ！兄貴！！」

「くう、開け！開くアルこの！！」

明日菜の叫び。

のどかの声にさえならない眩き。

どれもこれもが遠く、ネギはただ歯を食い縛って眼前の男を睨み付ける。

ヘルマンはその目を笑顔で迎えた。

「さあ、ネギ君。君の迷いを断とうか？」

巨木の広大な枝を足場に、悟空、エヴァ、茶々丸は眼下の戦場を見下ろしていた。

「コタロー……まだ気はしっかりしてっけど、力が入えらねえんだな」

「体力か。対人で長期戦ともなればこの三倍は長引くぞ。たかだか爵位級の悪魔が少し本気を出した途端これでは……まるで話にならん」

動けぬ歯痒さに珍しく表情を歪める悟空に対して、エヴァは冷たく吐き捨てた。

修業の成果の検分と称して、エヴァは悟空の一切の手出しを禁じている。それはネギ達の闘いに加わるのは勿論のことだが、エヴァが強い禁止事項はもう一つ

「ネギ……」

「……」

固く握り締められて震える拳がエヴァの視界の端を過ぎる。そっと、エヴァはそれから目を逸らした。

「ネギ君、君は、どうして今戦っているのかね？」

「え？」

突然に手掌を向けられ、ネギは言葉に詰った。しかし状況を無視した質問は続く。
続いてヘルマンはステージへと手掌を向けた。

「生徒達を守るため？教師として義務を果たすため？まさかとは思
うが正義感に突き動かされた、なんて愉快なことを言わないでくれ
たまえよ？ふっはははは！」

「ぼ、僕は！」

ユーモアを気取った話文句はしかし、ひどく馴れ馴れしく、隠しよ
うも無い皮肉に満ち満ちていた。知らず、ネギの顔はその不快さを

表すように厳しいものになっていく。

「怒り、哀しみ、憎しみ、ああ『復讐心』などは特に良い！それら本能に近い感情は私の大好物だ。理性という箍たがは時として能力にも影響する。これはいただけない」

「い、一体何を……」

まるで演説を披瀝する扇動者アシテータのように、ヘルマンはネギを見下ろした。

「責任感が義務感が、いずれにせよそんなもので動いているのなら、私の相手を務めるには役者不足の感が否めないが……おや、それともネギ君、君の理由とは」

白々しい、黒い男の道化師じみた笑み。粘つく生暖かい笑みはネギを捕えて放さない。

「あの雪の夜の記憶から逃げることに、だったのかな？」

「エヴァ……!!」

「ダメだ」

「……しかし、マスターごのままでは」

「聞こえなかったか。動くな」

「……」

「な、なんであんたが!？」

沈黙は一瞬。破ったのは明日菜の声。

しかし、それは誰の耳にも届かない。ヘルマンは勿論、ネギにさえ。

「ふふふつ、どうだね。何処か私は間違っているだろうか？」

「そ、そんな、な、そんなこと……！」

吹き出る汗は異様な程に冷たい。胸を強打し続ける鼓動は血量を増しているはずなのに、ネギの体は寒さに震えていた。まるで、降りしきる雪の中に立っていた、あの時のように。

「実はね、ここへ来る直前ソン　ゴクウに会ったよ」

「え」

一瞬、ネギの瞳に光が戻る。ヘルマンの眼はそれを見逃さなかった。

「いや、まさかあんな人間が存在するとは。心に一片の闇さえ持たない、高潔な魂、優しい戦士、最強の体現とはまさにこのこと。だからこそ、私は思ったのだよ。かの男を見ていると『嫌なことなど全て忘れて心が明るく照らされるようだ』とね」

ネギは、その言葉に、凝固した。

吊り上る三日月の口。愉悦に歪む悪魔の笑顔。

「まさかとは思うがね、ネギ君。君は、そんなソングクウという存在を」

男は帽子に手を掛けて、殊更ゆっくり脱いでいく。

「心の闇の、蓋代わりにしてやいないかね？」

帽子はゆっくり下りていき、男の顔を取り去って

「さあ、蓋を開けようか。ネギ君」

黒い悪魔の出来上がり。

子供の頃から　あの雪の夜から　出来ることはなんでもやった。学校で習える呪文は全部覚えだし、学校で教えてもらえない魔法は図書室の禁書を読み漁って覚えた。

それでも足りないと思った時はひたすら練習に明け暮れた。何度も何度も失敗して、何回も何回も涙を流した。

でもその度に思い出す。あの夜を、あの雪を、あの火の海を、石になつたスタンおじいちゃん、崩れたお姉ちゃんの足、怖いお父さん、優しいお父さん、居なくなるお父さん、泣き喚く自分。

それと一緒に胸一杯の恐怖、孤独、寂寥、最後に罪悪感を途方もなく思い出す。

だから勉強した。だから練習した。怖くて悲しくて寂しくて、辛いから。そんなのはいやだから。

本当にそう？

「うあああああああああ……！」

「な、なにアルかあれ!？」

「兄貴の魔力が解放されてんだ! 一時的だが。多分、今出力だけならあのおっさんを上回ってる!」

「し、しかし!！」

「やばいよあれ……あのオヤジって確かネギ君の村襲った!」
「?」

「ネギ君……!」

拳が百を越え始めた辺りで悪魔、ヘルマンは改めてネギを見た。暴走する感情に押し流され、戦闘とさえ呼べない暴力を振り回す様はさながら獣と言える。

（これがこの少年の……ソーン　ゴクウという箍が抑え付けていたモノか!）

歯止めの利かない力を何としても己にぶつけんと迫り来る小さな脅威。そして完全とは程遠い位置に在りながら、それでも自身を上回るほどのパワーを発揮して見せた可能性。

（素晴らしい! 才能の原石。是非とも将来を見てみたいものだ! ……

・・・だが)

最大限の魔力を籠めて握りこんだ拳を、思い切り振り被って突貫するネギ。

そしてそれは有体に言っ、隙だらけで無謀な暴拳。

黒く長大な悪魔の腕は、ネギの細首を真正面から受け止めた。

「がっは!？」

殺し切れなかった運動エネルギーは首を強烈に圧迫、その一瞬、ネギの意識を刈り取った。

(そう、輝かしい原石ならばなおのこと!)

空に佇む悪魔の指がネギの首へと食い込んでいく。呼吸は止まり、思考は止まり、感情のうねりは行き場を失くす。そして悪魔はその口を開いた。不気味な光に満ち満ちた、強力な魔力の迸る口腔を。

「!?!? 兄貴!!」

『ヘルマンのおっさんの永久石化だ。あゝ、あのガキ、ありや直撃コースだな』

「っ！ネギ！！」

「ネギ君！！」

「ネギ先生！」

目の前には見慣れた光景が。浴びれば最期の魔法の光。大事な人達を飲み込んだ憎き敵の顔。思い出すのは、石に成り果てた老人の顔。フードに隠れた父の顔。そして、

「……………悟空、さん……………」

憧れた、最強の笑顔。

風が止み、雨が止み、無数の枝葉さえもぴたりと動きを止めた静謐の只中。

「・・・・・・・・・・・・・・・・オラもう我慢できねえ！！！」

「あ、こ、こら悟空ー！！」

ピシュンッ

悟空の眼光が捉える相手は唯一つ。

それは寒気だったのかもしれない、それは予感だったのかもしれない、それは、恐怖だったのかもしれない。

悪魔・ヘルマンの顔面には拳が減り込んでいる。突如として現れ、雷光を超えて振るわれ、石化魔法の直撃さえ厭わず突き出された右拳。

そしてヘルマンは耳にした。魂の底から響かせたような、ただただ純粹すぎる怒りの声を。

てめえだけは、許せねえ！！！！！！

暗転

ネギの小さな体躯を左腕に抱えて、悟空は原型を留めない観客席へと降り立った。悟空の拳を正面からまともに受けたヘルマンは、ステージ広場どころか外縁を覆っている森林地帯を隕石のように抉りながら吹き飛んだ。

茫然自失のネギを地面に下ろす。悟空は屈んでネギと視線を合わせた。

「ネギ、おーい！ネギ！」

「あ……………！」「悟空、さん……………？」

焦点の合わなかった瞳に光が戻り、ネギはようやく悟空の存在に気が付いた。そして不意に、ネギの視線は悟空の腕を捉えた。

握り拳を作ったまま、指先から肩口に到るまで、全てが灰色の石と化した悟空の右腕を。

ネギの背筋を抗いようもなく恐怖が駆け抜けた。

「あ……ごうくさ……！……ああっ、ああああ……？悟空さん……悟空さん石に……石に、なっ……！」

「ネギ」

「どうしよう……どうしよう……！……どうしよう……？悟空さんまで……いやです……ダメです……！悟空さんまでそんなの……そんなの……」

「ネギ！」

ぼろぼろと泣き崩れるネギは恐慌状態にあり、悟空の声は届いていなかった。対して、悟空の方はそんなネギをして困ったように左手で頭を掻き、おもむろに右腕を振り上げ

「だああ！」

「あいたっ……！？」

ネギの頭頂部へと振り下ろした。ただでさえ固い悟空の拳骨が今や
比喩無しに石になっている現状、ネギの痛みは計り知れない。
先程から溜々くうくうと流れていた精神的涙から、今度は純粹な痛みによる
涙へシフトを果たしたのだった。

「うしっ！ネギ、オラの声ちゃんと聞こえつか？」

「あ、あえ？は、はい聞こえます……ってそんなことより悟
空さん！！腕を！そ、その石化魔法は特殊なもので治すには大変な

」

「もう一発いくか」

「はいすみません」

ひょいと上げられた右腕にネギは軍隊ばりの直立を見せた。悟空の
方も一つ頷くと、そのまま破顔してネギの頭を撫ぜる。

「心配すんな。こんなもん唾付けときゃ治るって！」

「いや流石に治りません悟空さん……」

「それよりだ、ネギ。オラおめえに話があんだ」

何やら台無しになった空気から一転、悟空は真直ぐにネギを見据え

た。射竦められる形で一瞬硬直したネギも覚悟を決めたようにゆっくりと首肯する。

「ネギおめえ、悟飯に嫉妬してんだってな」

「……………あう」

弩ストレートだった。オブラートってなに美味しいの、と言って実際にオブラートを溶かし食べる。孫悟空とはそういう人である。

「くおらあああああ!!!!?」

「うおっ?」

「あわわわ!?!」

地の底から響き渡るほどの怒声が辺りを震わせる。発生源は明日菜だった。

反射的にネギは悟空の背後へと避難する。

「散々人のこと待たせといて第一声がそれかい!!悟空さん、アタシだってねえ、怒るときゃ怒るのよ!?!」

(大体いっつも怒ってるよな、アスナって?)

(うう、でも今日はいつもよりもっともっと凄いですよー！って
か恐いですよー！)

「聞こえてるわー！ー！！」

「悟空さん来てくれた〜！」

「悟空さーん！ナイスタイミング！めちゃくちゃ撮りたかった！あ
と出来ればこっち見ないで！」

「むむむ！またアル！！また悟空さんの動き見えなかつたヨ！悟空さ
ん、わんもあアル！」

縛られた状態にあつても明日菜は元気に叫び続ける。水牢内の賑や
かさにも拍車が掛かった。

もう一つ苦笑いを浮かべると、今度こそ悟空はネギに相對した。

「分かつてると思うけどよ、ネギはネギだ。悟飯じゃねえ。んで悟
飯もネギじゃねえ」

「は、はい……………」

「エヴァが言うにや、オラが悟飯に期待してるのが気に入らねえん
だつてな」

「そ、そんな！気に入らないなんて……………ぼ、僕は……………
…ただ……………」

真直ぐな言葉には嫌悪も辛辣さも無かったが、容赦も無かった。それはネギがひっそりと心に抱きながら必死で掻き消した子供らしい幼い感情なのだから。
それでも悟空は目を逸らさなかった。

「オラはよ、悟飯にしたような期待をネギにするつもりはねえんだ」
「・・・・・・・・・・」

「だってよ、最初に言ったじゃねえか」

「・・・・・・・・・・え」

俯いていた顔を上げてネギは悟空を見る。

「一緒に修業して強くなる、ってよ!」

「は、はい」

「それって別に師匠とか弟子とか関係ねえってことだろ?」

「あ」

何故か、ネギの胸にはストーンと落ちるものがあった。目から鱗と言ってもいい。

「あん時オラは悟飯の師匠だったかな。どうにかして悟飯を強くしなきゃなんねえって必死だった。んで悟飯も悟飯でとんでもねえ力持ってたもんだから、オラえれえ嬉しくてよ！ものっすげえ悟飯に期待しちまつた……」

記憶に思いを馳せ、柔らかい微笑を浮かべていた悟空の表情はしかし、言葉尻に自嘲を含んでいた。

「ネギ、オラは強くなりてえ。今よりももっともつとだ！そんでネギも強くなりてえって言ったよな？」

「……はい」

「オラと一緒だ。なら、一緒に強くなるうぜ！オラが上でもネギが下でもねえ、肩並べて進むんだ！」

「……でも……」

容易く頷けない。頷いてはいけない。

心の蓋は、もう無いのだ。己の闇を知ったネギに、悟空はひどく眩しかった。そして、無意識に逃避を望んでいた自身が、闘いを逃げの口実と貶めた己が、ネギはどうしようもなく許せなかった。

悟空の言葉に、ネギは手を伸ばせない。はずだった。

「父ちゃん探し出す！」

「へ……………」

「んで、石になっちまった村の皆を元に戻す！ん？おめえずうくとそればっか考えてたじゃねえか？」

何を言っているのか、ネギには解らなかった。

だから悟空の目を食い入るように見る。先程から小揺るぎともしない真直ぐな、キョトンとしてネギを見つめる純粹な瞳。震える唇は知らず言葉を紡いでいた。

「じ……………じゃあ、ぼ、僕は……………」

たった一言声を発するだけなのに、まるでそれが罪であると訴えるような、ネギの涙を湛える瞳を、悟空はやはり、笑顔で見返すのだ。

「ネギ、おめえは間違っでなんかいねえ」

「……………あ……………あ……………」

・・うつ、く・・・あああつああ！！ああああつ」

悟空の腰に取り付いて、ネギはひたすら声を上げて泣いた。そして悟空は、ただただネギの頭を撫ぜ続けた。

怖かったのも本当。逃げ出したのも本当。

でも、父さんに会いたかったのも本当。スタンさんに、村の皆に会いたかったのも本当だった。

分からなかった。どれが本当の自分なのか。そして、逃げ出した自分を認めてしまうのは何よりも恐ろしかった。そしたら全て嘘になってしまう。今までしてきた血の滲むような想いまでも全て

そう、そのたかだか全てを、悟空さんは認めてくれたんだ。

雨に濡れる地面を踏みしめて、二人は屹立する。

眼前の悪魔の顔には落胆と愉悦が入り混じる。全身に散らばる己の傷などまるで頓着しない。目を逸らすことこそ悔いになると、決して視界は揺るがない。

「ふむ、さて、どうするね？ネギ君。希望の戦士が来て随分と元気になったようだが」

ヘルマンの声音には明らかに覇気がなかった。挑発には碌に感情も顕れず、ただ言葉だけを選んで放ったようなお粗末ささえある。案の定、ネギは小揺るぎともしなかった。

「闘います。一緒に！」

「へへっ、おう！」

悟空とネギは同時に構えを取る。言葉を交わさずとも各々の役割をすでに二人は理解している。

ヘルマンはほんの一瞬、眩しそくに眼を細めた。

不意に悟空は明日菜へと顔を向ける。

「アスナ！」

「え？」

唐突な呼びかけに明日菜は戸惑いを見せた。しかしそれも悟空の力強い視線を前に、瞬く間に消え失せた。

「ちょっと我慢できっか？」

「……………うん。いいわよ、思いつきりやっちゃって悟空さん！ネギ！！」

それが契機。

悟空はネギよりもさらに一步前へと踏み出す。拳を握り、動かぬ右腕と自由な左腕はそれぞれ腰に、そつと息を吸った。

『超サイヤ人化は今後禁ずる』

「分かってるさ、エヴァ……………」

思い出された言葉に悟空はそう一人ごちた。ここへ来る前に交わされた約束。

『強すぎる力は毒になる。自身だけでなく、特に近しい者へと。大きすぎる背中を追うことさえ、躊躇わせる……………』

だから禁止した。二人の肩を、並べさせるために。

「界いいい！王おおおおお！！拳えええええええん！！！」

その絶叫は全てを吹き飛ばした。

「なっ！！？」

「！？？」

紅き焰は瓦礫を飛ばし、雨を燃やし、夜空を焦がして吹き荒れる。

高まる力は限界を知らず、未だ火山のように大気を震わせ続け

悟空の右腕は次々に亀裂を刻み始めた。

「・・・・・・・・馬鹿、な」

「悟空さん・・・・・・・・腕が！」

「はあっ！！！！」

両腕を全開に、その気合を最後に、リストバンドと肩を覆っていた
胴着を諸共に石は碎け散る。

驚愕はネギとヘルマンの両者に訪れた。ネギには喜び。ヘルマンには屈辱を。悟空は構える。今宵最後の一勝負。前回とは違う。ネギと『一緒に』終わらせるのだ。

「行くぞ!！」

「はい!！」

二人は同時に飛び出した。より速いのは悟空。真直ぐに拳が放たれた。

勿論、まともにそれを受け負うヘルマンではない。拳を弾いたと同時に両拳から高速のジャブが無数に襲い掛かる。それを悟空は避けない。

「ぬうああああつ!！」

「だりやりやりやりや!！」

ヘルマンの拳に悟空は合わせて己の拳をぶつけたのだ。拳の弾幕同士がぶつかり合い、大気を夥しい震動で満たす。速度と力で悟空が負ける道理は無かった。界王拳の強化は、圧倒的に悪魔を凌駕する。

ヘルマンの両腕を悟空は同時に殴り上げた。そしてヘルマンはその目を見開いた。

「ネギ！」

「なにっ!?!」

悟空の呼び掛けにまるで応えるかの如く、ネギは悟空とヘルマンが向かい合ううちちょうどその間へと潜り込んでいたのだ。両腕を飛ばされ、無様に胴体を晒すヘルマン。ネギは拳に魔力を練り上げた。

「やあああ!?!」

ヘルマンの偉軀にネギの小さな、強烈な拳が突き刺さる。一拍遅れてヘルマンが後方へ跳び退ろうと足に力を入れた瞬間、

「はあ！」

「!?!あつ……!?!」

ネギの頭上を越えて、悟空の蹴りがヘルマンを夜空に打ち上げていた。

黒いボロ布のように空へと舞い上がるヘルマン。悟空はネギの目の前に着地、とほぼ同時に、両掌を合わせ腰溜めに構える。

「か
」

再び巻き起こる紅い嵐。対して辺りを照らし出すのは蒼い光。

「め
」

極限の凝縮。渦巻くは気の奔流。

唐突にネギと悟空の背後を三つの影が差した。

『はっ！ヘルマンのおっさんが言ったとおりダゼ！大技かまして隙だらけだ！』

『タイミングバツチリです』

『………あ』

三人の人外の少女達は一斉にネギと悟空へ襲い掛かり
もう三つの影に吹き飛ばされた。

『あぶぶ！？』

『あれえ？』

『やっぱり』

「やってまえネギ！悟空！！」

「小太郎君！！」

影分身をけしかけて小太郎は少女らを押さえ込んだ。ネギの喜びの声が木霊する中、悟空はそれに答えず、ただ嬉しげに笑った。

「は」

極限を超えて、世界は蒼と紅で満ちる。先の、小太郎が介入したわずか数秒の攻防で、すでに決着は着いている。

「め」

夜空に無防備を晒すヘルマンは最早動けない。戦士の眼光が絶対に悪魔を逃がしはしない。

「くっ！？悪魔」

デーモンシシエア

「

蒼い焔が眩く煌めいた瞬間

「波あああああああ！！！！！！！」

それは一気に悟空の掌から溢れ出した。

空を漂うヘルマンには眼下を埋め尽くす極光で地表を望むことさえ不可能だった。拳の魔力は意味を成さない。ただただそれを理解させられるのだ。

ヘルマンが腕を翳かざしたわずか数メートル先で蒼い極光は押し留められた。

「っだ、だが！！それでも私には届かないぞ！！！！！！」

そして地上の明日菜の胸で、ペンダントは光の絶叫を見せた。明日菜の悲鳴がステージ上を反響する。

「はっあああああああ！？っく！！こんのおおおおお！！！！」

しかし、全身を走り抜ける強烈無比な悪寒にも、明日菜は目を瞑らない。歯を食い縛り、真っ向から抗い、悲鳴は絶叫へと変化した。此度悲鳴を上げたのは光を放つペンダントの方。

走る亀裂。

高まる光。

押し留めること叶わず、ペンダントは粉々に砕け散った。

「そん、なっ……馬鹿なああ!?!」

ヘルマンの絶叫が空を木霊する。最強無比だった防壁は蒼色の極光と共に掻き消えて、悪魔を守るものはもう何も無い。

「ネギい!!極めるー!!!!」

「はい!!!!」

悟空の肩を蹴り、ネギは上空高く、ヘルマンさえ越えて跳び上がった。

拳に無詠唱?魔法の射手?一矢を籠めて、焼けつく悪魔を屹度睨む。目の前にいるのは、己が闇。闘いに正面から向き合えなかった自身の未熟。

今、ネギはそれを打ち破るのだ。

「だあああ!!」

「ぐう!!」

打ち下ろした拳はヘルマンを地上へ叩き落した。

風に体を打ち付けながら、ヘルマンは頭上を見上げる。そこには少

年がいる。ようやく闘いを知り始めた、まだまだ幼い少年が。

「ラス・テル マ・スキル マギステル!!」

掲げられた指先に魔力が集中し、自身から雷を呼び寄せる。

「来れ 虚空の雷 薙ぎ払え!!!」

夜空を背に、強さを求め、涙して、少年はまた一步前へと進んだ。

「うあああああ!!!」

雷の斧!!!

ぺたぺたと木乃香は悟空の右腕を触った。鍛え上げられた腕は文字通り鋼のように固く、そうと言って柔軟性もあるという矛盾した感触を木乃香の指に伝えている。
悟空は小首を傾げた。

「どうした？」

「……もう大丈夫やよね？石になったりせえへん？」

「おお、あつたりめえだ！結局オラ、どこも怪我してねえかな。それよかネギとかコタローのがずっとひでえぞ」

そう言つて、悟空は背後から付いて来る少年二人を振り返つた。
小太郎はむすつとして悟空を見返す。

「へんつ、あないな攻撃なんて俺からしたら日常茶飯事や！俺はネギみたいに柔とちゃうからな」

「む、うっそだー！だつて小太郎君さつきお腹押さえて痛そうにしてたよ！」

「あ、おまつ！？うっさい！余計なこと言わんでええんじゃアホ！」

「ははは！」

自身の背中で未だに眠る刹那を背負い直し、悟空一つ大きく笑った。隣を歩く明日菜は呆れたように溜息を吐く。疲労度はピークに差し掛かっているのに（主にツッコミ疲労）子供らはまだまだ元気な様子。

「そや。悟空、俺の修業にも付き合ってもらおうで！ネギだけこないな強い師匠おつてズルイヤんけ！」

「ええ！？ダメだよ！悟空さんは僕と修業してくれるって約束してるんだから！」

「むむむ！？これコタロとやら。悟空さんは私の組み手の相手する約束よ。横は入りは駄目アルヨ！」

「はいはい子供と張り合わないの」

わいわいと言い合うネギと小太郎に何故か古菲も加わり、和美が古菲の肩を羽織ったタオル越しに掴んだ。

最後尾を歩くのはどかと夕映。夕映の方は顎に手を副えてつらつらと記憶を廻らせていた。

「ふむ、あのヘルマン伯爵とやらはどうも今回ネギ先生と悟空先生が狙いだったようですね……」

「え？ゆえ、それって……」

「雇われたと自分で言っていましたから、おそらくは調査、ないし、排除が目的だったのでしょう。魔法に関係する裏社会というのがどういふものなのかは分かりませんが……やはり先の修学旅行が影響しているのでしょうか？……いえ、それもやはり早計か。ネギ先生は英雄の息子ですから、そこから遡ら

」

ぐるあぐいおおおおお！

「はあ、オラ腹減っちゃった」

「……」

「わわわ！？ゆえゆえ、落ち着いて！」

思考を両断されて震える夕映をのどかは必死に宥めにかかる。悟空は片手で腹を擦った。

木乃香は口元に手を当ててくすくすと笑っている。

「うしっ！なあ、サツキの店で飯食いに行こうぜ！」

「え？うん……そうね、私もお腹空いちゃった」

「あ、ウチもウチも！」

「お、マジか。んじゃ悟空の奢りっちゆうことやな！」

「ええ！？小太郎君、それじゃ悟空さんに迷惑だよ！」

「オラ別に構わねえぞ？」

「おお！超包子にご来店アルか？いらっしやいアルー！」

「いや早いから。そして今早朝だから。あと悟空さんあたしらマッパだから」

「ファンタジー孫悟空！今日という今日はあなたを論破せねば気が済みませんです！なんなのですかあなたはその非常識さは！腹の音に始まって質量保存無視の暴食と消化能力！あと宇宙人ってなんですか！？握手してください！」

「ゆえ〜！落ち着いて！色々めちやくちやだよ〜！」

それはもう何時もの日常の風景だった。怒りも悲しみも涙も終えて、騒いで喧嘩してまた笑う。

「……………ん……………あれ……………？」

「お、セツナ起きたか」

東の空はすでに白み、日の光は、少しだけ眩しかった。

「はは、温けえなあ……………」

パ―ティ―
仲間達はぞろぞろがやがや、朝陽の下を歩いていく。

おまけ1

出発前の二人

「なあ、ネギ……………」

「なに？小太郎君。攫われた皆のためにも急がなきゃ！」

「……………それなんなんや」

スライム達は逃げ出した！

第28話 並んで歩こう 後編(後書き)

どうもお久しぶりですみませんでした!!!
二ヶ月ってなんだよ!? 阿呆なの? 死ぬの?

..... 本当にすみません。更新速度更新速度と毎回のようになんか文句を垂れているのにもかかわらず、なんだこれ。己の無能に泣きそうな今日この頃.....

今回は珍しくシリアスが長めです。そして今回特に学んだことは、悟空を投入した時点でシリアス維持は不可能です! いや威張って言うことではないんですがね.....

界王拳、昔から作者大好きです。Dr.ワイロー戦とかご存知の方も多いと思いますが超カッケー!

ただ今の悟空が使う意味なくね? とか思われた方..... 勢いで

単純に気を高めるのなら界王拳のほうが馬力が出るかなと.....
・浅慮極まりないですね.....

前回御指摘を受けました悟空の妻帯問題、刹那さんだけが物凄い壊れてしまいました..... 文章を総括的にまとめる力を誰か俺にください.....

読者様相手に愚痴こぼす阿呆ですが、本当に読んでいただきありがとうございました!

幕間2 孫悟空コンビ二前相談室（前書き）

あれ、なんで俺こんな早く書けたの？……………。

はいというわけで、今回はシリアスないです。そして刹那さんごめんなさい。こんな役ばっか……………いえ、最初に謝罪させていた
できたかったです。

ではどしどし。

幕間2 孫悟空コンビ二前相談室

夜の帳は深みを増して、月は煌々と暗い校舎を照らし出す。女子中等部3年A組の教室は昼間の生徒達の喧騒がほんつとに嘘か幻のように静まり返っている。机と椅子が黙して鎮座する伽藍とした教室内は月光が差し込む薄闇以外なにもない。かに見えた。

ガタツ

「ふえっ!?!」

木製の机や椅子は時折、乾燥の度合いにとって小さく割れて音を発するときがある。心霊・超常現象の類を抜きとした場合のラップ音の一つがこれで、深夜直前の、無人の校舎で多少過敏になった恐怖心ならば、驚くかビクつくかするのは当然と言えた。たとえそれが、心霊・超常現象当人たる幽霊であっても。

「うう〜! やっぱり夜の学校怖すぎです〜!?!」

すぐさま教室から出ると、廊下を立てるべき足音も無く急いだ。当直の警備員さえいない静謐ばかりが蠢く校舎を、3年A組一番『相坂さよ』はひた走る（注・足は有らず）。

1940年 享年15歳 相坂さよはその人生を終えた

そして現在、彼女は幽霊として学校にいる。

麻帆良女子中等部校舎から徒歩数分と程近いコンビニエンスストア。最近ではすっかり当たり前となった24時間営業の店舗からは、眩しいほど電灯の光が放たれ、まるでコンビニそのものが一つの照明装置であるかのよう。

さよは、そんなコンビニの入り口横でぼんやりと佇んでいた。

幽霊として新たな生？を受けた彼女は、その有様に相応しく誰かを驚かすまいし取り殺すといった霊的役割を果たしているのかといえれば別段そんなことはなくて。死して60年程の間、教室で普通に授業を受けながら過ごしてきた。

人格は死してなおはつきりと残り、幽霊らしからず比較的生き生きとしている彼女だが、しかしそれはあくまでも幽霊基準の話である。生前の引っ込み思案と人見知りが災い（幸い？）してか、誰一人として彼女を幽霊として発見することはなかった。要は地味なのだ。

加えて、生来から引き継いだ怖がりという性格もあって、夜の学校と言う絶好の幽霊スポットも彼女にとっては恐怖の対象以外の何物でもないのである。

夜でも昼間の如く明るいコンビニは、彼女にとっての避難所だった。不意にコンビニの扉を二人の女生徒達がくぐる。同じ部活動の帰りなのか、楽しげに談笑し合う様をさよはほんやりと眺めた。

「・・・・・・・・友達かあ・・・・・・・・」

誰にも聞こえない呟きを漏らして、数十年目の溜息を吐く。姿は見え、声は聞こえず、存在すら忘れられた少女の生活は、有体に言って寂しいものだった。

「昼の間は皆賑やかだし、見ていだけでも楽しいんですけど・・・・・・・・」

それでもやっぱり、人肌恋しい年頃なのである。

「はあ・・・・・・・・あれ？」

そうこうして再度溜息を吐いていると、また数名の人影がコンビニへと近付いてくる。夜に団体を成してコンビニに立ち寄るのは怖いアンちゃん達だと半ば刷り込みのように覚えていたさよは、また当

然それを苦手としてるため、ほぼ反射的にゴミ箱の陰へと身を潜めた。

「うう、は、早く行ってください………」

恐々としてそんなことを言いながら、誰に見えるはずも無いのに、なんとなくさよは体を丸めて耳を塞いだ。

「あ、わりい、ちよっくら行ってくっぞ」

「ん？何、悟空さんなんか買うの？」

「おお、唐揚げ棒とか焼き鳥ってのだ。テレビの見てたら食ってみたくなってよ！」

「相変わらずねえ。ていうか、学校出る前にも皆からお菓子とかもらってたわよね………」

「あ、悟空さんのお腹鳴るん聞くとな、なんかあげたなるんよ」

「………餌付け？」

「じゃあ僕らはここで待ってますね」

「わりいな」

二、三言の遣り取りの後、団体の内一人だけがコンビニへ入ると、他の者達は入り口から少し離れて談笑を始めた。耳どころか目まで瞑っていたさよは、凍える小動物のように震えながら、ようやくゴミ箱から怖々とそちらを窺った。

「まったく、食費とかどーなってんのかしらね……………」

「本当ですね。あ、でもやっぱりあれぐらい食べなきゃ強くはなれないってことなんでしょうか？……………や、やっぱり僕もなにか！」

「やめんかい」

「アハ、でもネギ君は育ち盛りなんやから。修業とか関係なしにいっぱい食べなあかんえ」

「ネギ先生？それに神楽坂さんと近衛さんも？」

さよの視線の先には、同じクラスの神楽坂明日菜と近衛木乃香、そして今年の冬から自身のクラスの担任となったネギ・スプリングフィールドの姿があった。がやがやと賑やかで、それでいて楽しげな様。さよは自然とそれらを見つめていた。

「……………楽しそうだなあ」

ふわりとネギ達の傍へ近寄り、何とはなしに手の平をネギの顔の辺りではたばたと振る。普通なら驚くか訝しむかするだろうが、生憎さよは一般人はおるか、霊媒師、祈禱師にさえ気付かれないほどの地味っ子である。
当然返つて来たのは無反応。

「はぁ・・・・・・・・・・そうですね。そんな都合のいい話はないですよ・・・・・・・・・・」

新任教師として頑張っている姿を日々目にして、少しづつクラスにも変化らしきものを齎もたらしているネギならば或いは、と希望を抱いたが・・・・・・・・・・。
さよはそつとネギ達に背を向けた。ネギ達の間を流れる暖かな空気が、さよには少し辛かったのだ。決して触れることは出来ず、そのくせ見えるのに手が届かないのでは、生殺しもいいところだ（すでに死んでいるけれども）。

「・・・・・・・・・・あつ!？」

さよの体がつんのめる。段差に気付かずそのまま進んでしまったためだ。

躓くための足など無く、崩れるべき体重も質量さえも無い霊体の彼女が持つ、物理法則を超えた妙技トジツキである。

しかし、それは成されなかった。横合いから伸ばされた腕に、思わずさよがしがみ付いたのだ。

「あつ!?!」

「おつとと」

腕はさよを立たせると、そつと離れた。驚いてさよが見上げた先には、唐揚げの刺さった串を啜える孫悟空がさよを見下ろしていた。

「よっ、大丈夫か?」

「は、はい!どどうもすみませんっ……………」

「はは、足元気い付けろよ?んぐ」

顔を赤らめて俯くさよ。

そしてそのまま悟空が串を根元まで啜えてひょいと抜き去ると、串に残っていた5、6個の唐揚げは全て悟空の口の中へ。リスのように頬を膨らませて満足そうに笑う。

「まふああひたな、さほ(また明日な、さよ)!!」

そう言っつて悟空はさよの頭をばんばん撫でると、ネギ達が待つ方へと歩いて行った。

「？ 悟空さん、さっきの……って、なにそのデカイ袋」

「うわぁ！袋パンパンですよ!？」

「おお、あの変な温けえ箱に入ってるやつ全部美味そうだったかな、全部買ったぞ。アスナも食うか？」

「え？うくん……じゃあーコだけ」

「アスナの食いしん坊」

「アスナさん食いしん坊」

「なっ、このかとはもかくアンタは許さんわ！」

「ええ!?!ひどいですよそれ!」

来た時と同様、帰る時も賑やかに悟空達は去って行った。対して、その場に呆然と立ち尽くすさよ。そしてしばしの間、さよは目をパチクリさせ、腕を組んで唸り、首を捻って自身の頭を撫でてみたりを繰り返した。

「あれ?……………あれえ……………!!?」

時刻は高速で過ぎ去り、翌日の晩、さよはまたコンビニの前にいた。別段さよの出没場所はコンビニに限られている訳ではなく、24時間営業のファミリーレストランやゲームセンターなど、明るければ所を変えてお邪魔していたりする。しかし今日に限っては、確固とした理由からさよはコンビニに我慢強く詰めていた。

「
」

「
」

コンビニから出てきた一人の男は、上機嫌に手に持った袋からガサガサと今しがた購入した肉まんを取り出し、大きく頬張った。人の手の平程はあろう肉まんを男は二口でぺろりと平らげ、また新たに袋をガサガサとあさる。

さよはと言えば、じい〜つと男、孫悟空のことをまんじりともせず見つめているのだが、ここへ来て人見知りの能力が発動し、さよの無いはずの二の足を踏ませていた。

「あ、ああ、あの……その……つ！」

蚊の鳴くような声で、そしてカチコチとぎこちなく手を伸ばすが、例の如くゴミ箱の陰に潜んでいるためなかなか気付かない。

まるで告白前の女子児童といった体裁でさよは目をギョツと瞑った。そして胸一杯に息を吸い、とうとう覚悟を決めてカツと目を見開く。

眼前に悟空の顔があつた。

「よっ！」

「わきゃあああああ！?!?!?!」

完全な不意討ちにさよは有らん限り仰け反り、背中からアスファルトへと倒れる。

瞬時に悟空が手を伸ばしさよの手を掴んだ。

「あっ！」

「うおっと！危ねえ危ねえ。わりいな、驚かしちまったか？」

地面すれすれからひょいと引き起こされ、悟空にもたれながらまた付いて、よっやくさよは立ち上がった。

「オツスさよ！昨日もここで会ったな。なんか買ひもんでも……ん？」

「……………」

掌を上げて挨拶を寄越す悟空に、さよは答えなかった。さよは自身の手に握られた悟空の手を凝視して微動だにしない。

「さよ？」

「……………温かい、です……………」

ぼそりとさよは呟いた。消え入りそうなほど弱々しくなんとも儂い声音に、悟空は不思議そうにさよの顔を覗き込む。ぼろぼろと零れ落ちる涙は押し留められず、後から後から頬を伝い、地に落ちることなくこの世を去る。

「ふえええんー！ごうぜんぜえー！ー！ー！ー！」

「おっおっ…」

さよは悟空の腰に取り付くと、誰に憚ることもなく、声を上げて泣いた。

「はあく、おめえ幽霊だったんか！」

所変わらず、二人はコンビニのベンチに並んで座っていた。

悟空はさよをどうにかこうにか宥めると、たどたどしく語られるさよの話に耳を傾けた。そして事情を全て話し終えて、ようやくさよはほっと一息吐いた。

「そっか、どーりでおめえずっと一人だったんだな。皆の方も全然話しかけねえし変だなあくとは思ってたんだけど」

「はい……私昔からすつごく地味で目立たなかったから……だから、先生が、き、気付いてくれたのが、すつごく、嬉しくてえ……ふえっ……」

「ああああ、泣くな泣くな。ほれ」

悟空は泣きじゃくるさよの頭をくしゃくしゃ撫でると、袋から肉ま

んを取り出してさよへと差し出した。一瞬泣くのを忘れてキョトンと肉まんを見るさよだったが、今度は申し訳なさそうに目を伏せてしまった。

「うう、すみません悟空先生……私、幽霊だから、食べ物は……」

「え、そうなんか？オラは結構食ってたけどなあ？……あ、そっか」

「え……」

「ちょっと待ってる」

何やら思いついた様子の悟空は、ベンチから立ち上がると再度コンビニの扉を潜って行った。頭に乘っかっていた温かみが消え、急に倍増した寂しさがさよを襲う。

しかし、それ程の間も置かず悟空はすぐに帰ってきた。そして手には何故か割り箸。

「???悟空先生？」

「ほいっ」と

ズボツと音が出るのでは？な勢いで悟空は肉まんに割り箸を突き刺

した。矢庭に何となく意図を察したさよは、それこそ食
い入るように割り箸が突き立った肉まんを凝視する。

「どうだ、さよ？食べるか？・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「お・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お？」

「おいしい！！！！」

「おおそつかそつか！美味えか！」

「はいい！おいしいです！！つか味分かりますー！！！！」

「そつかー！！味分かつかー！！！！」

しばらくの間、二人はコンビ二前で喜び続けた。

なんやかんやあって、とりあえず落ち着いた二人はまだベンチにいた。

「うしっ、分かったぞ！」

「え？」

「明日、学校でおめえのこと皆に見えるようにする！」

拳を握り、悟空は大きくさよに頷いて見せた。

「え、ええー！？で、でもでも、私こんな地味で、霊媒師の人とかからも見放されるくらいで、ずっと、ずっと独りで、もう、諦めてて、そ、そんなこと……」

驚きの声は束の間、さよの声はどんどんと尻すぼみになっていく。さよとて過去何度も何度もクラスメートに自分の存在を訴えてきた。そしてその度、悲しくて寂しくて泣いたのだ。必死に投げ掛けた声、伸ばした手が、無意味に空中を彷徨う様は、考えただけでも辛くて辛くて、そしてやっぱり泣いてしまうのだ。俯いたさよは、膝の上に乗せた自身の手をもう片方の手で握り締める。それは、悲しみを耐えるための、さよの小さな抵抗だった。

「ほれ」

「あつあつあつあつあつ!?!?!?!?!?」

さよの頭を悟空は思い切り撫で付けた。無骨な手、力も強い、あと多少ガサツである。さよの銀系の髪は見る間にぐちゃぐちゃになっていった。

さよは驚いて、目に涙を湛えて悟空を見上げる。

「まゝた泣いてっぞ。泣くのは試してからでも遅かねえんだ。今はとりあえず笑っとけ!」

「えう……で、でも、もし、今度もまた誰も気付いてくれなかったら……?」

「なんとかなるさ!へへへっ」

「あ……」

人懐こい笑顔がさよを見下ろす。

学校に通い始めて早70年近くになる彼女だが、今年は奇妙な出会いがある。10歳に満たない子供先生や全然先生らしくない、なんだかお父さんみたいな先生。

ただ、その印象は決して間違っていないのだと、さよは思う。笑顔の悟空を見ているだけでなんだか無条件に信じてみたくなる。そんな、物凄い安堵。

「わ」

「わ？」

「わた……」

「綿あめ？」

「私のお父さんになってください！」

「うん？……んん？」

翌日の放課後、教室にて。

他の生徒達も大体が家路に着いた頃、早速悟空はさよを引き連れて
いの一に朝倉和美の元へ向かった。

「カズミ〜!!」

「ん？おお、悟空さんじゃん。なに、とうとうプロマイド製作付き
合ってくれる気になった？」

「いやわりい、なんかエヴァが恥ずかしいからってんで、そら無理

だ

「ちえー、クラス内なら結構売れると思ったのに。桜咲とか桜咲とか」

「朝倉さん!!」

「お、耳いいねえ〜桜咲」

教室の端から端まで凡そ10メートル前後の距離を一瞬で詰めて、桜咲刹那は和美に肉薄した。漏れなく真赤な顔で和美に詰め寄る刹那は、不思議そうにそれを見る悟空を認めた途端弾ける様にその場を跳び退った。

「ち、ち、違っあの悟空さん!これはそのあの、あのあのののっ!?!」

「はいはいどおどお〜。せっちゃん落ち着きや〜」

「お、コノカ」

「これももう相変わらずよね〜……………」

「おお、アスナ」

刹那を木乃香があやす最中に明日菜も加わり、妙にごちゃごちゃし始めて失念しかけていたが、悟空は本来の目的を思い出して手を打

った。

「そんでよカズミ、実は、ちよつくら写真撮って欲しんだ」

「え、なに、そんなこと。いいよいよ、はい、笑って笑って」

「いや、オラじゃな」

カシヤツ

悟空の言葉を遮って和美は自前のデジカメで悟空を撮ってしまった。そして早々にカメラのボタンを操作して写真閲覧機能を呼び出している。

「お、出た出た。うんよく撮れて……る……?」

「?」

「なに?朝倉、どうかしたの?」

「うん?」

突如、和美はデジカメの液晶画面を見たまま硬直した。怪訝に思ったその場の明日菜や木乃香、刹那は和美の手に収まっているデジカメへと視線を落す。そして同じく硬直した。

「? 皆どうしたんだ? 固まっちゃまって」

「あの〜?」

明らかに普通ではないその有様に、悟空とさよもまた皆に倣って画面を見た。

そこには悟空が写っている。つい先程撮られたのだから当たり前だ。それは問題ではない。問題なのはそこではない。

悟空の背後には黒い瘴気が立ち込めていた。背景さえ飲み込んで見えなくする程濃密且つ悟空の体へと絡みつくように伸びる様は尋常を超えた不気味さである。そして最大の難点。悟空の右肩に女が寄り添っていた。白く長い髪を垂らし、目元は暗闇が覆い隠したようにどす黒く、口は半開きで薄笑いを浮かべているのだ。さよの顔が見る間に青くなって行った。

「おお、よかつたなさよ! 写真には写ってっぞ!」

「いやよかないです!!?」

見事な心霊写真だった。

「い、悟空、さん……」

「ん? どしたセツナ? 顔色悪いぞ」

「……ふふふ、事もあるうちに、悟空さんに取り付くとは……いい度胸だ、女」

「ふえ？」

ゆらりと刹那は、抜刀した。刀は上段。踏み込みはこれ以上ない程に深く。

「斬魔剣!!!!」

「うおっ!?!」

「うひゃあ!?!」

振り下ろされた対魔の剣戟は和美の机を綺麗に両断し、ついでに床まで夕凧が刺さっている。咄嗟に悟空は避けていた。思考停止からの目覚ましには十二分だったようで、明日菜と木乃香、とりわけ机を二つにされた和美の反応が最速だった。

「ちょっとおー!?!?桜咲なにしてるのおー!?!?」

「あわわ、せつちゃん落ち着き!」

「そ、そうよ刹那さん!ま、まずは刀を」

「霊が逃げたらあかんから戸閉めな。あれ？意味ないんやろかこの場合？」

「分かったこのかから落ち着いて！」

パニックを起している生徒達を見かねてか、後方の座席から龍宮真名が悟空へと歩み寄る。

「うん？オラなんか間違えたかな……？」

「いや、いつも通り解釈を誤っただけだろう。刹那が」

苦笑いを浮かべて事の次第を見ていた真名だったが、悟空の右背を右目を瞑って見やると肩をすくめた。

「オッス！マナ」

「おつす。で悟空さん、その娘は？何処で拾ってきたんだ。犬猫じゃないんだ。霊はやめときなさい霊は」

「あう、私別に捨てられてません！」

「捨てられてないってよ」

「分かった。捨ててきなさい」

にべも無い返し。しかし口元は半笑い。真名は面白がっている。そうこうしている内に明日菜と木乃香の説得も空しく、刹那が夕凧片手に悟空の前へと立った。

「待っていてください、悟空さん。今、お助けいたします」

「いや、だからよセツナ。さよは」

「龍宮！ちょうどいいお前も手伝ってくれ。この怨霊め、恐ろしく隠密性が高いようだ。私の目にも薄ぼんやりとしか見えない」

「はあ、あいな刹那。この娘は」

「通常の倍額支払おう」

「成仏してくれ」

「ひえ！？」

真名のスカートが一瞬はためいたかと思うと、いつの間にか両手には黒々とした大口径の拳銃デザートイーグルが握られていた。幽霊でなくてもそんなもん向けられれば誰でも身が竦み上がる。さよは悟空の背中にしがみ付いた。

それを臍に見て取ったか、刹那はさらに眼光鋭く夕凧の切先をさよへ差し向ける。

「きつ、さま……だから……近、そんなぴったりくっ
つい……!」

「せつちゃん、本音出とる出とる」

「今すぐ調伏してくれるわ!!挟み討つぞ!」

「了解^{ラジャー}」

「ひえええええ!?!?!?!?!」

歴戦の退魔師および仕事人に挟まれ、さよは恐怖でぐいぐいと悟空の胴着を引つ張っている。

そして悟空はといえば、頭を掻きながら珍しく溜息を吐くと、迫り来る二人を視界に収め

「だああ!」

「もきや!?!」

「あタっ」

その小振りな頭を叩いた。

「っていつわけだ」

「申し訳ございません平に平に謝罪いたしますクラスメートにや刃を向けてあまつさえ怨霊などこの私目は」

漫画的たんこぶを頭にこさえて、床に正座した刹那は深々と頭を下げていた。

錯乱状態にあつた刹那を物理的ショックにて正常に戻した後、明日菜、木乃香、和美、真名、刹那と雁首揃えて事情説明と相成った訳だが。

話を聞くにつれて蒼くなっていく刹那の顔色と、忍び笑いが大笑いに変わってく真名。

「ははは、予想はしてたけど何ともはや」

「いやでも写真写り悪いつてレベルの話じゃないよこれ……」

「ええっと、相坂さん？なんか今は素で見えてるけど」

「こんにちは、はじめまして？ああ、お久しぶり？どれがええんやろか？」

未だ嘗てない注目の視線に、やはり悟空の背に逃げ込みながらもさよは恐々と顔を出した。

さよを一瞥して悟空は明日菜達を見やる。

「ま、そういうわけだからよ。さよもずっと寂しかったみてえだから、時々でも話し相手になってやってくれ」

「お、私でいいんなら喜んで！」

「新聞のネタになるからね」

「そうそう……いやいやいや、それだけじゃないからさ！」

「幽霊さんか、ねえねえ、どないな感じ？ やっぱり空とか飛べるんかな？」

「魔法使い、吸血鬼、ロボ、鬼、妖怪、宇宙人……そして幽霊……あれ、あんまり驚けない。あれ、私の常識は？」

「ア、アスナさん、ファイトです！」

数十年間の寂しさが一日にして吹き飛ばされ、さよの心境は不思議な心地で落ち着いている。目の前の、今までずっと手の届かなかつた喧騒に、自分は加わっているのだと、まださよは実感が持てなかつた。

「？ さよ、おめえまた泣いてっぞ」

「え……あはは、ごめんなさい。あ、でも今はいいんですよ。私、皆さんに見てもらえました……！」

「うん？うん……それもそっか」

麻帆良学園女子中等部から程近いコンビニエンスストアには奇妙な噂がある。

夜、深夜とは言いがたく、それでも夕方よりは遅い時間、コンビニ前のベンチには必ず『誰か』が座っている。だから殆どの人間はそのベンチに座ろうとさえしないのだ。そして仮に座っても、途端に起こる寒気で決して長居が出来ないのだとか。

人々はそれを、コンビニ前の交通事故で亡くなったドライバーの霊の所為だとか、過労で死んでしまったコンビニ店員が来る所為だとか、恋人を待ち続ける少女の霊がいるのだとか、様々な想像を掻き立てて囁いている。

「オッス！」

今日も一人、男がベンチに座った。手には揚げ物やら中華まんやらでパンパンに膨れた袋を提げ、そして何故かもう片方の手には必要のないはずの箸を握って。

こんばんは、悟空さん

男は夜が深まるまでずっとベンチで楽しげに笑っていたという。

幕間2 孫悟空コンビ二前相談室（後書き）

オチが本怖っていうより、心霊体験特集のアンビリバボーみたいになっちゃいました、こんにちは足洗です。

出来れば何も考えずに、暇つぶしの種にでもお使いいただければ幸いです。

あと悟空が幽霊見えたり、触れたりするのは、やっぱり死人経験の豊富さを妄想した結果です……肉体はありましたが……。

さよ」ところで、悟空さんってなんで私のこと触れるんでしょうか「？」

悟空「うん？ああ、オラもう結構死んだからな」

さよ「……………は？」

読んでいただきありがとうございます！

第29話 日常と

津波のような無数の数字と文字列。何重にも展開するモニタウィンドウ。点滅を繰り返し、針が一度として止まることのない計器の群。床を蠢く電子ジャック。床を埋め尽くす資料とメモ書きの束。映像出力機器と入力用コンソールを置いた机の上も、床との様相に大差は無い。

凡そ人が生活する空間ではないその場所で、少女は一人、場違いな程穏やかな溜息を吐いた。

「やっとこさ安定したヨ。まったく、出力下げてこれでは何れ此処も吹き飛んでしまうネ」

物騒な独り言を漏らして、少女は掛けていた椅子に深くもたれ掛ると、少女の背後で空圧式自動ドアが吐息を漏らしながら開かれた。

「お疲れ様です」

「お疲れ。外骨格および内骨格の強度実験結果は？」

「なんとかクリアしました。対物、対魔、対氣、どれも目標値到達です」

「ふむ、それは何よりネ。こつちも合成には成功した。後はこの状態でどれ程の馬力が得られるかだが」

「あの強度を維持しながらの自己再生も、まして量産化は現代科学の範疇外です……」

「中々の無茶振りだたネ。我俣と言うより豪気、と言えるのかナ？」

「他の量産機達の目途も立ちましたし、一度お休みを取られては？」

「う〜〜ん？」

少女の問いかけに、少女は伸びをしながら逡巡している様子。椅子の背もたれが甲高い悲鳴を上げて倒れ、少女はそのまま天井を見上げた。

「闘う程に強くなる種族を相手に、私達の科学がどれ程対抗し得るの力」

「？」

「なに、純粋な科学者としての興味ネ」

不意に少女はコンソールを叩いた。一瞬で無数のウィンドウは切り替わり、画面は唯一つだけ映像を映し出す。

剥き出しの電子機器達

ワイヤーで固定された上半身

コードと鉄の骨組みが垂れただけの下半身らしきモノ

胸には己の臓器を待ち構えた伽藍堂

そして、確かな意志を放つ、鋭い眼光

「サイヤ人は手強い。果して勝てるのかナ？」

『ソレ』はほんの一瞬、確かに嗤った。

朝陽眩い街路樹が立ち並ぶ大通りは、何時も通りの賑やかな疾走で満ちている。

麻帆良学園の朝は戦場である。一体誰の言葉だったのだろうか。し

かしこれ程までに目の前の現状を表している言葉も無いと、ネギはこの地へ来て何度目かになる頷きを覚えた。

「ネギー！前見て走んねえと転んじまうぞー！」

「あぶ！？」

「コタロー！踏ん張れー！」

「んぎぎっ！分かつとるわ〜！！」

「ああああ………」

「あははは、ネギ君コタ君ファイトや！」

案の定、ネギはすっ転び　　そうなところで悟空に後襟を掴まれ、小太郎は寸でのところで右足で地を踏みつけて耐えた。

レンガ造りの赤茶けた公道を踏み締め、今日も今日とて子供先生ネギとお父先生悟空は学校目指してひた走る。そしてそんな父子コンビにもう一人、学ラン姿の犬上小太郎が加わった。

ネギと小太郎と悟空に軽々と追いつく体力バカ、もとい、体力自慢な明日菜は、呆れとも苦笑いとも付かない表情を顔に貼り付けて三人の奇態を見つめていた。対して、すいーっとローラーブレードで併走する木乃香は、何がそんなに嬉しいのか朗らかに微笑んでいる。周りは小中高大の学生達、社会人の方々、クマの縫ぐるみ、鎧武者、

口ボ、ウルトラな人、怪獣、怪人、恐竜、人力飛行機などなど皆一様に全力疾走を繰り広げ、さながらマラソン大会の様相を醸す。そんな日常。

何故もつと早く家を出ないのか、というカモの疑問は周りの明るい喧騒に掻き消され、誰の耳に届くことも無い。

また一步、地面を蹴り付けるように足を踏み出したところで、とうとう小太郎の走りは止まってしまった。そしてそれに釣られるように、ネギもまた膝に手を付いて息を切らす。両者とも額からは止め処なく汗を滲ませ、顎を伝って落ちた汗が地面を黒く汚していく。悟空は二人の前に立ち止まり首を傾げた。

「どうだ。やっぱしまだ早かったんじゃないか？」

「はっ、なに言うтонねん！こんなんすぐ慣れるわ！」

そう言うと、鋭い犬歯を覗かせて小太郎は悟空に笑って見せた。幼いながらも野性味を思わせる好戦的な笑み。やはりせえせえと息を切らしているのに変わりはないが。

幾分余裕が窺えるネギの方は、小太郎の様子を見て微かに眉をひそ顰める。

「悟空さんの、言う通りだよ。僕はもう、20キロで体が慣れてたからいいけど、はあ、小太郎君は慣らしも無しに、いきなりだし……」

「う、うっさい！そもそも『コレ』がそういう意味やて、初めから知っとなら、はあっ、学園こく来てすぐに実践出来たんやぞ！ネギが

隠すんが悪いんやろ！はあっはっ」

「ええ！？ば、僕隠してなんかないよ！」

ネギの弁解など聞く耳持たぬ、と言わんばかりに小太郎はジャブを繰り出した。それを避けては往なして、ネギも応戦を余儀なくされる。

非常によた付きながらポカポカと殴り合う様は、どう見たとて子供の喧嘩にしか見えない。少年と侮る莫れ、片や我流狗神使い、片や魔法使いなのだ。そのはずなのだ。

「……………ねえ、悟空さん」

「ん？なんだ？アスナ」

不意に掛けられた声に、悟空は視線を超越す。そこには如何にもゲンナリとした表情をふらふらとじゃれ合うネギや小太郎に向ける明日菜がいる。

怪訝そうに悟空は小首を傾げた。明日菜は額を押さえた。

「……………やっぱ甲羅なのね……………」
「？」

「おお、いい修業になるかな！アスナもやつか？」

「誰がするか！！」

「でもでもアスナ、二人ともよちよちしとってかわええよ〜」

流線型の光沢が眩い（以下省略）

ネギと小太郎の背中には亀の甲羅が吊られていた。ずっしりとしたカルシウムの塊はその重量実に40キログラム。間違っても10歳の子供が日常生活を送るために背負う必要はない。

「お?」

とそこで、不意に小太郎の襟首は背後から伸ばされた白い手に摘まれた。

「ぐえ!?!」

「あらあらダメよ〜。喧嘩はいけません」

伸びやかな音色とは裏腹な有無を言わせぬ良く透った声。もう片方の手で口元を押さえながら千鶴はにこやかに微笑んでいた。傍らには吊るされた小太郎を憐憫の籠った眼差して見守る夏美の姿も。

「よう、チヅル。ナツミも」

「おはようございます 悟空先生、ネギ先生」

「ちよちよ！？ちづ姉ちゃん！？はなし、放して！」

「あー……小太郎君ガンバ」

夏美はそのまま玩もてあそばれる小太郎へ合掌。なんとなく明日菜もそれに加わった。

「あ、そっか。コタロー君、那波さん達と一緒に暮らしてるんだね」

「お、俺は一人暮らしでええ言うて」

「はい、この子は私が立派に育てていきます！」

「ちよっ、ちづ姉ちゃん！？」

子供を愛しむ千鶴の聖母のような微笑が眩しい。ネギは素直に感嘆の息を漏らし、小太郎はあたふたと慌て続けた。ふと、千鶴は悟空を流し目に見やる。

「女手一つの子育てより、やっぱりお父さんがいた方が小太郎君も嬉しいわよね？」

「は？何を言つとんのやちづる姉ちゃん……？」

「うふふふ」

「？」

(子供を出汁に落としに掛かるたあ……いや中学生のやり方じゃねえって!?)

「カモ君どうしたの？震えてるけど」

紆余曲折ありながら、そろそろと行軍する悟空達。

学園に近付いていく程通りの賑わいはその大きさを増して、空には飛行船や幟を吊るしたバルーンが高々と浮遊している。

そこかしこから湧き上がる歓声と所狭しと点在する各サークルのチラシや宣伝看板。実際にパフォーマンスを披露する者らとそれを眺める見物人の群が大挙する。

「んで、オラずっと気になってたんだけどよ」

「はい、僕もです悟空さん」

「なんやこれ」

「いやホント今更よね、アンタら……」

悟空と子供ら二人は、朝から置き去りにしてきた周囲の光景をようやく注視した。

朝、人々が大群を成して登校出勤するという麻帆良学園において最早当たり前な光景に混じっていた違和感達。仮装衣裳の群と奇妙に多い出店。拡声器で叫ばれる宣伝文句とそれに負けない派手な実演者。

「うひゃ〜、なんだなんだ？ 祭でもあんのか？」

「うふふ、そ、全学園合同の学園祭ですよ」

「もうそんな時期なんやね〜」

「まだ先だつてのに麻帆良マホウの人達は……」

学園校舎が望める小高い丘の入り口には、ビルほどもある凱旋門がすでに外装の整備を終えて屹立していた。そんな巨大な門から続く一本の坂は、遠目から見ても出し物を催す者、見る者、宣伝する者で溢れ返っている。

『麻帆良祭』

三日に亘って開催される延べ入場者数約40万人という全世界有数の規模を誇る学園都市全校合同イベントである。

明日菜に倣うように小太郎もネギも溜息を漏らす、そんな光景だった。

対して、悟空はネギ達以上に子供らしく目を輝かせてはしゃいでいた。

「ははは！すつげえな！」

「は、始まつてもおらへんのにこれかいな……。お！ネギ、悟空見てみ、格闘大会やて！出よ出よ！」

「ええー！？そんないきなり！？つてか無謀だよ小太郎君！」

「おお！負けねえぞ！」

スキンヘッドで筋肉質な男が『格闘大会参加者募集中』と極太の達筆で書かれた幟を掲げて爽やかに微笑む。三人は肩を並べて意気揚々と受付へと歩んで行った。

「コラあぁー！！3バカ遅刻！つてか教師二人がどうどうとサボるな！！」

「「「ん？」「」」

「結局、遅刻せずに済んでよかったですね」

「ははは、またアスナに怒られちゃったけどな」

麻帆良学園女子中等部校舎、3年のフロアを廻る廊下をネギと悟空はそんなことを呟きながら歩いていった。
登校途中にあった準備中のアトラクションや商店、露店、舞台装置などなど未だ稼働していないにも関わらず、奇妙に魅力的なそれらを振り切って、定時通りの出勤を迎えた彼ら。

「兄貴の学校にゃこんなのは無かったからな」

「そう言や、クラスでも何か出し物^{もん}つてのがあんだろ？新田のおっちゃんが決めとけって言つてたよな？」

「とりあえずは朝のホームルームで皆さんと意見交換ですね！どん

ボタンッ

「教室間違えたか？」

「いえ、そんなはずないんですが……」

「いやいやいやお二方よ……」

ぴしゃりと、しっかりと、ぱつちり迷い無く閉じられた扉を不思議そうに眺めて、ネギと悟空は顔を見合わせた。

確かめるまでも無く、扉の上部に取り付けられたプレートには『3-A』の文字が。何度も通った校舎の道のりを忘れるはずもない。仕様も無いので、再度ネギは扉に手を掛け　その瞬間引き戸は破壊的なまでの勢いでレールを滑り、全開した。

「ひどいよ……!!二人とも!!」

「いきなり閉めちゃうことはないでしょう!」

「アハハハハ、やっぱり二人には刺激が強かった？」

「刺激って言うてもメイドさんなんてそんなに珍しいかな？」

「ううう、わ、私はネギ先生の鑑賞に堪えないと!?!そう言うこと

なのでしょうか！？ネギ先生！！」

「あわわわ！？み、皆さん！？落ち着いて！！」

「お？お？」

津波のようにネギと悟空へ殺到する椎名桜子、柿崎美砂、釘宮円らチア部三人組や朝倉和美、そして目になみなみと涙を湛えてネギに縋りつく雪広あやか。

非難の理由は言わずもがなであるが、その理由に相まって彼女らは納得ができない様子。

「で？どうどうこれ？ネギ君的には！？」

「悟空先生もさ、なんか感想ないの〜？」

桜子はその場でぐるりと可愛らしく一回転。その拍子に棚引く黒地にミニのスカート、ワンピースの前は白いフリル付エプロン、髪を二つに結ってこれまた白いフリル付きのカチューシャでそれを纏めている。紛うことなくそれはメイド服だった。

ポカンとした表情のネギと悟空をちゃっかりカメラに収める和美も、カフェエプロンタイプの比較的シンプルなやつばメイド服である。あやかが身に着けているのは所謂ロングドレス。如何にもメイド長といった風格なのだが、ネギの前で膝を付いて神に祈るが如く手を合わせる様は懺悔する修道女のようにもあつた。

扉を開けた瞬間に目に飛び込んできた光景が、あまりに日常からか

け離れたものであったが故に、ネギも悟空も咄嗟の対応に窮して扉を閉塞したのだった。あやか辺りのダメージは相当なようだ。

「え、ええつと皆さん……これは一体？」

「なにつて、麻帆良祭の出し物だよ！最近話題のメイド喫茶で集客率トップを狙うのさ！」

躍り出るように教壇に立ち、明石裕奈は声高に叫んだ。

現在、何故かネギは、何時設たえたのか分からないソファーソファに腰を下ろし、両脇の桜子と美砂に挟まれて飲み物を注がれている。仄暗く燈った照明、サクスを利かせた静かなBGM、少女達の黄色い笑声。

（兄貴、とりあえずこれメイドカフェじゃねえ……………）

カモの呟きは、やはり誰も聞くことはなかった。

なんとなく瞳を爛々と輝かせる裕奈や早乙女ハルナの傍にることが躊躇われた悟空は、比較的まとも　　静かな隅の方でネギの無事を祈っていた。

同じく悟空の隣で和泉亜子と大河内アキラは恐々と現状を諦観している。

「冥土吉鎖って変なとこだな」

「悟空さん、これは、あの、違うから、いろいろ……」

「こ、悟空さんは変なこと覚えんでええからね！」

「いや、この場合むしろネギ先生こそ変なこと覚えんじゃないのかな……なんて」

「……」

「？」

春日美空の言葉で沈黙が降りた。

教室内は混沌としている。本当に何時設えたんだと言いたくなるバーカウンターと酒棚、誰が飲むんだワインクーラー。ミラーボールは煌々と幾筋もの微光を放ち、その下で四葉五月と長瀬楓がバーテンドーに勤んでいる。

呆然とそんな夜の街を見ていると、いつの間にか和装のウエイトレス姿の佐々木まき絵とメイド服に猫耳を頭に乗つけた裕奈が亜子とアキラの手をガツシリと掴んでいた。

二人はなんとなく顔を蒼くした。

「ほら、亜子もなんか着ようよ！」

「はいはい二名様ご案な〜い！」

「ええ！？ウチはいいから！ウチはいいから！！助けて悟空さーん！？」

「あーっ……………」

ドブプラー効果を起す亜子の声とアキラの声ならぬ涙の声を残して二人の少女は二人の少女に連行されて行った。

一瞬手を伸ばした悟空だったが、まき絵と裕奈の速度はサイヤ人の英雄をして驚異的と言わしめる程であったために、断念。そう、決して他意などない。

「あ、だ、ダメ、バニーはいやあ……………」

「や、いややつ、短い、スカートこんなっ！あかん見えてまうって！やあー！？」

「……………行っちゃまった」

一人取り残された悟空。混沌渦巻く賑やかな子供らの声を尻目に、しばし手持ち無沙汰にカウンターへもたれていた。

どしどし。

「ん？おお、サツキ」

朗らかな笑みを浮かべて、五月はそつとグラスを悟空の前へ滑らせた。透き通った琥珀色の液体は間接照明の光を受けて微かに揺れる。悟空は自身の掌に収まるタンブラーをしげしげと見つめ、次いで五月の笑顔を見上げた。

特製ドリンク。修業、頑張ってるって聞いてます。

「ああ、そっか。つつても、頑張ってるのはむしろネギの方だぞ？」

ううん、お二人共について思ったんだけど……ふふっ、ネギ先生は忙しそうだから。

「あー」

だから今は悟空さんに。

視線を合わせて五月は小さく頷いた。悟空も小さく微笑むとタンブラーを一気に呷った。カクテルの飲み方としてそれは無作法というより無遠慮で、お世辞にもバーの雰囲気解しているとは言いがたい。しかし、そんな悟空の無体な様を見ても五月は怒りやしない。むしろ「ぶはっ」と豪快に一息吐いた悟空の笑顔をそれはそれは嬉しそうな笑顔で見つめているのだから。

「初めて飲んだけど、やっぱりサツキが作るやつはみんな美味えや」

ふふ ありがとう、悟空さん。

束の間、悟空と五月の周囲に限り、空間は穏やかさを取り戻した。そしてそれは正しく束の間である。まったりする悟空目掛けて突貫する機影二つ。

「悟空せんせー!!」

「見て見てコレー!!」

「うおっ」

赤い頭巾に赤いスカート、編み籠片手に鳴滝風香は悟空の腰へ。体操着にブルマ、胸にはきちんと名前入りの四角い刺繍を施した鳴滝史伽は飛び掛るように悟空の肩車に乗り込んだ。

「ほらほら可愛いでしょ!コレ!」

「他にもいろいろあるです!」

「おおっと。なあ、聞きてえんだけどよ」

「? なに悟空先生?」

「これって、結局ナンなんだ？」

悟空の今更と言えは今更な疑問にキョトンとして顔を見合わせる鳴滝姉妹。

「ナンだろうね？」

「ナンなんだろうな？」

益体も無かった。

悟空が無意識に視界の外へと追い遣っていた教室を見渡すと、兎耳を付けたアキラがタオルに包まって震え、明らかに正規ではないナース服に猫耳と尻尾を携えた亜子がチラチラと悟空の方を窺いながら必死にスカートと裾を押さえ、スカート丈異常な修道服の美空は十字架を胸に苦笑い、袴を寸断したかのような巫女服に龍宮真名は溜息を、スクール水着に猫耳尻尾を取り付けられた桜咲刹那は茹蛸のように全身を赤く染めていた。

電卓片手の古菲の前を何故か真っ白に燃え尽きたネギが蹲り、顔を突き合わせた裕奈と和美は「やっちゃったな」おい」「やっちゃったよ」「ってかメイドカフェってナンだっけ」と何やらぶつぶつと呟いている。

鳴滝姉妹をぶら提げて、悟空はカオスの只中に佇んでいた。

「しょうがねえなあ……うしっ、おっ！皆！」

『ほあ？』

両手で作ったメガホンからの大声で、ぐちゃぐちゃと動き回っていた生徒達はようやくその場に静止した。弾ける様に楽しんでいた者もいれば疲労困憊して倒れ伏す者もいる。

コスチュームプレイもキャバクラもイメクラも完全な知識外のモノであり興味も惹かれなかった悟空は、その思想的余裕から、本来の目的を忘れていなかった。

「とりあえず皆座れ！ほれ、ネギ！早えとこ決めねえと新田のおっちゃんが出来ちまうぞ」

「あ、ああ、ご、ごくうさん・・・怖い、大人の世界恐いですつ・・・み、見ただけで、二万円も、・・・ぼ、僕大人になつたらずっと目瞑つてなきゃいけないんですか！？それじゃ、お、大人の人達は皆どうやって生活を!？」

「うん？大丈夫だ。いいかネギ。目だけで相手の動きを追うのは限界があんだ。目に頼りすぎるんじゃないかと、もっと体中使つて

「旦那違う。それ全然違う」

机も椅子も教室の隅へと撤去されていたため、生徒達は皆床に直接腰を下ろし、憔悴するネギを抱えて教壇に立った悟空を見た。制服を着ている者の方が少ないという現状、教室内の風景は甚だ奇妙ではあった。

一つ悟空が手を打ち鳴らすと、びっくりとして覚醒するネギ。それを

見て取って悟空は満足そうに頷いた。

教室に居並ぶ生徒達を見渡す。元気で、賑やかで、ノリも良い（悪ノリが玉に瑕）、そんな気の良い少女らに悟空は、ここへ来てからずうずうと抱いていた疑問を、やっと口にするこゝと出来た。

「で、おめえ達、一体何がしてえんだ？」

元気な教室に、しばし沈黙が降りた。

夕陽が沈んでいく様を悟空はぼんやりと眺めた。どんな世界にいたとしてもこの光景に大した差異はないのだと、改めて思い返してみらる。エヴァンジェリン邸への帰り道、森の入り口を目前に悟空とネギは歩いていた。

ネギは、熱心に今日の朝出された生徒達の意見をまとめていた。学園祭で各クラスが執り行う出し物案はメモ帳のページをびっちり

埋め尽くしている。

「うわあ、一杯ありますよ。どれを選べばいいんだろ……?」

「さつきも言ったろ? 明日皆で決めりゃいいさ」

「……そっか、それもそうですね。うん、でもでもホント楽しみです! 一体どんなんでしょう、学園祭って!」

晴れやかに笑顔を浮かべてネギの歩調は浮き足立った。悟空の方は腕を組んで、様々に想像を廻らせている。

「そうだな。エヴァとかチャチャマルにも聞いてみつか。面白えところいろいろ知ってつかもしんねえ」

「あはは、そうですね」

「よしっ、そうと決まったら急ぐぞネギ!」

言うが早いか悟空はその場を駆け出した。一拍反応が遅れたネギも、負けじと悟空を追いかける。

「今日は久々に甲羅取って組み手だ! 本気出してやつぞ!」

「ええ!? そ、そうですね……な、なら今日こそ悟空さんに

一撃！・・・掠らせます！」

「もうちよい頑張れ兄貴！」

豪快な笑声が森に響く。夕陽は沈んで静かな夜闇が降りて来る。今日も今日とて悟空とネギは駆けるその足を止めることはない。今はまだ見ぬ麻帆良祭を二人はひどく心待ちにしていた。

そして『ソレ』は麻帆良祭を待っていた。

おまけ

「・・・・・・・・」

「ご、悟空先生？な、なんで私のことジッと見てるの？あ・・・・・・・・
な、なんで、私の手、握って？」

「！？ あ、アキラ！？な、なんで・・・・・・・・！」

「亜子！？ち、ちが、これは！」

「う、う、っ！ゆうなーーーー！！ウチもバニーやるーーーー！！」

「亜子ーーーー！？！？」

「うん、アキラは大丈夫だな！」

解る方、いますか・・・・・・・・？

第29話 日常と（後書き）

どうもこんにちは足洗です。

今回、主に学園祭準備のあのどんちゃん騒ぎです。捻りも無く。．．．すみません。

オリジナルストーリーテラーの方が最近物凄いです．．．．．羨ましいです．．．．．妬ましいです．．．．．そして読みます．．．．．。

序盤については．．．．．まだ今少しお口チャックで．．．．．これこそ解る方いらっしやったらとんでもないですけど。

なんやかんや言いつつ、今回も読んでいただきありがとうございます！

第30話 今日も変わらず+おまけ

南の空に煌々と輝く太陽の下。

午前を占める四時限の授業を乗り越えて、眠気と気怠さからの解放を望む生徒達と頻りに喧しく空腹を訴えるお腹が大いに待ちに待った御昼ランチタイムの時間がやって来た。ところが、校舎内を響き渡る鐘の音が高らかにその訪れを告げる中、3年A組の教室にそんな憩いを堪能している様子はない。

「いやいや、貴重なお昼休みを削って学祭準備に励むなんて私ら生徒の鑑だねえ」

「削らな間に合えへんだけやん！」

のんびりと裁縫針を動かす裕奈の肩を亜子がペシリと一つ叩く。仮にツツコミの基礎教本などという奇物がこの世に存在していたなら二ページ目の目次題字の真下にその写真をデカデカと掲載出来得るそんな美しいフォームのド突きであった。と、アキラはひっそりと思いつつ床材の模様を模したカーペットに針を通していく。

ワイワイと少女達で賑わう教室内は不可思議な光景で満ちている。教室の其処彼処は持ち込まれた木材や裁断前の布・生地、それらを加工するための工具や各種小道具がひしめき足の踏み場も無い。そしてそれらを手にして作業に没頭する生徒らは、何故か一様に顔や服装へすでに加工を施していた。

猫の耳と口髭、狸の着ぐるみ、鬼の角、お岩の腫れ顔、キョンシー、吸血鬼などなど和洋折衷出来ているのか甚だ微妙ながら、唯一つそ

ここには『お化け』という曖昧模糊な一貫性があった。

先日開かれた『第一回麻帆良祭における3-Aの出し物を決めよう会』が混沌を描くだけに終わり、担任教師たるネギと悟空はこりやイカンとクラスの意見を再検討した。

そして四苦八苦右往左往七転八倒悲喜交々（ネギが）して厳正に厳正な思索を重ねた末、遂に3-Aの出し物はお化け屋敷と相成ったのだ。

「……………それにしても終わらないわねえ。縫っても縫ってもゴールどころか生地の間も見えてこないんだけど……………」

「そりゃ特大のシートお化けだもん。全長10メートル！総重量なんと一トン！どんなゴーストスイーパーだってイチコロな最強のブギーマンなんだから」

「これも幽霊ってより怪獣のほうがしっくりくるね」

「え、なにそのトンデモモンスター？あんたらお化け屋敷のコンセプト解っててやってるわよね？いやそもそもお化け屋敷ってなにか解ってるわよね？」

「アスナアスナ、驚かしたもん勝ちやし」

「お嬢様、多分それ驚きの種類違います」

飛び交う会話はトンチキなれど順調に準備は進んでいった。

「ねえねえねえ！これ見てこれ！新聞！」

「なになに？麻帆良スポーツじゃん」

「ええつと、『世界樹伝説に効果アリ』って」

「そうそう！世界樹の魔力であらゆる障害・困難を突破！年齢差とか外見アンバランスなんてぜんぶ無視してカップル成立だよお！
凄くないこれ！？」

「あゝ、それ聞いたことある。ウチのOGで教育実習生にアタック
掛けてOKもらったとか。それも三人」

「競争率激高の超美形男子GETした子もいるらしいよー」

「結構信憑性高いかも！」

「ウソ〜」

「でもほら、体験談みたいなのも載ってるよ。その後の関係も良好
だった！」

その年頃に相応しい話題にも事欠かず、己の作業など放り出して一
気に新聞へと群がる姦しい少女達。

前言の撤回に瞬きの間さえ要らぬ。それはもうめちゃんこ早かった。

「き、教育実習生って言うたら先生ってこと、やよね………？」

「くつくつくつ、そうそう。年の差なんてガン無視のカップルだつてえ。いや、良かったねえ、亜子。前例あるじゃん！もうこれ行くしかないじゃん！」

「うえっ!？」

「なになに!？もしかして亜子はもう相手決まってるの!？」

「女子校にいながらすでに男をモノに!？」

「そそそそんなことは!？」

「なんですと!？亜子！きりきり吐け！」

「吐くです！」

「いやあ~~~~!!？なんかウチこんなばっか!!？」

角を生やした鳴滝姉妹が亜子に飛び掛ったことで口火を切ったか、裕奈は当然、目を輝かせる桜子とそれに便乗する円らもまた亜子へと進攻した。そして素知らぬ振りで作業をしていながらも、少女達の多感な小耳は亜子の口から紡がれる言葉ゴシップを今か今かと食虫植物よろしく待ち構えている。なまじ強烈にその気配だけが亜子の体へと突き刺さってくるため、最早追い詰められた草食獣と同列の境地に亜子はいた。それは諦めとも言つ。

「そっか、亜子はもう心に決めた人がいるんだ………え

へへえ、私も……」

「学祭期間中の過密スケジュールがこれ程までに憎悪すべき怨敵となろうとは……ぐぬぬ、雪広あやか一生の不覚っ！！……ネギ先生……」

「……」

「？　どうかしたのか茶々丸？」

仄かな想いを抱いたり叫んだり馳せたりする乙女達。

「やっぱり、お夕食で釣る……誘う方がいいかしら？ふふふ、とっても食いしん坊さんだもの。ああでも、学祭と一緒に回るのも楽しそう。星空の下で既成事じ……お散歩するのも素敵ね　うふふふふ」

「……」

。 艶気のある柔らかな笑みを零す少女（の後ろでガタガタ震える夏美）

普段から乱闘乱舞お祭騒ぎ必至の教室内を何やら桃色の氣が立ち込めている。もうしばらく時間が経てばその内ありもしない睦言までも聞こえてくるのではあるまいか、と思えるほどに室内の空氣が甘つたるい。

巨大極まるシートへと針を通しながら、木乃香は不意に刹那を見詰めた。

「刹那さん落ち着きなさい……つたくもつ、このかが言いたいのはソッチ系の意味じゃなくて……」

「下着はかわええの選ばんとね」

「あるえ？」

麻帆良発行の週刊誌『麻帆良の歩き方・学園祭SP特集!』を眺めながら、木乃香はにこにこ顔で刹那に迫る。

「ほら、いきなり告白はあかんってここに書いてるしやっぱり学祭一緒に回るのがええんよ。お食事処満載やて！」

「ええつと、そのお、わ私はですね、わ、私なんかそんな……
・お、お誘いつしても、悟……さんには迷惑……だと思っわけ
でして……その……あの……だから……」

聞き取ることが非常に困難な声でごにごによと呟く刹那は、迫り来る木乃香の笑顔に対して為す術もなく、無力な小動物の如く怯えている。視線は四方八方を泳ぎ回り、何としても己が逃げ道を探し出そうと足掻く様は哀れを誘う。

とその時、刹那の視線に一人の少女が留まった。

ところで桜咲刹那という少女は戦闘に関する各種能力や戦場で得られる空気感などを一切除いた場合、急場を凌ぐためのボキャブラリーやアドリブ等の口舌は一般人のそれにさえ遠く及ばない。悪く言

え世間知らずの初心が服を着たような少女である。であるわけで、この一瞬の視線の交差と咄嗟に彼女の脳内に走った閃きは、或いは世紀の大偉業と言っても過言ではない奇跡なのであって、話題転嫁の贄として明日菜を犠牲に出来た刹那に罪は無いはずである。

「あ、明日菜さんの方は高畑先生とその後どうなのでしょう！？」

「ひとまずその白々しいモノログについて語り合わない刹那さん？」

「あゝ、そういえばアスナも。去年も一昨年も惨敗やったし、今年こそ頑張らなあかんえ」

「あるえ逃げられねえ！？」

晴れて逃れて、恋多き年頃の明日菜へと話題はシフトした。うろたえる明日菜を他所に木乃香と刹那は早速カタログへと目を落とす。

「あ、ほら。世界樹広場近くにお値段控えめのレストランやて」

「これなら中学生の懐にも優しいですね！」

「うーん、でもこの場合高畑先生が払ってくれるんが正しいのかな？」

「ああ、それもそうですね……うーん」

「ちよちよつと！？アンタら勝手に

」

「へへへ、成程な」

エスカレーターし続ける二人に明日菜が待ったを掛けようと身を乗り出したその時、三人が囲む机の中心に小さな影が躍り出る。

一瞬身を固くした明日菜はそれを視界に収めるやギョツとして目を瞬いた。

「なつ、ちよつとアンタ！？」

「あれ、カモ君や」

「話は聞かせてもらったぜ。お嬢さん方」

小さな二足でしかと机を踏み締め、直立して三人を見上げるオコジヨ。アルベール・カモミールはニヤケ面を引っさげて少女らの前に立った。

所変わって此処は麻帆良学園女子中等部の中庭である。

日に照らされて青々と光る芝生の上をさらさらとそよぐ風は温かく、鈴の音のように優しい音色を整然と生い茂った草木の枝葉が響かせる。そんな円形広場の外縁には等間隔にベンチが設えてあり、それぞれの弁当箱を持って昼食を摂る女子生徒達も多い。

昼休みの今、此処は少女らの楽しいげな笑声や話声に満ちている

「ほぐれ、あと30回だ！二人とも気張れ〜！」

「ふんっ、ぐう！！わかつとるわあ！！」

「はっいいい！！」

はずである。

中庭のほぼ中心。円形広場には男が一人立っている。山吹色の胴着を身に纏い、ツンツンと四方八方へ伸びた髪を揺らす男。言わずもがな悟空である。

そして今、悟空は芝生の上に立ち、張り付けにされたイエスよろしく両の腕を左右一杯に伸ばしていた。

「ほれほれ、だんだん顎が下がってきてっぞ？しっかり腕曲げろ」

「のおっ！ちよつやば、力入らん！？」

「あ、あはははははは！ふ、震えてます、すっごい震えてます僕！」

前述した通り、芝生の上に立っているのは孫悟空ただ一人である。

苦悶と奇怪な笑いを漏らす二人、小太郎とネギは、現在悟空の左腕と右腕それぞれにぶら下がっている。そして背中には何時ものように甲羅（40キログラム）がぶら下がっている。

悟空の腕を掴む手はそれぞれ一本。片腕のみを支えに、二人は只管『懸垂』に勤しんでいたのだった。

「よ、四百、九十つろおおく！四百九十う、七！」

「四百九十八つ！四、ひ百九十九！」

「よし！ラストー！」

「「いひやく！……」」

半ば絶叫にも似た掛け声と共に少年二人は悟空の腕から芝生へと落下した。落ちる勢いのまま仰向けにばたりと倒れ、ゼエゼエと喘ぐ

ように息を吸う。

無論甲羅は担いだままのため少々寝転がるには難儀しているが、今の二人にはそんなものを気に留められる程の余裕は無かった。二人の顔を屈んで悟空が覗き込む。

「すげえなあおめえ達。さっそく重しに慣れてきてんな。もうあと五百回くらいわけねえんじゃねえか？」

「はあっはあっお、おおよ。こないなことだな、はあ、へばるほど、はっ、や、やわな鍛え方、はあ、はあ………」

「こ、小太郎くん、はあ、わかつたから、今は休もうホントお願いだから、はあ、はあ………」

「ははは！冗談だって。よし、休憩すつか」

ポン、と一つ自身の膝を打って悟空は笑顔のまま立ち上ると、その両の手を少年らに差し出した。

「腹も減っちゃまったしよ！へへっ」

「んぐ、要は、ネギにしるコタローにしる今のままじゃどんだけ魔力とか気上げても、いろいろ限界があんだ。あむ」

「限界、ですか？はむっ」

「ほつふうほほは？」

芝生に広げた重箱を囲んでどっかりと座り込んだ三人はそれぞれ握り飯を頬張った。

薄く塩を塗して焼き海苔を巻いただけのシンプルなそれを片手に、もう一方の箸で以て鳥の唐揚げやら出汁巻き卵やらミニハンバーグやら弁当の品目として定番且つ絶品の品々を次々口の中へと放り込んでいく。

明らかに重箱の容積が一般的でない上、その総段数実に七段。軽く大人十人前はあろうそれらをしかし、少年二人と男一人はすでに三分の二程まで食い尽くしている。

「ところでよ、おめえらとオラの闘え方の違いってわかっか？」

「はふ？」

リスのように頬を膨らませ小太郎は首を傾げた。

一方、一瞬キョトンとして悟空の方を見たネギは不意に箸の手を止めて思索を走らせる。

「悟空さんの闘い方……？」

「ああ、解んねえか？」

「……はい、一体どんな？」

カタリと重箱の縁に箸を置き、ネギは居住いを心持正して悟空へ向き直った。

「そいつは、『強化』だ」

「え、なんでや。悟空かて強化ぐらい使とるやろ？」

「ああ、もちろんだ。でもよ、どうも見てとこっちの奴らは強化つてのにえれえこだわってる気がすんだ」

悟空は豚カツを口に放り込んだ。

「んぐぐ、んっだつてよ、修学旅行つてのに行つて、ネギとコタロ―が最初に闘つたときは確かネギがコテンパンにやられちまつたんだろ?」

「おお!そやそや。アスナの姉ちゃんの後ろ隠れてコソコソ情けない奴っちな―て最初思ててな。瞬動使たら案の定やった。いやあ弱かつたわ〜」

「何気に小太郎くんヒドイ……」

嬉々として声を上げる小太郎。

鬱々として縮こまるネギ。

笑う悟空。そして手羽先に齧り付いた。

「んで、その後ネギが自分に魔力供給つちゅうのを覚えてコタロ―をぶっ飛ばしたんだっけか?」

「はい!そうなんです!最初のうちは余裕ぶっこいてた小太郎くんを魔法で牽制しつつ接触からの雷系呪文で無力化して、最後なんかモコモコケモノになってましたけどちゃんとぶっ飛ばしました!」

「おどれも中々ええ性格しとるの……」

目を爛々と輝かせるネギ。

低い声で唸る小太郎。

不意に、小太郎が箸を置くとネギはすぐさま飛び退つた。小太郎も

その対面に躍り出る。

小太郎は自身の学ランを傍らに投げ捨て指の関節をボキボキと慣らした。

対するネギも、首のネクタイを引き抜きボタンを一つ二つと外す。近くの木に立て掛けてある杖へチラと視線を投げながら、小太郎の動きには逐一意識を向けている。

そんな俄かに睨み合い構えを取った二人を他所に、悟空はビシッと二人に箸を突き付けた。

そしてまた一つオニギリを手に取った。

「それだ。つまり鍵になってんのは強化、だろ？それが出来る出来ないで闘えるかどうかが決まっちゃうんだもんさ。あむ」

「「あ」」

「もひほん、んぐんぐつ、そうじゃねえ奴だっているぞ？マナあたりは気とか魔力とかほつとんど使ってねえけど強えかな。ま、ちつとは強化もしてんだろうけど」

対峙の構図はそのままに二人は記憶を巡らせた。

ネギが強化というものを意識したのは、仮契約を行った従者に対する魔力供給を知ってからである。それも初期のソレに関しては、我流の、『自身への魔力供給』という術式構築もへったくれもない突貫工事のような有様だった。

小太郎は、幼少時代から日々の修業の中で気というものをごく自然に『感じて』きた。そして意識し掌握出来てからは如何にして応用し活用するかという命題を常に、只管研鑽に明け暮れていた。

オニギリをぺろりと平らげると、悟空はあっけらかんとして笑った。

「それによ、ぶっちゃけちまうとオラがおめえ達くらい頃は『気』なんて何のことかさっぱりだったしな！」

「え？」

「はあ！？ちよつちよい待ちや悟空、んなアホな話があるかい！ア
ンタみたいな化けモンやつたらそらとんでもない気の使い手のはず
や！ちゆうか修学旅行ん時あないなモン見せといて何のことかさっ
ぱりってどないやねん！そないなモン俺らにどうせいっちゆうねん
おい！！」

「こ、小太郎くん落ち着いて！一旦落ち着こう！」

悟空へと掴みかからんばかりに「うがー」と迫る小太郎の腰に取り
付き、ネギは必死に小太郎を抑え込んだ。

「わりいわりい、言い方が拙かったな。気の修業をしてねえんじや
なくてよ、したのがおめえ達より後だってこった」

「は？」

「……………あ！そっか。神様の神殿でしたよね」

「おお、そっぴやそこまで見せてたっけか？」

「あ？神様？」

ネギはなるほどと言わんばかりにポンと自身の手を打って頷いた。支えを失い芝生へ落下した小太郎の頭部で疑問が回転を始める。

「空のように静かに、雷よりも速くつてな」

「心を無にする、ですよね！」

「ム？」

「ああ、ミスターポポと神様のお陰でやっとこさ気づってモンが何なのか解った。ものすげえ苦労したけどなあ」

「ぼぼ？」

「あははは。あ、でも、流石に全部は見てませんよ。神様の所どころな修業したんですか？」

「ん？そうだな。まずは釣りだな。それから鬼ごっこだ。そこでその後は……」

「釣り？鬼ごっこ？」

「おお、なんだか楽しそうですね」

「それがそうでもねえんだなあー。むっつかしいのなんのってよ。目隠したミスターポポに捕まっちゃった時はオラおったまげたぞ」

体全体でネギは興味津々を表現している。悟空の方も思い出話の懐かしさに溜々と物語を紡ぐ。

ほんの一時、話をせがむ子とそれに優しく応える父の朗らかな時間が流れた。

「……………このうの、のけモンって言うんやろつなあ……………
・はむ」

体育座りで背を向けて小太郎は暫しオニギリをはむはむしていた。そんな小太郎に二人が気付いたのはさらに数分後のことである。

「んでつまるとこ、悟空は何が言いたいんや？強化の修業に力入れる言つことかいな？」

復帰した小太郎とネギは再度定位置に戻ると揃って悟空を見た。

悟空はそんな小太郎の言に小さく首を振る。

「いいや、逆だ。オラと修業すつときは只管身体だけ鍛えるぞ！」

「え、悟空、それ言つとることめちゃくちやないか？」

「そんなことねえさ。どんなにでけえ力も扱いきれなきや無えのと一緒だ。ネギもコタローもそりやあ強えもん持つてるけどよ、今のままじゃ全力つてやつには程遠いぞ？特にネギ」

唐突に名指しされて一瞬キョトンとしたネギだったが、脳裏には即座に先の『雨の夜』が過ぎった。暴走。オーバードライブ潜在能力の飛躍的上昇。未熟な己では扱い得ぬ過ぎた力。

小太郎の方もそれに思い至ったのか、横目にチラとネギを捉えながら腕を組む。

「力に振り回されねえぐらい目一杯強え下地作って、まずは今のおめえ達の掛け値なしの『全力』を出せるようにする。んで、そんなこそその全力の壁を超える修業だ。近いうち、おめえ達には今の全力の二倍か三倍くらいにやなってもらうかな。覚悟しとけよ？」

「うっ、お、おお！望むところや！」

「が、頑張ります！」

へへへっ、とまたぞろ悪戯つぱく笑う悟空を前に、僅かに怯みながらも少年二人は力強く頷いて見せた。

そんな二人を嬉しそうに見た後、悟空は己の拳を握る。飽くなき向上心と未知数な成長。目の前の子供らと修業するのが楽しみで仕方ない。そして勿論、己の修業の行き着く先も。

限界という壁を打ち破らんと邁進する仲間を悟空は幾度目とも知らず今一度得られたのだ。

拳を天高く突き上げて悟空は声を張った。

「よし！明日からやるぞー！……！」

「おー！……！」

「あれ、そう言えば悟空さん。
師匠マスターが明日はお休みって言ってませ
んでした？」

「あり？そうだったっけか？」

「なんでやねん！……！」

おまけ

嘘予告「紅き翼に金色の羽を」

澄み渡る夜空は轟音と極光で満ち満ちていた。

照らし出され臙になった暗い空は、夥しいまでの『鯨』共、強力な砲塔を携えたヘラス帝国の巨大戦艦の群によって覆い隠されている。数十、或いは数百にまで及ぶ戦艦達には、それをさらに上回る数の魔法使いの兵士が追従し、それぞれが武器を手に手に、己が敵を倒さんと迫り来る。

地を踏み砕くは巨神の足音。

淡い光を発する巨軀がその頑強な腕を振るえば山が崩れ、長大な足を踏み立てれば人の身の丈など蟻も同じだった。

広大な森林地帯を数多の巨神兵が悠然と歩む様は正に壮観、その攻勢を一手に受ける対国においては圧倒的絶望を醸した。

白亜の巨塔へ『鯨』達がその砲を差し向けた。魔力で生成された幾重もの光の奔流が塔へと喰らい付かんばかりに襲い掛かる。しかし、魔力砲は敢無く、塔を目前にして唐突に掻き消えた。

『精霊砲、全弾消失！』

『広域魔力減衰現象を確認！』

『ちっ！黄昏の姫御子か！』

遙か高みに位置する塔の頂上で、数人の男共は慌しく、或いは恐怖して、柱の間から覗く戦場を見下ろす。
小さな少女は、ただ夜空を見ていた。

「術式の構築は!?!」

「ま、まだ、もうしばし掛かります!」

「ええいもたもたするな!急」

「ひいつ!?!」

怒声が響き渡る最中、巨神兵はそんな男共の焦燥など意にも介さず長大な腕を塔へと伸ばした。その威容に相応しい力が秘められた巨大すぎる掌は、弱者たる人間の原初の恐怖心を掻き立てる。

「う、うわぁあー!?!」

その叫びは誰のものだったか、それを契機に男達は一目散に逃げ出した。

鎖に繋がれた少女を一人残して。

その行為を責めることこそ酷なのだろう。所詮王族として政を生業としてきた、戦場を忌避する知識階級。インテリゲンチア逃げの一手は人としてとても正しいのだから。

そしてだからこそ、というわけでもなく、少女は初めからそれを恨めしいなんて思っていない。

ただ、頭上から振り下ろされる大岩の如き拳が自身の終わりを意味しているのだと、その感情の宿らぬ瞳で以って理解しているだけ。特段抱くものは無い。恐怖も、寂寥も、怒りも、哀しみも、どこかへ置き忘れてきてしまったのだろう。だから、これは絶望ですらない。

少女は淡々と『望みを絶った』。

轟音と光、そして衝撃。巨神は夜の森へと吹き飛んでいた。

絶ったはずの生は未だ此処に。色彩を欠いていた少女の瞳に、矢庭に色が映り込んだ。世間の中でさえ鮮やかで、冷たい夜気をも吹き飛ばす、暖かな山吹色の背中。

「ん？オツス！危なかつたなおめえ。ケガねえか？」

振り返って少女を見下ろすと、男は笑った。

石床へと着地した男は少女と向き合い、少女の小さな手を縛る鎖をまるで紐でも扱つるようにして千切り、少女の口元を流れる血をそつと拭う。

「ほれ、血い拭け。オラ今からあのデケエ奴の相手してくつからよ、おめえはここで待ってる」

多少乱暴に、男は少女の頭を撫で付けた。いかにも男くさく、無骨で粗野で無遠慮で、暖かい手。
立ち上がって早々に男は少女に背を向けて歩き出し
その場でピタリと止まった。

「そつだ！」

「？」

「なあ、おめえの名前、なんてんだ？」

一瞬、男の言葉を少女は判じかねた。

今正に目の前まで迫り来ている巨神を、戦艦群を、魔法使いの軍勢を無視してまで知れたがることなのかと。それでも男のまっすぐな瞳は、少女の言葉を自然に引き出させていた。

「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテ
オフユシア」

「うんと……アスナだな！うん、いい名前じゃねえか」

石床を蹴って男はふわりと夜空へ舞い上がる。そして瞬く間に白い
焰を身に纏い、地を震わせながら悠然と迫る巨人を前にして微塵の
怯みも揺るぎも見せず相対した。
ただただ少女は悟る。眼の前に在る本当の『強さ』を。

「おっ、そっぴや忘れてた」

その男は、不動の大山であり、静謐の大空であり、走駆する雷光で
あり、優しい太陽だった。

「オラ、孫悟空だ！」

最後に見上げた男の瞳は深い碧に煌めいて、世界は黄金に輝いてい
た。

戦乱と混沌が渦を巻く魔法世界に、一人の男が迷い込んだ。

「おい！お前！」

「ん？」

「てめえ一体何モンだ！？」

「オラか？オラは……………」

「……………ヘラス帝国の四個連隊をたったの一人で……………ナギ、この男は一体」

「まあなんでもいいや！お前、オレの仲間になれ！」

「いいぞ？」

「ですよね。そして貴方も即決ですか」

紅き翼と男は出会う。まるで必然を歩むが如く。

「オレはナギ！無敵の魔法使いナギ・スプリングフィールドだ！」

「近衛 詠春。剣士だ。このバカの事はあまり気にしないでくれ」

「んだと詠春！！やるかこのヤローああ！？」

「私はアルビレオ・イマ。出来ればそこのおバカ二人と一緒に数えないでいただければ幸いです」

「アルよ、多分手遅れじゃ。そしてワシはゼクトじゃ。よろしくの」

「ははは！おめえ達おもしれえな！オラ孫悟空だ！」

赤髪の少年ナギ。

神鳴流剣士詠春。

謎めいた微笑のアル。

幼くも老獪な教師ゼクト。

「要はこの戦争を止めりゃいいんだな？」

「ああ、そうだ。とりあえず悪い奴ら全員ボコリゃいいんだ！」

「わかった！いつくぞーナギ！！」

「先頭はオレだー！！」

「バカが二人になりましたね」

「まったくじゃの」

数多の戦場を駆け抜けて、瞬く間に彼らは、彼は伝説となってゆく。

「赤髪のがき、ナギ・スプリングフィールド。弱点無し。特徴は無敵。ふうくん」

「へへっ、なんだ？相手してやっても

」

「は？別に？本命はソン　ゴクウだしい。雑魚はしっしっ」

「.....」

「お？オラか？」

「超々要注意人物。山吹色の胴着で黒髪の男。『万一金に染まったら、諦める』。特徴『最強』」

「ちよい待てや筋肉ダルマ。おま、ちよっと顔貸せ。一発でノしてやっから。あ？」

「執こいんですけど。何？やんのかガキおいこらカスこら」

「てめえがカスじゃボケこらナス」

そして新たな敵『コスモエンテレケイア完全なる世界』との交戦。

「オツス、久しぶりだなガトウ。ん？誰だそいつ」

「ああ、ゴクウ。こちらはヘラス帝国第三皇女にあらせられる……」

「おお！おめえ角生えてんのか！すげえなあ〜！うりうり」

「うみやあ！？き、貴様何をするかー！？あぁっ、そ、そんな乱暴に、触っちゃ、やぁ……」

「おいしいい！？皇女殿下に何さらしとんだゴクウ！！？」

「ガトウ、キャラ崩れてますよ」

様々な出会いを繰り返し、様々な別れを過ぎ去って、男は世界を知っていく。

「オツス、ナギ。またアリカとでえーとってやつか？」

「うつせーよ……お前だっであのテオドラってちっこい姫さんと出掛けんだろが」

「ああ、まあな。すっかり女っちゅもんはどうしてこつ買もんが好きなんだろうな」

暗雲によつて閉ざされた空に黒い影を落とす巨大な王宮『墓守人の宮殿』

見上げたところで天頂を望むことなど出来ない。真下を覗き込んだところで大きすぎる釜の底は霞の向こうに消え入っている。

そんな巨大という形容すらも生ぬるい威容を背に、黒の異様

ライフメイカー
造物主　　が其処には在った。

在った、という言い回しに間違いは無い。それは断じて生物と言ふカテゴリに数えるべきモノではないのだから。その馬鹿馬鹿しいまでの存在感は、その禍々しいまでの圧倒的オーラは、何者の常識をも許容しない。

彼のジャック・ラカンでさえ絶対に勝てないと言わしめたモノを一体誰が、何が、止められるというのか。

その男は黒の存在を真正面から睨みつけていた。

一切の揺るぎ、一切の怖気、一切の迷いを断つた強力な眼光を、ただただ真直ぐに差し向けていた。

「へっ、おいおい。もしかしくなくてもゴクウの野郎、怒ってやがんな」

「ああ？こつからはオレが挽回してやるうって時に、あんにゃろつ」

「はあ？ボロボロの血まみれが何すつとぼけてんだ？」

「うつせーんだよ！てめえの方こそ腕ねえじゃねえか！何ソレカ
ツコいいの？カツコいいの？」

「あゝあん！？」

「おやおやこれは」

「ふむ、どうやら潮時かの」

「これで終わりか。ふう、やれやれだ……」

口々に漏れる軽口や戯言。

凡そ、生と死の天秤が死へと傾きかけた現状を前にした者らとはとても思えない奇態である。だがしかし、その言葉の数々には言いよ
うの無い確信が、答えが籠められている。

「おいこらゴクウ！！今日のところは譲るけどな、次の相手はこの
ナギ・スプリングフィールド様だ！！その黒子野郎ちゃっちゃんと
ぶっ飛ばしてオレに倒される！！！」

「バカがなんかほざいてるがてめえの次の相手はこのジャック・ラ
カんだ！！！！0勝249敗なんて笑えねえんだよ！！！！」

「ゴクウ！貴方の食費がとうとう経費で賄えなくなりました！その
分きちんと働いてくださいね！」

「のうゴクウ！また竜の肉捕ってきてくれんか！？あれ結構大ハマ

りじゃった!!」

「お前ら他に言つこと無いのか!？」

それはどうしようもない軽口で、どこまでも下らない戯言で、そしてはつきりただ一言「帰って来い」とほざいていた。

「ああ」

だから悟空も応えるのだ。そのただ一言に全てを籠めて。

目前では肉体を得た闇黒が全てを終わらせようとしている。その背後に聳え立つ神々しいまでの古城は、今の悟空にとって牢獄にしか見えなかった。

「アスナ、待つてる。こいつぶっ倒したらすぐ助けに行くかな」

囁きの中に満ちた優しさを囚われの少女は今も待ち焦がれている。再び自由を奪われながら、それでも希だけを胸にして。

『随分ト、舐メラレタモノダナ。高々人間風情ガ、コノ造物主ヲ前
二』

「.....」

声とさえ呼べぬ聲が、殺意が、空間を這い回る。何というおぞまし
さ、何という妖しさ、何という恐ろしさか。

悟空は小揺るぎともしない。ただ黙して対する敵を睨むのみ。

悟空の心は穏やかだった。表出することのない怒りは悟空の丹田の
内で刻々と凝縮され続け、今や、漣立つ海辺に佇むも同じだった。

そう、津波の前の凧。嵐の前の静けさの如く。

『貴様

！？』

造物主、始まりの魔法使い、あらゆる意味合いにおいてこの世に敵
など存在しない彼のモノは、その瞬間、はつきりと恐怖した。

「貴様だけは、絶対に許せねえ……！！」

『ホザケエエー……！！！！！！』

雄叫びにも似た絶叫、無数に広がる巨大な魔法陣、構築される死の
一撃達。

それらは唯一個の人間を、孫悟空を殺すために、消し去るために、
夥しい顎と化して喰らい付く。

嵐のような攻撃、否、最早それは災厄の群だ。滅ぼすことだけが存
在の理由。殺戮の焰は悟空の身体を

世界を救った英雄は世界を救う英雄達に出会った。
ならば、世界を救うしかないだろう。

アラルプラに一枚だけ生えたアラアウレウスの羽

これはそんな、一つのハチャメチャな物語。

第30話 今日も変わらず+おまけ(後書き)

本当に本当に本当にお久しぶりです。こんにちは足洗です……。いや〜三ヶ月って案外さらっと流れて行きますよね。改めて年をとったんだな〜って実感しました……。いやすみませんごめんなさい申し訳ありません……。

阿呆ちゃうんかかね、何をしとんねんと。心境は罵詈雑言なんでもバツチ来い！って感じですよ……。本当に有難い御催促のメッセ―ジをいただけで狂喜すると同時に冷や汗を流す日々でした……。ただ一言だけ言い訳を許していただけなら、一人暮らしは大変です。そしてパソコンは便利です。あ、二言ですすみません。

今回、大して話が進行するでもなくだらだらと原作進行に終始します……。このままだと兄責は何時出せるのっげふん。

紅き翼さんとの嘘予告的なものも書きなぐってしまいました……。お目汚し平に謝罪です。

ひとえに楽しんでいただけたならこれ以上の幸いはありません。言い訳ばかりの後書きですが、お読みくださり本当にありがとうございました！

第31話 兆し（前書き）

……何を言っても言い訳にしかありません。

ただただご催促のご感想がありがたく、申し訳なくありました。

一向手前勝手な言い分ではありませんが、不肖足洗、これからも執筆活動を続けさせていただく所存です。不遜な物言いここに極まりませんが、どうかこれからよろしくお願い致します。

閲覧してくださる方々、度々のご感想をくださる方々、本当にありがとうございます！

第31話 兆し

ふと視線を上げれば、そこには青空が広がっている。

不純物を一切排した澄明な空気によって、この空の蒼はどんな空よりも鮮烈であった。

澄み切った蒼のキャンパスにはいとも煌びやかに太陽が輝いている。

柔らかな白色で染まった球形は、しかしその色合いに比して、焼け付くような鋭い陽光を幾条も放っていた。

爽快の晴天の下、あたかも雄大に、蒼海が広がっている。

穏やかに上下する波は静かに静かに、決して崩すことないリズムを刻んだ。

無限と見紛う大海の中、小さな島がポツリと浮かんでいる。

白い砂と僅かな熱帯植物が点々と生えるばかり、歩けば一日と掛からず踏破してしまえる陸地面積の、そんな寂れた小島には

天高く、白亜の塔が聳^{そび}え建っていた。

風が一陣、山吹色の男を薙いだ。

叩くという程の乱暴さは無く、さりとして撫ぜる程の優しさもそこには無い。陽光の暖かさは裏腹な、塔の頂上、高所特有の冷たい風が胴着の隙間からするりと入り込み、男の身体を引き締め、掛か

る。

極限まで無駄を削ぎ落とし、極限を目指して鍛え上げた肉体は正しく鋼と呼ぶに相応しい。何モノの膂力をも凌駕する四肢、何モノの攻勢をも撥ね退ける軀カラダ。それら掛け値無しカマタの物質的剛ツヨクさを備えた身体は、今この時、超常的『ちから』によって無上の強さを纏おうとしている。

「すう……」

穏やかな呼吸。一吸い毎に丹田にて氣を練り上げ、一吐き毎に練成した氣を“全身”へ張り巡らせる。

「……」

例えば“全身”という言葉を果たして人は如何様に認識するだろうか。

各種器官を備えた胴体、そこから伸びる二対の手足と凡そ二十の指、そして首で連結した頭。

ごく一般的な思考の末に導き出されるのは、おそらくそのような回答なのだろう。

故に、この『行為』に対してその認識は圧倒的に不足である。

“一般的”、“常識的”、“普遍的”。そんな世界に在る限り、その境地には至れない。

彼の『業』は、体内を絶えず循環する氣の流動を完全無欠に、全

身全靈に、心血精魂に至るまで、掌握し支配し制御し尽くさねばならないのだ。それは前述の身体部位に始まり、内臓から表皮、血流指先に生えた爪の一片は当然、頭髮一本の先端とて例外ではない。

「……ふっ」

短く浅く、そしていとも軽く、ただ一瞬の呼気と共に男は「ちから」を解き放った。それは風と成り、或いは熱と成り、時に炎の烈波と成って塔の頂を吹き荒れる。

白の石畳はその石塊一つ一つが整然と、それでいて頑強に組み上げられている。円形広場の外縁に沿って並び建つ石柱群は言わずもがな、天を衝くこの白亜の塔そのものが“特殊な”建築構成と補強手段により大嵐や大地震程度ならば容易に凌ぎ切る耐久性を持つ。今、その塔が震えているのだ。たった一人の力によって。

生物、無生物を問わず、万物に氣は宿っている。人間の身体はその最たるモノだ。

ならばこれこそ、人が為す事の出来る究極の一と、そう呼べるのやもしれない。

「……うっし、準備できたな。んじゃ、よく見とけよ。こいつが」

握り締めた拳を腰元へ下ろし、徐に男は目を瞑る。同時に嵐のようだった氣の奔流もまた、海辺の風が如く一拳に吹き止んだ。それがほんの一時訪れた仮初の静けさに過ぎないことは、この場に居合

わせた誰も理解している。

引き絞られた弓のように、引鉄トリガーに指を掛けた拳銃のように、噴火
寸前の活火山のように、強大極まる力が猛り狂う。

そして

「界王拳だ！」

深紅が塔を染め上げた。

「3秒だ」

開口一番、その細い腕を胸の前で組み合わせながら、エヴァンジ
エリンは言い放った。

彼女の、足元にまで届く長い金糸の髪は、不意に訪れた風に梳か

れてはらはらと舞った。極上の絹と見紛う美しい髪が、ひどく柔く優しげに、エヴァの白い頬を撫ぜる。対して、その大きな瞳は極寒の凍て付きを見せていた。

「ああ、もうちっと持たさなきゃな」

「持たせ過ぎだ、バカ」

如何にも暢気な声、言葉をぴしゃりと斬り捨ててエヴァは傍らに佇む男を見上げた。

山吹色の胴着と紺のアンダーシャツ、同色の帯とリストバンド、ブーツにも似た変わった靴、ツンツンと四方八方へ伸びる黒髪。口元には上機嫌な笑みを浮かべ、孫悟空は己の頭をわしゃわしゃと掻いた。

「そうか？今のネギとコタローなら並の奴じゃ相手になんねえ。オラ相手でもまだまだ食い付いてこれんだろ」

「……どうもお前は、苛酷なようでその実ガキ共には甘いらしいな。お前がその気なら今の交戦、一刹那といらんだろっに」

「いやあ、それじゃ修業になんねえだろ？やっぱ最初は向こうから仕掛けさせてよ、どんな風に攻められっか見極めさせねえと」

悟空のそんな言葉に、エヴァはギロリと睨みを寄越すことので応えた。

「実戦で、お前は敵にそんな親切心を期待するのか？」

「そんなことねえさ。げんに二人ともこうしてやられちまつてるしな。ネギもコタローも自分で解ってたんだ。このままじゃいけねえつてよ」

「……ふん、どうだかな」

一向崩れない悟空の飄然とした様に、エヴァは小さな溜息を吐く。大雑把なようできて、時折垣間見せる子供達への真摯な理解。本人からして子供のような悟空なのに、時としてエヴァ以上の老獪さを見せる。

「変なヤツめ」

「ん？なんか言ったか、エヴァ？」

「いいや……」

キョトンと小首を傾げる悟空を見てエヴァは微かに笑みを零す。まずまず以て意味が解らない悟空は頭上で疑問符を回すばかり。暫しの間、鈴を転がすようにコロコロと、エヴァは笑っていた。

「ふうっ。さて、今日のところはこれまでだ。餓鬼共コイツらの治療に、別こ

「莊の修復と……ああ、メンドーだ」

「お、そうか？そんなら、オラはもうちょい残って修業」

「アホか！七時間以上ぶつ通して使いおつてつ。外はもう朝だ！それとも何か？お前はここを破壊し尽くすまで止まらんのか！？」

「わ、分かっている分かってるって！半分くらいジョーダンだからよ」

「お前をして半分なら上出来だ！……まったく」

再度腕を組み直してエヴァは今度こそ盛大な溜息を吐いた。驚きと怒りを通り越し、呆れでその皮肉にも鋭さが欠けた。

悟空の方も頬を掻きながらばつが悪そうに苦笑う。

「……もういい。そろ、さっさと行くぞ」

「ああ」

そう言つと、ふわりと髪を靡かせてエヴァは早々に悟空達へ背を向けた。

頷き応えを返しながら、悟空は至る所に罅を刻んだ石床を、そこへ大の字になって横たわる二人を見やる。

所々が薄汚れた白地のタンクトップシャツ、黒い学生ズボンには破れ穴に酷い痛みが見える。犬歯が覗く口の端からは涎が一筋垂れていた。

激しい戦闘ついでうの為の比較的ラフなTシャツと短パンは、やはり薄汚れ穴破れ痛みが目立つ。床には鼻からずれ落ちた小さな眼鏡がぼつねんと転がっていた。

両者共に身体は汗でどろどろで、切り傷擦り傷打撲は当たり前、氣も魔力も勿論体力など最早空である。ただ一様に、氣を失い、くたりと力無く眠る表情は、ひどく満足げなだった。

「へへっ」

くしゃくしゃと如何にも乱暴に、悟空はネギとコタローの頭を撫で付ける。思わず零れた笑みは、どこまでも嬉しげだった。

コタローは肩に担ぎ、ネギは小脇に抱え上げ、そうして悟空はエヴァの後を追った。

「あ、悟空先生こっちこっち」

「うん？どこか？」

「ああ違う！もうちよい右いじゃなくて左！そんでまっすぐ！」

「左で、まっすぐ…：こつか？」

「ネギくん！そのフェルト貸して！」

「あ、はい。この赤いのですよね？」

「そうそう。お礼はいつか体で返すから」

「ふえ！？」

今日も今日とて、麻帆良学園女子中等部校舎、取り分け3年A組の教室は賑わいを見せていた。

学園祭を近日に控えいよいよ出店準備も架橋を迎えようとしている現在、当然ながら教室内はてんやわんやである。机と椅子を運び出してスペースを確保したはずの室内は作業用具や材木が散乱、蔓延、時々集積され、作り掛けの看板やら妖怪の仮面やらの破片らしきものが各所に点在して足の踏み場も無い始末。

昼休みや放課後はもとより、授業の合間にある僅かな休憩時間さ

えも余さず活用して作業に従事する生徒達の熱意は、確かに十分賞賛に値するものだった。

がしかし、そんなある種妥協しない彼女らの信条は、時に人を巻き込んでしまったりする。

「いやあ、悟空先生って物凄い力持ちだよ〜。ホントに地球の人？」

「おお、オラ地球育ちだぞ」

窓の外からは赤々と西日が射し込み、教室を鮮やかな茜に染め上げている。授業終了後のホームルームも終えて、各クラスの生徒達が学祭準備に本腰を入れ始める放課後。

教員であるネギと悟空は、何故か未だに教室で居残っていた。と、いつか扱き使われていた。

裕奈の冗句に割とマジで答えながら、悟空はゆつくりと“門扉”を所定の位置へ下ろす。所々に悪魔や妖怪、モンスターなど、お化け屋敷的要素が設けられ、質感やデザインのリアリティは素人仕事とは思えぬ出来栄えの入口門。

高さは悟空の身の丈を超えて天井に届き、横幅に至っては教室の幅とそう大差が無い。総重量は見かけ程でないにしろ、使用した材木や粘土類等の多さを加味して、一人が“ひよい”と持ち上げられる代物でないことは確かである。

「アツハハハ！そりゃそうだよねえ。私実は先生って宇宙人なんじゃないかと思ってたよ〜」

「いや、こんな人間味溢れる宇宙人普通じゃないでしょ」

「マジで！？悟空せんせって宇宙人なの！？UFO乗ったことある！？」

「宇宙先生です〜！」

「ゆーほーってのはねえなあ。丸っこくてちっこいやつならあるぞ？」

桜子が如何にも屈託無く笑い、円がツツコミ、鳴滝姉妹は目を輝かせた。

そうこうする間にも、悟空は次なる看板を持ち上げては運搬に当たっている。頭を使わない単純作業故か、それとも幼少時代に従事した土木建設の経験の賜物か、割と手際良く悟空は仕事をこなしてゆく。

同じく、教室の隅ではネギが壁板にペンキで色を塗っていた。傍らで共に作業するまき絵は実にも上機嫌な笑顔を見せた。

「あはは、一応僕先生なんですけど……」

「えへへへ、ありがとうネギ君！すっごく助かってるよ〜！」

「ああ、申し訳ありませんネギ先生。このようにお手を煩わせてしまうなんて……そもそも！始めからきちんと作業計画を立てていればこのようなことにはならなかったでしょう！？」

「まあまあいいんちよ。なっちゃったもんは仕方ないって。でもこのままだと、たぶん今日も徹夜かな」

「……おい、何徹目だこれ。ワーカーホリックってレベルじゃねえぞ……」

ハルナの言葉に千雨はどんよりと頭を抱えた。

内装用の建材をあらかじめ運び終えた悟空は、作業の邪魔にならぬよう教室の隅に腰を落ち着けた。

今現在、被り物や各自が身に付ける装飾品等の細かな製作作業が主立って進められている為、悟空に手伝うことの出来る仕事が無いのだ（悟空に繊細な作業が務まらないという事実は皆暗黙の内に了解している）。

不意に手持ち無沙汰となってしまう、悟空は少々暇を持て余した。

「アスナ見て見て！赤鬼のお面出来たよ！超リアルだよ！特殊メイクもびっくりだよ！」

「……で？なにが言いたいのかしら美空さん……」

「はい！絶対似合うから！」

「よしその喧嘩買ったあ！……！」

「ユエ、卒塔婆の文字ってこれでいいのかな？」

「そうですね…宗派によって細部に違いはありますが、主には戒名、帰依する仏の名と種子しゆじ、梵字などを書き記します。戒名とは本来師に就いて仏道を修めようとする者が三帰戒、三帰五戒、十善戒など己に対する戒めを宣誓する意味合いが強いのです。戒名という呼称自体、もっと細かな分類がなされ、法名、或いは法偉と呼ばわる宗派もあるです。死者に対する供養は勿論、仏道においては僧となる者が最初に通る仏事と言えるやもしれません。当然ですが非常に重要な行為ですから、おいそれと簡単に書き殴ってしまつてよいものではありませんです。いいですかのどか、まず一番上に記すこの梵字は

「『ネギくんLOVELOVE愛してる』つと」

「ハルナアアアアアア!?!」

「クギミー、私思うんだ。最近のモンスターは古いつて!」

「クギミー言うな。何?桜子、藪から棒に」

「そうねえ、確かに使い古された感はあるかな。最近妖怪を取り扱う漫画ってよく見るし、西洋モノだと吸血鬼とか多いよね」

「だから私考えました。じゃん!狼男ならぬ大猿男!満月を見ると巨大なお猿さんに変身します!弱点は尻尾ね!」

暫時、何をしてもなく悟空は作業に没頭する楽しげな生徒達の姿を眺めていた。

「あ、悟空さん」

「お、ネギ」

唐突に、忘我に在った悟空の意識が浮上する。悟空が見上げた先にはネギの姿があった。

スーツの上着は脱いで、ワイシャツの袖を肘まで捲り上げている。所々ペンキのインクが付いた腕や手を気にしながら、トコトコとネギは悟空の元へ歩み寄った。

「ペンキ塗り、終わったんか？」

「はい、内装用の壁は全部。キグルミとか衣装が出来上がった後は組み立てただけだそうです！」

「そっか。お疲れさん」

「はい！悟空さんも。……本当は、僕らが手伝ったりしない方がいいんですけどね。あははは」

「まあ、いいんじゃないかねえか？皆楽しそうだしよ」

胡坐を掻く悟空の隣に、体育座りのネギがちょこんと並ぶ。窓際の壁に寄りかかりながら、二人は今一度喧騒に耳を傾けた。

ふと、悟空はネギの顔を見やる。

「ははは、そっぴやおめえケガだらけだなあ」

「え？」

悟空の言に一瞬キョトンと首を傾げるネギ。そしてすぐに自身の今の有様を思い出して苦笑いを浮かべた。

ネギの頬や額を覆う多くの絆創膏。捲った袖口からは白い包帯が覗き、見えない服の下にも細かな傷が残っていることを悟空は知っている。

途端にネギは、ひどく照れ臭そうに頭を掻いた。

「あはは……まだまだ修業が足りません。小太郎くん悔しがってましたねー。今朝だって結局、僕ら一度も悟空さんに打ち込めませんでしたし。アスナさんにもまた怒られちゃいました」

「大丈夫だ。たぶんその内オラも怒られっぞ」

「えっと、それ大丈夫って言えるんですか？」

「誰かと一緒に怒られる方がよくねえか？なんとなく」

「ああ…それもそうですね」

西日はいよいよその赤みを増して、教室の風景は何処か朧げで、水彩画のように何処か淡い。益体のない会話もまた後押ししてか、うたた寝の夢のように、時間はひどくゆっくりと流れゆく。

だからネギは、己の頭に乗せられた掌をいとも自然に受け止めていた。

くしゃくしゃと撫でる無骨な感触。突然に、いつの間にか、手に入れていた欲しかった暖かさ。

「今はまだ解んねえかもしれねえ。けど、おめえ達は強くなってる。最初会った時とは比べもんになんねえくらい、ずううつとな」

「……」

「だからよ、ちゃんと胸張って、自信持て！」

「……えへへ」

嘘偽りの無いまっさらな笑顔を悟空は見せた。

嬉しさと照れ臭さをない交ぜにして、そしてやっぱり嬉しくて、ネギもまた笑った。

茜色の逆光の中、大小二つのシルエットは、いつまでも長く穏やかに伸びていた

「ところでネギ君！！学祭でね新体操部のエキシビジョンやるんだ！！よかつたら見に来て」

「あつ！こらまき絵さん抜け駆けを！？ネギ先生！乗馬部の乗馬イベントにも是非お越し下さいな」

「ネギせんせー！！さんぽ部の学園一周さんぽイベントだよー！！」

「悟空せんせーも来るです！！絶対絶対楽しいですから！！」

「我が弟子、そして悟空さん！中武研の演武会に来るヨロシ！進入部員達にネギ坊主の套路（ぶつてい）を見せたいアル！それで悟空さんの亀仙流も是非披露して欲しいネ！」

「お？お？」

「え！？その、あのっ、あわわわ！？」

優しさで微かな哀愁に満ちた空気は一切の迷いも無く突き破られ完膚無く破壊された。

一番手はまき絵だった。すかさず、断じて遅れてなるものかと二番手にあやかが続く。さらに便乗して鳴滝姉妹。至って真剣なだけに余計性質が悪い古菲（クフエイ）が締めに加わる。

それが契機とばかりに、少女達は各々の携わる出展のチケットやパンフレット手に手に悟空とネギを取り囲んだ。一時遠退いていた喧騒が再び二人を包み込むには、瞬く間さえ要らなかった。

「ネギく〜ん！私達学祭でライブイベントやるんだー」

「はい、だから先生見に来てよ！」

「あ、ハイ！どうも」

桜子、円、美砂のチア三人娘に囲まれて戸惑いながらも、ネギはチケットを受け取った。

「悟空先生、天文部でプラネタリウムの鑑賞会を開くことになったんです。もしご都合がよければ」

「おお。サンキュー、チズル。うーんと、ぶらねた??」

「あらあら。じゃあ今度“じ・っ・く・り・と”お教えしますわ」

「ええっとお暇でしたら演劇部もついでにどうぞ……」

何処までも朗らかに柔らかに微笑む千鶴と、その背後からおずおずと顔を出す夏美。

「占い研で占いの館いつの開いてるから、よかつたら二人とも来てや〜。ウチが占ったげるえ〜」

「あんたら空気読め!……って言いたいとこだけど。はい、美術部の展示会資料。ま、時間あったらでいいわよ」

お料理研のお食事が……

「ぜってえ行くぞ!……!」

はい お待ちしてます。

「分かりやすいわねえ……」

悟空の豪く気合の入った返事に一同は大いに呆れ、たちまちに笑声が満ちた。賑やかさに溢れかえる3-Aにとっては逢魔ヶ刻の物寂しさなどあつて無きが如しなのである。

互いに横目で視線を交わしながら、悟空とネギはもう一度ニカリと笑い合った。

その時、冷めやらぬ騒々しさの中、タイミングを見計らつて裕奈とハルナが群集から並び出る。

「さあ！ここからまた泊り込みで頑張るよ！……学校側には内緒なんで、一旦解散の後忍び込みます！……一同静かに元気よく張り切つていこー！……」

『『『オオー！ー！ー！……』』』

「そしてなんと！今回夜食が出ます！提供は超包子オーナーチャオハオスの超！チャオ」

「うむ、頑張つてる皆にご褒美ネ」

『『『イエエ〜〜イ！ー！ー！……』』』

「同級の好みダ。一人二百円に負けるヨ！」

「金とんのかい！？」

「どこまでもビジネスライクだよこの子!？」

「チャオのケチ〜!!」

締め切り間際の漫画家よろしく忙しない雰囲気のままに作業は急ピッチで進んでいく。

それでも、天性のお気楽根性に裏打ちされたテンションの高さと迸る若さ故のなんとやらで、楽しげで騒がしく笑い声を飛ばしながら和気あいあいと、夜の帳は少しずつ下りていった。

「ああ、そうダ。悟空先生」

「うん？」

ぞろぞろと教室を後にする生徒達の波の中、ふと足を止める者が一人。

扉を抜けるほんの直前、超は悟空へと振り返った。頭のサイドで二つに纏めたシニヨン、そこから一房ずつ伸びた黒のおさげ髪がふわりと揺れる。

口元には微笑。何処か悪戯の気色を映す大きな瞳が、柔く悟空を

ない闇黒が見渡す限りを覆い尽くす。

ただ一滴、水面にぽつりと浮かぶかのように、影を纏った月が煌々と世界を見下ろしている。

こつこつ、こつこつ。

人の姿が絶えた石畳の道を、いやに五月蠅く響き渡る靴音が二つ。昼間の大喧騒を知る者が見れば寂寥さえ醸してしまえる程に、この通りは今、ひどく閑散としていた。

夜風に棚引く街路樹は、この夜闇の中では枝葉の青さを見ることがも叶わず、全身を闇で塗り固め、まるで立ち枯れているかのようだ。唯一の灯りである街灯も、遠く疎らに光を落とすばかりで、むしろ欧風ガス灯のような凝ったデザインは見る者の不安感を掻き立てた。

「……時々思うヨ。夜の麻帆良はほんのちよとだけ不気味ダ」

「そうか？オラは見るもん全部が物珍しいんで、あんましそんな風に思ったことねえなあ」

「ふふふつ、悟空さんはどんな場所だって“怖い”とは思わないヨ。げんに今、私全くぜんぜん怖くないネ」

また一つ、街灯^{ヒカリ}を潜る。

超は口元に手をやりながらくすくすと笑い、次いで隣を歩く大きな影を見やった。

「いやいや。それよりもすまなかつたヨ、悟空先生」

「別にオラ構わねえぞ？チャオ一人じゃ流石にこりゃ重てえだろ」

そう言つて、悟空は今現在両手で抱えている箱を示した。

一抱え程の大きさはあるうプラスチック製配膳ケースが五つ、縦に積み上げられている。中身は3・Aの夜食用に用意された箱一杯の肉まんや餡まんだった。

「うむ。か弱い乙女の細腕では中々に厳しい話だ。本当に助かったヨ」

「？ いや、超の腕も中々だと思つぞ？」

「アハハ、ここは素直に謝ありがとうと言つべきなの力？」

先程よりも幾分乾いた笑みを超は漏らす。気持ち、悟空のキョトン顔をジトーっと見詰めているように見えるのは気の所為、でもない。

超包子から女子中等部校舎までの移動にさほどの時間は必要ない。精々が数分と、登下校時に生徒達が利用するには打って付けの立地と言える（そもそもが路面電車を店舗として利用しているので、無関係と言えばそれまでだが）。

束の間の静かな散歩。暫し言葉も無く、悟空と超は歩き続けた。

虫の音も、風鳴りも、人の気配も、遙か遠くへ置き去りに。静寂の空気に満ちた夜の道は、常よりも幾分長く伸びていく。

「悟空さんは」

「ん？」

声は、口をついて出た途端夜気に飲み込まれ、霞のような響きだけを残す。

それでも地を蹴る靴の音は、鋭く耳朵に突き刺さった。

「闘うことが好きだと、前にそう言ってたネ」

「？ ああ、そうだな。強えヤツと闘う時はいつもワクワクすんだ！」

一瞬、問いの意味を判じかねて首を傾げた悟空は、しかしすぐさま子供のような笑顔を浮かべる。

それに、超は苦笑で応えた。

「『我只要和強者闘』カ。ははっ、そう言えば昔古クもそんな顔をして笑ってたヨ。悟空さんが現れてからは特に。毎日掛かってくる挑戦者にも何処か満足してなかったようだが、最近はとても楽しそうネ」

「ははは、そっか。近頃はネギとコタローの修業であんまし相手してやれねえけど、いつかクーとも真っ正面から勝負がしてえなあ」

「うむ、それを聞けば、古もさぞ喜ぶだろう」

不意に古菲の名が出た所為か、空気が緩みを取り戻した。かの少女の天真爛漫な様子を、或いは多少抜けている性格を、想像に上らせ
ては笑みを零す。

まるで思い出を懐かしむように、超はそっと目を閉じていた。

「……………」

そしてまた、長い沈黙が降りた。

耳に痛い程の静寂の中、一つの靴音が俄かに速まる。超は背を向
けたまま、悟空の目の前に立った。

「超？」

「なあ、悟空さん」

訝しむ悟空の声を無視して、超は悟空の名を呼んだ。それは問い
の続き、答えの催促、懇願のようでもあった。

「貴方は、強い。とてもとても。この学園で……いや、“この世界
”で並ぶ者などいない程に」

「！」

「貴方は、力ある者だ。だから、私は貴方に問いたい」

悟空の表情が驚きが変わる。しかし超は取り合わない。

何時の間にか、鳴り止んでいた風が二人の間を吹き抜けていた。
冷たく乾いた夜の風。

「思いを通す為に、幾多の闘いに自ら身を投じた、貴方に」

騒騒、木々が揺れる。葉音を響かせ、人を掻き立てる。

音も無く少女は振り返る。何の気負いも抱かぬ、真直ぐな瞳で悟
空を見据える。

「未来を変える為に、闘うことは罪だろうか？」

一際強く、風が唸りを上げた。

騒騒と、轟轟と、夜気を震わせ男と少女を包み込む。

そして、男は、少女に答えを差し出した

第31話 兆し（後書き）

見苦しい言い訳はせめてあとがきで……というのも失礼なお話ですね……。

本当にお久しぶりですそしてすいまつせんでした！！

大仰なまえがきを書きましたが、前述通りこれからも執筆を続けさせていただきたく思っています。

遅筆遅筆と連呼してましたが、ここまでくるとホントにもう……地震の影響をご心配くださる方々までいらっしやっ……。地震の影響は本当にまったくございません。そして本当にすみません。いえ、いややっばすみません。

今回やっつとこ、学園祭に絡んだお話を書けた気がします。思えば超と絡む場面がほとんどないという……ひとえに私の采配の弩下手さ故ですね。

更新速度は、やはりまちまちになりがちです……ただ、それでもながしかの完結を見るまでは止める心算は絶対ありません。待っていただける今の状況に無礼にも胡坐を掻くばかり、本当にありがたく、そして申し訳ありません。

では、長々と書き連ねましたが、読んでいただき本当にありがとうございました。

第32話 世界樹（前書き）

ぐおおおお、話が進まない……！

第32話 世界樹

東の空から悠然と、朝陽が顔を出した。

幾条もの陽光が麻帆良学園へと降り注ぎ、眩いほどに白く白く女子中等部校舎を彩っている。

窓から差し込む日の光を受けて、山吹色の胴着が輝く。悟空は目一杯に伸びをしながら、数多の化生で飾られた扉を仰いだ。

「ん〜！ やつとこさ完成したぞ〜！」

『『『おお〜〜〜！』『』『』』』』

「ま、外見^{そとみ}だけなんだけどよ」

「ですね」

そしてさらりと無情な現実を口にする悟空と夕映。

便乗して勝鬨を上げた生徒らは堪らず床に膝を付いた。

朝も早くから教室の中で、或いは外の廊下で、忙しげに走り回る多くの生徒達。とうとう麻帆良祭を前日に控えた今日は、どのクラスもどの部活・サークル団体も追い込みを掛けている。出店準備の完成は勿論のことながら、ほとんどの人間にとっては待ちに待った祭の日を全力で楽しみたいというのが本音なのだが。だからこそより完成度の高いものを作り上げ、またその完成度の高いものを存分に享受する。

何事にも一切手を抜かない麻帆良の人々のポテンシャルは、事お祭騒ぎを行うに際して天才的でさえあった。

3 - Aの出店であるお化け屋敷も残す所は内装工事だけとなり、生徒達の多くはめいめいの部活やサークルの出店準備を手伝う為、教室を後にしていた。

元気に駆け去る生徒達に手を振りつつ、ネギは傍らの悟空へ小首を傾げる。

「暫くは教員もこれといったお仕事がありませんし……これからどうしましょうか？」

「うん？そつだなあ……」

ぐるうづごがあああああ 腹の虫である

「とりあえず腹ごしらえだな」

「アハハハ……」

「あいつかわらず物凄い音ねえ……それ、お化け屋敷こわの音響効果で使えるんじゃない？」

「手伝ってくれてありがとね〜二人とも」

「お疲れ様です。ネギ先生、悟空さん」

神妙な顔で腹をさする悟空を苦笑うネギに明日菜が加わり、次いで木乃香と刹那が続いた。

「よっ、お疲れさん。おめえ達も一緒に飯行くか？」

「あー、アタシはパス。美術部の出展仕上げなきゃなんないのよね」

「あちゃ、ウチも占い研で準備せなあかん……仕方ないね。いつてらっしゃいせっちゃん!」

「えっ?あ、はい!行って参ります!」

いやに気合の入った応酬はさて置き、悟空達一行は大いに賑やかな校内を抜けて玄関口へ。まだまだ早朝の冷涼な空気に身を晒しながら、これまた盛況を見せる大通りに出た。

和装洋装は基より、鎧武者や騎士甲冑、サーカス団、赤リボン軍団、キグルミは一般的な動物から、ロボット、妖怪、怪獣、怪物、

界王、怪人、拳句アミーバ状の何かに、巨大恐竜、触覚の生えた緑色の宇宙人などなど……統一性など欠片もなく、学園全体が異世界の様相を醸している。

「は、麻帆良全部がえれえことになってんなあ」

「はい、なんだかハチャメチャなことになってますね」

「アハハ、上級生の力の入れようは毎年凄いですから……」

「悟空さんもネギくんもいつつぱい！楽しんでな」

「祭っていつでも、あんまりはしゃいでケガとかするんじゃないわよ？……」

目を輝かせる子供“二人”にしつかり釘を刺すと、明日菜は石造りの道を小走りに駆け出す。

「さてつと、それじゃあ私もう行くわね」

「おお。コノカもだっけか？」

「うん、ウチも。ほいじゃ三人とも、また夜に会おう！」

明日菜の後を追うように木乃香もまたローラーブレードを滑走させる。手を振りながら二人は人混みの中へ消えていった。

明日菜と木乃香を見送ると、悟空は待ってましたとばかりに自身の腹を一つぽんと打つ。

「うっし！そんなじゃさっそく飯食いに行くぞ！」

「ははは、そうですね。やっぱり今日も超包子に

」

「おーいー！！！」

そうして意気揚々と歩き出した悟空にネギと刹那が続こうとした時、聞き慣れた声が三人の背後から響いた。

「うん？」

「あ、小太郎くん！」

三人が振り返った先、最早乱痴気騒ぎのような喧騒の中に見える小さな学ラン姿。小太郎は素早い動きで人混みを掻い潜り、瞬時に悟空へ跳び掛かった。

「え！？」

「ちょ！？」

「お？」

「だりゃあー!!」

最小限の高さで以て虚を衝かれたネギと刹那を跳び越える。腹の底から発した気合と共に固く固く握り締めた右拳を振り被る。

半身に振り返って小太郎を見上げたまま、悟空の動きは止まっている。

(殺^とった！)

これ以上ないタイミングと相手の姿勢。

鋭利な犬歯を覗かせて、小太郎は口の端を吊り上げた。そして

拳は敢無く空を突いた。

「へ？」

期待した手応えは得ること叶わず、ひどく間の抜けた声が喉から漏れた。逆に虚を衝き返され、小太郎の意識は空中で一時停止。

そんな瞬きの間に、滞空する小太郎の真下から山吹色の足が伸びる。

「ほいっ」と

「おろ？」

背を地面に付けた状態で、小太郎の腹を悟空の足下が捉える。突撃の勢いを一切殺すことなく、悟空は巴投げの要領で小太郎を投げ飛ばした。

「のおおおおおおっ~~~~」

「!?!?!?!?」

投石装置も斯くや。小太郎の体は中々の速度で上空を舞い、錐揉みし、回転を加えつつ、再度雑踏の中へ消えた。遠ざかる絶叫と共に。

「し、死ぬかと思たわっ!!はあっ、はあっ、はあっ……………!」

「お、お疲れ様、小太郎くん!」

「ははは、わりいわりい。ちつと飛ばし過ぎたみてえだな」

大中小様々な“モノ”が津波のように行進する真っ只中へと運悪く落下した小太郎は、命からがら悟空達の下に生還を果たした。

地面に膝を付きながらゼエゼエと息を切らす小太郎の肩を、労いやら同情やら色々籠めて叩くネギ。背中や後頭部にくつきりと押された足跡がひどく哀愁を誘った。

「し、しかしまた、随分と唐突な攻撃でしたね」

「出会い頭に殴るたあまるつきり通り魔だぜ、犬っころ」

「はんつ、あ、当たり前や。悟空の隙突こう思たら、このくらいっ、せな、はっ、あかんっ！」

「それなら声掛けなきゃいいのに……」

「あ」

小太郎は暫し、膝を付いたまま動かなかった。

数分後、ようやく立ち直った小太郎を伴って、悟空達は麻帆良の街並みを歩いていった。

「世界樹広場に？」

「せや。学園長に呼び出し喰らうてな。魔法先生と魔法生徒は皆そこに集合なんやと。んで、ついでにネギ達も一緒に連れて来いて言われたんや」

如何にも面倒臭い、と言いたげな小太郎である。

隣を歩くネギも、そんなある種『らしい』態度に苦笑いを浮かべた。

「うーん……やっぱし、警備うちゅうやつの話し合いか？」

「かもしれませんね……学園には私が把握していない魔法先生も多
いみたいですし」

「お？そっか。セツナはまだあんまし会ったことねえんだな」

「はい？」

何やら一人うんうんと納得している様子の悟空に、刹那はキョト
ンと小首を傾げている。

二人の会話の聞き慣れない単語に、ネギと小太郎もまた首を捻つ
た。

「警備って……そういえば修学旅行の時にも刹那さん言ってました
よね？それって一体……」

「まあ、行ってみりゃ分かる」

不意に、悟空の貌から笑みが消えた。

「……………」

その視線は射抜くようにネギから遙か上方へ。立ち並ぶ西洋建築群の更に向こう側、虚空を屹度見据えて動かない。

悟空の突然の豹変に、三人は何事かと身を固くした。

「悟空、さん？」

「ところでよ、随分静かじゃねえか？」

「え？」

なんとも素朴な響きで以て問いが上る。そしてその時にはもう、瞬きでもするように悟空の表情は平素のそれへ戻っていた。

悟空の言葉通り、たった一本道を隔てただけのここは、表の往来が嘘のように人一人、猫の子一匹見当たらなかった。目的地たる世界樹広場へ近づくほどに、その静けさは拍車が掛かる。

「そついえば……この辺は全然人がいませんね」

「…人払いの結界やな。用意周到っちゅうやつちゃ」

目的地である広場は、世界樹の巨大な偉容をバツクに幅広の階段とそれぞれを広大なフロアで区切っている。階上へ向けてガス灯が一定の間隔で立ち並び、この広場全体を美しい対称足らしめていた。そんな、ローマのスペイン広場にも似た清潔感のある白いエントランスを昇ったフロアから、複数の人影が悟空達を見下ろしている。皆朝焼けの逆光で影を落とし、その中でも一際長くい頭と髭を揺らして老人が一步前へ出た。

「おお、悟空君にネギ君。待つとた」

「遅い!!」

学園長が発した第一声は、横合いからの怒声によつて敢無く寸断された。

ツカツカと靴音を響かせて階段を早足に降りる少女。黒い修道服にも似た麻帆良学園聖ウルスラ女子高等部の制服にナースキャップを思わせる白い帽子。その下で金糸の長い髪がふわりと風に靡く。高音・D・グッドマンは如何にも無然と悟空達の、というか悟空の前に立ち、その大きな瞳で以て悟空を睨み上げた。

「召集から十分の遅刻です！皆さん職務の合間を縫ってきちんと集まっているのに貴方は本当にいつもいつも！」

「オツス、タカネ。いやあわりいわりい、コタローとやり合ってた
らなんか楽しくなっちまってよ。思ったよか時間食っちまったみて
えだな」

「ああまた毎度毎度似たような理由を……言わせていただきますが、
貴方には麻帆良学園の職員として、延いては魔法先生としての責任
感が庄・倒・的・につ欠如しています！そもそもこの学園で職務を
得られること自体榮譽あることだというのに貴方と来たら！」

「ははは。タカネ、おめえも会ったんびに似たようなこと言ってん
ぞ？」

「~~~~っ！！！」

「ご、悟空さん！？僕よくは分かりませんが大丈夫ですか！？大
丈夫なんですか！？」

朗らかな笑顔を浮かべる悟空、そして顔を真っ赤にして口をパク
パクさせる高音。くつきりと対照的な二人だった。

ある意味どこまでも気心の知れた？二人の様子に、ネギや刹那、
小太郎は呆気にとられるばかり。

「ご、悟空先生にお姉様！今日はこの辺にしときましょう！ね？ね
？」

そんなこんなする間に、また一人、小柄な少女が階下へ降りてき

た。刹那同様女子中等部の制服を身に付け、手には何故か箒が握られている。赤みがかった髪を二つに結び上げた佐倉 愛衣は、現在進行形で言い合いを続ける二人（主に高音 悟空）に、半ば恒例としてわたたと駆け寄った。

「いいですか悟空先生！我々魔法に関わる者の本来の使命はですね！！」

「よお、メイも呼ばれたんだな。元気してたか？」

「え？あ、はい。悟空先生もお元気そうでしたです」

「まあな。最近はおんまし“仕事”もねえから、なんか結構久々だぞ」

「はい、久々ですねえ」

「なんか暇になっちゃったよな」

「暇になっちゃいましたね」

「…腹減ったな」

「…お腹空きましたね」

「ははははは」

「えへへへへ」

「ああもうその脳ミソが蕩けるような会話をやめなさい！ーとい
うかつ、これもまた恒例化していませんこと！？」

「……うおっほん！あー、そこのお三方、そろそろ本題に入りたい
んじゃがよいかの？」

咳払いと控えめな問い掛けは学園長自ら。周りを囲む教員生徒達
はそれぞれ苦笑や溜息を漏らしながらも、皆明らかに『慣れ』が見
えた。

事情を知っている訳もないネギ達は当然、多分に戸惑いを見せて
いる。

「ええっと、ご、悟空さんとあの人達はお知り合いなんですよね…
…？」

「はは、あの二人はいつもあんな感じだよ。決して仲が悪いわけじ
ゃないんだが……」

「反りが合わないというか、タイプが正反対というか。高音君はと
ても真面目だし、悟空先生は多少天ね……自由なところがあるから」

「明石先生、大丈夫ですよ。ネギ君達を含めてこの場にいる皆解つ
てますから」

怖ず怖ずとした様子のネギに高畑が困ったように笑みを向ける。
続く明石のフォローになってるのかなってないのか判らない言には、

瀬流彦が諦観と乾笑を込めて大きく肯いた。

そして、誰一人として言い返すことはなかった。

弛緩した空気を振り払うように、もう一度学園長は咳払いを零す。それが契機と、周りの教員や生徒達の表情も瞬時に切り替わった。

居並ぶ者らから更に一步前へ、学園長は改めてネギ達に向き合う。

「さて、ネギ君には紹介が遅れてしもうたが、ここにおけるのが麻帆良学園都市の各地、小・中・高・大学に常時勤務する“魔法先生”および“魔法生徒”達じゃ」

「ええ！？」

「ちなみにこれでもまだ全員ではないぞい？」

「えっ、えええ！！？」

「んで皆が皆強え。よかつたなあネギ！タカミチもそうだけどよ、カンタラギの闘え方も中々おもしれえぞ？」

「えええええ！！？……って、いや、それはちょっと違いますか？」

「悟空君、また脱線しとるよ……まあそれはさて置きじゃ。わざわざごうして皆に集まってもらったのは他でもない。今、問題が起きておるんじゃないよ。そして、皆で協力してその解決に当たってほしい」

「問題、ですか……？」

学園長は己の背後、未だ白んだ空を覆う巨木を仰ぎ見た。

「ネギ君達は『世界樹伝説』を知っておるかの？」

「えっと、確か桜子さん達が言ってた…」

「ああ、クラスの奴らがなんや言うと思ったな。学祭最終日に世界樹に願い事するとホンマに叶うて。はっ、くだらん御伽噺やわ」

「へえ〜！願いを叶えんのか。それじゃまるで……」

「ふむ、まあ概ねそんな感じなんじゃが、問題というのが叶ってしまっんじゃない、マジで」

「」「」は？」「」

さらっと、学園長は言つてのけた。

異口同音に声を上げてポカンと口を開けるネギ、小太郎、刹那。悟空はといえばキョトンと首を傾げている。

「生徒達から世界樹と呼ばれておるこの樹、本来の名を“神木・蟠桃”^{とう}と言つての。内に膨大な魔力を秘めた魔法の樹なのじゃ。22年に一度の周期でその魔力を極大化させ外部へと放出、樹を中心とした六ヶ所に強力な魔力溜りを形成する。この広場もその一つじゃ」

「はあ〜、道理でなあ。ここは随分魔力が濃いいぞ」

「ふおおお、学祭最終日もなればこの数十倍には跳ね上がるだろうの。密度は言うに及ばず、その総量は想像も付かんわ……故に、少々厄介な面もある」

ふと、学園長は片目を瞑ってネギと悟空の二人を見やる。先刻からの老獪さは鳴りを潜め、その瞳にはひどく悪戯っぽい気色が見え隠れしている。

「ところでネギ君に悟空君、近い内に告白されるというような予定はあるかの？」

「うん？」

「ふえ！？な、ななんのででせうか！！？」

「兄貴、わっかりやすすぎるぜ……」

「ふおおお！まあ冗談は兎も角、というより冗談では済まされんのだよ」

引き続きキョトンな悟空と慌てふためくネギに微笑むと、学園長は屹度視線を引き締めた。

「世界樹が放つ魔力は強大無比じゃ。しかしだからといって『世界征服がしたい』とか『大金持ちになりたい』とか『ギャルのパンテイおくれえ！』のような即物的な願望を実現することはできん。無

から有を生み出す事と同義じゃからの」

「？　どうかしたんですか、悟空さん」

「ん？いやあ、よく分かんねえんだけど懐かしかったんですよ。はは」

「？」

「話を戻すぞい。形を持たん純粹な魔力が叶えられる願い、それは同じく形を持たんモノでなくてはならん。一番身近で御し難くそのくせ移ろい易い…つまりは人の心じゃな」

「あーじゃあ」

「うむ、刹那君は思い当たったようだの。そう、それが告白行為というわけじゃ」

866

そこで、学園長は背後に控えていた女性、葛葉 刀子へ目配せを寄越す。

それを受けて、刀子はその銀縁の眼鏡を今一度掛け直し手元のフアイルへ目を落とした。

「現在、世界樹に関する噂の浸透率は男子34%、女子79%となつています。麻帆良スポーツの記事やネットの書き込み等の影響も大きいですが、各サークルの世界樹観測によつてかなり真実へ近付いている模様です」

「流石に本気で信じている生徒は少ないみたいですが、占いや迷信

が好きな女生徒を中心に実際に試そうとする人は多いと思われる
ね」

刀子の報告を補足する形で明石が続く。学園長は二人に頷き、己
の髭を撫でた。

「学祭期間中、告白の成就率は冗談抜きに120%！最早人心掌握
の呪^{シユ}と言っても過言ではない。本人の意思を無視して心を操るなど
魔法使いの本義に反する。絶対に阻止せねばならんことじゃ」

「……………」

「？ ネギ？固まっちゃまって、どうかしたんか？」

「あー、旦那は気にしねえでくれ」

青くなって凝固するネギを暫しぼんぼんと叩く悟空。反応は無か
った。

「そういうわけじゃ。生徒には悪いが、この六ヶ所で告白行為に及
ばんよう諸君らに見張っていて欲しい。最終日程でないにせよ、今
の段階から影響は始めている。皆ゆめゆめ気を付けて」

「！ 誰かに見られています」

「え？」

「お」

再び学園長の言葉は遮られた。差し込まれた声の主は愛衣。世界樹広場向かい側に立ち並ぶ建築群の更に上方を仰望している。

即座に動いたのは黒スーツの男。顎鬚にサングラス、啞え煙草の紫煙を燻らせ、神多羅木は虚空へと腕を伸ばし同時に指を鳴らした。空气中を飛び散る乾いた音。無詠唱で放たれた風の刃が一陣、大気を斬り裂く。

不可視の斬撃は一瞬で朝空に浮遊する機械人形を両断した。

一連の流れるような動作を見終わると、悟空はネギと小太郎の二人へ振り返った。

「な？おもしれえだろ」

「は、はい！技の出の速さと練度、単発の威力も凄まじいです！」

「しかも無詠唱やからな。このレベルで大技かますまでの繋ぎに出来るんはでかいアドバンテージやで」

「接近戦に持ち込めりゃあまだやりようはあっけどよ、カンタラギ自身も動けるし、何よりあの威力を隙無しで連発出来るってのが厄介なところだな。でだ、おめえ達ならどうする？」

「うーん、僕なら一時的に壁を張って……でもそこまで耐久性と持続性を持った障壁だと無詠唱は無視できないか……」

「一瞬で見切りながら接近……手数で圧倒されたらワヤヤなあ。犬神圏に使う分身で攪乱いうのもアリか」

「あ、それなら僕だって風の精を召喚すれば……」

「……なんか、どんどん悟空さんで染まってますよね、二人とも……」

「あー、というかお前ら。人の戦術分析すんのやめてくんない」

「それ以前に、そんなおバカなことを言ってる場合ではないでしょうー!」

刹那の苦笑、神多羅木のぼやきを諸共に吹き飛ばす勢いで高音が吼える。他の教員らはすでに先程の“視線”の出所に目星を付けているようであった。

高音はつかつかと学園長の眼前へ歩み出た。

「追います！メイ、付いてきなさい」

「あ、はい！お姉様」

「私も同行しよう。もう動き出したようだ」

「三人とも深追いはせんでいいよ。犯人に見当は付いとる」

高音、愛衣の二人にガンドルフィーニが加わる。

ガンドルフィーニは学園長へ軽く会釈すると、地を蹴って跳躍。軽々と時計台の屋根へ、そしてまた次の屋根へと跳び去って行った。

屹度、高音が髪を靡かせ振り返る。視線の矛先は言わずもがな。

「悟空先生！貴方には魔法を、異能を行使する者としての心構えをきっちりと言いついて聞かせますからね！覚悟してなさい！」

「あ、悟空先生、今朝カップケーキ作ったんです。よかったら持って行きますね〜」

「ホントかメイ！？サンキュー！」

「人の話を聞きなさい！い！そしてメイ！貴女まで何言ってるの！？」

「う、ごめんなさい！あ、お姉様の分もちゃんとありますよ？」

「え？あらそうなの、ありがとう。そんな気を使わなくていいの！……って、だからそういうこと言ってるんじゃないの！」

「……あの、いつもこうなんですか？」

「まあ、だいたいこんな感じだな」

半ばヤケクソめいて飛び出していった高音とそれを追う愛衣。賑やかな少女二人の背中を悟空は笑って見送った。

パンっ、手を打つ乾いた音が広場に響く。学園長は今一度居並ぶ者らを見渡し、改めて口を開いた。

「事は生徒達の青春が掛かった大事。皆々、当日のパトロールをよろしく頼む。では解散！」

『ハイ！』

肯きの意思を籠められた声を確りと返し、魔法先生・生徒達はそれぞれの職務へ戻っていく。

同時に、人払いの結界が解かれた事で、閑散としていた広場にも続々人の姿が現れ始めていた。

そしてネギ達もまた、広場を後にしようとして踵を返す。

「ああ、悟空君はちいとワシに付いて来てもらいたいんじゃないか。よいかの？」

「うん？」

巨木は今日も、巖然と、泰然と、悠然とそこに在り続けていた。天を衝く程に聳え立つ太く堅固な幹。そこから四方八方へと伸びる無数の枝葉。隙間なく深緑で覆われた枝のただ一本でさえ、何百と人が乗ったとて小揺るぎともしないだろう強度がある。

一個の森と見紛う樹木を見上げながら、悟空は改めて嘆息した。

「やっぱしでつけえなあ。こんなでけえ木そうそう見ねえぞ」

「ふおふお、まあそうじゃろう。正確な樹齡も分からん。それ程長きに亘って世界を見てきた木だからのう」

「ははは、そいつあすげえや」

枝の根元、木の中心、巨大な幹へ悟空は掌を這わす。樹木独特のごつごつとした、それでいて奇妙に暖かな手触りを感じながら、自然と笑みが零れるのを悟空は自覚した。

「んでよ、じつちゃんもオラになんか用か？」

「も？ふむ。なあに、近頃の様子を伺おうかと思ったただけじゃよ。」

ネギ君も悟空君もまだまだ新任には違いあるまいて」

「お？ネギとオラか？うーん……」

柔らかな笑みを浮かべる近右衛門に、悟空は暫し腕を組んで記憶を反芻していた。

「…ネギは強くなったなあ。初めて会った頃よりもずっとよ」

「そうじゃな。まったく子供の成長は早いもんじゃて。いや、あの子は特にの」

「ああ、そんでまだまだ強くなる」

「ほう！そらまた楽しみじやのう。では、学園祭の方はどうじゃ？ネギ君もそうじゃが悟空君も初めての経験じゃろっ」

「はは、そうだなあ。オラこんなでけえ祭初めてだ。そんで皆が皆思いっきり楽しそうだよ、オラも明日になんのが楽しみだ」

「ふおふおふお」

「あ、でもネギの奴はなんかばやいてたな。予定詰めすぎて死んじやうとかなんとか」

「ふおふおふお！贅沢な悩みじゃわい！」

悟空と近右衛門は大きな声で一頻り笑い通した。笑声は木々へ木霊し、木々は風と共に騒騒と鳴り響く。

そしてまた、近右衛門は何処か安堵するように笑みを浮かべた。或いは何かを、懐かしむかのように。

「…………ネギ君は、毎日笑っておるかの」

「時々エヴァの修業で泣いてんな」

「うむ、全く以てあれは泣くより他にあるまい。あ奴は童女の皮を被った悪魔じゃからして」

「ははは！ひでえな、じつちゃん」

「ふおおおお、陰口とはこうやって叩くのじゃよ。本人の前では口が裂けても言えん。というか本当に口を裂かれてしまっわ…………じやが、その様子じゃと」

「へへっ。ああ、あいつは元気だ。エヴァに明日菜に木乃香に、刹那も小太郎もカモも、他にも物凄えたくさん、色んな奴に囲まれてよ。寂しいなんて思う暇ねえぞ」

にかりと齒を覗かせて悟空は笑った。ひどく子供染みた、優しく力強い笑み。

木漏れ日が生い茂った枝葉の隙間から差し込み、山吹色の男を照らす。神の樹を背にして超然と、孫悟空という存在がそこに顕れていた。

「……ほんに、不思議な男じゃのう。お前さんは」

「？」

「孫悟空君」

その眩さに目を細めながら、近右衛門は改めて悟空を見据えた。近右衛門の視線の意味を判じかねて悟空は疑問符を浮かべている。

「近い内、何かが起こるじやろう。麻帆良全土を巻き込んで、ワシら魔法先生でも対処できん大きな事件が……」

「……」

「異世界から来た君に、これはひどく烏滸がましい頼みじやろう。それを承知で言わせて欲しい……ネギ君の事を、3 - Aの生徒達の事を、そして　超君^{チャオ}の事を、守ってやってくれんか」

腹の奥底から重く固く、苦悩を吐き出すように麻帆良学園長・近衛　近右衛門は頭を垂れた。重ねた年月など比べるべくもない若造に。しかし、その姿の何処にも、ただの一片たりとて、恥や外聞を取り繕うような素振りは無かった。

それは心からの願い。誰よりも生徒の身を案じるただ一教師の望み。

だから、悟空は気負わない。虚飾なぞ投げ捨てて、真直ぐに頷く

だけだった。

「あつたりめえだ。なんたつてオラあいつらの先生だかな」

「ふおおお、おおおお、そうじゃったそうじゃった。では、任せましたぞ。悟空先生」

「おう！」

小鳥の囀り、街行く人々の喧騒、そしてまた一陣風が巨木を薙いでいく。

騒騒と賑やかに、さらさらと優しげに、時には凜と涼やかに、蟠桃は笑う。歌うように、蟠桃は笑う。

「ところでよ、言ってる間になんでかネギ達と高音達が闘ってつぞ？近くに超もいるみてえだ」

「……………マジで？」

「おお、マジだ」

言った傍から問題発生。

さしもの学園長にも言葉はなく、とりあえず恥も外聞も掻き捨てて拝み手に悟空へ頭を垂れた。

「早速ですまんが、悟空君や。いや悟空さん、いや悟空伯爵」

「悟空でいいぞ。ああ、ちよっくら見てくつぞ」

「あー、瞬間移動じゃったか？能力を街中で行使するのは流石に不味い……………手遅れっばいがの……………その足で行ってくれい」

「そっか、分かった。じゃあな、じっちゃん！」

とん、足場としていた枝をいとも軽やかに蹴り、木々の間を抜ける。文字通り目にも留まらぬ速力で以て、悟空は空へと翔けていった。

おまけ「街中の三人娘」

「亜子、ホントにいい加減覚悟決めなつて。ただ『デートしてください』って言うだけじゃん」

「だ、だつてえ……………」

「だつてもダンテもないの！ほら練習練習。恋愛は習つより慣れつてやつだよ」

「裕奈つて、時々すごいおじさんくさいよね……………」

「アキラく？」

「……………うん。ウチ、ウチやる。やってみる…！」

「おおっ、その意気だよ亜子…！はい』デートしてください』」

「で、で、で、で、で、で、で、で、で……………」

「はいもう一息！勢いで言っちゃえ！せえゝの、って、え」

「え、あれって」

スタツ

「う、ウチとデートしてください！！」

「？ いいぞ？」

「え？」

「ん？」

「……え？」

「ん？」

アポイントメント成立

第32話 世界樹（後書き）

次回からようやく学祭に入れます……二重の意味で遅筆って救いよ
うないですね……。

愚痴ってますみません。ともかくも読んでいただきありがとうございます！
ました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6020k/>

英雄の息子とサイヤの英雄

2011年10月28日12時26分発行